ル国民負担ノ減少ヲ招来スル為メニハ現在ノ英米協定案ハ我国ニトリテ甚満足シ得サル案ナリト云ハサルヲ得ス

猶英米協定案ガ米国自身ニトリテ大拡張案ナルコトハ当初ノマクドナルドドーズ協定案以上ニシテ米国ハ現在相当程度ニ工程進捗セル一万噸巡洋艦八隻ノ外一九三六年迄即七年間ニ

一万噸巡洋艦	十三隻	一三〇、〇〇〇噸
オマハ級巡洋艦	五隻	三五、〇〇〇噸
巡洋艦 計		一六五、〇〇〇噸
駆逐艦		約一三〇、〇〇〇噸
合 計		二九五、〇〇〇噸

即約三十万噸ノ水上補助艦ノ建造ヲ要スベク其建造費ハ察スルニ七億弗ニ上ルノ大拡張案ナリ

備考

猶以上ノ考察ニ関連シテ考慮スベキハ軍縮会議成功スレバ現在ノ老齢艦ヲ廃棄スルノ結果維持費ヲ減少スルガ如キモ老齢艦ノ維持費ハ比較的僅少ニシテ且我国カ艦齢超過艦ヲ保有スル場合ヲ考慮シ得ベク又、補助航空母艦或ハ掃海艇ガ巡洋艦及駆逐艦ノカテゴリーニ編入セラレサル場合ハ夫等ノ代艦建造費ヲ必要トスル場合アリ之等ノ為増加スベキ金額モ相当額ニ上ルベク之等ノ諸点ニ関シテハ計数不明ナルヲ以テ増減共ニ之ヲ考慮外ニ置キタリ

三　会議招請及び非公式交渉関係

144　昭和4年9月20日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

英米協定案及び軍縮会議開催前における非公式交渉に関し回訓について

付　記　英米協定案及び軍縮会議開催前における非公式交渉に関する海軍側意見

第二四八号（極秘）

貴電第三五〇号第三五一号及第三五八号ニ関シ

一、海軍協定ノ最大難関タル巡洋艦問題ニ付英米両国間ノ商議著シク進捗スルニ至リタルハ慶賀スル所ナリト雖其ノ協定案ニ付テ見ルニ英米ノ巡洋艦保有量ハ相当ノ高噸数ニ上リ之レヲ五国間協定ノ基礎トスル場合ニハ軍備拡大ノ結果トナル虞アルヘク帝国政府ニ於テハ往電第一九二号ノ通リ此機会ニ於テ予ネテ中外ニ声明セル公約ヲ履ミ軍備縮小ノ実ヲ挙ケンコトヲ期スルモノナルニ付英米両国側ニ於テモ大型巡洋艦小型巡洋艦ヲ通シ其ノ保有噸数ノ低下ニ尚ホ一層ノ努力ヲ用ヒンコトヲ希望セサルヲ得ス

二、八吋砲搭載艦ニ付テハ英米間十五隻対十八隻トスルモ其ノ最大勢力ノ七割ハ十二万六千噸トナリ我カ国トシテハ新ニ約二万噸ノ建造ヲ要スヘク万一米国側主張ノ如ク其ノ保有量二十一隻ニ決定スル場合ニハ我カ国ハ新ニ約四万噸ノ建造ヲ要スルコトトナリ軍縮ノ本旨ニ鑑ミ到底同意シ難キノミナラス対英国ノ関係ニ於テハ八吋砲艦ニ関シ我保有量ハ均勢ヲ超ユルコトトナリ重大ナル困難ヲ生スルニ至ルヘク我カ国ノ希望スル所ハ往電第一九二号㈢ノ通リナルモ形勢已ムヲ得サルニ於テハ貴電第三五五号ノ二ノ趣旨ニテ八吋砲艦英十五隻米十八隻ニ止メ米二十一隻ト云フカ如キ案ノ実現ヲ阻止スル様可然御措置アリ度シ

三、右ノ如ク八吋砲艦米国十八隻ニ止ムル代償トシテ二十一隻トノ差三万噸ヲ米国側六吋砲艦保有量ニ増加セントスル場合ニ於テ六吋砲一万噸ト云フカ如キ新艦型ヲ認ムルコトハ現存既成艦ノ価値ニ変動ヲ及ホスモノナルカ故ニ之レヲ避ケ貴電第三五八号ノ一英国提案ノ如ク六吋砲

七千五百噸四隻トスルコトト致度シ（若シ強ヒテ米国側ニ於テ六吋一万噸三隻ヲ要求スル場合ニ於テハ厳格ニ之レヲ三隻ニ限定シ将来此種新艦型巡洋艦ノ続出ヲ防止スルコトトスルノ外ナカルヘキモ此点ハ我ニ取リテ最後ノ譲歩案ナルニ付差当リ貴官限リニ含ミ置カレタシ）

四、米国新聞所報ノ如ク駆逐艦ヲ十五万噸以下ニ又潜水艦ヲ成ルヘク小量ニ低下シテ巡洋艦ノ拡張ヲ相殺シ以テ海軍軍備全体トシテノ縮小ヲ図ラントスルコト或ハ一案ナルカ如キモ従来ノ仏伊ノ態度ヨリ観テ駆逐艦潜水艦カ果シテ英米ノ期待スルカ如キ低率ニ落付クヤハ大ナル疑問ニシテ一旦巡洋艦ニ於テ相当大ナル拡張ヲ認ムル以上結局軍備縮小ノ主旨ニ反スル結果ヲ来スハ免カレサル所ナルヘク此点ヨリ観ルモ英米両国ニ於テ巡洋艦ノ保有量ニ付キ一層ノ削減ヲ加ヘムコトヲ希望セサルヲ得ス（我カ国トシテハ駆逐艦保有量ノ低下ニ反対スルモノニアラサルハ勿論巡洋艦ニ付拡張ヲ見ル場合ニハ駆逐艦ノ削減ニ依リ全体トシテノ縮小ヲ図ルノ外ナキ次第ニテ寧ロ之ヲ歓迎スルモノナルモ往電第二一二号㈣ノ事情アリテ極端ニ其ノ保有量ヲ低下スルトキハ潜水艦保有量ト総括的七割比率トノ調節ニ困難ヲ生スヘキニ付此点御含置アリ度シ）

五、五国会議開催前日仏伊三国ニ対シ非公式話合ヲ必要トスル貴見ハ全然同感ナルニ付貴電第三五一号ノ一末段ノ趣旨ニテ交渉ヲ進メラレ度ク貴電第三五九号末段「マ」首相ノ言モアリ此機会ヲ逸セス適宜三人ノ会合若クハ各別ニ二人ノ話合ヲ行ヒ八吋砲艦米国保有量ノ削減ト共ニ我カ比率ニ関スル英米側ノ意向ヲ突止ムルコトニ極力御尽力アリ度シ

六、貴電第三五〇号ノ二英米協定案各条項ニ関スル我カ方ノ意見左ノ通リ

㈠軍備縮小協定ニハ各国間ニ於ケル平和ニ対スル信念ヲ前提トスルコトヲ必要トス今次ノ協定ニ於テ不戦条約ノ精神ヲ出発点トスルコトハ帝国政府ト全然所見ヲ同シクス

㈡英米間ノ協定トシテハ異議ナキモ我国トシテハ往電二一二号㈣ノ如ク総括的七割比率ト潜水艦保有量トノ調節ヲ図ル必要上各艦種別ニ同一比率ヲ適用シ難キ場合アルヘキヲ予期ス

㈤往電第一七二号㈡第二項参照

㈥㈠艦齢ニ付テハ原則トシテ英米協定ヲ承認シ差支ナキモ我カ国トシテハ従来補助艦ノ有効艦齢ヲ巡洋艦十六年駆逐艦潜水艦十二年トシ居ル関係アル為既成艦中ニハ千九百三十六年以前ニ実勢力ノ著シク減損スヘキモノアリ且工業力維持ノ必要モアルニ顧ミ代換実施ノ調節上一時的例外ノ措置トシテ其ノ一部ノ艦齢ヲ短縮スルヲ必要トスル場合アルヘシ

㈡代換済艦齢超過艦ノ一部ヲ教育、警備其ノ他ノ特種任務ノ為保有スルヲ認ムルコトヲ希望ス

㈦㈧往電第二一二号㈣ノ通リ

㈩会議開催ノ時機ニ関シテハ帝国ノ地理的関係上三ケ月ノ予告ヲ希望ス近ク招請ノ運ヒトナル場合ニハ来年一月下旬頃ニテ差支ナシ

其ノ他ノ条項ニ付テハ異存ナシ

七、貴電第三五八号末段御禀申ノ通リ仏伊トノ交渉ハ英米ニ任カセ置クコト可然右ハ往電第二四三号㈦ノ趣旨ニモ合スル次第ナル処我方ヨリ英米ノ妥協ヲ図ル為メ調節案ヲ提示スルコトハ種々ノ困難ヲ伴フ虞アルヲ以テ特ニ調停者ノ立場ヲ執ラス屢次ノ電訓ノ趣旨ニ基キ貴官ニ於テ機宜調節的手段ヲ講セラレ度シ

八、潜水艦ニ対スル仏国ノ態度ニ付英米カ如何ナル観察ヲナシ居ルヤ相当大ナル潜水艦保有量ヲ要求スヘシト察セラルル仏国ニ対シ英米側ニテハ如何ナル態度ヲ執ラントスルモノナリヤ並ニ英米両国ノ巡洋艦保有量ノ協定ニ関連シ英国側ニ於テ何等カ特殊条件ヲ留保シ居ラサルヤ此等ノ点ハ我カ態度決定上頗ル必要トスル所ナルヲ以テ特ニ御留意ノ上随時電報アリ度シ

米、仏、伊ニ転電シ仏ヲシテ佐藤局長ニ転報セシメラレ度シ

（付　記）

松平大使第三五〇号及第三五一号ニ関シ回訓案

一、

㈠英米協定案保有量中八吋砲搭載艦ニ関シ米ヲ二十一隻トスルニ於テハ我方ハ新ニ約四万噸ノ建造ヲ要スベク軍縮ノ本旨ニ鑑ミ同意ヲ表シ難シ従ツテ英国側希望ノ如ク米ノ八吋砲搭載艦ハ多クモ十八隻ニ止メ其ノ他ハ六吋砲艦トシ又其ノ艦型ハ現存既成艦ノ価値ニ変動ヲ及ボサザル為六吋砲一万噸ノ如キ新艦型ノ現出ヲ避ケ

度希望ナリ

(ロ)米国側新聞報ノ如ク駆逐艦ヲ十五万噸以下ニ又潜水艦ヲ可成小量ニ縮小シ以テ綜合的ニ軍縮ノ実ヲ挙ゲ得ベシト認メラレザルニアラザルモ従来ノ仏伊ノ態度ヨリ看テ駆逐艦潜水艦ガ果シテ該協定ノ如ク低率ニ落付クヤハ大ナル疑問ナルヲ以テ巡洋艦ニ於テ初メヨリ拡張ヲ予期スルガ如キハ避クルヲ要シ此ノ見地ヨリモ大巡ノ拡張ニハ同意シ難シ

二、五国会議開催前日仏伊ニ対シ非公式談合ヲ必要トスル貴見ハ全然同感ニシテ会議ノ成否ハ此ノ談合ノ如何ニ懸ルトモ云ヒ得ベキニツキ貴電ノ趣旨ニ依リ極力御尽力アリ度

三、英米ガ五国会議ノ基礎トシテ提議セントスル条項ニ関スル意見左ノ如シ

(一)(三)帝国ノ最大海軍国ニ対シ七割ヲ獲得スルノ必要ガ英米ノ「パリチー」問題ト同一関係ニアルコトハ既電ノ通ナル処殊ニ帝国ハ八吋砲艦ニ関シ対米七割ヲ又潜水艦ハ自衛ノ見地ヨリ約八万噸ヲ必要トスルモノニシテ之等ノ関係上総括的七割比率ヲ失ハサル限リ水上艦ノ一部ヲ犠牲トスルモ亦已ムヲ得ズト認メ居ル次第ナリ従ツテ各艦種別ニ同一比率ヲ適用スルノ原則ニハ同意シ難キ場合アルベキヲ予期ス

(六)(イ)艦齢ニ就キテハ原則トシテ英米協定ヲ承認シ差支ナキモ帝国トシテハ従来補助艦ノ有効艦齢ハ巡洋艦十六年駆逐艦潜水艦十二年トシタル関係モアリ已成艦ノ現状ニ鑑ミ代換実施ノ調節茲ニ工業力維持上一部ノ艦齢ヲ短縮スルヲ要スル場合ナシトセズ

(ロ)艦齢超過艦ノ一部ノ制限外保有ヲ認ムルコト

(七)(八)潜水艦ノ廃止ニハ同意シ難ク又我保有量ニツキテハ潜水艦ニ関スル限リ縮少ノ余地ナシ

(九)会議開催ノ時機ニ関シテハ帝国ノ地理的関係上三ケ月以前ノ予告ヲ希望ス

(十)五ケ国会議ヲ華府条約ニ依ル一九三一年ノ会議トスルハ差支ナキモ討議ノ範囲ニ就テハ往電第一七二号ノ趣旨ニ依ルコトト致度

四、潜水艦ニ対スル仏国ノ態度ニ就キ英米ガ如何ナル考慮ヲナシ居ルヤ仏国トシテハ相当大ナル潜水艦量ヲ要求スベシト察セラルル処之ニ対シ両国ノ執ラントスル態度並

ニ英米両国ノ巡洋艦保有量ニ関シ英国側ニ於テ何等カ特殊条件ヲ保留シ居ラザルガ之等ノ点ハ帝国ノ態度決定上頗ル必要トスル所ナルヲ以テ特ニ御留意ノ上随時電報アリ度

145　昭和4年9月20日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

英米協定案及び軍縮会議開催前に各国と非公式交渉方に関し訓令について

本省　9月20日後4時20分発

第三二五号

在英大使宛往電第二四八号ノ趣旨ニ依リ貴官ヨリモ米国当局ニ適宜懇談ノ上我カ主張ニ対スル米国側ノ意向ヲ確ムル様可然御措置アリ度シ

146　昭和4年9月24日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議の招請状の発送遅延に関する英米両国の内情について

ロンドン　9月24日後発
本　省　9月25日前着

第三六六号（極秘）

往電第三六一号ノ招請状ハ今日ニ至ルモ未タ接到セス今廿四日伊国大使来訪シ過日「リンゼー」次官ニ面会セル際右発送ハ或ハ「マ」米国訪問後トナルヤモ知レサル旨述ヘタルカ其ノ後「ドーズ」ニ面会セル処米国側ニ於テハ既ニ或ル箇条ヲ除クノ外同意セルヲ以テ今明日中ニハ発送セラルヘキ旨述ヘタル由内話セルカ同大使退去後本使ハ「ドーズ」ヲ往訪シ其ノ経緯ヲ尋ネタル処「ド」ハ英国招請案ノ大体ニ対シ大統領ニ於テ異議ナキモ唯英米間ニ今日迄合意ヲ見タル勢力ノ数ヲ記載スル事ハ「フーバー」ニ於テ之ヲ好マス是等ハ結局五国会議ニ於テ決定セラルヘキモノ故寧ロ此ノ際決定セルモノノ如キ形ヲ以テ招請状ニ記入セサル方可ナリトノ意見ヲ付シテ英国側ニ回答セルカ英国側ニ於テハ既ニ外務省ノ手ニ付セラレ目下各自治領政府ニ一応照会セルヲ以テ遷延シタルモ一両日中ニハ発送ノ運ヒニ至ルヘシト思ハルル旨ヲ述ヘタリ本使ハ帝国政府ニ於テ巡洋艦ニ関スル英米今日迄ノ妥協点ヲ更ニ一層低下サレン事ヲ希望シ万一其ノ事難シトスルモ大巡洋艦二十一隻ト云フカ如キニ付テハ到底同意シ難カルヘキ旨述ヘタル処実ハ「フーバー」

ニ於テ尚更ニ英米ノ保有量ヲ減縮シタキ意ヲ有シ居リ米大型二十一隻ノ代リニ十八隻トシ七千噸新艦ヲ三隻増加シテ八隻ト為シ其ノ代リニ英国側ニ於テ大型十五隻ヲ十四隻ニ減シ以テ「パリチー」ヲ保タント為シツツアリ此ノ計画ニ依レハ英ハ一万噸ヲ減シ三十二万九千噸トナリ米ハ三十万余トナル次第ナルカ果シテ「マ」カ之ニ応スルヤ否ヤハ判明セス何レニセヨ「フーバー」ハ右「パリチー」ニ於テ意見合ハハ英米トモ夫レ以下ニモ切下ケタキ意向ヲ有スルモ海軍方面ニ困難ヲ有スル旨申居リタリ尚本使ハ駆逐艦ニ関シ英米ノ欲スル保有量如何ト尋ネタル処右ハ日本側ノ潜水艦保有量其ノ他仏伊等ノ状況ニ依リ決定スヘキモノナルモ大体今日ニ於テハ十五万噸見当ニ為シタキ希望ナリト述ヘ本使ハ我潜水艦ノ保有量八万噸ニ付重ネテ説明ヲ為シ若シ英米ト「パリチー」トナル場合ニハ駆逐艦等ノ比率ニ於テ調節スヘキ旨説明シ置キタリ

只今外務省ヨリ電話アリ明廿五日次官ニ於テ会見シタキ旨申越シタリ招請状ノ交付カト思ハル

米、仏、伊ニ転電セリ

---

147 昭和4年9月25日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

英米仮協定に対する訓令執行方に関し意見稟申について

ロンドン 9月25日後発
本 省 9月26日前着

第三六七号（極秘）

貴電第二四八号ニ関シテハ出来得ヘクムハ「マ」首相出発前ニ会談シタク存シ居リタルモ同首相出発前非常ニ多忙ナルト非公式会見ノコトヲ記載セル招請状其ノモノノ発送モ後レ且今二十四日「ドーズ」ト会見ノ際「ド」モ亦首相カ仏伊ノ猜疑ヲ招クコトヲ極メテ虞レ居ルコトヲ話シタル次第モアリ旁此ノ際急ニ話ヲ持出スヨリモ同首相帰英ヲ待チテ英米交渉ト同シ形ニ於テ商議ヲ開始スルコト然ルヘシト思考ス右御含置キヲ請フ

尚我カ七割要求ニ関シテハ其ノ後機会アル毎ニ「ド」大使ニ徹底スル様試ミ居レルカ往電第三五五号「ド」氏ト懇談セル際モ同氏ハ日本側七割ノ希望ニ対シテハ未タ反対ノ声ヲ聞カス此ノ頃ハ日英米勢力ノ比較ヲ議スル場合ニハ日本ヲ七割トシテ計算シ居レリト述ヘタルコトアリ同大使一己

ノ諒解ハ得タル様思ハルルカ英米結局ノ意思ヲ突止ムルコトハ商議開始後ニ非サレハ難カシキコトト思考ス貴電第二四八号第五ノ次第モアルニ付御参考迄

米ヘ転電セリ

---

148 昭和4年9月25日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議開催前の非公式交渉の開始及び我が要求に関するリンゼー外務次官との会談について

ロンドン 9月25日後発
本 省 9月26日前着

第三六八号（極秘）

九月廿五日「リンゼイ」外務次官ノ求メニ依リ往訪シタルニ首相出発前多忙ノ為代ツテ御話ヲスル次第ナルカ既ニ先日同首相ヨリ御話シタル通リ今ヨリ五国会議開催ニ至ル迄英米間ニ於テ為シタルカ如キ然ルヘキ方法ニテ関係国トノ間ニ非公式意見ノ交換ヲ続ケ以テ会議ノ成功ヲ期シタキ考ナル旨述ヘタルニ付本使ハ過日総理ノ御話ハ既ニ政府ニモ報告シ之ニ対シ訓令ニモ接シタル次第ナルカ日本ハ右非公式ノ打合セヲ以テ会議ヲ成功セシムル唯一ノ方法ト考ヘ之ニ賛意ヲ表ス又本使ハ各問題ニ付大体政府ノ意図モ指示セラレ居ルニ付今日ヨリニテモ右意見ノ交換ニ応スル準備アル旨述ヘタル処同次官ハ満足ノ意ヲ表シタリ依テ本使ハ招請状ハ何日発送セラルヘキヤヲ尋ネタル処実ハ「フーバー」大統領ハ「マ」首相ト会見後ニ発送シタキ希望ヲ有シタルモ「マ」ノ希望ニ依リ矢張リ此ノ際発送スルコトトシ米国側申入レノ修正ヲ容レタル上（「ドウズ」談話ノ通リ）目下自治領ニ照会中ナルニ付今ニモ回答来次第発送ノ積リナリト言ヘルニ付本使ハ我方ニ於テハ少クトモ三ケ月ノ予告ヲ要スルニ付今発送セラルレハ一月下旬ヲ便宜ト思考スル旨述ヘタル処次官ハ一月中旬頃ニ開キタキ積リナルカ確タルコトハ未タ定リ居ラスト申シ居リタリ尚本使ハ首相出発前御面会ノ機会ナカルヘキニ付左ノコトヲ伝ヘラレタシトテ貴電第二四八号第一項ヲ述ヘ尚米国側八吋一万噸三隻ノ増加ニ対シテハ日本ニ於テ到底同意シ得サルコト並ニ已ムヲ得ス英国側ニ於テ右三隻ニ代フルニ対案ヲ出タサルル如キ場合ニハ七千五百噸六吋四隻案ノ方ヲ一万噸六吋三隻案ヨリモ可ナリト思考スル旨御来示ノ説明ヲ加ヘテ話シ尚

総括七割ノ要求ニ対シテハ日本政府ニ於テハ米政府ハ対英「パリチー」ノ原則ニ対スルト同様重要視シ居ル事ヲ詳シク説明シタル処次官ハ右ノ次第ハ篤ト首相ニモ申シ伝フ可シト述ヘタリ

在米、仏、伊各大使ヘ転電セリ

149　昭和4年9月25日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議の開催日取及び開催前の非公式交渉に関する国務長官との会談について

ワシントン　9月25日前発
本　　省　9月26日前着

第三四八号（極秘）

二十四日国務長官ニ会見シ貴電第三二五号御訓令ニ依リ軍縮問題ニ関シ懇談セル結果左ノ通

㈠先ツ本使ヨリ日本ハ地理的関係上倫敦会議ニ対シテハ少クトモ三箇月ノ予告ヲ希望スルニ付其ノ点含ミ置カレ度ク尚招請状ハ凡ソ何日頃発セラルヘキヤト尋ネタルニ長官ハ自分ハ比律賓ニ居リタル関係上日本ノ不便ナル地位ハ充分了解シ居レリ「マ」首相ハ多分倫敦出発前招請ノ手続ヲ為スヘキカト察セラル従テ予定通来年一月下旬ニ開クコトトセハ充分日本側ノ御希望ニ副フコトトナルヘシト語レリ

㈡本使ヨリ日本政府ハ単ニ軍備ノ制限ノミナラス真実ニ其ノ縮小ヲ希望スルコトハ屢御話致シ置キタル通ナル処日本政府ノ見ル所ヲ以テセハ最近大体纏リタル英、米協定ノ巡洋艦噸数ハ相当高率ト認メラレ試ミニ米国ノ八吋砲艦十八隻ニ付其ノ七割ヲ算出スルニ我方ノ八吋砲艦現有量（建造中ノモノモ含メ）十万八千四百噸ニ対シ約二万噸ヲ超過シ又仮ニ米国ノ保有量ヲ二十一隻トセハ約四万噸ノ超過トナリ従テ七割ヲ保タムトセハ我カ所要量ヲ充タス為ニ新ニ建造セサルヘカラサルヘク真ニ困難ナル立場ニ陥ルヘシト述ヘ右計算ノ基礎ヲ紙片ニ認メタルモノヲ長官ニ交付シ米国政府ニ於テハ大統領ヲ始メトシ予テ熱心ニ軍備縮小ヲ唱道セラレタル関係モアリ英米協定ノ数字ヲ更ニ低下セシムルコトニ付此ノ上トモ努力セラレムコトヲ希望スル次第ナルカ大体ノ御見込ナリトモ腹蔵ナク示サレ度シト述ヘタルニ長官ハ英国ノ最終提案タル巡洋艦三十三万九千噸ハ米国側ヨリ幾度カ談判ノ末漸ク先方ニ於テ譲歩セルモノナルモ米国政府トシテハ未タ以テ毫モ之ヲ満足ト思考シ居ラス此ノ上トモ凡ユル機会ニ於テ更ニ英国ヲ説得シ出来得ル限リ之ヲ低下セシメ度キ誠実ナル希望ヲ有スルコトハ茲ニ貴大使ニ対シ言明ヲ躊躇セサル次第ナルヲ以テ英国ノ切下ケ得ル点迄ハ何処迄モ切下ケル決心ナリ今日ノ処英国ニ於テ五十隻三十三万九千噸ヲ固執スル為之ト均勢ヲ保持スル必要上国論殊ニ海軍当局ノ主張ヲモ考慮ニ容レ三十一万五千噸ヲ支持シ居ルニ過キスト語レリ

㈢次ニ本使ヨリ日本側ニ於テ七割ノ比率ヲ希望スル次第ハ曩ニ貴長官ニ懇談シ置キタル次第アリタル処右ニ対シテハ其ノ後考究セランタルコトト思料セラルルカ大体ノ御見込ニテモ承ルコトヲ得ヘキカト尋ネタル処長官ハ貴国側ノ事情ハ諒トスルモ本問題ハ真ニ困難ナル事柄ニテ英国側トノ交渉ノ関係モアリ今以テ仮令一己ノ私見ナリトモ申上兼ヌルニ依リ悪シカラス諒察アリタシト逃ケタルニ付本使ヨリ往電第三二一号末段ノ趣旨ヲ繰返シ且日本ノ国情ハ食料及原料ニ付海外ヨリ供給ヲ仰カサルヘカラサルコトニ於テハ英国ト酷似スル点アリト雖世界ノ各方面ニ通商路ヲ有シ而モ隔絶シタル地方ニ根拠地ヲ有セサル点ニ於テ米国ト事情ヲ同シクシ従テ大型巡洋艦ヲ必要トスル点ヲ考慮ニ容レラレ日本ハ米国ノ保有スヘキ大型巡洋艦ノ七割ヲ必要ト認ムルコトニ特ニ御留意アリ度シト敷衍説明シ尚華府会議ノ際ハ山東問題其ノ他種々ナル政治上ノ関係ヨリシテ米国ノ国論概シテ日本ニ不利益ナリシコトハ当時自分ノ親シク目撃セシ処ナルカ今日ニ於テ日米ノ関係頗ル良好ニテ支那問題ニ対シテモ従来ノ誤解殆ト一掃セラレタルカ如キ次第ナレハ日本ノ七割ノ比率ニ同意セラルルモ恐ラクハ米国国論ニ反対アルコトナカルヘシト確信スト述ヘ置キタリ

㈣英国ノ提議ニ係ル六吋砲一万噸型ニ関シ本使ヨリ長官ノ意向ヲ探リタル処長官ハ即座ニ斯ル新型巡洋艦ノ建造ハ米国海軍当局ニ於テ絶対ニ好マサルニ依リ飽迄之ヲ拒絶スル積リナリト述ヘタルニ付此ノ種新型艦ノ建造ヲ希望セサルコトハ我海軍ニ於テモ全然同感ナリト告ケ進ミテ大型巡洋艦三隻ノ問題（往電第三三八号ノ二）ノ調整方ニ付英国側ト話進ミタルヤト尋ネタルニ長官ハ未タ何等纏リヲ見ルニ至ラス近ク「マ」首相渡米ノ際自然軍縮問

題ニ付話合アルヘシト思ハルルモ成ルヘク細目ニ亘ル点ニハ触レス専ラ英米関係ノ大局ニ関スル意見交換ヲ為ス考ヘナレハ右ノ点ハ当分未解決ノ儘ト為シ置クコトトナルヘシト語レリ

(五)本使ヨリ駆逐艦及潜水艦ノ問題ニ言及シ長官ノ意向ヲ探リタルニ長官ハ駆逐艦ノ保有噸数ニ付テハ米国ハ巡洋艦同様英国ノ低下シ得ヘキ点迄低下スル方針ナリ又潜水艦ノ廃止ニ付テハ英国トノ間ニ一応ノ話合ハ著キタルモ他ノ関係国ノ立場ヲモ顧ミ結局或程度迄ハ保有スルコトトナルヘシト語リタルニ付本使ハ日本ニ於テハ駆逐艦ノ保有噸数ハ或程度迄低下セシムルコトニ反対セサルヘキモ潜水艦ハ劣勢海軍国タル関係上之ヲ必要ト認メ居ルコトヲ述ヘ置キタリ

(六)最後ニ本使ヨリ軍備縮少ノ目的ヲ達成スル為ニハ日英米ノ主要海軍国ノ外仏伊両国ノ参加ヲ必要トスル次第ナル処右両国ノ倫敦会議ニ対スル態度ニ付何等承知セラルル所有リヤト尋ネタルニ長官ハ両国参加問題ニ付テハ米国政府ニ於テハ何等手ヲ触レス専ラ英国政府ニ委セ居ルニ付明確ナルコトヲ承知セス自分トシテハ是非両国ノ参加ヲ希望スル旨述ヘタルニ付此ノ機会ヲ利用シ本使ヨリ日本政府モ亦真実両国ノ参加ヲ希望ス若シ何等カノ事情ニ依リ万一参加ノ運ヒニ至リ難キコトアリトスルモ日本ノ関スル限リハ英米両国ト誠実ニ協力シテ軍縮問題ノ達成ニ貢献シ度キ考ヘナリト述ヘタルニ長官ハ軍縮問題ニ関スル日本ノ真意ハ自分ニ於テ充分諒解シ居リ深ク日本ノ態度ヲ多トシ居ル旨述ヘタリ

(七)英米協定ノ内容ニ付テハ「ドウズ」大使ヨリ松平大使ニ詳細内話アリタルモ国務省ヨリ別段詳細ナル内報ナキニ顧ミ閣下発松平大使宛電報第二四八号ノ六ノ各項ニ付意見交換ヲ試ミルコト不適当ト認メ本日ハ大体前記ノ程度ニテ会談ヲ打切リタル次第ナルカ長官ハ終始極メテ熱心ニ本使ノ所言ヲ聴取シ時々要点ヲ筆記シ居リタルニ付「マ」首相近ク渡米ノ折柄本日ノ会談ハ相当長官ノ注意ヲ喚起シ得タリト思料ス為念

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ転電セシム

150　昭和4年10月5日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

我方の補助艦総括的七割要求に対する英米両

国の意見回示方に関し国務長官と懇談方訓令について

第三三五号　極秘　本省　10月5日後4時発

補助艦最大勢力ニ対シ七割要求ノ我主張ニ関シテハ松平大使ヨリ「ド」大使及「マ」首相ヘ反覆説明セラレ居ルコトニモアリ又貴官ヨリモ国務長官ニ対シ再三懇談セラレ居リ英米両国当局ニ於テモ充分了解シ居ルコトト思考セラルルモ今日迄未タ之ニ対シ両国政府ノ明確ナル意向ヲ聞知スルコトヲ得サル次第ナル処「マ」首相ノ帰英ハ十一月ニ入ルヘク「ド」大使モ其ノ頃迄ハ任地ニ帰ラサル模様ニテ在英大使来電第三六七号ノ内協議ハ暫ク之ヲ開クコト不可能ナル実情ニ在リ他方五国会議ニ臨ム我全権委員ハ晩クモ十二月早々ニ出立スルヲ要スヘク若シ此儘ノ情勢ニ放任スルトキハ全権委員ノ出立前ニ会議ニ対スル大体ノ見込ヲ立テ難キノミナラス会議開催以前ニ大綱ニ関スル了解ノ成立ヲ見ルコトヲ得ヘキヤモ甚タ危惧セラルル次第ナリ就テハ貴官ハ至急国務長官ニ面会ノ上前顕ノ事情ヲ説明シ帝国政府トシテハ今回ノ会議開催以前ニ於テ英米側ト内協議ヲ遂ケ本全権ニ於テハ成ル可ク論争ヲ交ユルカ如キコトナク最モ平和ナル空気ノ中ニ軍備縮小事業窮極ノ目的タル国際和親ノ実証ヲ中外ニ示シ度キ希望ナル処速カニ内協議ヲ進メ難キ前述ノ事情ニ顧ミ此際国務長官ニ於テ「マ」首相ト会談ノ機会ヲ以テ我主張ノ骨子タル総括的七割要求ニ関シ英国側ノ意向ヲ質シ之ニ対スル英米両国ノ大体ノ意見ヲ淡泊ニ我方ニ回示スル様配慮アリ度旨懇談セラレ度シ尚此際我方ニ於テ英米両国ノ了解ヲ求メ其ノ意向ヲ知ランコトヲ希望スル所ハ補助艦七割ニ対スル専門的技術的ノ解決ニアラス即チ何艦種カ何隻何噸ト云フカ如キ意味ニアラスシテ言ハハ其ノ政治的解決ニシテ恰モ英米間ニ於テ均勢ノ原則ヲ商議ノ基本トシタル如ク比率問題ニ関スル我国ト英米両国トノ商議ノ基本トシテ我補助艦ヲ総括シテ英米ノ七割トナスノ原則ヲ承認セムコトヲ求ムル趣旨ナリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊、佐藤公使ニ転報セシメラレ度シ

151　昭和4年10月(8)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請状送付について

別　電　十月八日着在英国松平大使より幣原外務大

臣発第三七八号
チェンバレン英国外相より松平大使宛、軍縮会議招請状

第三七七号（至急、極秘）
往電第三七三号前段ニ関シ
軍縮会議招請状十月七日付ヲ以テ外務大臣ヨリ今七日送越シタルニ付全文別電第三七八号ヲ以テ電報ス
尚「ウェルズレー」ヨリ右招請状全文十月九日（水曜日）ノ朝刊ニ発表スル積リナル旨通知シ来レリ
本電別電ト共ニ米ニ転電セリ
仏伊ニ本電ヲ転電シ別電ヲ郵送セリ
（別電）

No. 378

I have the honour to inform Your Excellency that the informal conversations on the subject of naval disarmament which have been proceeding in London during the last three months between the Prime Minister and the Ambassador of the United States have now reached a stage at which it is possible to say that there is no point outstanding of such serious importance as to prevent an agreement.

From time to time the Prime Minister has notified Your Excellency of the progress made in these discussions and I now have the honour to state that provisional and informal agreement has been reached on the following principles :

1. The conversations have been one of the results of the Treaty for the Renunciation of War signed at Paris in 1928 which brought about a re-alignment of our national attitudes on the subject of security, in consequence of the provision that war should not be used as an instrument of national policy in the relations of nations one to another. Therefore, the Peace Pact has been regarded as the starting point of agreement.

2. It has been agreed to adopt the principle of parity in each of the several categories and that such parity shall be reached by December 31st, 1936. Consultation between His Majesty's Government in the United Kingdom and His Majesty's Governments in the Dominions has taken place and it is contemplated that the programme of parity on the British side should be related to the naval forces of all parts of the Empire.

3. The question of battleship strength was also touched upon during the conversations and it has been agreed in these conversations that subject to the assent of other signatory Powers it would be desirable to reconsider the battleship replacement programmes provided for in the Washington Treaty of 1922, with the view to diminishing the amount of replacement construction implied under that treaty.

4. Since both the Government of the United States and His Majesty's Government in the United Kingdom adhere to the attitude that they have publicly adopted in regard to the desirability of securing the total abolition of the submarine, this matter hardly gave rise to discussion during the recent conversations. They recognise, however, that no final settlement on this subject can be reached except in conference with the other naval Powers.

In view of the scope of these discussions both Governments consider it most desirable that a Conference should be summoned to consider the categories not covered by the Washington Treaty and to arrange for and deal with the questions covered by the second paragraph of Article 21 of that Treaty. It is our earnest hope that the Japanese Government will agree to the desirability of such a conference. His Majesty's Government in the United Kingdom and the Government of the United States are in accord that such a conference should be held in London at the beginning of the third week of January, 1930, and it is hoped that the Japanese Government will be willing to appoint representatives to attend it.

A similar invitation is being addressed to the Governments of France, Italy and the United States ;

and His Majesty's Governments in the Dominions are being asked to appoint representatives to take part in the conference. I should be grateful if Your Excellency would cause the above invitation to be addressed to the Japanese Government.

In the same way as the two Governments have kept Your Excellency informally au courant of the recent discussions, so now His Majesty's Government will be willing, in the interval before the proposed conference, to continue informal conversations with Your Excellency on any points which may require elucidation. The importance of reviewing the whole naval situation at an early date is so vital in the interests of general disarmament that I trust that Your Excellency's Government will see their way to accept this invitation and that the date proposed will be agreeable to them. His Majesty's Government in the United Kingdom propose to communicate to you in due course their views as to the subjects which they think should be discussed at the conference, and will be glad to receive a corresponding communication from the Japanese Government.

It is hoped that at this conference the principal naval Powers may be successful in reaching agreement. I should like to emphasise that His Majesty's Government have discovered no inclination in any quarter to set up new machinery for dealing with the naval disarmament question; on the contrary it is hoped that by this means a text can be elaborated which will facilitate the task of the League of Nations Preparatory Commission and of the subsequent General Disarmament Conference.

（右仮訳文）

昭和四年十月七日付海軍軍備縮少会議招請ニ関スル英国政府公文（仮訳文）

予ハ海軍軍縮問題ニ関シ過去三箇月間総理大臣並合衆国大使ノ間ニ進行シツツアリシ非公式会談カ今ヤ協定ノ成立ヲ阻礙スルカ如キ何等重大ナル未決点ヲ残ササルノ域ニ達シ

タルコトヲ閣下ニ通報スルノ光栄ヲ有ス総理大臣ハ随時右会談ノ進展ニ関シ閣下ニ通告セラレタル処茲ニ改メテ左記ノ原則ニ関シ暫定的且非公式ノ協定成立セルコトヲ閣下ニ通報スルハ予ノ光栄トスル所ナリ

一、右会談ハ千九百二十八年巴里ニ於テ署名セラレタル戦争抛棄ニ関スル条約カ各国相互ノ関係ニ於テ戦争ヲ国家政策ノ手段トシテ使用スヘカラサルコトヲ規定シタルカ為安全保障ノ問題ニ関スル両国ノ態度ニ変化ヲ齎ラシタルニ基クモノニシテ従テ吾人ハ右条約ヲ以テ協定ノ出発点ト看做セリ

二、吾人ハ各艦種ニ亘リ勢力均等ノ原則ヲ採用シ而シテ右勢力均等ハ千九百三十六年十二月三十一日迄ニ達成セラルヘキコトニ付合意ヲ見タリ右ニ関シ英本国政府及自治領諸政府間ニ協議ヲ遂ケタルカ勢力均等ノ考案ハ英国側ニ於テハ帝国全部ノ海軍力ヲ包含セシムルノ趣旨ナリ

三、主力艦勢力問題モ亦会談中論及セラレタルカ他ノ署名国ノ同意アルニ於テハ千九百二十二年ノ華盛頓条約ノ想定スル代換建造量ヲ縮少スルノ目的ヲ以テ同条約ニ規定スル主力艦代換計画ヲ再考スルヲ可トスヘシトノコトニ意見一致セリ

四、合衆国政府及英本国政府ハ共ニ潜水艦ノ全廃ヲ望マシトスルコトニ関シテ従来両政府カ公然採リ来リタル態度ヲ固守スルヲ以テ本件ハ今次ノ会談ニ於テハ殆ント討議ヲ見サリシト雖モ両国政府ハ他ノ海軍国ト合議ヲ遂クルニ非スンハ本問題ノ最終的解決ハ不可能ナルコトヲ認ムルモノナリ

本件会談ノ範囲ニ鑑ミ両国政府ハ華盛頓条約ニ規定セラレサル艦種ヲ考究スル為並同条約第二十一条第二項ニ規定セラレタル問題ノ準備並処理ノ為会議ヲ招請スルコト最モ望マシト思考ス吾人ハ日本国政府カ斯ル会議開催ニ同意セラレムコトヲ切望ス英本国政府及合衆国政府ハ斯ル会議カ倫敦ニ於テ千九百三十年一月第三週初頭ニ於テ開催セラルヘキコトニ一致シ日本国政府カ同会議ニ列席スル代表者ヲ任命セラレムコトヲ希望ス

英本国政府ハ仏蘭西国、伊太利国及合衆国政府ニ対シ同様招請状ヲ発送シ尚ホ自治領政府ニ対シテモ会議ニ参列スヘキ代表者ヲ任命センコトヲ要請セリ予ハ閣下カ右招請状ヲ日本国政府ニ送達セラレンコトヲ懇請ス

英米両国政府ハ今次ノ討議ニ関シ非公式ニ閣下ニ通報ヲ怠ラサリシカ英国政府ハ今後モ同様来ルヘキ会議開催前闡明ヲ必要トスル事項モアラハ閣下ト非公式会談ヲ継続スルノ用意ヲ有ス一切ノ海軍問題ヲ近キ時期ニ於テ検討スルコト一般軍備縮少ノ為頗ル重大ナルニ鑑ミ日本国政府ニ於テ本招請ヲ受諾セラルヘキヲ信シ所定ノ会議期日ニツキテモ異存ナキコトト思考ス英本国政府ハ会議ニ於テ討議スルヲ適当ナリト思考スル諸問題ニ関シ追ツテ何分ノ見解ヲ閣下ニ通報スル意向ニシテ日本国政府ニ於テモ同様意見ヲ開示セラルルヲ得ハ幸ナリ

右会談ノ結果主要海軍国間ニ協定ノ成立ヲ見ンコトハ英国政府ノ切ニ希望スル所ニシテ予ハ英国政府ハ如何ナル方面ニ於テモ海軍軍縮問題ヲ処理スル為別ニ新機関ヲ設クヘシトノ意見ニ接シタルコトナキノミナラス却ツテ今回ノ如キ会議ニ依リテ国際連盟準備委員会及次テ開カルヘキ一般的軍備縮少会談ノ事業ヲ促進スヘキ委員会及次テ開カルヘキ一般的軍備縮少会議ノ事業ヲ促進スヘキ規準ノ作リ出サレンコトハ一般ノ希望スル所ナルコトヲ特ニ指摘セント欲ス

152　昭和4年10月8日　在イタリア松田大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議へのイタリアの態度に関する新外相の談話について

ローマ　10月8日後発
本省　10月9日前着

第七七号

本使近日中帰朝出発ニ付事務打合セ旁八日新外相「グランジー」往訪ノ際海軍軍縮会議ニ関シ談話ヲ交ヘタルカ外相ハ今朝ノ新聞ニテ招請状愈倫敦ニ於テ日仏伊ニ交付セラレタル由承知シタルモ未タ電報ニ接セサルカ伊国ノ態度ハ招請状接到ノ上ニテ篤ト考量スル積リナリト云ヘリ依テ本使ハ右会議ニ伊国ノ参加ハ主義トシテ大体決定シ居ルヤト尋ネタルニ其ノ点サヘ今ノ処何トモ云ヘス又仏ノ態度ヲ探リ居ルモ未タ分ラスト答ヘタリ本使ハ今回ノ会議ニ伊仏ノ参加ハ重要ニシテ帝国政府ニ於テモ切ニ之ヲ希望シ居ルヘシト信スル旨ヲ述ヘタルニ外相ハ本件ノ如キ問題ハ五国ノ会合ニ於テ何等カノ決定ニ達スル事頗ル有効ナルハ誠ニ同感ナリト云ヘリ

本使案スルニ伊国ノ参加決定ニハ会議ノ性質乃至招請ノ趣旨ヲ篤ト講究スル事勿論ナルヘキカ同時ニ仏国ノ態度ニ充分ノ注意ヲ払フヘシト思ハル尚近日首相ニ面会ノ機会モアルニ付其ノ節ハ伊国ノ態度ニ関シ多少判明スヘキカト思ハル

英、米、仏ニ転電シ、仏ヲシテ佐藤公使ニ転報セシム

153　昭和4年10月(9)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

マクドナルド英国首相の米国訪問の経過及び新聞論調について

ワシントン
本省　10月9日後着

第三六二号

一、「マクドナルド」首相ハ四日紐育著出迎ノ国務長官ト共ニ同日華府ニ来リ五日午後「ホワイトハウス」ノ賓客トナリ直ニ大統領ト共ニ「キャンプ」ニ赴キ大統領ノミトノ間ニ国務長官ヲ交ヘ談合ヲ為シ七日早朝帰華ノ上議会ヲ訪問シ上院ニ於テ一場ノ挨拶ヲ為シタルカ同首相著米以来米国民一般ノ歓迎振ハ極メテ熱心ナリ

二、同首相ハ紐育ノ歓迎会ニ於テ英米間ニ同盟ヲ造ルカ如キ考ハ毛頭無シト述ヘ更ニ華府到著後新聞記者ヲ接見ノ際前記同盟説ヲ否定シ英米両国ノ為サントスル処ハ何等他国ニ対抗セントスルニ非スシテ単ニ両国間ノ諒解ヲ促進シ延テハ世界平和ニ貢献セントスルモノナリトノ声明ヲ発シ又上院ニ於ケル挨拶中ニ於テ英米二国カ不戦条約ノ効果ヲ発揮スルニ於テハ右両国間ノ戦争ハ全然考ヘ得ラレサル処ニシテ従ツテ均勢ヲ承認スルコトニ依リ平和的協調促進ノ気分ヲ造リ得ヘシト述ヘタリ

三、七日大統領及「マ」首相ハ共同声明ヲ発シ英米両国民間ニ軋轢ヲ生スルヤモ知レサル一切ノ問題ニ付隔意無キ談合ヲ為シタル処既ニ満足ナル進捗ヲ見タルカ尚会談ヲ続ケ居レリトノ趣旨ヲ述ヘタリ尚「マ」首相渡米ノ目的及大統領トノ会談内容ニ関シテハ同首相著米前ヨリ各新聞共種々ノ臆測ヲ加ヘ居リタル処前記共同声明ニ関連シ

一、二新聞カ又復会談ノ内容ハ個々ノ外交問題ニモ及ヒタルカ如キ推測ヲ為セル以外大多数ハ右会談ハ軍縮問題ニ関連シ英米ノ友好関係増進ニ関スル全般的ノ意見交換

ニ過キサルモノト観測シタリ

四、「マ」首相訪米ニ関スル連日ノ新聞論調ハ一斉ニ同首相ノ渡米ハ二大英語国民ノ関係ヲ緊密ニスヘク英米両国ノ意見一致ハ世界平和ニ貢献スル処大ナルヘシトテ歓迎ノ意ヲ表シ居レル外同首相渡米ニ伴フ全般的英米友好関係増進ニ依リ俄ニ多大ノ実質的結果ハ期待シ得ストスルモ英米間ニ海軍ノ均勢ヲ認メタルコトハ英米親善維持ノ一大要件タルノミナラス将来ノ海軍競争ヲ排除シタルコトニ依リ他ノ諸国間ノ関係ニモ多大ノ好影響アルヘシト為シ又仏伊殊ニ仏国側カ危惧スルカ如キ英米同盟ハ米国ノ断シテ好マサル処ニテ他国ヲ疎外シ英米間ニ何等カノ談合ヲ為スカ如キ秘密外交ハ時代後レナルノミナラス斯ル疑ヲ抱ク者ハ米国ノ国情ヲ知ラサルカ為ナリト論シ居レリ

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ転報セシム

154 昭和4年10月(10)日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請状発表に関する新聞論説について

第三八〇号　ロンドン　本省　10月10日前着

十月九日当国政府ノ五国海軍軍縮会議招請状全文発表セラレタルカ右ニ関シ各紙何レモ大々的記事論説ヲ掲ケ居ル処九日ノ各論説ヲ総合スルニ概ネ今次ノ招請カ何等英米同盟又ハ「アンタント」ノ結果ニアラス両者ハ毫モ既成事実ヲ他国ニ押付ケムトスルモノニアラサル点ヲ強調シ会議ノ前途ニ対シテハ仏伊ノ「パリテイー」潜水艦ノ廃止ニ対スル反対及各艦種間ノ融通ノ主張ヲ予想シ居レルカ就中「ガーディアン」ハ補助艦ニ関スル仏国従来ノ主張ヲ詳述シ仏国トシテハ対伊並対英関係ヲ顧慮セサルヘカラサル事情アリ右ハ来ルヘキ会議ノ際大難関ニシテ仏伊カ各艦種別制限ニ同意セハ大成功ナリト論シ「テレグラフ」ハ華府会議規定事項以外ノ点ニ関スル包括的五国協定ハ成立覚束ナカルヘク英米関係改善カ米大統領努力ノ最実質的果実ナルヤモ知レスト述ヘ居レリ

米ニ転電シ仏、伊ニ郵送セリ

155 昭和4年10月10日 在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請状に対する主要新聞論調について

第三四六号　パリ　10月10日後発　本省　10月11日前着

海軍軍縮会議招請状ニ対スル当地新聞論調ノ主ナル点左ノ如シ

㈠海軍軍縮問題ヲ不戦条約ニ関連セシメタル点ニハ賛意ヲ表シ難ク主力艦ノ制限ナラハ格別補助艦ノ制限ハ防禦的戦争ヲ否認セサル不戦条約ヲ根拠トスルモノニ非ス（「タン」「マタン」「ジュルナル」）

㈡各国ハ其ノ安全維持ニ対スル独自ノ見解ニ依リ全然自由ナル立場ニ於テ補助艦比率ヲ協定スヘク華盛頓会議ノ際ノ主力艦比率ヲ其ノ儘採用スルコト能ハス（「マタン」）

㈢代艦問題ニ関スル華盛頓条約ノ改正殊ニ艦齢延長ハ仏国ノ夙ニ主張スル所ナリ（「ジュルナル」「プテイ、ジュルナル」）

㈣潜水艦ハ防禦的武器ナルノミナラス主力艦補助艦ノ劣勢ナル国ニ取リ沿岸防備並海外植民地トノ連絡保全上必要ナルヲ以テ之カ廃止ニハ断然反対スヘク之カ為会議ノ不成功ニ終ルカ如キコトナカルヘク万一会議決裂スルモ其ノ責ハ仏国ノ負フヘキモノニ非ス（「タン」）

㈤招請状カ末段ニ今次会議ト国際連盟ノ軍縮準備委員会並一般的軍縮会議トヲ関連セシメタル点ニ付賛意ヲ表シ仏国回答ハ此ノ点ヨリ出発スヘキモノナリトナスモノ（「ジュルナル」）又右招請状ノ文句ニモ鑑ミ仏国モ会議参加ヲ拒絶スルコト能ハサルヘシトナスモノ（「マタン」「プテイ、パリジヤンヌ」）

㈥招請状ハ単ナル招請ニ止マルヲ以テ会議参加ノ終局的諾否ハ議題通告ヲ待テ決定スヘキモノナリ（「デバ」）

尚九日ノ「タン」ハ英米間ニ海軍軍縮問題ニ関スル協定成立スルモ海洋自由ノ問題解決セサル限リ両国間ノ懸案ハ除去セラレサルヘシト述ヘ「デバ」亦同様ノ記事ヲ掲ケタリ

英、米ニ転電シ連盟事務局ニ転報セリ

156 昭和4年10月10日 在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

マクドナルド首相の米国訪問に関する共同声明について

ワシントン　10月10日後発
本　省　10月11日後着

第三六四号
往電第三六二号ニ関シ
九日大統領及「マ」首相ハ今回ノ会談ニ関シ共同声明ヲ発シ軍縮問題ニ関スル従来ヨリノ商議ノミナラス世界平和ノ為両国ノ精神的努力ヲ行使スル方法ニ付考慮ヲ加ヘタルカ国情ヲ異ニスル関係上平和促進ヲ計ル上ニ於テ英米各其ノ方策ヲ異ニスヘキモ不戦条約ニ基キ国策ヲ建ツルコトニ決定セル次第ニテ英米間ノ戦争ノ如キハ全然アリ得ヘカラサルコトナリ右ノ新シキ見地及雰囲気ニ依リ吾人ハ旧来ノ歴史的問題ヲ商議スルモノナリ軍縮問題ニ付テハ他ノ関係国ヨリ自由且隔意無キ協議アルニ非サレハ協定ノ成立ヲ期シ難ク従テ会議迄商議ヲ継続スヘキカ会議成功ノ結果各国海軍勢力ノ減少ノミナラス将来ノ建造計画ノ削減ヲ齎スヘシトノ趣旨ヲ述ヘ尚「マ」首相カ其ノ後更ニ新聞記者ニ対シ発セル声明中今回会談ノ結果自分ハ英国関係官庁及自治領ニ於テ新ニ考究スヘキ問題ヲ携ヘ帰国スヘシトノ趣旨ヲ述ヘ居レリ
当国各新聞ハ前記共同声明ニ関シ解説的推測ヲ下シ居レルカ「ボラー」氏カ年来海洋自由問題ヲ主張シ居レル経緯モアリ前記所謂歴史的問題並前掲「マ」首相声明中ノ字句ヲ以テ海洋自由ニ関スル問題ニ付談合行ハレタルモノト観察スルニ一致シ居レルカ右ノ外英領西印度諸島ノ要塞廃棄ノ問題ニモ言及アリタリト伝フルモノアリ
右声明ニ関シ論評ヲ掲クルモノ未タ多カラサルカ紐育「ワールド」ハ海洋自由問題ハ不戦条約ノ成立ト共ニ従来ノ如ク重要ナル問題トハナラサルヘシト述ヘタリ
英ニ転電シ英ヨリ仏ニ転報セシム

157　昭和4年10月11日　在イタリア松田大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請に関する新聞論調について

ローマ　10月11日後発
本　省　10月12日前着

第七八号
海軍軍縮会議招請状接受直前「アーナルド、ムソリニー」ハ「ポポロ、デイタリ」紙上「フ」「マ」会見ニ関連シテ「フアシスト」ハ誠意ヲ以テ世界平和ノ為ニ尽瘁シ来リ今後モ積極的ニ努力ヲ続クル必要アルヲ論シタルカ愈招請状発送ノ報伝ハリタル後ノ新聞論調ヲ綜合スルニ右会議ニ際シ各国カ既成事実ヲ突キ付ケラルルカ如キ事ナク自由ニ其ノ立場ヲ主張シ得ヘキハ招請状ノ「テキスト」ニ鑑ミルモ明ナリト論シ何レモ仏国トノ「バリテイー」維持及潜水艦ノ全廃問題ヲ重要視シ居レリ即チ九日ノ「ジュルナレ、デイタリア」ハ伊国ハ主力艦ノ艦齢延長ニハ反対ニ非サルモ潜水艦ノ全廃ニハ反対ナリト論シ又「テベレ」及「ラボロ、フアシスタノ」同シク之ニ反対シ本問題ニ付テハ日、仏、伊三国間ニ密接ナル提携成立スルニ至ルヘシト論セリ将又十一日ノ各新聞ハ首相官邸ニ於テ首相外相及海相トノ間ニ去ル八日付英国招請状ニ対シ第一回ノ審査ヲ開キタル由ノ政府ノ「コミユニケ」ヲ掲載セリ
英、米、仏ニ郵送

158　昭和4年10月11日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

日米全権団の構成及び日本全権のワシントン招待に関するコットン国務次官との会談について

ワシントン　10月11日後発
本　省　10月12日後着

第三六八号（至急極秘）
貴電第三三九号ニ関シ
往電第三六七号会談ノ機会ヲ以テ国務次官「コツトン」氏ニ尋ネタル処同次官ハ全権ノ問題ニ付テハ実ハ過日「キヤンプ」ニ於テ「マ」首相ト大統領ト会談ノ際（自分ハ其ノ際同席セリ）「マ」首相ノ質問ニ対シ大統領ハ国務長官ヲ全権トシテ派遣シ度キ意向ナルカ其ノ他ノ全権ニ付テハ未タ決定シ居ラスト答ヘタリ其ノ後右顔振ニ付テ何等論議進行シ居ラサルカ自分一己ノ観察ニテハ一、二名ノ上院議員任命セラルルコトトナルヘキモ軍人ヨリ全権ヲ選フカ如キコトハ之ナカルヘク又只今ノ処海軍大臣ノ加ハル模様モナシト答ヘ転シテ日本ノ全権顔触如何ト尋ネタルニ付本使ハ未タ何等承知セスト述ヘタル処「コ」次官ハ実ハ日本全権カ倫敦ニ赴カルル途中之ヲ華盛頓ニ招待シテ懇談ノ機会ヲ造ルコト然ルヘシトノ考ニテ両三日前国務長官ト相談シタルカ来週水曜同長官帰華次第（長官ハ目下紐育ニ滞在中）更ニ協議ノ上決定スル積リナリト語レリ
右日本全権華府招待ノ件ハ唯今ノ処国務長官及大使館限リノ談合ニ過キサルモ最近「マ」首相訪米ノ関係モアリ日本

ニ於テモ右招待ニ応スルコト諸般ノ関係上好都合ト思考スル処右実現ノ場合米国側ヨリ公式申出以前本使ニ於テ予メ帝国政府ノ御意向ヲ承知致シ置キ度キニ付何分ノ儀大至急電報アリタシ

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ転電セシム

159　昭和4年10月11日　在米国坂野大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

比率問題に関する出淵大使と山口多聞中佐との懇談について

ワシントン　10月11日　発
海軍省　10月12日後2時20分着

米海機密第一六番電（十一日）

山口中佐十月十日大使ニ面会補助艦ノ総括的七割比率獲得ニ関スル政府ノ強硬ナル決意、大型巡洋艦ノ対米七割ハ絶対必要ナルコト、潜水艦ノ自主的ニ必要ナル所以並ニ比率ト兵力量ニ関スル観念ニ関シ委細話セシ所大使ヨリ「当地ノ対日空気頗ル良好ナル趨勢ニ鑑ミ機会アリ次第七割獲得ニ関シ有ラユル努力ヲ惜マザルベク大型巡洋艦ニ関シテモ此ノ際徒ラニ米国ノ拡張呼バハリヲ避ケ七割獲得ヲ確実ナラシムル様輿論ノ指導ニ注意アリ度」トノ意見ナリ

（註）元ヨリ米ノ大型巡洋艦保有量引下ハ望マシキコトナルモ七割獲得ハ尚ヨリ以上重大ナルヲ以テ英米全体ノ保有量引下ヲ目標トシ此ノ際米ノミヲ非難スルガ如キコトアラバ折角良好ナル米ノ輿論ヲ逆転セシムル恐アリ却テ不利ナルベシトノ説ナリ

御参考迄

160　昭和4年10月(12)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請に対する米国の回答要旨について

ワシントン
本省　10月12日前着

第三六五号

国務省ハ当日在英米国代理大使ヲシテ軍縮会議招請状ニ対スル米国政府ノ回答ヲ英政府ニ交付セシメタル旨十一日ノ各新聞ニ公表セリ右回答ハ極メテ簡単ナルモノナルカ其ノ要旨左ノ如シ

米国政府ハ華府条約第二十一条掲記ノ問題及他ノ艦種ヲ包含セル討議ノ為海軍軍備ニ関スル前記条約署名国ノ会議ニ対スル英国政府ノ招請ヲ快諾ス

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

161　昭和4年10月12日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

大統領及び英国首相の共同声明に関する新聞論調について

ワシントン　10月12日後発
本省　10月13日前着

第三七一号

往電第三六四号

「マ」首相大統領ノ共同声明ニ関シ当国新聞ハ一般ニ今回ノ会議ニ依リ英米間ノ誤解一掃セラレ両国ハ不戦条約ニ基キ新シキ見地ヨリ世界平和ノ為ニ将来精神的ノ力ヲ行使セントスル全般的了解ニ到達シタルモノニテ何等同盟協定等ヲ結ヒタルモノニ非スト論シ居レルカ右ノ外紐育「タイムス」ハ右声明中ニ平和確保ノ方法ハ英米各々其ノ趣ヲ異ニシ米国ハ欧州ノ外交ニ捲キ込マレサルヘシト述ヘタル点ハ大統領カ特ニ上院ノ猜疑ヲ招カサル為ニ書キ加ヘタルモノナルヘシト述ヘタリ尚共同声明ヲ以テ英米カ両国海軍ノ「プール」スルコトニ意見一致セルモノト解釈シ居ルモノナルニ対シ国務長官ハ十日右ハ今回ノ会談ノ精神ヲ全然曲解セルモノニテ会談中斯ル提案ニ就テハ一言タリトモ発セラレタルコトナシトノ趣旨ノ声明ヲ発セリ尚又英国政府ノ招請状末段連盟ニ言及セル部分ニ関シ上院議員中ニハ今回ノ軍縮協定ハ連盟ノ一般軍縮会議ノ承認ヲ経ルニ非サレハ効力ヲ発生セサルカ如ク解シ居ル向アル趣ナル処官辺ニ於テハ英米両国ハ前記ノ如キ意志ナキ旨述ヘタル趣報セラル

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

162　昭和4年10月(13)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

ヴァージニア州ラピダン・キャンプにおける大統領と英国首相との会談内容に関するコットン国務次官の談話について

ワシントン
本省　10月13日前着

第三六七号（極秘）

国務次官「コットン」ハ最近軍縮問題ニ携ハリ居リ現ニ「キャンプ」ニ於ケル大統領「マ」首相会談ノ際ニモ列席シタル次第アルニ付十一日同官ヲ往訪シ前記会談ノ内容ニ付探リヲ入レタル処同官ノ語レル処大要左ノ通

㈠軍縮問題ニ関シテハ大統領「マ」首相間ニ充分意見ノ交換行ハレ「マ」首相ハ帰国ノ上英国海軍当局ヲ説キ付ケ尚一段ノ縮少ヲ決行セントノ意向ヲ明示シタルカ右ハ即チ主力艦ニ付テハ代艦延期其ノ他ノ方法ニ依リ漸次之カ縮少ヲ計リ巡洋艦ニ付テハ英国トシテ大型ヲ十五隻以下ニ減少スル事ハ何分困難ナルモ小型巡洋艦ニ付代艦数ヲ減スル等ノ方法ニテ出来得ル限リ保有艦噸数ヲ減シ又駆逐艦ニ付テモ削減ヲ計ルト同時ニ潜水艦総噸数モ出来得ル限リ低キ限度ニ止メントスルモノナリ一方米国側保有大型艦中例ノ三万噸ノ問題ニ付テハ今回ハ話ヲ纏メス結局会議ニ持越ス事トナリ

㈡海洋自由ノ問題モ議ニ上リタルカ本問題ニ付テハ今後引続キ意見ヲ交換スル事トナレリ但本件カ倫敦会議ノ議題トナルヘキヤ否ヤニ付テハ今日ノ処何等言明シ難シ尚華府条約中太平洋防備制限ノ規定アルニ鑑ミ今回ノ会談ニ於テ Caribbean Sea 及「ハリファックス」ノ防衛撤廃問題モ議ニ上リタルカ之亦会議ノ議題トナルヤ否ヤハ未タ判明セス

㈢今回ノ会談ハ専ラ英米間ノ問題ヲ議シタル為自分ノ承知スル限リニ於テハ日本ノ関係ハ遂ニ議ニ上ルニ至ラス従テ七割ノ問題ニ付テモ何等触ルル処ナカリキ

右ニ対シ本使ヨリ内報ヲ謝シタル上日本全権ハ距離ノ関係上十一月下旬又ハ十二月上旬出発ノ必要アルヘク旁日本政府ニ於テ軍縮問題ニ関シ準備ノ都合モアルヘキニ付過般来国務長官ニ御話シ置キタル比率問題ニ関シ成ルヘク速ニ米国政府ノ諒解ヲ得度キ旨述ヘタルニ「コ」次官ハ日本ノ七割要求ハ自分ノ見込ニテハ米国ノ関スル限リ左迄重大ナル困難無カルヘシト思考スルモ兎ニ角長官帰華次第話シ置クヘシト答ヘ尚本日ノ会談ハ大統領ト「マ」首相間ノ内談ニ関スル事故固ク秘密ニ願度シト述ヘタリ本使ハ十七八日頃国務長官ニ面会ノ予定ナリ

英ニ転電シ英ヲシテ仏伊ニ転電セシム

163　昭和4年10月15日　在イタリア松田大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請に関するイタリアの対英回答内報について

別　電　十月十五日着在イタリア松田大使より幣原外務大臣宛第八〇号
会議招請に関するイタリアの対英回答テキスト大要

第七九号　ローマ　10月15日前発
本　省　10月15日後着

十四日夕求メニ依リ往訪シタル吉沢ニ対シ外務省主任官ハ今日首相ノ裁決ヲ経テ倫敦会議招請状ノ回答ヲ発スルコトトナリ在英伊国大使ニ訓示シ同時ニ他ノ関係諸国政府ニモ内報スル手筈ニテ日本政府ニ対シテハ在東京伊国大使ヨリ対英回答文「テキスト」ヲ送致スヘク電報済ミナルカ同時ニ松田大使ニモ内報致置度シトノ「グランジ」外相ノ希望ニ基ク旨ヲ内話シテ右回答文写（伊文）ヲ交付シタル上本「テキスト」ハ十六日ノ新聞ニ発表スルコトトナリ居ル旨並ニ在本邦伊国大使ニ対シテハ伊国政府ハ会議開催前日本政府トノ間ニ予メ意見ノ交換ヲ行ヒ度希望ヲ有スルコトヲ併テ申入ルル様訓示シタル旨付言シタル趣ナリ

右「テキスト」大要別電ノ通

英米仏ヘ暗送セリ

（別　電）

第八〇号

（前略）軍縮問題ニ対スル特ニ海軍制限ニ対スル伊国政府ノ意向ハ既ニ累次ノ声明ニ徴シテ明カナリトシテ特ニ英仏海軍協定問題ニ関スル客年十月六日付対英回答ヲ引用シタル後伊国ハ過度ノ軍備ノ齎ス危険ヲ除去スルノ企ニハ常ニ協力センコトヲ希望シ又今回ノ会議ハ軍縮達成上貢献センコトニ係ルヘキヲ確証スルカ故ニ欣然招請ヲ諾スル旨ヲ述ヘ最後ニ英政府カ伊国側ノ本件会議事項ニ関スル見解ヲ求メラレタルニ付テハ之ヲ諒承スルト共ニ伊国政府ハ英側ノ同様ノ通報ニ接センコトヲ期待シ其ノ都度伊国側ノ意見ヲ回示スルコトヲ留保ス

英、米、仏ヘ暗送セリ

164　昭和4年10月15日　在パリ佐藤連盟事務局長より幣原外務大臣宛（電報）

ロンドン軍縮会議への仏国の態度に関する軍縮準備委員会仏国代表の談話について

パリ　10月15日後発
本省　10月16日前着

第一二一号

十二日軍縮準備委員会仏国海軍代表ト面談ノ際本官ヨリ寿府三全権発往電第三九号後段倫敦会議ニ対スル仏国側ノ態度ニ言及シ今尚同様ノ意見ヲ固持スル次第ナリヤト尋ネタル処「ド」ハ仏国トシテハ陸海空三軍連繋ノ主義ヲ放棄シ得サルモ来ル倫敦会議ニテハ仏国モ艦艇ノ各種別ニ亘リ噸数及隻数ノ問題ニ関シ協議セサルヲ得サルヘキ処（此ノ点前電寿府会議ノ際トハ大ナル差異アルヲ認ム）仏国全権ハ前記ノ主義ニ基キ少クトモ陸空軍ノ人員及機材ノ制限方式ニ関スル今春ノ軍備準備委員会ニ於ケル決定カ変更セラレサルヘキ保障ヲ取付クルニアラサレハ海軍問題ノミヲ切離シ考量スルヲ得ス即チ万一陸空軍ニ関シ他日制限方式ヲ変更スルコトアリトセハ海軍ニ関シ仏国全権ノ承諾セル数字モ当然其ノ効力ヲ失フヘシトナスモノナリト答ヘ尚本件三軍連繋ノ問題ハ仏国ニ取リ頗ル重大ナル意味ヲ有スルモノナルニ付出来得レハ日本ト同一ノ歩調ニ出テ度キ希望ニシテ二、三日前在東京仏国大使ニ対シ日本政府ヘ此点詳細説明方訓電発セラレタリト付言セリ

尚陸軍代表ハ同日樺陸軍代表ニ対シ略々同様ノ趣旨ヲ述ヘ且仏国陸軍側ニ於テハ仏国ノ対英回答中ニ倫敦会議ニ於テハ軍縮準備委員会ノ決定セル陸空軍制限方式ニハ手ヲ触ルルヘカラストノ趣旨ヲ仄カスコト適当ナリトノ意見ニテ目下外務省側ト意見交換中ナル趣ナリ

英米伊ニ転電シ仏ヘ通報セリ

165

昭和4年10月15日　大蔵省資料

現有勢力維持の場合と英米協定案により米国の七割保有の場合との昭和十一年迄の補助艦建造費の比較について

現有勢力維持ノ場合ト英米協定案ニヨリ米国ノ七割保有ノ場合トノ一九三六年（昭和十一年）迄ノ補助艦建造費ノ比較

第一　現有勢力維持ノ場合

標準　既定補助艦計画ノ目標タル左ノ勢力ヲ維持スルモノトス

	噸数	備考
八吋砲巡洋艦	一〇八、四〇〇噸	巡洋艦合計一八九、八五五噸
六吋砲巡洋艦	八一、四五五	
駆逐艦	一一〇、一四五	水上補助艦合計三〇〇、〇〇〇噸
潜水艦	七五、四九九	
合計	三七五、四九九	

(一)既定方針ナル艦齢巡洋艦十六年駆逐艦十二年潜水艦十二年ニ依ル場合

	建造所要噸数	噸当単価	所要建造費
八吋砲巡洋艦	〇噸	円	〇円
六吋砲巡洋艦	一六、六六〇	三、〇〇〇	四九、九八〇、〇〇〇
駆逐艦	四八、九八五	三、九五〇	一九三、三九〇、七五〇
潜水艦	二九、二四四	四、七七〇	一三九、四九三、八八〇
合計	九四、八八九		三八二、八六四、六三〇

(二)今回予算上海軍省要求補助艦補充計画ニ於ケル艦齢案即巡洋艦十六年駆逐艦十四年潜水艦十三年ニ依ル場合

	建造所要噸数	噸当単価	所要建造費
八吋砲巡洋艦	〇噸	円	〇円
六吋砲巡洋艦	一六、六六〇	三、〇〇〇	四九、九八〇、〇〇〇
駆逐艦	三九、三〇五	三、九五〇	一五五、二五四、七五〇
潜水艦	二三、七六八	四、七七〇	一一三、三七三、三六〇
合計	七九、七三三		三一八、六〇八、一一〇

第二　英米協定案ニ依ル米国ノ七割保有ノ場合

標準　巡洋艦駆逐艦ハ米国保有噸数ノ七割ヲ巡洋艦駆逐艦ハ日本ノ自主的要求タル八万噸ヲ保有スルモノトス

	噸数	備考
八吋砲巡洋艦	一四七、〇〇〇噸	巡洋艦合計二二〇、八五〇噸
六吋砲巡洋艦	七三、八五〇	
駆逐艦	一〇五、〇〇〇	水上補助艦合計三二五、八五〇噸
潜水艦	八〇、〇〇〇	
合計	四〇五、八五〇	

(一)今回ノ会議ニ於テ各国ノ一致ヲ見ルベシト予想セラルル艦齢即巡洋艦二〇年駆逐艦一六年潜水艦一三年ニ依ル場合

	所要建造噸数	噸当単価	所要建造費
八吋砲巡洋艦	三八、六〇〇噸	二、七四一円	一〇五、八〇二、六〇〇円
六吋砲巡洋艦	△七、六〇五	—	〇
駆逐艦	一一、七九五（四、一九〇）	三、九五〇	四六、五九〇、二五〇（一六、五五〇、五〇〇）
潜水艦	二八、二六九	四、七七〇	一三四、八四三、一三〇
合計	七一、〇五九	—	二八七、二三五、九八〇（二五七、一九六、二三〇）

備考

此場合ニ於テハ日本ハ六吋砲巡洋艦七千六百五噸ヲ廃棄セザルベカラズ然レ共之ヲ保持シテ其代リトシテ駆逐艦

ノ保有噸数ヲソレ丈減少スル場合ニハ括弧内ノ数字トナル

(二)我国ハ経過的ニ一時既成艦ノ艦齢繰上ノ要求ヲ有スト而シテ其具体案ハ未定ナルモ巡洋艦及駆逐艦ニ於テ一ノ場合ヨリモ各二年ヲ繰上ケ各十八年及十四年トナス場合

	所要建造噸数	噸当単価	所要建造費
八吋砲巡洋艦	三八、六〇〇	二、七四一円	一〇五、八〇二、六〇〇円
六吋砲巡洋艦	△四、三七五	—	○
駆逐艦	三四、一六〇 (二九、七八五)	三、九五〇	一三四、九三二、〇〇〇 (一一七、六五〇、七五〇)
潜水艦	二八、二六九	四、七七〇	一三四、八四三、一三〇
合計	九六、六五四	—	三七五、五七七、七三〇 (三五八、二九六、四八〇)

備考

此場合ニ於テ日本ハ六吋砲巡洋艦四千三百七十五噸ヲ廃棄セザルベカラズ然レ共之ヲ保持シテ其代トシテ駆逐艦ノ保有艦数ヲソレ丈減少スル場合ニハ括弧内ノ数字トナル

(三)(二)ノ場合ヨリモ巡洋艦ニ於テ更ニ二年ヲ繰上ケ十六年トナス場合即現有勢力維持ノ為メ今回海軍省カ予算上要求シタル艦齢案即第一ノ(二)ト同一ノ艦齢案ニ依ル場合

	所要建造噸数	噸当リ単価	所要建造費
八吋砲巡洋艦	三八、六〇〇	二、七四一円	一〇五、八〇二、六〇〇円
六吋砲巡洋艦	九、〇五五	三、〇〇〇	二七、一六五、〇〇〇
駆逐艦	三四、一六〇	三、九五〇	一三四、九三二、〇〇〇
潜水艦	二八、二六九	四、七七〇	一三四、八四三、一三〇
合計	一一〇、〇八四		四〇二、七四二、七三〇

右各種ノ場合ノ補助艦建造費ヲ一括シ概数ヲ示セバ左ノ如シ

現有勢力維持ノ場合

(一)　三八二、九〇〇、〇〇〇円

(二)　三一八、六〇〇、〇〇〇

英米案米国ノ七割ノ場合

(一)　二八七、二〇〇、〇〇〇
　　(二五七、二〇〇、〇〇〇)

(二)　三七五、六〇〇、〇〇〇
　　(三五八、三〇〇、〇〇〇)

(三)　四〇二、七〇〇、〇〇〇

而シテ現在ノ補助艦建造費ハ昭和六年度ニ終ルヲ以テ昭和七年度以降十一年度迄五ヶ年度間ニ追加計上スルモノトスレバ其毎一年度額ハ左ノ如シ

現有勢力維持ノ場合

(一)　七六、六〇〇、〇〇〇円

(二)　六三、七〇〇、〇〇〇

英米案米国ノ七割ノ場合

(一)　五七、四〇〇、〇〇〇
　　(五一、四〇〇、〇〇〇)

(二)　七五、一〇〇、〇〇〇
　　(七一、七〇〇、〇〇〇)

(三)　八〇、五〇〇、〇〇〇

以上各種ノ場合ヲ比較スルニ我国ニ於テ経過的ニ巡洋艦及駆逐艦ノ艦齢繰上ヲ要求スル場合ニ於テハ現有勢力ノ場合ニ比較シテ大体ニ於テ代艦建造費ヲ減少スルコトナク寧若干ノ増加ヲ見ル如キ傾勢ニアリ

現在ノ我国補助艦艇ノ建造費ハ毎年年額八千八百万円ヲ維持セリ而シテ右ノ計数ハ従来ノ八千八百万円ニ比較シ減少スル如キモ右ハ巡洋艦駆逐艦潜水艦ノ三艦種ノミニ付計算セルモノナルヲ以テ其外ノ各種ノ補助艦特務艦等ノ建造費ヲ加算スレバ之又相当ノ額ニ上ルベシ昭和五年度ノ予算計画ニ際シ海軍省ノ要求セル之等特務艦艇等ノ建造計画ハ左ノ如シ

	隻数	噸数	建造費
砲艦	三隻	二、〇〇〇噸	六、三〇〇、〇〇〇円
敷設艦	五隻	三、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇
工作艦	一隻	一〇、〇〇〇	六、九〇〇、〇〇〇
給油艦	一隻	一五、〇〇〇	一〇、〇五〇、〇〇〇
駆潜艇	三隻	三六〇	一、五三〇、〇〇〇
合計	一三隻	三〇、三六〇	三二、五八〇、〇〇〇

即総額三千二百五十八万円ニシテ之ヲ昭和七年度以降十一年度迄ニ建造セントスレバ毎年平均年割額ハ六百五十万円ヲ要ス之ヲ前述ノ巡洋艦駆逐艦及潜水艦ノ建造費ニ加算スレバ補助艦艇全部ノ建造費年割額ハソレ丈増加スル計算ナリ

日英米水上補助艦比較表　(A)

	現在		建造中		計画済未起工		艦齢超過艦		一九三六年末(昭和十一年末)現有勢力差引計	
	隻数	噸数	隻数	噸数	隻数	噸数	隻数	噸数	隻数	噸数
日本										
八吋砲巡洋艦	八隻	六八、四〇〇噸	四隻	四〇、〇〇〇噸	隻	噸	隻	噸	隻	噸
六吋砲巡洋艦	二一	九八、四一五	○	○	○	○	四	一六、九六〇	一七	八一、四五五

海軍新規要求補充計画完成予定時ノ勢力表　日英米水上補助艦比較表(B)

	現在 隻数	現在 噸数	建造中 隻数	建造中 噸数	計画済未起工 隻数	計画済未起工 噸数	艦齢超過艦 隻数	艦齢超過艦 噸数	(昭和十一年度末現有勢力)差引計 隻数	(昭和十一年度末現有勢力)差引計 噸数
日本										
八吋巡洋艦	八	六八、四〇〇	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一二	一〇八、〇〇〇
六吋巡洋艦	二一	九八、四一五	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一七	一七、〇〇〇
巡洋艦計	二九	一六六、八一五	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二九	二八、〇〇〇
駆逐艦	一〇一	一〇五、五七五	一四	一四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	四	四〇、〇〇〇	一〇一	一〇一、〇〇〇
水上補助艦計	一三〇	二七二、三九〇	一八	一八、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	四	四〇、〇〇〇	三六	三六、〇〇〇
潜水艦	六一	六一、三五七	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	一九一	三三三、七四七	二八	二八、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一一	一一、〇〇〇
英国										
八吋巡洋艦	一一	一一、〇〇〇	四	四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一一	一一、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	四五	二二八、九七一	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
巡洋艦計	五六	三三八、九七一	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二一	二一、〇〇〇
駆逐艦	一五三	一五九、二五五	二〇	二〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
水上補助艦計	二〇九	四九八、二二六	二四	二四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	三一	三一、〇〇〇
潜水艦	五六	四六、七九二	一二	一二、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	二六五	五四五、〇一八	三六	三六、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二一	二一、〇〇〇
米国										
八吋砲巡洋艦	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
巡洋艦計	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
駆逐艦	二六一	二六七、九三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
水上補助艦計	二七一	三三八、四三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
潜水艦	一〇九	七九、六六四	一	一、八二二	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇
合計	三八〇	四一八、〇九七	二一	二一、〇六〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二二	二二、〇〇〇
英国										
八吋巡洋艦	一一	一一、〇〇〇	四	四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	四五	二二八、九七一	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
巡洋艦計	五六	三三八、九七一	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
駆逐艦	一五三	一五九、二五五	二〇	二〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
水上補助艦計	二〇九	四九八、二二六	二四	二四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
潜水艦	五六	四六、七九二	一二	一二、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	二六五	五四五、〇一八	三六	三六、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二二	二二、〇〇〇
米国										
八吋砲巡洋艦	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
巡洋艦計	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
駆逐艦	二六一	二六七、九三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
水上補助艦計	二七一	三三八、四三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
潜水艦	一〇九	七九、六六四	一	一、八二二	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇
合計	三八〇	四一八、〇九七	二一	二一、〇六〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二二	二二、〇〇〇
英国										
八吋砲巡洋艦	一一	一一、〇〇〇	四	四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	四五	二二八、九七一	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
巡洋艦計	五六	三三八、九七一	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
駆逐艦	一五三	一五九、二五五	二〇	二〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
水上補助艦計	二〇九	四九八、二二六	二四	二四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
潜水艦	五六	四六、七九二	一二	一二、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	二六五	五四五、〇一八	三六	三六、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二二	二二、〇〇〇
日本										
八吋巡洋艦	八	六八、四〇〇	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一二	一〇八、〇〇〇
六吋巡洋艦	二一	九八、四一五	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一七	一七、〇〇〇
巡洋艦計	二九	一六六、八一五	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二九	二八、〇〇〇
駆逐艦	一〇一	一〇五、五七五	一四	一四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	四	四〇、〇〇〇	一〇一	一〇一、〇〇〇
水上補助艦計	一三〇	二七二、三九〇	一八	一八、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	四	四〇、〇〇〇	三六	三六、〇〇〇
潜水艦	六一	六一、三五七	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	一九一	三三三、七四七	二八	二八、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一一	一一、〇〇〇
英国										
八吋砲巡洋艦	一一	一一、〇〇〇	四	四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一一	一一、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	四五	二二八、九七一	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
巡洋艦計	五六	三三八、九七一	四	四〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二一	二一、〇〇〇
駆逐艦	一五三	一五九、二五五	二〇	二〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
水上補助艦計	二〇九	四九八、二二六	二四	二四、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	三一	三一、〇〇〇
潜水艦	五六	四六、七九二	一二	一二、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一〇	一〇、〇〇〇
合計	二六五	五四五、〇一八	三六	三六、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二一	二一、〇〇〇
米国										
八吋砲巡洋艦	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
六吋砲巡洋艦	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
巡洋艦計	一〇	七〇、五〇〇	〇	〇〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
駆逐艦	二六一	二六七、九三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
水上補助艦計	二七一	三三八、四三三	一〇	一〇、〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	一三	一三、〇〇〇
潜水艦	一〇九	七九、六六四	一	一、八二二	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇
合計	三八〇	四一八、〇九七	二一	二一、〇六〇	〇	〇〇〇〇	〇	〇〇〇〇	二二	二二、〇〇〇

艦齢　巡洋艦　二〇年　駆逐艦　一六年　潜水艦　一三年

駆逐艦　三万五千噸ニ要スル経費

第一、新規建造費

三、九五〇円×三五、〇〇〇円＝　一三八、二五〇、〇〇〇円

第二、将来毎一年当経費

㈠代艦建造費

一三八、二五〇、〇〇〇円÷一六年＝　八、六四〇、〇〇〇円

㈡維持費

二四〇円×三五、〇〇〇円＝　八、四〇〇、〇〇〇円

合計　一年当リ経費　一七、〇四〇、〇〇〇円

巡洋艦ト駆逐艦一噸当リ経費ノ比較

		指数
㈠建造費		
大型巡洋艦	二、七四一円	一〇〇
駆逐艦	三、九五〇円	一四〇
㈡毎一年当リ経費		
一、代艦建造費		
大型巡洋艦	二、七四一円÷二〇＝一三七円	一〇〇
駆逐艦	三、九五〇円÷一六＝二四七円	一八〇
二、維持費		
大型巡洋艦	二〇〇円	一〇〇
駆逐艦	二四〇円	一二〇
毎年当リ経費（代艦建造費及維持費合計）		
大型巡洋艦	三三七円	一〇〇
駆逐艦	四八七円	一四五

英米協定案要目

㈠補助艦

一、噸数隻数

	英国	米国
八吋砲巡洋艦	一五隻　一四六、八〇〇噸	二一隻　二一〇、〇〇〇噸
六吋砲巡洋艦	三五隻　一九二、二〇〇噸	一五隻　一〇五、五〇〇噸
巡洋艦計	五〇隻　三三九、〇〇〇噸	三六隻　三一五、五〇〇噸
駆逐艦	正式発表ナシ英米各十五万噸ナルヤニ推測セラル	

潜水艦　全廃希望

備考

一、右ノ結果新規建造ハ

米国	一万噸八吋砲艦	一一隻	十一万噸
	六吋砲艦	五隻	三万五千噸
英国	六吋砲艦	一四隻	九万一千噸

（艦齢超過艦ノ外五万八千噸廃棄）

二、英ハ米ノ一万噸八吋三隻ノ代リニ一万噸六吋三隻又ハ七千五百屯六吋四隻ヲ希望ス

一、右ノ勢力ニハ一九三六年末ニ到達スルモノトス

二、艦齢巡洋艦二〇年、駆逐艦一六年、潜水艦十三年

㈡主力艦　五ケ年間建造延期

（華府会議ハ一九三一年起工予定）

我国ノ現在補助艦計画ノ目標トセル

昭和六年度末ノ現有勢力

巡洋艦	二九隻	一八九、八五五噸
内		
八吋砲巡洋艦	一二隻	一〇八、四〇〇噸
六吋以下軽巡洋艦	一七隻	八一、四五五噸
駆逐艦	九〇隻	一一〇、一四五噸
小計		三〇〇、〇〇〇噸
潜水艦	六七隻	七五、四九九噸
合計		三七五、四九九噸

備考

艦齢	巡洋艦	十六年
	駆逐艦	十二年
	潜水艦	十二年

（注）作成の日付不明であるが昭和四年十月十五日の印あり。

166　昭和4年10月16日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請に関する回答書手交並びに会議開催前に非公式会談を希望の旨申入について

ロンドン　10月16日後発
本　省　10月17日前着

第三八五号

貴電第二六一号ニ関シ

目下外務大臣旅行中ニテ来週ニ非サレハ帰京セサル由次官モ亦休暇旅行中ナル為已ムヲ得ス今十六日午後五時「ウエ

ルズレー」ニ面会回答書ヲ交付シタル上貴電御訓示ノ次第ヲ詳細申入レタル処「ウ」ハ外相ニ報告シ尚電報ヲ以テ首相ニモ申送ルヘキ旨答ヘタリ尚伊国政府ヨリハ昨十五日受諾ノ回答ニ接シタル旨述ヘ居リタリ今朝仏国大使ニ面会ノ際同大使ハ本日午後五時半仏国政府ノ回答書ヲ提出シ明十七日発表スル由話シ居リタリ尚伊国回答モ今明日中ニ発表セラルル由右不取敢

米、仏、伊ニ転電シ仏ヲシテ佐藤公使ニ転報セシム

167 昭和4年10月16日 在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

陸海空軍軍縮の関連性及び仏伊海軍力の比較などに関するブリアン外相の内話について

第三五四号　パリ 10月16日後発　本省 10月17日前着

十四日諜報者ヲシテ軍縮問題ニ関シ「ブリアン」ト質疑応答セシメタル処「ブリアン」ハ当座ノ感想トシテ大要

一、今次五国海軍縮少会議ノ結果ハ将来連盟ニ於テ作成スヘキ一般的軍縮条約案ノ一部ヲ形成シ連盟ノ「サンクション」ヲ経タル後ニ非サレハ之ヲ実施セサルコトトスルコトヲ要ス（即チ陸海空三軍軍縮ヲ関連セシメ且ツ五国会議ノ結果タル海軍縮少ヲ他ノ連盟国ニモ拡張セントスルモノ）

二、潜水艦ノ全廃ハ到底不可能ナリ

三、仏国トシテハ英国ノ保有スヘキ海軍力ヲ基礎トシテ仏国ノ沿岸防禦及植民地トノ連絡保持ニ必要ナル海軍力ヲ算出シ之ヲ主張スレハ足ルヘク他国カ仏ト同等ノ数字ヲ要求スルト否トハ問題ニ非ス（諜報者ノ談ニテハ「ブリアン」ハ伊国ハ実際上仏国海軍ニ追随シ来ル力ナシト考ヘ理論上ハ伊国トノ間ニ「パリチー」ヲ認メントスルモノナリ）

トノ趣旨ヲ内話セル由ナリ尚十五日「マツシグリ」カ右諜報者ニ内話セル所ニ依レハ仏国政府ノ対英回答文ハ当初「マ」ニ於テ種々条件ヲ付シタル長文ノモノヲ起草セルモ「ブリアン」ハ如斯条件ヲ付スルヲ好マス書換ヘヲ命シタル趣ニシテ其ノ結果往電第三五三号ノ如キ簡単ナル回答発送ノ運ヒニ至リタルモノト察セラル

英米伊ヘ転電シ連盟事務局長ヘ通報セリ

168 昭和4年10月16日 在パリ佐藤連盟事務局長より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請に関する仏国の対英回答写の交付及びこれに関するマシグリの談話について

付記　会議招請に関する仏国政府の対英回答

第一二七号　パリ 10月16日後発　本省 10月17日後着

十六日午後四時「マツシグリ」ノ招請ニ応シ往訪ノ所米国大使館書記官モ同時来合セ共ニ「マ」ニ面会別電第一二八号ノ如キ五国海軍会議ニ関スル仏国政府ノ対英回答写ノ交付ヲ受ケ且該回答ハ之ヨリ一時間ノ後在英仏国大使ヨリ英国政府ニ交付セラルヘク又本日中ニ公表ノ筈ナリトノ説明アリタリ「マ」ハ更ニ左ノ如キ感想ヲ述フ

本件回答末項冒頭ニ所謂軍縮ノ一般的条件若ハ海軍軍縮ノ特別条件ニ関シ仏国政府ノ従来支持セル主義ハ茲ニ再言ヲ要セストノ意味ヲ現ハセル一句ハ仏国政府ノ最モ重キヲ置ク所ニシテ即チ三軍連繋問題ヲ指スニ外ナラス而シテ仏国政府ハ倫敦会議ニ於テ噸数隻数等ノ数ノ問題ヲ討議スルヲ拒絶セサルヘキモ其ノ受諾スルコトアルヘキ数ハ仮ノ性質ヲ有スルモノニシテ他日軍縮会議ニ於テ（準備委員会ノコトナリヤ又軍縮会議ヲ意味スルモノナリヤハ「マ」ノ説明ニテハ不明ナリ）陸空軍ノ制限方式ニ満足ヲ得サレハ海軍ニ関スル数ノ問題モ仏国ニ関スル限リ効力ヲ生セサルヘシ又仏ノ遭遇スヘキ最大ナル困難ノ一ハ仏伊関係ナルヘキ処本件解決上ヨリ云ヘハ今回ノ倫敦会議ハ時宜ヲ得タリト云ヒ難ク実ハ仏ハ対伊関係ヲ緩和シ軍縮ヲ容易ナラシメントスル目的ヲ以テ伊ニ対シ政治的協定ヲ提議シタルモ最近「ムツソリニ」之ヲ回避シ話進捗セス若シ従前ノ如ク海軍問題モ準備委員会ヲシテ取扱ハシメタリトセハ本会議迄ニハ充分ノ時日アリ伊国トノ協定モ可能ナリシナランモ今日ノ状態ヲ以テシテハ倫敦会議前ニ現実到底覚束ナク従テ仏側トシテハ会議ノ成功ニ対シ幾多ノ危惧ヲ懐カサルヲ得ス尤伊国側ヨリ仏伊「パリチー」問題ニ関シ会談ヲ希望シ来レルカ如ク最近ノ機会ニ於テ両国間協議開始セラルヘシト思考ス云々

右ニ対シ本官及米書記官ハ交々仏伊間ノ困難ハ早晩解決ニ値スヘキ問題ニシテ時機ノ問題ヨリスレハ倫敦会議ハ軍縮本会議ニ比シ劣レリトハ考ヘラレストノ意見ヲ述ヘ引キ取

レリ尚上記「マ」ノ所言ハ内密ニセラレタシト云ハリ
本件会談発表間際ニ付平文ヲ以テ電報ス但英米ハ全文郵送ス

（付　記）

Le Gouvernement Français a pris connaissance avec un vif intérêt de la lettre du Secrétaire d'Etat pour les Affaires étrangères, par laquelle le Gouvernement Britannique, en lui communiquant les principes qui ont fait l'objet d'un accord provisoire entre lui et le Gouvernement des Etats-Unis d'Amérique, l'invite à se faire représenter à une conférence qui s'ouvrirait à Londres au début de la troisième semaine du mois de janvier prochain et où seraient discutés les problèmes relatifs aux catégories de bâtiments de guerre qui ne sont pas visés dans le Traité de Washington de 1922, ainsi que les questions faisant l'objet du deuxième paragraphe de l'art. 21 de ce traité.

Le Gouvernement de la République se félicite que les conversations engagées entre le Premier Ministre Britannique et l'Ambassadeur des Etats-Unis à Londres suivant la méthode suggérée au cours des délibérations de la Commission préparatoire du Désarmement, aient pris un tour aussi favorable. Il n'a pas été moins heureux de constater que les deux Gouvernements ont trouvé dans le Pacte de Paris du 27 août 1928 un élément précieux pour réaliser entre eux une entente de principe sur les armements navals qui leur paraissant répondre aux besoins de leur sécurité.

Le Gouvernement Britannique, après s'être concerté avec le Gouvernement des Etats-Unis, propose maintenant d'étendre ces conversations aux Puissances principalement intéressées à la solution du problème naval, et cette initiative a expressément pour but, ainsi que le marque la communication du Secrétaire d'Etat Britannique, de faciliter la tâche de la Commission préparatoire et celle de la future conférence générale pour la limitation et la réduction des armements.

Le Gouvernement de la République Français a donné trop de preuves de son désir de l'achèvement rapide des travaux préparatoires de cette conférence, dont la réunion permettra de réaliser les obligations inscrites à l'article 8 du Pacte de la Société des Nations, pour ne pas se féliciter de cette proposition. Il est donc heureux d'accepter l'invitation qui lui est adressée.

Les principes qui n'ont pas cessé de guider la politique française, soit en ce qui concerne les conditions générales du problème de la limitation des armements, soit au sujet des conditions spéciales du problème de la limitation des armements navals, ont été trop souvent définis, aussi bien au cours des travaux de Genève que dans les négociations connexes, pour qu'il soit nécessaire de les rappeler.

D'ailleurs, le Secrétaire d'Etat Britannique pour les Affaires étrangères, dans sa lettre précitée, fait connaître les intentions de son Gouvernement de procéder avec le Gouvernement Français, comme avec les autres Gouvernements invités à la Conférence de Londres, à des échanges de vues préliminaires sur les questions qui seront inscrites au programme de leurs délibérations communes. Le Gouvernement de la République ne voit que des avantages à l'application de cette méthode, qui lui fournira l'occasion de préciser sa manière de voir, tant en ce qui concerne les divers points visés dans la lettre de Son Excellence M. Arthur Henderson, que touchant les problèmes qui s'y rattachent et l'ensemble des questions qui pourront se poser devant la prochaine Conférence.

（右仮訳文）

仏蘭西国政府回答仮訳文

英国政府ハ同国外務大臣ノ書翰ヲ以テ英国政府及米国政府間暫定協定ノ主題タリシ原則ヲ仏国政府ニ通報セラルルト共ニ来ル一月第三週初頭ニ倫敦ニ於テ開催セラレン千九百二十二年ノ華盛頓条約ニ規定セラレサル艦種ニ関スル問題並同条約第二十一条第二項ノ主題タル問題ヲ討議スヘキ会議ニ仏国政府ノ参加ヲ招請セラレタリ仏国政府ハ右書翰ヲ深

甚ナル興味ヲ以テ了承ス

仏国政府ハ軍備縮小準備委員会ニ於ケル討議中提議セラレタル方法ニ従ヒ英国首相及在倫敦米国大使間ニ行ハレタル会談カ斯ノ如ク好転スルニ至リタルヲ慶賀シ又両国政府カ其ノ国ノ安全ノ必要ヲ充タスルニ足ルト思考スル海軍軍備ニ付相互間ニ原則上ノ協定ヲ遂クルニ当リ千九百二十八年八月二十七日ノ巴里条約ヲ以テ之カ貴重ナル要素ト看做シタルコトヲ知リ大ニ欣幸トスルモノナリ

今ヤ英国政府ハ米国政府ト協議ノ上海軍問題ノ解決ニ付主要ナル利害関係ヲ有スト思考セラルル国ニ対シ右会談ノ範囲ヲ拡張センコトヲ提議セラレタルカ右提議ノ目的カ明カニ準備委員会並将来ノ軍備制限及縮小ニ関スル一般会議ノ事業ヲ容易ナラシムルニアルコトハ英国外務大臣ノ書翰中ニ指摘セラレタル通ナリ

該会議ノ開催ニ依リ国際連盟規約第八条ニ規定セル義務ヲ実行シ得ヘキニ依リ仏国政府ハ該会議準備事業ノ急速終結ヲ希望スルノ証左ヲ示シ来リタル次第ナルヲ以テ此ノ種ノ提案ヲ見ルハ其ノ慶賀ニ堪ヘサル所ナリ仍テ仏国政府ハ茲ニ同政府ニ対スル招請ヲ受諾スルヲ欣幸トスルモノナリ

軍備制限問題ノ一般条件並海軍備制限問題ノ特殊条件ニ関シ仏国ノ政策ヲ終始指導セル主義ハ「ジュネーヴ」ノ討議及之ニ関連セル交渉ニ際シテ屢々言明セル所ナルヲ以テ茲ニ之ヲ再言スルノ要無カルヘシ

尚英国外務大臣ハ前記書翰中ニ於テ共同討議ノ議題トスヘキ問題ニ関シ英国政府ハ倫敦会議ニ招請セラレタル他国政府ト同様ニ仏国政府ト予備的意見交換ヲ為ス意向ヲ有スル旨ヲ述ヘラレタリ仏国政府ハ斯ノ如キ方法ニ依ルコトハ「アーサー、ヘンダーソン」閣下ノ書翰中ニ挙ケラレタル諸点並右ニ付帯スル問題及来ルヘキ会議ニ付議セラレ得ヘキ問題ノ全般ニ対シ仏国政府ノ見解ヲ明ニスル機会ヲ得ヘキ所以ナルヲ以テ之ヲ有益ト思考スルモノナリ

169 昭和4年10月16日 在ソヴィエト連邦田中大使より幣原外務大臣宛

マクドナルド首相、フーヴァー大統領間交渉の意義に関するプラウダ紙の社説について

公第三六四号 （十一月四日接受）

昭和四年十月十六日 在ソヴィエト連邦

特命全権大使 田中 都吉（印）

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

英米関係ニ関スル「プラウダ」社説報告ノ件

本月十二日「プラウダ」紙ニ掲載セラレタル社説「マクドナルド」「フーヴァー」交渉ノ意義ハ英米関係ニ関スル当国要路ノ観察ト認メラルルニ付別紙ノ通リ訳報ス

本信写送付先 在英、米大使

（別 紙）

「マクドナルド」及「フーヴァー」交渉ノ意義

（一九二九年十月十二日「プラウダ」紙所載）

労働党首領ノ「弗ノ国」入ハ大西洋彼岸ノ「デモクラシー」ニ依リテ極テ盛大ニ仕組マレタルカ白堊館ニ於ケル「労働」宰相ハ夢ヲ結フニ一八六五年「リンコルン」大統領暗殺ノ日以来何人モ用ヒタルコトナシト謂フ歴史的寝台ヲ宛行（アテガ）ハレタリ

「マクドナルド」又米国ニ到着スルヤ直チニ同国「ブルジュア」ノ前ニ滔々タル蜜ノ如キ言辞ヲ縷述シ始ムルト共ニ米国社会党ノ如キ無害ナル団体カ彼ノ到来ノ機会ニ催サントセル民衆的集会ニサヘ出席スルヲ拒ミ「シティー、ホール」ニ於テハ日曜ノ説教ヲ夢見タルモノノ如ク彼カ米国ニ来レルハ物質的利害ヲ議センカ為ニ非ス権威アル両国民カ互ニ手ニ手ヲ握リ此ノ世ニ神ノ働キ賜フ処何処ナリトモ我等両国々旗カ其ノ働ヲ共助シツツ相並ンテ進マン為ナリト声明シ居レリ

神ト信仰トカ巡洋艦、潜水艇等ノ如キ「非物質的」事物ト相伍シテ描カレ居ル此ノ美辞ハ抑々何事ヲ意味スルヤ将又「マクドナルド」及「フーヴァー」ノ会見ト声明ト更ニ其ノ会見ヲ囲繞シテ世界「ブルジュア」新聞カ上クル喚声ハ何事ヲ意味セントハスル

此等ノ質問ニ対スル回答ハ帝国主義的「ブルジュア」ノ陣営ニ於ケル根本的矛盾ヲ成ス英米ノ争覇ノ著シク鋭化セラレタルコトニ之ヲ求メサルヘカラス平和主義的濃霧即「熱誠ナル」商議「友好的」会見ハ唯此等諸矛盾ノ全意義ヲ裏書スルニ過キス

「マクドナルド」「フーヴァー」ノ会見モ彼等ノ共同声明ナルモノモ商議ノ真意ヲ糊塗スル虚偽ト偽瞞トニ終始スルノミ

事実ノ真相ヲ穿テハ即チ英国ハ米国ノ圧迫ニ遭ヒテ争闘ノ

鋭化ヲ暫時緩和シ現状ニ於テ最モ有利ナル地位ヲ保持セントスルモノナリ尤モ避クヘカラサル戦争ニ当面セル国々カ戦争前「平和的」声明ヲナセル事実ハ国際史上一再ナラス今回ハ「タイムス」サヘ公然ト本件ノ関スル処決シテ英米ノ同盟ニハ非サルコトヲ承認シ「英米協商ニ付テハ何等言及セラルル処ナキモ是レ「マクドナルド」カ米国ハ何レノ第三国トモ協商乃至同盟ヲ結フコトヲ欲セス又之ヲ為シ能ハサルコトヲ「フーヴァー」氏同様承知シ居ルカ故ナリ云々」ト述ヘ居レリ

何故ニ米国カ「之ヲ欲セス又為シ能ハサル」カハ全ク明瞭ナリ米国ノ集積セル大資本ハ其ノ捌口ヲ求ムルモノニシテ一九一四年直前ニ於テ米国資本ノ在外投資額ハ二十五億ヲ算セルモノ今日ハ二百七十億ヲ算シ且其ノ年々ノ増加額二十億ニ及ヒ其ノ生産力ハ自国市場ノ需要ヲ満シ之ヲ超ユルコト二十五％ナリ故ニ加奈陀、羅典アメリカ、印度、支那、豪州、サテハ欧州ニ於テ到ル処米英ノ利害ハ相衝突シテ解決スヘカラサル矛盾ヲ生メリ

最近「失業防止」大臣「トーマス」氏ハ加奈陀トノ通商振興問題ニ尽瘁シ又「デ、アベルノン」卿ヲ首班トスル英国商業団ハ米国ト「アルゼンチン」トノ緊張セル関係ヲ利用センカ為ニ「アルゼンチン」ニ到着セリ太平洋上ノ状勢ニ至ッテハ茲ニ述フル迄モナシ上海発行米国雑誌「チヤイナ、ウイクリー、レヴイユ」カ極東ニ於ケル米英ノ関係ハ可ナリ長期間ニ渉リテ不満足ナルモノナルカ今日ハ益々其ノ甚シキヲ見ルト述ヘタルハ全ク叙上ノ状勢ヲ写スモノナリ

「グレート、ブリテン獅子」ハ如何ニ米国ト「ブリテン」ノ宝庫タル印度トノ貨物取引カ漸進シ如何ニ米国人カ波斯（独逸資本ト共同シ）ニ在リテ鉄道ヲ敷設シ如何ニ米国ノ顧問等カ支那ニ充満シ又如何ニ米国帝国主義ノ触角カ埃及ヲ使嗾スルコトニ依リテ「ブリテン」ノ関節動脈タル「スエス」運河ニ触レントスルカヲ猛々シクモ睥睨シ居レリ

「パナマ」ト「シンガポール」是レ太平洋上ニ於ケル英米争覇ノ二大作戦的要所ナリ「シンガポール」ニ沿フ地域ノ住民カ今回独立ヲ享有セサルコトヲ以テ米国雑誌「フォーレン、アツフエアス」カ遺憾トセルハ宜ナルコトナリ又英国カ米国ニ対シ「パナマ」運河ニ面スル「カリビアン」海ノ三海軍根拠地ヲ自発的ニ譲渡スルコトニ関シテモ論議醸サレツツアリ太平洋上ノ英米争覇ハ更ニ更ニ錯綜シ居レリ

他面又米国ハ欧州ノ舞台ニ於テモ英国ニ対シ断乎タル攻勢ヲ取リ居レルカ欧州列強ノ債務二百七十億弗中米国ノ回収セルモノハ未タ百七十億ニ過キス此処ニ於テモ米国ノ攻勢ハ金融市場ニ於ケル争闘中ニ其ノ一面ヲ表シ居レリ戦前英磅ハ他ノ総テノ硬貨銀行券中最モ勢力ヲ有シタリシカ今ヤ米国銀行ハ英国ノ金準備ヲ盛ニ吸集シ同国銀行ノ準備金ヲ四千万英磅ニ減少セシメタリ英国ハ六、五迄ノ割引額引上ヲ以テ之ニ答ヘタルモ斯ル方策ハ英国自身ノ産業ニ対シ重大ナル打撃ヲ齎スニ過キサリキ是ニ依リテモ国際決済銀行組織委員会ニ於ケル会議ノ雰囲気カ英米ノ露骨ナル競争ニ充満セラレタルコト故ナキニ非ス英国代表カ決済銀行ノ主要ナル使命ハ国際財政状態ノ保持ト貨幣激変ノ警戒ナリト言明セルコト宜ナル次第ナリ

「シティー」ノ銀行家等ハ英米関係ノ怖ルヘキ逼迫ニ鑑ミ大西洋彼岸ニ於ケル矛盾ヲ暫時緩和セントシテ「マクドナルド」ヲ送リタルモノナリ彼等ハ英帝国主義ノ利益ヲ保持スル点ニ於テ保守党ニ勝ルトモ劣ラサル労働党ノ試験済ノ方法ニ望ヲ繋カントスルモノニシテ「マクドナルド」「フーヴァー」共同声明ノ由テ来タル所又此処ニ在リ

右共同声明ハ曇リナキ親善ト誠意及信頼トニ対スル希望ヲ確言シ米英戦争ノ思惟シ得サルモノナルコトヲ言明シ居レリ然シナカラ甘キ平和主義的言辞カ将来ノ米英戦争ニ対スル武装ト準備トノ焦慮ヲ蔽ハントスル企図ニ外ナラサルコトハ右声明ノ内容ヲ点検セハ明ナリ

茲ニ一例ヲ示サハ声明中ニハ「マ」及「フ」カ海軍力ノ均勢ニ付テ折合ヘルコトヲ確認シ居リ右取極ニ拠ラハ英国ハ二十隻ノ巡洋艦ヲ廃棄セサルヘカラサルコトトナル然ルニ秘密ノ鍵ハ以上ノ中十七隻カ老朽ニ属シ英国ハ之ニ代ヘテ排水噸四万噸トナル新巡洋艦七隻ヲ建造セントスルニ在リ英米軍縮ノ実相概ネ右ノ如シ潜水艇隊ノ廃棄ニ至リテハ帝国主義タル日仏伊カ果シテ同意スルモノト思フハ愚ノ骨頂ナリ声明中ニハ来ルヘキ五国海軍会議ニ言及シ居ル処所謂「軍縮」慾ハ英米以外ノ三国ニ在リテモ相当増大セルモノノ如ク一国トシテ華府会議（一九二一―二二）ニ於テ採用セラレタル大型軍艦ノ比率ヲ承認セントスルモノ無ク彼等ハ何レモ其ノ巡洋艦ト潜水艇数ノ増加ヲ要求シ居リ誠ニ以テ戦争ハ「マクドナルド」「フーヴァー」声明ノ通「思惟シ得ヘカラサルモノ」ナリ

サハアレ尊敬スヘキ為政者等ハ其ノ声明中ニ多クノコトヲ全ク脱シタリ就中彼等ハ海洋ノ自由、債務、関税政策、国際連盟、海牙裁判所等ノ如キ「小問題」ニ付テ沈黙ヲ守リタルカ是レ英米間ノ矛盾ヲナスノ問題カ間モナク大ナル勢力ヲ以テ鋭化シ来ルヘキコトヲ物語ルモノナリ

「戦争ハ予防シ得ヘキカ予防シ得サルモノトセハ総テノ戦争ハ英米戦争ニ発展シ来ルヘシ」トノ雑誌「フォーレン、アツフェアス」ノ言ハ全ク正鵠ヲ得タリ英米ノ矛盾ハ久シキニ及ンテ愈々広汎ナル地盤ニ伸展シ武装ノ熱烈ナル確保、労働階級ニ対スル圧迫ノ増大、帝国主義的搾取ノ未聞ノ発達ヲ伴フコトトナルヘシ新ナル帝国主義的殺戮ノ徴候ハ英米競争ノ結果益々急階調ヲ以テ迫ルヘク是レ「マクドナルド」「フーヴァー」交渉ノ平和主義的帷幕ヲ通シテ洩ルル真相ナリ

170 昭和4年10月16日 幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

比率問題に対する米国側意見突止め方に関し訓令について

第三四四号　至急

在英大使宛往電第二六一号ニ関シ

回答文写貴任国政府ヘ内報セラレ其ノ機会ヲ以テ国務長官ニ対シ帝国政府トシテハ本会議開催以前ニ比率問題等ノ重要事項ニ付テハ日英米三国間ニ大体ノ話合ヲ是非纏メ置キ度キ意向ナルニ付倫敦ニ於テ松平大使ト「マ」首相「ド」大使トノ間ニ行ハルヘキ非公式会談ヲ促進スル様協力方懇談スルト共ニ貴官ニ於テモ常ニ国務長官ト密接ナル連絡ヲ取リ側面ヨリ倫敦ニ於ケル会談ノ成功ニ助力スルコトトシ度旨可然申入レ置カレ度ク尚ホ申ス迄モナキ義ナカラ比率ニ関スル我カ要求ニ付米国側ノ意向ヲ成ル可ク速カニ突止ムル様精々御尽力アル度シ

英ニ転電シ英ヲシテ仏伊佐藤公使ニ転報セラレ度シ

171 昭和4年10月16日 幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

軍縮会議招請に対する回答手交並びに非公式交渉において比率問題話合完了希望の旨英国側に申入方について

別　電　十月十六日幣原外務大臣より在英国松平大使宛第二六二号

軍縮会議招請に対する回答

第二六一号至急　本省　10月16日後2時発

貴電第三七七号ニ関シ

㈠貴官ハ英国外務大臣ニ面会ノ上別電第二六二号回答文ヲ手交スルト共ニ右回答中ニ記載セル英国当局トノ非公式会談ハ貴電第三五九号「マ」首相トノ談話ノ通リ適宜米国当局ヲ交ヘ又ハ米国当局トノ会談ト並行シテ之レヲ行フ趣旨ナルコトヲ説明シ帝国政府ニ於テハ本会議ノ成功ヲ期スル為其ノ開催前ニ非公式会談ニ依リ比率問題ノ如キ重要事項ニ付テハ予メ大体ノ話合ヲ完了シ置クコトニ最モ重キヲ置クモノナルコトヲ特ニ指摘シ在米大使宛往電第三三五号ノ趣旨ヲ敷衍シテ之レニ対スル英国当局ノ協力ヲ切望スル旨申入レラレ度シ

㈡回答文ハ直チニ先方ヘ手交セラルル見込ヲ以テ当地ニ於テハ十八日（金曜日）午後九時発表ノ予定ナリ

米仏伊ニ転電シ仏ヲシテ佐藤公使ニ転報セシメラレ度シ

（別　電）

No. 262

I have the honour to acknowledge the receipt of your Note dated October 7, informing me of a provisional and informal agreement reached between the Prime Minister and the American Ambassador at London on the subject of naval disarmament, and inviting the Japanese Government to participate in a Conference which it is proposed to summon in London, to consider the categories of ships not covered by the Washington Treaty, and to arrange for and deal with the questions covered by the second paragraph of Article 21 of that Treaty.

2. Having laid before my Government the contents of your Note under acknowledgement, I am desired to state in reply that the Japanese Government are happy to signify their entire concurrence in the desirability of the proposed Conference, and are ready to appoint representatives to take part in that Conference. The date suggested for the opening of the Conference, namely, the beginning of the third week of January, 1930, is also agreeable to my Government.

3. The Japanese Government are further gratified to know of the willingness of the British Government to continue informal conversations with me, as hitherto, on any points which may require elucidation. They note that similar discussions conducted in London by the Prime Minister with the American Ambassador during the last three months had cleared the ground for an agreement on essential points between the British and American Governments, prior to the invitation extended to other naval Powers to meet in a Conference. My Government attach the highest importance to the same procedure being followed by the Japanese and British Governments, in order to ensure agreement between them on various questions that are to be laid before the Conference. The success of the forthcoming Conference no doubt depends in a large measure upon the satisfactory issue of such preliminary discussions, and my Government confidently trust that the informal conversations between the British Government and myself on questions of special moment will be carried on and completed before these questions are presented to the Conference for final adjustment.

4. In your Note under review, it is intimated that the British Government propose to communicate to me in due course their views as to the subjects for discussion at the Conference. The Japanese Government are looking forward to such a communication with keen interest, and, on their part, they will be glad to furnish the British Government with a corresponding communication as desired.

5. With regard to the four points of principle mentioned in your Note as the subject of provisional agreement between the British and American Governments, the Japanese Government hope to be able to submit their observations in the course of the informal conversations which I shall shortly permit myself to hold with the British Government. They would, however, make use of this occasion to assure you of their

cordial support to the principle that the Treaty for the Renunciation of War, signed at Paris in 1928, should be taken as the starting point for all discussions on disarmament. They feel confident that the sense of national security inspired by the provisions of that Treaty in the mutual relations of the contracting Powers will pave the way for the final settlement of the outstanding questions relative to naval disarmament.

6. In conclusion, I am instructed to express the sincere and earnest hope of the Japanese Government that the Conference will succeed in the adoption of plans calculated to promote international peace and good will, and to relieve humanity of the heavy burden of armament whether existing or contemplated. It is not merely the limitation, but also the reduction of armament, that all nations should seek to attain.

（右訳文）

一、十月七日付貴翰ヲ以テ海軍軍備縮小問題ニ関シ貴国首相及在倫敦米国大使間ニ成立ヲ見タル暫定且非公式ノ協定ヲ通報セラルルト共ニ華盛頓条約ニ規定セラレサル艦種ニ付考究ヲ加ヘ且該条約第一十一条第二項ニ規定セラレタル問題ヲ協定処理スル為倫敦ニ招集セラレントスル会議ニ帝国政府ノ参加ヲ招請セラレタリ本使ハ右貴翰ヲ領承ス

二、本使ハ右貴翰ノ内容ヲ本国政府ニ伝達シタル処帝国政府ハ右会議開催ヲ望マシキコトトスルニ全然同感ナルヲ欣幸トシ該会議ニ参列スヘキ代表者ヲ任命スルノ用意アル旨回答スル様訓令ニ接シタリ尚ホ所定ノ会議開会期日トシテ千九百三十年一月第三週初頭ヲ提議セラレタル処本国政府ハ亦之ニ同意ヲ表スルモノナリ

三、次ニ帝国政府ハ闡明ヲ要スヘキ一切ノ事項ニ付キ英国政府カ従前ノ通本使ト非公式会談ヲ継続スルノ用意アルヲ知リ欣快トスルモノナリ帝国政府ハ過去三個月ニ亘リ倫敦ニ於テ貴国首相カ米国大使ト此ノ種ノ会談ヲ行ヒ之レニ依リ他ノ海軍国ニ会議参加ノ招請ヲ発スルニ先チ英米両国政府間ニ重要事項ニ関スル協定ノ素地ヲ作ラレタルコトヲ了知シタリ本国政府ハ会議ニ付議セラルヘキ諸般ノ問題ニ関シ日英両国政府間ニ協定ノ成立ヲ確保スル

為両国政府カ右ト同様ノ手続ヲ執ランコトヲ最重大視スルモノナリ来ルヘキ会議ノ成功ハ斯ノ如キ予備的会談カ満足ナル結果ヲ得ルヤ否ヤニ懸ルコト多大ナルハ明瞭ニシテ本国政府ハ特ニ重要ナル問題ニ関シテハ其ノ最終的決定ノ為会議ニ提出セラルルニ先チ英国政府及本使間ニ非公式会談ヲ続行完了センコトヲ切望ス

四、前顕貴翰中ニ於テ英国政府ハ会議ノ討議事項ニ関シ追テ其ノ見解ヲ本使ニ通報セラルヘキ意向ナル旨陳述セラレタルカ日本国政府ハ深甚ナル興味ヲ以テ斯ノ如キ通報ヲ期待シ且日本国政府ニ於テモ御来示ニ従ヒ英国政府ニ対シ同様ノ通報ヲ為スヲ欣幸トスヘシ

五、英米両国政府間ニ暫定的ニ協定セラレタルモノトシテ貴翰中ニ記述セラレタル原則四点ニ関シテハ帝国政府ハ本使カ近ク英国政府ト行フヘキ非公式会談ニ際シ其ノ所見ヲ開示スルコトアルヘシ唯此ノ機会ニ於テ千九百二十八年巴里ニ於テ署名セラレタル戦争抛棄ニ関スル条約ヲ軍備縮小ニ関スル一切ノ討議ノ出発点トナスヘシトノ原則ヲ衷心支持スルモノナルコトヲ確言セント欲ス同条約ノ規定ニ依リ締約国間ノ相互関係ニ齎ラシタル国家ノ安全ノ感念ハ追テ海軍軍備縮小ニ関スル未決問題ノ最終的解決ヲ容易ナラシムルニ至ルヘキコト帝国政府ノ疑ハサル所ナリ

六、最後ニ本使ハ本国政府ノ訓令ニ基キ日本国政府ハ該会議カ国際ノ平和及親善ヲ増進シ且人類ヲシテ現存及計画中ノ軍備ノ重キ負担ヨリ免レシムヘキ方案ヲ採用スルニ成功センコトヲ深ク切望スル旨ヲ表明セムトス思フニ各国民ノ希求スル所ハ軍備制限ニ止マラス実ニ軍備縮小ニ在ルヘシ

（注記）右訳文は、昭和四年十月十五日閣議決定と同一文である。

172

昭和4年10月16日　幣原外務大臣より在仏国安達大使宛（電報）

軍縮会議招請に対する回答要旨に関し仏国臨時代理大使より内報について

本省　10月16日後4時50分発

一昨十四日在京仏国代理大使外相「ブリアン」ノ電訓ニ依ル趣ヲ以テ次官ヲ来訪シ仏国政府ハ英国政府ノ招請状ニ対スル回答中ニ於テ陸海空軍一括主義、潜水艦及軍備縮小ノ

三点ニ付論及スル筈ナルカ特ニ三軍一括主義ニ就テハ従来一貫シテ主張シ来レリ此主義ニ対シテハ日本政府ニ於テモ連盟ニ於ケル軍縮問題ノ審議ニ際シ同様ノ態度ヲ執リテ仏国側ヲ支持セラレタル次第ナル処仏国政府ハ今次ノ倫敦海軍会議ニ関シテハ素ヨリ之カ成功ヲ阻碍スルカ如キ意図ヲ有スルモノニアラサルモ其ノ成立スヘキ協定ハ陸軍及空軍ト関連セシメテ考慮スルニアラサレハ仏国ノ受諾シ難キ所ナリト述ヘ日本政府ニ於テモ倫敦会議招請状ニ対スル其ノ回答中ニ於テ右仏国政府ノ見解ト同様ノ趣旨ヲ表明セラレ度ク少クトモ之ニ反対ノ態度ニ出テラレサラムコトヲ希望スル旨申出タルニ依リ十六日本大臣ヨリ同代理大使ノ来訪ヲ求メ我対英回答写ヲ手交シ仏国ノ立場ニ反対スル文意ナキコトヲ示シタル処代理大使ハ日英米ノ非公式会談ヲ以テ会議ノ討議ノ基礎トスル考ナリヤト質問セルニ付日英米ノ非公式会談ハ日本ニ関スル事項（例ヘバ比率問題）ニ付英米両国ト予メ協議セントスルモノニシテ仏伊ニ関係アル事項ニ触ルヽモノニアラザルコトヲ説明シ置タリ尚代理大使ヨリ本問題ニ付テハ日仏両国海軍当局ノ間ニ密接ノ連絡ヲ取リ度旨希望シタルニ依リ仏国海軍当局ヨリ諸般ノ事項ニ付相談アル場合ニハ我海軍当局ハ勿論之ニ応スルコトナルベシト答ヘ置タリ

英米伊ニ転電シ佐藤公使ニ転報セラレ度シ

173

昭和4年10月16日　幣原外務大臣より在イタリア松田大使宛（電報）

軍縮会議招請に対する回答要旨に関しイタリア大使より内報について

本省　10月16日後8時30分発

第四一号

十六日午前在京伊国大使本大臣ヲ来訪シ伊国ノ対英回答ヲ内報シタルニ付本大臣ヨリモ我カ対英回答案ノ要領ヲ内報シタルカ其ノ際同大使ハ倫敦会議ニ付テハ今後日伊両国政府ノ間ニ充分意思ノ疎通ヲ図ルコトトシ度旨希望シタルニ付之ヲ了承シ置キタリ尚同日午後我カ対英回答案写ヲ同大使ニ送付セリ

英、米、仏、佐藤公使ニ転電アリ度シ

174

昭和4年10月(17)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

我が全権米国経由方に関するスティムソン国務

長官の申出について

ワシントン
本　省　10月17日前着

第三七五号（至急、極秘）
往電第三六八号ニ関シ
十六日国務長官ノ求メニ依リ往訪セル処同長官ハ実ハ明十七日常例会見ノ際御話スル考ナリシモ一日モ早キ方好都合ト考ヘ本日特ニ御来訪ヲ求メタル次第ナルカ日本全権倫敦行ノ際ニハ西比利亜鉄道ノ不便ナル現状ニ顧ミ米国ヲ経由セラルル事最捷路ナリト認メラル就テハ日本全権ニ於テ数日間華府ニ立寄ラレ軍縮問題ニ付懇談ノ機会ヲ与ヘラルルヲ得ハ甚タ幸トスル所ナリ右貴国政府ヘ御伝達ヲ請フト述ヘタリ
依テ本使ハ米国政府ノ好意ハ帝国政府ニ於テ大ニ多トスル処ナルヘシト挨拶シタル上本使含迄ニ日本全権ノ華府立寄ハ何時頃ヲ以テ好都合トセラルル次第ナリヤト尋ネタルニ長官ハ只今ノ処明確ニハ申上ケ兼ヌルモ差当リ自分ノ思（付）トシテハ米国全権ハ多分一月十日前後ニ華府ヲ出発スル事トナルヘキカ十二月下旬ハ「クリスマス」休日ノ関係モアルニ付新年早々日本全権ヲ華府ニ御迎ヘスル事ヲ得ハ最好都合ナルヘク尚相成ルヘクハ日本全権ト同船渡英シ船中ハ更ニ懇談ヲ継続致シタキ考ナリ尤本日貴大使ト御話シタル次第万一世上ニ漏ルルカ如キ事アラハ必スヤ欧州方面ヨリ不要ノ疑惑ヲ招ク虞アルニ付本件ハ当分ノ間厳ニ秘密ニ付セラレタシト述ヘタリ
長官カ本日取急キ本使ヲ招致シ右会談ヲ為シタルハ往電第三七三号ＡＰ電報ニ刺戟セラレタル結果カト察セラル
英ニ転電シ、英ヲシテ仏、伊ニ転電セシム

175　昭和4年10月(17)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題に対する米国側意見表示方に関し国務長官との会談について

ワシントン
本　省　10月17日後着

第三七六号（極秘）
貴電第三四四号ニ関シ
往電第三七五号会談後本使ヨリ帝国政府ハ愈倫敦会議ニ参会決定シ英国政府ヘ回答方松平大使ニ電訓セル事ヲ内話シ尚回答文只今接到セルニ付解釈出来次第内送スヘキ旨ヲ述

ヘタル処国務長官ハ右内報ニ対シ深ク感謝ノ意ヲ表シタリ次イテ本使ハ御訓令ノ趣旨ニ依リ比率問題等ニ関シ会議前予メ三国間ニ話合ヲ纏メ置ク必要アル事ヲ力説シ本件ニ付テ之迄屢々貴長官ニ懇談セル次第モアリ既ニ考慮ヲ費サレタル事ト思考スル処大体ノ御意向ナリトテモ承ル事ヲ得サルヘキヤト述ヘタルニ長官ハ同問題ハ自分ニ於テ決シテ等閑ニ付シ居ル儀ニハ非サルモ何分事柄ノ重大ナルニ顧ミ今俄ニ米国政府ノ意向ヲ御話スル事困難ナリ本件ニ付テハ英国側就中「ドミニオン」中ニ反対アル様思ハルルノミナラス先ニモ御話セル通日本側ニ於テ七割ヲ主張スル時ハ仏伊亦比率ノ変更ヲ要求スヘキ虞モアリ旁本件ハ容易ナラサル問題ナリト思考スト述ヘタルニ付本使ハ右英国「ドミニオン」側ノ反対ハ自分モ想像シ居ラサルニ非ス現ニ豪州ノ如キ異論ヲ挾ミ居ルヤニ聞及フモ右反対ハ真ニ謂レ無キ次第ニテ日本カ同方面ニ何等ノ野心無キ事ハ何人ニモ明ナル筈ナリ又仏伊側ニ関スル御懸念ハ然ルコト乍ラ日本ハ華府会議劈頭ヨリ七割ノ要求ヲ強硬ニ主張シタルモ会議ノ円満ナル進行ヲ期スル見地ヨリシテ結局難キヲ忍ヒ主力艦ノ関スル限リ六割ノ比率ヲ受諾シ之カ為非常ナル国論ノ反対ヲ惹起シタルコト累次御話セル通ナリトテ七割ノ比率ハ挙国一致終始一貫シテ要求スル処ナルコトヲ重ネテ敷衍説明シ本件ニ付テハ松平大使ヨリ「マクドナルド」首相及「ドーズ」大使ニ懇談スル筈ナルモ両者共ニ当分倫敦ニ帰ラサル一方我方トシテハ全権ノ本邦出発前会議ニ関スル準備ヲナス必要上早目ニ少クトモ米政府ノ諒解ヲ得タキ趣旨ナルニ付テハ此ノ際成ルヘク速ニ何分ノ御意向ヲ承知シタク自分ハ何時ニテモ貴長官トノ間ニ予備的話合ヲナス用意ヲ有スト告ケ長官ノ切実ナル考慮ヲ促シタルニ長官ハ何レ篤ト大統領ト相談ノ上何分ノ御挨拶ヲナスヘシト答ヘタリ右会談ノ際長官ハ英米間ニハ均勢ヲ維持セサルヘカラサル主張アリ仏伊ノ間ニモ同様ノ問題アル処日本ノミ斯ノ如キ困難ナル問題ニ煩ハサレサルハ誠ニ羨シト云ヘルニ付本使ハ日本ノ立場ハ全ク「インデペンデント」ニシテ要スルニ我方ノ欲スル処ハ真実ナル海軍縮少及七割要求ノ二点ニ過キサル次第ナリト告ケ置キタリ
次ニ本使ヨリ前回貴長官ト会談ノ際巡洋艦総噸数低下方ニ付更ニ英国側説得ニ努メラルル御方針ノ由承リタルカ其ノ後「マ」首相ト会談ノ結果右低下ニ付何等見込付キタリヤ

ト尋ネタル処長官ハ大型巡洋艦ノ割当ニ付テハ決定スル処ナキモ巡洋艦総噸数ニ関シテ結局幾分之ヲ低下セシメ得ヘキ見込アリト云ヘリ

最後ニ本使ヨリ「マ」首相ト大統領ト会談ノ際海洋自由防備撤廃等ノ問題議セラレタルヤノ新聞報道アル処之等問題カ倫敦会議ニ上議セラルルカ如キ事アルヘキヤト尋ネタルニ長官ハ世上種々ナル憶説流布セラルルモ海洋自由問題ニ付テハ別段討議シタル事実無シ又防備撤廃問題ニ付テハ西半球ニ於ケル英国ノ洋上防備撤廃ニ関シ種々懇談アリシモ右ハ要スルニ英、米間ノ問題ニ過キサルヲ以テ倫敦会議ニ上ルカ如キ事無カルヘシト思考スト述ヘ尚右「マ」首相大統領会談ノ件ハ極秘ニ付セラレタシト特ニ付言セリ

尚往電第三七五号及前記会談中国務長官自身米国全権トシテ渡（英？）ノ心組ナルコト充分ニ看取セラレタリ

英ニ転電シ英ヲシテ仏、伊ニ転電セシム

176 昭和4年10月(17)日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

日本の補助艦七割比率要求に関するタイムスの記事について

ロンドン 本省 10月17日後着

第三八六号

十六日「タイムス」ハ Japan and naval parity ト題スル東京通信ヨリノ書面通信ヲ主要欄二段ニ亘ツテ掲載シ相当注意ヲ牽キツツアル処右ハ日清戦争当時ヨリ今日迄ノ各時期ニ於ケル帝国海軍ノ勢力ヲ挙ケテ其ノ常ニ防禦ヲ目的トセルヲ強調シ特ニ日本ノ現在補助艦勢力ハ支那海黄海ニ依ル亜細亜大陸トノ交通ヲ確保セントスル全然防禦的ノモノナルコトヲ例証シ比率ニ関シ日本ノ要求スル所ハ地理的状態ヲ考慮セル defensive parity ニシテ七割比率ハ即チ之ナリ華府会議ニ於テ六割ヲ受諾セルハ太平洋防備制限ヲ設ケントセル結果ニシテ一万噸巡洋艦ニ付テハ七割ハ最低ノ defensive parity ナリ日本カ英米ヨリノ低比率ヲ受諾セントスルハ日本ニ戦意ナキ証拠ニシテ一万噸巡洋艦比率ニ付日本ニ譲歩スルハ毫モ他国ノ安全ヲ害スルモノニ非サルヘキモ同時ニ日本政府カ六割、六割五分乃至七割間ノ相違ノ為ニ協定ヲ拒絶スルニハ充分ナル理由ヲ見出シ難カルヘシト報ス

米仏ニ郵送セリ

177 昭和4年10月17日 在イタリア松田大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請へのイタリアの回答に関する各新聞論調要旨について

ローマ 本省 10月17日後発 10月18日前着

第八四号

軍縮会議ニ関スル伊国ノ回答十六日「ステファニ」通信ヲ以テ公表セラレタルカ之ニ関スル各新聞ノ論調ヲ綜合スルニ

(一)伊国ノ回答カ各国ニ先シ且会議ヲ困難ナラシムルカ如キ留保ヲ含マサルハ伊国ノ軍縮問題ニ対スル誠意ヲ表明シタルモノ

(二)総噸数主義欧州大陸海軍国トノ均勢維持主力艦艦齢延長等ニ就テハ客年十月九日付対英回答「ノート」中ニ開陳セル伊国ノ見解ハ其ノ後国際政局ノ変転ニ拘ラス何等ノ変化ヲ見サル事

(三)伊国ハ連盟ノ軍縮事業ニ協力シ居ルヲ以テ来ルヘキ倫敦会議ト寿府トノ関係ヲ重視スル事ノ諸点ニ於テ略一致セルカ「ジオルナル、デイタリア、メツセジエロ」中ニハ回答中ニ何等留保ヲ記載セサルノ事実ハ何等予メ「コンセツション」ヲ為スノ趣意ニ非サル事ヲ特ニ指摘セルモノアリ「テベレ」「ポポロ、デ、ローマ」ハ英米関係ニ於テスラ一致セサル点アルニ顧ミ五国間ノ会談トナラハ一層困難ヲ予想シ得ヘシ又艦種別制限ハ其ノ軍縮ヲ齎ス所以ニ非ストシ会議ハ結局英米ノ軍備拡張ニ終ル事トナラムカヲ懸念セリ

英、米、仏ニ郵送セリ

178 昭和4年10月17日 在ロンドン佐藤海軍大佐より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

対英米非公式交渉に関し意見具申について

ロンドン 海軍省 10月17日発 10月18日前9時着

機密第六四番電（十七日）

一、愈々英国政府ノ招請受諾セラレタルニ就テハ今後ノ非公式協議ハ従来ノモノトハ稍其ノ性質ヲ異ニスル次第ニテ或ハ協議スヘキ事項、各事項ニ付進行セシムヘキ程度

等ニ関シ改メテ大使ニ訓令セラルル御内意アルニ非スヤトモ察セラルル所若シ其ノ御内意アラハ本非公式協議ハ何レ英首相「ド」大使帰英後ニアラサレハ開始ノ運ニ至ル能ハサルヘシト思ハルルモ当方ノ研究準備ニ遺憾ナキヲ期シ度ニ付成可ク速ニ発令アル様御配慮ヲ得度追テ本件ハ全ク小官ノ希望ニテ大使カ新ニ訓令ヲ希望シ若ハ期待セラルル意味ニ非ス

二、松平大使ハ対英米接衝方針トシテ今次ノ協議ニハ英米ヲシテ我ニ対スル共同ノ「フロント」ヲ造ラシメス即我方ヨリ持掛クル話モ特別ノ場合ノ外英米別々ニ之ヲ進メ英米ヲシテ其ノ協議ノ趣ヲ共同ノ答トシテ我ニ答フルカ如キ情況ニ導カサルカ如クスルト同時ニ英米何レニモ我国カ一方ト提携シ他方ニ当ラントスルニアラサルヤヲ疑ハシムルカ如キコト無カラシムルコト極メテ肝要ト確信セラレ従来モ之ニ基キ将来モ亦之ニ拠リ交渉ニ当ラントセラレツツアリ従テ先般英首相着華前出淵大使ニ対シ我要求ニ対スル英米ノ諒解取付方訓令アリタル際モ少カラス驚カレ若事前ナリシナラハ充分意見具申スヘキ旨漏ラシ居ラレ又今回ノ帝国全権華府立寄ノ件モ英首相ト米政府トニ談合ノ結果ナルカ或ハ英政府ノ腹ヲ確メタル上ナラハ格別然ラサレハ同問題ノ取扱ニハ深甚ノ考慮ヲ要ストノ意見ニテ或ハ右趣旨ノ意見上申アルヤモ知レス本件大使トシテハ事前ナラハ格別両度共既ニ事後ニテ或ハ近キ将来適当ナル上申ノ機会ナカルヘキカト存シ小官ノ思付ニテ御参考迄

179　昭和4年10月(18)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請に関する仏伊両国の対英回答に対するタイムスの論評について

ロンドン
本　省　10月18日前着

第三八七号

十七日各紙ハ主要欄ニ仏伊ノ対英回答「テキスト」全文ヲ掲載（仏伊ヨリ夫々報告済ミト存スルニ付省略ス）且我方回答カ十六日当国外務省ニ手交セラレタル旨及右ハ favourable ニシテ細目ニ亘ラス招請ノ無留保受諾ニ等シキモノナル事ヲ報ス

尚右両国回答ニ対スル論評ヲ掲載セルハ「タイムス」ノミナルカ同紙ハ次ノ三ケ月間ニ於ケル非公式話合ヒハ会議ノ障碍ヲ除去スルヲ得ヘキ処目下ノ最大障碍ハ陸海空三軍連繋問題ニシテ右ハ英米ノ主張ト衝突ス海軍会議ハ軍縮準備委員会ノ予備的性質ヲ有スルカ故ニ倫敦会議ニ於テハ何等各艦種別ニ依ル噸数及備砲ニ関スル協定ヲ遂クルハ不可能ナラントノ仏国政府ノ意向ヲ反映スルカ如キ仏国新聞ノ見解ハ明カニ英米交渉ノ結果ト矛盾ス之ニ加フルニ仏伊間ノ比率英米ノ潜水艦廃止希望ノ如キ諸問題ハ何レモ会議ヲ決裂セシムルニ充分ナルヲ挙ケテ和衷協同之カ論議解決ニ努ムルニ非ラサレハ会議ノ成行困難ナル旨ヲ述ヘ各国カ兎ニ角倫敦ニ会合スル事ハ好意ノ表象ナリト結ヘリ

米仏伊ニ郵送セリ

180　昭和4年10月18日　在パリ佐藤連盟事務局長より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請に関する仏国の対英回答並びに軍縮本会議準備に関し意見上申について

パリ　10月18日後発
本省　10月19日後着

第一三〇号（極秘）

在仏大使宛貴電第一八五号ニ関シ

在本邦仏国代理大使ノ申出ト仏国政府対英回答文トヲ比照スレハ右回答ノ内容ハ最後ニ至リテ大イニ緩和セラレタルモノノ如ク従テ仏国カ倫敦会議ニ於テ三軍一括主義ヲ如何程迄主張スヘキヤハ今後ノ交渉ニ俟タサレハ予断シ難キモ若シ往電第一二一号及往電第一二七号仏国当局ノ所言ノ如ク仏国全権カ陸空軍ノ制限方式ニ関シ満足ヲ得ル事ヲ条件トシテ海軍問題ノ解決ニ同意ストノ態度ニ出テタル場合我方トシテ如何ニ措置スヘキヤハ慎重考慮ヲ要スル儀ニシテ帝国政府ニ於テモ既ニ御考慮中ノ事ト存スルモ元来仏国ノ陸軍問題ニ対スル主張ハ略々我方ト其ノ主義ヲ一ニシ殊ニ今春軍縮準備委員会ノ決定セル方式ハ我ニ取リテモ最有利ナルモノナルヲ以テ仏国カ倫敦ニ於テ強硬ニ右方式ノ維持ヲ主張スルハ我方トシテモ陸空軍ニ関シテハ却テ好都合ト謂フヘキモ全般ヨリ観テ我方トシテハ陸空軍制限方式維持ヲ条件トシテ海軍問題ヲ議スルト謂フカ如キ程度迄仏国ト歩調ヲ一ニスルノ要ナク且英米側ノ思惑ヲモ考慮スルヲ要スヘキコト勿論ナルヘク此ノ際陸空軍ニ関スル制限方式ヲ維持シ延テ「セシル」卿ノ次回準備委員会ニ於ケル活動

（連盟総会三全権発往電第四四号参照）ヲ未然ニ防止シ得ルコトトモナラハ頗ル好都合ト存セラル之ニ加フルニ本年連盟総会ノ形勢ヨリ観ルモ軍縮本会議ハ恐ラク明後年中ニハ開催ニ至ルヘシト予測セラレ本邦ニ於テモ万事右予測ノ下ニ準備ヲ整ヘ置クノ要アリト思考セラルルニ付テハ今回ノ会議ニ臨ムニ当リテハ陸空軍問題ヲモ今日ヨリ充分ニ研究シ置クコト最緊急ト思考ス

就テハ全権出発前是等諸点ニ関シテモ篤ト御打合置相成様希望ニ堪エス本件ニ付テハ往電第一二三号ヲ以テ不取敢上申シ置キタルモ仏国側ノ態度ニモ鑑ミ重ネテ愚見申進スル次第ナリ以上陸海軍代表トモ打合済ミ

英米ヘ転電シ伊ヘ暗送シ仏ヘ転報セリ

181　昭和4年10月18日　在仏国三浦大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

軍縮会議への仏国の態度に関する仏国海軍当局との懇談の要領について

パリ　10月18日後6時40分発
海軍省　10月19日後2時30分着

機密第三四番電

本月上旬帰京セル仏国海軍卿ハ軍備縮少ニ関シ小官ト会談シ度内意アル趣ヲ其親友ヨリ伝聞セシカ仏伊（両国）ニ対シテハ最近松平大使宛訓令ノ趣モアリ当方ヨリハ監督要務以外ハ海軍省出入ヲ差控居タルカ招請状受諾ヲ機トシ十七日小官一人官房長「デ」少将ヨリ午餐ニ招カレ後任予定者ダルラン大佐第二班長及ドルウズ大佐列席三時間余懇談ヲ受ケタリ其要領左ノ如シ

一、五国会議ハ参加各国ニ対スル法廷ニアラス各国平等ノ立場ヨリ自由ニ其ノ主張ヲナスヘク決シテ英米ヨリ強制セラレ若クハ其ノ裁決ヲ受クルカ如キコトアルヘカラス仏ハ会議ニ入ルニ先立チ主義問題ヲ決定スヘキヲ主張セントス即チ一昨年ノボンクウル融通案ニ基キ各国自主的ニ必要ナル総噸数ヲ決定ス均勢比率問題ニ触ルルコトハ決シテ一般的軍備縮少ヲ成立セシムル所以ニアラストシ縷々右融通案カ既ニ日伊外五国以外ノ小国多数ノ賛成ヲ受ケタリト説キ日本カ七割要求ヲ以テ国民ノ声ナリトシ国家ノ体面問題ナリトナスナラハ何故之カ許容ヲ英米ニ乞フガ如キ態度ヲ捨テ堂々日本ハ英米ト平等ノ権利ヲ有スルモ軍備縮少ノ趣旨ニ従ヒ国家安全ノ為必要トスル兵力総噸数幾何ヲ以テ満足スト主張セスヤ仏国トシテハ今回ノ会議ヲ以テ華府会議ノ継続ト見做ヲ許ササルモノニシテ永久ニ累ヲ残ス比率ニヨル軍備ニハ反対ナリ恐ラク此ノ趣旨ハ日本モ賛成セラルルコトト信ス

二、右ニ対シ小官特ニ意見ヲ述ヘス只仏案ハ誠ニ理論的ニテ結構ナルカ総噸数主義ニ依ルモ結局相対的ニ見テ比率トナル日本カ必要噸数ヲ主張シタル時英米カ之ニ基キ相当噸数ヲ増加ストセバ寧ロ軍備拡張トナルコト日本ハ切実ニ軍備縮少ヲ望ミ出来レバ英米ノ割当ヲ更ニ切下ゲタキ位ナリト述ベタル処先方四名交々之ニ反駁シ閉口セリ

三、終ニ「デ」少将ハ日本愛好ノ余リ又古賀及貴官トノ今日迄ノ親交ニ鑑ミ極メテ率直ニ又無遠慮ニ仏国ノ見解及日本ノ為必要ト認ムル建議ヲナセリ就テハ之ヲ東京ニ伝ヘラレ仏案ニ対スル日本側ノ御意向内密ニ承知シ度本日ノ会談ハ絶対秘密ニセラレ度云云

四、意見右ノ如ク仏ノ軍備縮少態度ハ伊国トノ関係及小国操縦ノ都合ヨリ比率ヲ避ケ各国自主的決定ニ依リ一般的軍備縮少ヲ作リ上ケントスルモノニシテ従来ノ英米交渉及日本ノ交錯ト比較シ著シク趣ヲ異ニシ一見水ヲ差スカ如キ感アルモ理論トシテハ相当根拠アリ仏伊両国間不一致ヲ理由トシテ之ヲ除外スル三国条約ヲ成立セシメントノ底意アル米国カ却テ本年四月「ギ」氏声明ノ質ヲ取ラレ仏案ニ正面反対出来ス伊国モ亦仏国ニ賛スルトセハ参加以外小国支援ノ下ニ仏ハ意外ノ形勢ヲ馴致セストモ限ラス一方折角有利ニ進行中ノ対英米交渉阻礙ノ恐アル対仏関係ヲ作ルハ絶対ニ之ヲ避クルヲ要スルニ付右回答篤ト御詮議ヲ要スルモノト認ム何分ノ御回訓ヲ乞フ

五、「デ」海軍少将ノ説明ニ依レハ仏ノ回答ハ伊国ノ回答ニ促サレ予定以上ニ速ニ発送セラレタリ回答文中英米交渉ハ軍縮準備委員会ノ定ムル方法ニ従ヒ円満解決ニ向ヒツツアルヲ指摘セル文句カ重点ナリ又仏ハ英米ニ内交渉ヲ開始スルヤト尋ネタル所三週間後ナラント答フ

六、新聞論調ハ仏伊カ無留保回答ヲナシタルモ決シテ議事ノ内容ニ賛同セルモノニアラズ論議ハ今後開始セラレント云フニ一致ス

182　昭和4年10月18日　幣原外務大臣談話

軍縮会議招請状への回答に関する談話

対英帝国回答ニ関スル幣原外相ノ談話

（四、一〇、一八）

英国政府ノ軍縮会議招請状ニ対スル帝国回答ハ本日発表シタ通リテ殆ント説明ノ必要ナク欣然会議参加ヲ受諾シ会議ニ対スル帝国ノ態度ヲ簡明ニ示シタモノテアル

帝国政府ハ来ルヘキ会議ニ於テ採用セラルヘキ軍縮案ハ何国ヲモ脅威スルコトナク不戦条約ニ基ク各国ノ安全感ヲ一層高ムルノ結果ヲ齎スヘキコトヲ確信スルト同時ニ軍事費ノ削減ニ対スル一般ノ慾求ニ対シテモ充分ノ考慮ヲ払ハントスルモノテアツテ政府ハ之等遠大ナル目的ヲ達成センカ為メ他ノ海軍国ト協力シテ全幅ノ努力ヲ尽ス覚悟テアル

帝国政府ノ回答中英国政府ト駐英大使トノ間ニ格別重要ナル問題ニ関シ之ヲ会議ノ一般討議ニ付スルニ先チ非公式協議ヲ遂クルノ点ハ政府ノ特ニ重キヲ置ク所テアルカ右非公式協議ノ結果何等第三国ヲ害スルカ如キ協定又ハ合意ヲ遂ケントスルモノテナイコトハ勿論テアツテ日本カ特ニ利害ヲ感スル問題ニツキ其ノ調整ヲ容易ナラシメ迅速ニ会議ノ成功ヲ来スノ素地ヲ作ラントノ趣旨ニ外ナラナイ故ニ政府ハ米国政府又ハ他ノ二国トモ同様利害共通ノ問題ニツキ非公式協議ヲ開クコトニ聊カモ躊躇シナイ

要スルニ政府ハ来ルヘキ会議ノ結果我国民ノ宿望タル国際ノ平和及了解カ著シク増進セラルヘキコトヲ確信シ充分ノ希望ヲ持ツテ会議ニ赴クモノテアル

183　昭和4年10月(19)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請受諾の各国回答に対する米国各紙の論調について

ワシントン
本　省　10月19日後着

第三七八号

往電第三六五号ニ関シ

㈠日仏ノ回答ニ付十七、十八両日ノ主要新聞何レモ社説ヲ掲ケ居レルカ各国回答ノ速ニ出揃ヒタルヲ慶賀スルト共ニ会議前ノ予備的会談ニ依リ諸般ノ難問題ニ付話ヲ纏メ置ク事ノ肝要ナルヲ説クモノ多シ尚我方回答ニ付テハ「ウワールド」カ右ハ極メテ懇切ナルモノナリト述ヘタル外別段論評ヲ加ヘ居ルモノ無ク各紙トモ主トシテ仏伊ノ態度ニ付論シ居レルカ其ノ大要左ノ通

㈠仏伊ノ真意カ連盟ノ同意ヲ待チテ倫敦会議取極ノ効力ヲ発生セシメントスルニ在ルナラハ右ハ海軍軍縮ヲ無期延期スルニ等シ蓋シ連盟ノ軍縮事業カ遅々トシテ進行セサルハ周知ノ事実ナリ（華府「ポスト」及紐育「ヘラルド、ツリビューン」）

㈡仏国其ノ他カ潜水艦廃止ニ反対スルハ尤ナリ（華府「ニュース」小海軍国側ノ態度ニ顧ミ潜水艦廃止ハ当分不可能ナリ（市俄古「デイリー、ニュース」）

仏国カ倫敦会議参加ニ決定シタルハ英米カ潜水艦廃止ヲ強要セサルヘキ見込付キタル為ナルヘシ（紐育「タイムス」）

㈢十七日華府発「エー、ピー」其ノ他新聞通信ハ国務長官米国首席全権タルコトニ決定セルカ米国全権ハ或ハ同長官一人ノミニ止マルヤモ知レス尚「ギブソン」及「ジョーンズ」ハ顧問タルヘシト報シ居レリ

英ニ転電シ英ヲシテ仏、伊ニ郵送セシム

184　昭和4年10月19日　在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請についての仏国の対英回答及び仏伊間内交渉開始に関する新聞論調について

パリ　10月19日後発
本省　10月20日前着

第三五八号

㈠軍縮会議ニ関スル仏国ノ対英回答ニ関シ十七日「タン」ハ右回答中英米ノ交渉ハ連盟軍縮準備委員会ノ決定セル方法ニ従ヒ主義上ノ談合ヲ行ヒタルモノナリ云々ノ項ハ仏国側ノ特ニ重キヲ置ク点ナリトテ五国会議ノ事業ハ連盟ノ一般的軍縮ノ一部ヲナスヘキモノナルコトヲ強調シタル上同回答ニ留保ナキコトヲ以テ仏国カ其ノ従来ノ主張ヲ抛棄シタルモノト見ルヘキニアラス又各国ハ何レモ其ノ特殊ノ事情ニ基キ其ノ必要トスル軍備ヲ保存シ得ヘキナリト論シタリ

㈡仏伊間内交渉開始ニ関シテハ十九日「エキセルシオル」ハ本件交渉ハ仏伊間ニ特別協定ヲ締結セントスルモノニハアラスシテ日本カ其ノ対英回答中ニ言及セル予備交渉同様五国会議ノ成功ヲ容易ナラシムル為ノ下相談ニ過キス仏国ハ伊国ト地理的及作戦上ノ事情ヲ異ニスルヲ以テ

（伊）仏間ノ「パリチー」ハ到底之ヲ承認スルヲ得スト論シ同日ノ「エコドパリ」又仏国カ戦時北阿弗利加ヨリ

三十万ノ陸兵ヲ輸送スルノ必要アルヲ指摘シ伊国トノ「パリチー」ニ反対ヲ表明セリ

㈢尚新聞報ニ依レハ当国海軍大臣ハ十八日仏国ハ今次ノ対英回答ニハ何等ノ留保ヲナササリシモ今後適当ナル機会ニ於テ右留保ヲ提出スル意向ナリト言明セル趣ナリ

英、米、伊ニ郵報シ、連盟ニ通報セリ

185　昭和4年10月(20)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議招請に関する日・仏・伊三国の対英回答を比較したテレグラフの論説について

ロンドン　本省　10月20日前着

第三九三号

十九日各主要新聞ハ海軍軍縮会議招請ニ対スル我方対英回答全文又ハ主要部分ヲ掲載セルカ同日「テレグラフ」論説ハ日、仏、伊三国回答ヲ比較シテ要旨左ノ如ク論ス

仏伊両国ハ英米予備交渉ヲ白眼視セルモ参加ヲ拒絶セハ英米ノ真摯ナル企図ヲ軽視スルノ嫌アルヲ以テ渋々招請ヲ受諾セルカ日本ノ回答ハ之ニ比シ遙ニ明白ニ同情的態度ヲ表明シ単ニ軍備ノ制限ノミナラス縮少ヲ力説シ之亦当初ヨリ「フーバー」大統領ノ主張セル所ナルモ仏伊ノ回答ハ之ニ言及セサルハ海軍縮少ヲ実現不能ト為スカ為ヨリモ寧ロ会議ニ於テ該問題ニ付何等「コムミツト」セサラムトスルノ決意ニ出ツ又日本回答ハ不戦条約ノ精神ニ満腔ノ賛意ヲ表セルモ伊ハ一言モ之ニ言及スル所ナク仏国モ亦之ヲ重視シ居ラス更ニ仏ノ回答ト日本ノ夫レトノ最モ顕著ナル精神並ニ意図ノ相違ハ前者カ最モ明白ニ来ルヘキ会議カ軍縮準備委員会事業促進ヲ目的トセサルヘカラストノ見解ヲ答ヘ居ルニ対シ日本回答カ軍縮準備委員会及一般軍縮会議ニ何等言及シ居ラサル点ナリ英米両政府ノ意図カ五国会議ノ協定ヲ幾年後トナルヤモ知レス且理想ニ過キサル前記二会議ノ決定ヲ待タス別個且即時ニ実施セムトスルニ在ルハ周知ノ事実ナルト共ニ陸海空三軍連携ニ関スル仏伊ノ主張モ依然（実？）行セラレ居ラス最後ニ日本回答ハ会議前英政府トノ非公式談合ヲ強調セルカ会議ノ成功ハ実ニ来ル三ケ月間ノ充分ナル準備ニ懸ル云々

米、仏、伊ニ郵送セリ

186　昭和4年10月21日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

我が全権米国経由方の国務長官の申出に対する政府の意向照会について

ワシントン　本省　10月21日前発　10月21日前着

第三七九号

（極秘）

往電第三七五号国務長官ノ申出ニ対スル帝国政府ノ御意向並ニ右申出ヲ受諾セラルルニ於テハ全権ノ華盛頓到着ノ大凡ノ日取折返シ御電報アリタシ本使近日中ニ国務長官ニ面会スルコトトナリ居ルニ付夫迄ニ何等ノ儀承知シ置クヲ得ハ好都合ト存ス

187　昭和4年10月(22)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議招請への我が対英回答に関する英国新聞報道について

ロンドン　本省　10月22日前着

第三九四号

一、二十一日「テレグラフ」ハ五国海軍会議ニ関スル日本ノ対英回答ニ関スル同紙外交記者通信ヲ掲ケタルカ其ノ要旨左ノ通

英米ト日本トノ間ニハ予備交渉ニ於テ考慮セラルヘキ数多ノ重要ナル相違アルヘキモ日本回答カ一般的ニ会議ノ目的及方法ニ同意セルハ明カナリ仏伊ト異ナリ日本ハ来ルヘキ会議ヲ以テ自主独立ニシテ之ニ提起セラルヘキ特殊問題ニ関シテハ最終的決定ヲ為シ得ヘキモノト認メ居レリ又日本ハ単ナル軍備ノ制限ニ止ラス真ノ縮少ヲ希望シ居ル事英米ニ劣ラス更ニ喜フヘキ事ハ日本カ従前ト異ナリ何等疑惑ヲ示サスシテ最近ノ英米接近ヲ歓迎セルノ精神ニアリ日本ハ英米接近カ其ノ安全ニ対スル脅威ニ非スシテ保障タリ極東ニ於ケル敵対行動ニ非スシテ新ナル共同動作ヲ齎スモノナルヲ看取セリ日本政治家ハ二大英語国民ノ接近ニ依リ其ノ何レカカ日本ニ対シ非友誼的態度ニ出ツルノ危険去レルヲ洞察セリ何トナレハ英米ハ危機ニ際シ自制和解ノ為努力スヘキヤ必然ナレバナリ仏伊カ英米接近ニ付日本ト同様思慮アル見解ヲ採リ得サルハ悲シムヘシ

二、二十日「サンデー、タイムス」ハ「オタワ」ヨリノ特派員通信トシテ米大統領及英首相ハ来ルヘキ倫敦会議ニ於テ重大ナル意見ノ相違ナカラシメムカ為年末迄ニ海洋自由問題ヲ解決セン事ヲ希望シ居レリ目下「フオルミユラ」作成中ナルカ米国側意見ハ英国ハ中立船舶臨検ノ権利ヲ放棄シ米国ハ攻撃的交戦国ニ対スル物資ノ供給ヲ為サス但シ攻撃国ナリヤ否ヤハ海牙或ハ寿府ニ干渉セラル事ナク米国自身之ヲ決定スヘシト云フニアリト報ス

米、仏、伊ニ郵送セリ

188　昭和4年10月23日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題に関するスティムソン国務長官との会談について

ワシントン　10月23日後発
本　省　10月24日後着

第三八八号（極秘）

二十三日国務長官ニ面会シ貴電第三四七号全権渡英日程ヲ内報シタル処長官ハ全権カ華府ニ立寄ラルルコトトナリタルニ対シ満足ノ意ヲ表シ外部ニ対スル説明振ニ付テモ全然同感ニテ過日来其ノ心持ニテ新聞記者ニ接触シ居ル趣ヲ述ヘタリ

次テ本使ヨリ米国側ノ顔触ニ触レタル処長官ハ自分カ首席全権タルコト及「リード」「ロビンソン」両氏ノ全権タルコトハ確定シ我方ハ尚一二名ヲ任命ノ筈ナルカ其ノ顔触ニ付テハ種々ナル噂伝ヘラレ居ルモ確定迄ニハ今暫ク時日ヲ要スヘシト答ヘタリ

右会談終リタル後本使ヨリ比率問題ニ言及シ去ル十六日ノ会談（往電第三七五号）後長官ニ於テ相当考慮ヲ進メラレタルコトト思料スル処日本全権ノ出発期モ愈確定シタル今日帝国政府トシテハ準備ノ都合上一日モ速ニ米国政府ノ意向ヲ承知シ度ク就テハ何日頃本問題ニ付本使ト意見ヲ交換シ得ラルヘキ見込ナリヤト尋ネタルニ対シ長官ハ本問題ノ困難ナルコトニ付テハ屢々申上ケタル通ニテ米国側ニ於テ容易ニ其ノ態度ヲ明カニシ得サルコトハ貴大使ニ於テモ察セラルルコトト存（ス）過般来貴大使ヨリ米国側大型艦ノ数ヲ減スルコトニ付屢々御話ノ次第アリタルカ実ハ大統領モ自分モ予テ申上ケタル通熱心ナル軍縮ノ意向ヲ有スルモ海軍側ニ於テハ中々強硬ナル意見行ハレ英国カ三十三万九

千噸以下ニ切下クルコトニ同意セサル限リハ米国側ニ於テ大型二十一隻ヲ主張セサルヘカラスト固執シ居リ一方「マ」首相ニ於テモ吾人ト同シク軍縮ヲ希望シ居ルモ英国海軍ハ之亦強硬ナル態度ヲ持シ中々困難ナル立場ニアリ日本ノ七割主張ハ総噸数ニ対スル儀ナラハ兎ニ角米国ノ保有セントスル大型巡洋艦ニ対シテ主張セラルル次第ナルヲ以テ英国側トノ間ニモ難カシキ関係ヲ生シ頗ル困難ナル事情ニアリ斯ル訳合ニテ遷延シ居ルモ成ルヘク速ナル機会ニ於テ本問題ニ付貴大使ト意見ヲ交換シ度キ考ナリ目下米国側ニ於テ日、英、米、ノ巡洋艦ノ詳細ナル表ヲ作成中ナルニ付右完了次第会談ノ運ヒニ至ルヘシト語レリ尚右会談ノ際往電第三五七号長官トノ会談ニ言及シ（往電第三六七号「コツトン」トノ会談ニ於テ同氏ハ日米ノ関係ハ議ニ上ラサリシ旨語リタル次第ハアルモ）過日「キヤンプ」ニ於ケル英首相トノ会談ノ際日本ノ主張スル比率問題ニ関シ何等カノ討議ヲ為シタルコトアリヤト尋ネタルニ長官ハ貴大使ノ御話ノ次第ハ早速大統領ニ直接報告シ尚英首相ニモ自分ヨリ伝ヘタル処首相ハ日本ノ主張ハ既ニ倫敦ニ於テ松平大使ノ話ニ依リ好ク承知スト述ヘタル丈ニテ「キヤンプ」ノ会談ハ専ラ英米間ノ関係ヲ議スル建前ナリシ関係上進ムテ討議スルニ至ラサリキト述ヘタリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

189　昭和4年10月24日　佐藤連盟海軍代表より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

軍縮に関する対英米下協議開始に際し卑見申進について

パ　リ　10月24日前10時　発
海軍省　10月25日前7時15分着

機密第二七番電

軍縮ニ関スル対英米下協議モ近ク開始セラルベキニ付全般的ニ見タル左記卑見御参考迄申進ス

一、当方面ニ於ケル帝国ノ補助艦七割比率ハ従来主トシテ海軍大臣又ハ海軍ノ主張トシテ伝ヘラレ国民的要求又ハ帝国ノ国防方針ニ基クモノナリトノ印象ヲ一般ニ与ヘ居ラズ

二、仏伊ノ態度ニ関シテハ新聞紙ハ依然多少ノ不安ヲ漏ラシツツアルモ帝国ノ態度ニ付終始極メテ楽観的ニシテ日本ハ五国協定ニマレ三国協定ニマレ只只英米ニ追従スル

モノノ如キ印象ヲ与ヘツツアリ

三、軍縮ニ対スル仏国ノ態度ニ関シテハ九月二十六日ノ武官電報ニテ御承知ノ通ナルカ現ニ進行中ノ仏伊内交渉ノ結果従来仏国ノ抱持セル主義上ニ両国ノ連衡成立シ他方仏伊ノ要求ハ遂ニ英米ノ容ルル所トナラスシテ五国会議カ再ヒ三国会議化スルノ算無シトセス其ノ場合日英米三国カ仮令協定ニ達シ得タリトスルモソハ条件付協定ニシテ軍縮ハ勿論軍備制限ノ目的ヲモ完全ニ達スルヲ得ス其ノ効果ハ単ニ帝国補助艦ノ対英米比率ヲ定ムルコトニ外ナラサルヘシ

四、全権一行ノ華府経由ハ全般ヨリ見テ結構ナリト考ヘラルルモ一行「ワシントン」滞在中ニ七割問題解決ヲ期待スルハ相当危険ナルノミナラズ最近出淵大使トノ会見ニ於テ全然顧テ他ヲ云フガ如クナル「スチムソン」ノ態度ヨリ推スニ（米発外務大臣宛三百六十六電報参照）米ハ全権ノ来華ニ藉口シテ七割交渉ヲ遷延シ然モ全権華府滞在中外交上的行事辞令ヲ満喫セシメ結局本件ニ関シ内交渉ヲ曖昧裡ニ葬ラントスル底意ナルヤモ量リ難シ要スルニ我七割比率要求ノ点ニ関シ未ダ全然見込付カス当地ニ於ケル一般的感想ヨリスレハ松平大使ドーズ会談当時ヨリモ寧ロ却テ後退シタルカノ観アリ思フニ七割比率ハ下協議ニ於テ解決ヲ得ザル限リ本会議ニ於テハ到底之ヲ獲得シ得サルヘシ加之前記三事情ヨリ見テモ七割比率ノ獲得ヲ確実ニシテ初メテ会議ニモ邁進スベク然ラザレバ官房機密第一〇二番電ノ三ノ主旨ニ依リ寧ロ比率論ヲ離レテ所要兵力主義ニ形式転換ヲ行ヒ仏伊ト同様ノ立場ニ立テロンドン会議ニ臨ムヲ得策トスベシ斯クテ七割比率獲得ハ啻ニ会議ニ於ケル帝国ノ目標タルノミナラズ対倫敦会議方策決定上ノ出発点トモ云フベク此ノ際下協議ニ於テ是非共取付ケ置クコト緊要ニシテ米国ノ態度ヨリ見ルモ下協議ハ対英対米別個ニ推進シ全権ノ「ワシントン」着前結了セシムヘキモノト思考ス

190　昭和4年10月24日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

ロンドン会議前に仏伊間内交渉開始の旨イタリア大使より内話について

第二六九号

二十四日在京伊国大使本大臣ヲ来訪ノ節伊国政府ハ倫敦会議前ニ仏国政府ト内交渉ヲ開始スルコトトナリタルカ右ハ「マクドナルド」首相カ在英伊国大使ニ勧告セルニ基クモノナル旨内話シタリ貴官内密ノ御含迄

米仏伊ニ転電アリ度シ

191　昭和4年10月(25)日　在英国島津大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

軍縮問題に関するエコノミスト及びタイムスの論調について

ロンドン　海軍省　10月25日前8時着

第二五番電

佐藤大佐発

一、十九日ノ雑誌「エコノミスト」ハ大体今次ノ軍縮問題ハ理想ニ依リ今日迄案外順調ニ進展シ来レルモ実際問題トシテハ相当ノ難関アルヘキヲ論シタル中ニ日本ノ態度ニ就キ述ベテ曰ク日本ハ華府条約ノ主力艦比率ニ不満ヲ感シ居ラス三国会議ニ於テハ国民ノ負担ヲ軽減スルト同時ニ対英米関係ニ於テハ従来ニ劣ラザル地位ヲ得ルヲ以テ満足セントスルノ極メテ尤モナル態度ニ出デタリ日本ノ要望スル処ハ制限ニ止ラス縮少ニアリ今回モ巡洋艦ニ就キ七割ノ比率ヲ繰返シ要望スヘキモ掛値ナキ処ハ（六割ヨリ稍良キ比率）ニアルニアラスヤト思ハル

二、二十一日「タイムス」華府入信ハ日米間ノ予備交渉ニ就キ述ベテ曰ク比率ノ問題ハ最モ隔意ナク且ツ詳細ニ議論セサルヘカラサルモノナルモ今ヤ日米間ニハ非常ノ好感漲リ且ツ米国側ニハ日本ノ地位ト困難トニ対スル十分ノ理解アリテ此ノ談合ノ結果ニ就キテハ殆ト悲観ノ余地ナシ

192　昭和4年10月28日　在仏国三浦大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

補助艦総噸数に限った比率七割主張が却って有利の旨上申について

パリ　10月28日後4時25分発
海軍省　10月29日前7時15分着

仏海機密第三六番電（二十八日）

仏国政変ノ大体ハ機密第二八番電報告ノ通リニ帰着ス五国会議ハ仏国ノ妥協ニ依リ成功ノ見込ナリト認ム帝国トシテハ艦種別ニ七割大型巡洋艦ニ付テハ英米ヲ刺激スルコト大

ナルニ鑑ミ会議前ニハ総噸数七割ノミヲ獲得スルコトニ御方針ヲ変更セラルル時ハ仏伊トノ関係モ自然有利トナリ四国間ノ調停的立場ヲ占メ終極ノ目的ヲ達成シ得ベシト思考ス

193　昭和4年10月29日　在米国坂野大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

軍縮問題全般に関するロング海軍少将との会談要領について

ワシントン　10月29日　発
海軍省　10月30日前6時40分着

機密第二十二番電

軍備縮少問題ニ関シ十月二十七日 Long 海軍少将ト会談ノ要領左ノ如シ

同海軍少将曰ク「軍縮会議ハ一見容易ナルカ如キモ諸種難関アリ特ニ大型巡洋艦ヲ区別シ話合ヲ進メタルニ依リ然リ私見トシテハ今日ニ於テモ総噸数ヲ制限シ其ノ範囲内ニ於テ各国所要巡洋艦ヲ建造スル方法ハ日本ノ必要ヨリモ寧ロ国内ノ輿論ニ鑑ミ六割以上ニ増率ノ要アルコトヲ屢々耳ニセリ然レドモ米国海軍ノ研究ニ依レバ西太平洋ニ於ケル根拠地設備不足ニ依リ日米勢力比二対三以上ヲ要ス

右ニ対シ小官ヨリ最近我国内輿論ノ概要ヲ説キ且我七割ハ防禦ニ存シ米国ヲ攻撃スルコト絶対不可能ナル故之ガ容認ハ難問題ナラズ云々ト答ヘタルニ彼曰ク米国ニモ対内策輿論等ノ関係アルニ付之ヲ承認スルコトハ左程容易ナラサルヘシ但シ両国ノ感情ハワシントン会議当時ニ比シ頗ル良好ニシテ移民問題ノ外懸案無ク両国ノミナレバ容易ニ解決シ得ヘキモ仏伊ノ難関ニ加フルニ英米ハ尚簡単ニ行カズ要スルニ難問題ハ巡洋艦、潜水艦ニアリテ駆逐艦ノ解決最モ容易ナルベシ参加国ノ内三国ノ拒絶明ラカナルニ拘ラズ潜水艦廃止ヲ提議セルハ寧ロ了解ニ苦シム所ニシテ英国ノ利益及対内策ニ外ナラズト認ム駆逐艦潜水艦ノ保有量ニ関シテハ英米間ニ未ダ話合無シ云々ト

御参考迄

二十九日

194　昭和4年10月31日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題に関する米国側意向開示方を督促したスティムソン国務長官との会談について

ワシントン　10月31日後発

第四〇〇号（極秘）

本省　11月1日後着

三十一日定例会見日ヲ利用シ国務長官ニ面会往電第三八八号会談ニ基キ軍縮ニ関スル意見交換方ニ付催促シタル処長官ハ先般来貴大使ヨリ屢々御話アリタルコトハ最近繰返シ大統領ニ報告シ又全権ニ内定セル「リード」「ロビンソン」両氏ニモ詳細説明シ相談ヲ重ネ居ル次第ナルカ今以テ議熟スルニ至ラス従テ貴大使トノ会談ノ機会遷延シ居レルハ洵ニ申訳ナキ次第（apologize）ナリ「ド」大使モ来週末頃ニハ華府ニ帰ル筈ナレハ成ルヘク速ニ内部ノ話ヲ纏メ来週遅クトモ来来週中ニハ貴大使ト意見交換ノ運ヒニ至ル様取計フコトニスヘシト答ヘタリ

次テ本使ヨリ米国側ニ於テハ三全権ノ外ニハ未タ他ニ顔触決定セスヤト尋ネタルニ長官ハ極秘トシテ自分ハ「ド」大使ヲ適当ト思考シ過日来大統領ニ進言スル所アリ昨日モ右決定方重ネテ申出テタルモ大統領ニ於テハ今以テ決定スルニ至ラスト語レリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

195　昭和4年11月11日　海軍側資料

ロンドン軍縮会議に対する海軍の方針説明資料

倫敦海軍会議ニ対スル帝国海軍ノ方針説明資料

（昭和四年十一月十一日稿）

一、帝国主張ノ要点

㈠二十糎砲搭載大型巡洋艦ハ特ニ対米七割ヲ保持スルコト

㈡潜水艦ハ比率ニ関係ナク少クモ昭和六年度末現有量（七八、四九七噸）ヲ保持スルコト

㈢補助艦比率ハ米国ニ対シ少クモ総括的ニ七割ノコト

二、補助艦制限保有量ノ標準

㈠昭和六年度末ニ於ケル我現有量（表参照）ヲ標準トス

㈡帝国海軍軍備ノ要旨ニ悖ラズ且所要比率ヲ失ハザル限リ各国ト協調シ我保有量ノ標準ヨリモ縮減スルニ吝ナラズ但シ潜水艦ハ劣勢海軍国ノ国防上極メテ重要ナル武器ナルヲ以テ昭和六年度末現有量ヲ下ルコトナキヲ要ス

付表　昭和六年度末（一九三一年三月末）帝国現有兵力

種別＼有効艦齢細別	有効艦齢内 隻数	有効艦齢内 噸数	艦齢超過艦 隻数	艦齢超過艦 噸数	制限外艦船（訓令記載ノモノ） 隻数	制限外艦船（訓令記載ノモノ） 噸数	合計 隻数	合計 噸数
主力艦	一〇	二九二、四〇〇	—	—	—	—	一〇	二九二、四〇〇
航空母艦	二	五三、八〇〇	—	—	—	—	二	五三、八〇〇
補助航空母艦	二〇	一五、〇七〇	—	—	—	—	二	一五、〇七〇
巡洋艦 二十糎砲艦	二〇	一〇八、四〇〇	—	—	—	—	一二	一〇八、四〇〇
巡洋艦 軽巡	二〇	九四、六五五	一	三、七六〇	—	—	二一	九八、四一五
巡洋艦 旧型巡	二〇	—	九	六六、〇四〇	—	—	九	六六、〇四〇
駆逐艦	一六	一〇四、一二二、六一五	一五	九、八八〇	—	—	一一九	一三二、四九五
潜水艦	一三	七一、七八、四九七	—	—	—	—	七一	七八、四九七
敷設艦	二〇	四、五、九九〇	二	一六、四二〇	—	—	六	二二、四一〇
砲艦	二〇	—	一	一、三二〇	一二	三、九八〇	一三	五、三〇〇
潜水母艦	—	—	—	—	四	二一、〇一五	四	二一、〇一五
掃海艇	一六	六、三、六九〇	—	—	—	—	六	三、六九〇
練習標的 測量砕氷艦	—	—	—	—	七	五三、七六五	七	五三、七六五
運送艦	—	—	—	—	一八	二一三、〇三三	一八	二一三、〇三三

備考　一、米国海軍ノ本年度補助艦新補充計画ニ対スル我新補充計画ハ目下詮議中ニシテ二十糎砲搭載巡洋艦ニ関スル限リ少ナクモ対米七割ヲ保有スル方針ナリ

二、表中ノ有効艦齢ハ寿府三国海軍軍備制限会議ニ於ケル仮協定ニ準ジタルモノナリ

三、制限外艦船

制限外艦船ヲ定ムルニハ左ノ考慮ヲナスコト

(イ)攻撃的性質ヲ有スル軍艦ハ之ヲ制限ス

(ロ)艦型、武装、行動力等小ナル為専ラ防禦的用途ニ充ツル軍艦ハ制限外トス

(ハ)商船ニ僅カノ改装ヲ行ヒテ容易ニ付与シ得ル程度ノ戦闘力ヲ有スルニ過キサル軍艦ハ制限外トス

以上ノ主旨ニ基キ制限外艦船ノ規格標準ヲ定ムルコト左ノ如シ

(一)六百噸以下ノ水上艦ハ其ノ性能ノ如何ニ拘ラズ全部無制限トス

(二)排水量六百噸ヲ越エ速力二十節以下ノ水上艦ハ次ニ述フル性能ノ何レカ一ツヲ有セサル限リ無制限トス

(イ)口径十五糎ヲ越ユル砲ヲ有スルコト

(ロ)口径八糎ヲ越ユル砲四門ヲ越ユルコト

(ハ)魚雷発射ノ計画又ハ装備ヲ有スルコト

(ニ)装甲ヲ有スルコト

(ホ)飛行機艦上帰著装置ヲ有スルコト

(ヘ)飛行機発進装置ハ中央線ナラバ一基舷側装置ナラバ各舷一基宛即チ合計二基ヲ越ユルコト

四、補助艦ニ関スル事項

(一)類別制限方式及制限方式ノ適用

左ノ三類別ニ従ヒ基準排水量ヲ以テ其ノ保有量ヲ制限スルヲ可トス但シ大勢如何ニ依リテハ(ロ)ハ更ニ軽巡洋艦、駆逐艦ノ二艦種ニ類別シテ制限スルニ同意シ差支ナシ

(イ)二十糎砲搭載大型巡洋艦

(ロ)軽巡洋艦、駆逐艦

(ハ)潜水艦

右ノ各類別毎ニ最大合計噸数ヲ定メ其ノ噸数以内ニ於テ制限艦型以下ノ艦船ヲ各国任意ニ建造シ隻数ハ之ヲ自由ニ委スルヲ可トス又排水量二千五百噸未満千五百噸以上ノ駆逐艦ニ就テハ現有ノモノハ其ノ儘保有シ得ルモ将来建造ノモノハ其ノ保有量ヲ可成小ニスルヲ要ス

(二)補助艦各艦種ノ制限保有量間ニ其ノ一定量ヲ限リ彼此融通スルハ二十糎砲搭載大型巡洋艦ニ他ヨリ融通転加スルコトヲ除クノ外差支ナシ而シテ一艦種ニ増

加シ得ヘキ保有量ハ帝国ノ所要ヲ充シ得ルヲ程度トシ可成小ナルヲ可トス

(ホ)二十糎砲搭載大型巡洋艦ノ制限保有量ノ一部ヲ其ノ他ノ補助艦ニ融通転加スル場合ニ於テハ前者ヨリ減ズル量ニ若干量ヲ加ヘタルモノヲ後者ニ転加スルコトトシ差支ナシ此ノ場合其ノ増加標準ハ大勢ニ順応シ差支ナシ

(ヘ)補助艦各艦種間ニ於ケル制限保有量ノ彼此増減ハ前号ノ場合ヲ除クノ外噸対噸ニ拠ルヲ適当トスベシ

(二)制限外艦船ノ範囲ニ属セズ且巡洋艦、駆逐艦若ハ潜水艦タルノ性能ニ欠クル処アル現有ノ海防艦、敷設艦、網艦、河川用砲艦、モントル、スループ等ハ之ヲ保有シ及代換スルコトヲ得ルモノトス

(三)補助艦ノ艦型制限ニ関シテハ概ネ左記ニ準拠ス

(イ)二十糎砲搭載大型巡洋艦

備砲口径二十糎

排水量一万噸以下七千五百噸以上ニテ可成小ナルコト

(ロ)軽巡洋艦

備砲口径十五糎ヨリ大ナラザルモノ

排水量七千五百噸未満二千五百噸以上

(ハ)駆逐艦

備砲口径十三糎ヨリ大ナラザルモノ

排水量二千五百噸未満

(ニ)潜水艦

備砲口径十三糎ヨリ大ナラザルモノ

排水量二千噸以下

(四)代換艦齢

補助艦ノ代換艦齢ハ巡洋艦二十年、駆逐艦十六年、潜水艦十三年トスルヲ適当トス但シ各国勢力ノ権衡及代換実施ノ調節並ニ工業力維持上既成艦ノ一部ニ就テハ協定艦齢内ニ於テモ代換シ得ル如ク規定スルヲ要スル場合アルベシ

(五)代換法

(イ)代換艦齢ニ達スルトキハ制限保有量内ニ於テ之ヲ代換スルコトヲ得

(ロ)代艦ノ建造ヲ了セル補助艦ハ之ヲ廃棄スルヲ原則トスルモ練習又ハ警備等特殊ノ用途ニ充ツル為水上艦

ニ限リ制限量ノ約二割（帝国ノ関スル限リ最小限巡洋艦五隻駆逐艦十六隻）ヲ保有スルコトヲ必要トス協定成立ノ際ニ於テ制限保有量以外ニ保有ヲ必要トスル老齢艦ノ量亦前項ニ同ジ

五、華府海軍軍備制限条約ニ規定セラレアル事項ノ一部変更ノ範囲及程度

(一)主力艦

主力艦ノ廃止又ハ其ノ協定隻数ノ変更ニハ同意シ難キモ同条約ニ依ル制限ヲ左ノ範囲ニ於テ変更スルコトハ軍費ノ軽減ニ貢献スル所アルヲ以テ之ヲ希望ス

(イ)代換期間ノ伸長

代換期間ハ可成之ヲ伸長スルヲ可トス但シ一艦ノ建造期間五年ヲ越エズ且現有主力艦ノ代換艦齢最長三十年ヲ越ユヘカラス

(ロ)艦型縮小

艦型ハ主砲制限ト関連シ主砲口径四十糎ナラバ三万噸迄又主砲口径三十六糎ナラバ二万五千噸迄縮小シ差支ナシ

主砲口径ヲ三十六糎未満ニ縮小スルコトニハ同意セズ

(ハ)艦齢延長

代換艦齢ハ二十六年迄延長シ差支ナシ

代換開始期ノ延期ハ工業力ノ維持並ニ代換期間ノ伸長上可成短キヲ可トスルモ大勢已ムヲ得ザレバ一九三六年迄延期スルコトニ同意シ差支ナシ

(二)航空母艦

帝国ノ国情ニ稽ヘ航空機ヲ帝国ノ近海ニ持チ来ス仲介タルベキ艦船ハ可成小量ニ制限スルヲ可トシ尚軍費ノ軽減ニ貢献スル為同条約ニ依ル航空母艦ノ制限ハ左ノ範囲ニ於テ変更スルヲ有利トス

(イ)一万噸以下ノ補助航空母艦ヲ華府条約ノ規定スル航空母艦保有量中ニ包含セシムルノ目的ヲ以テ同条約ニ依ル航空母艦ノ定義中一万噸ヲ越ユルノ件ノ制限ヲ廃スルコト

(ロ)艦齢ノ延長

代換艦齢ハ一万噸ヲ越ユルモノニアリテハ二十六年迄延長シ差支ナク一万噸以下ノモノニアリテハ二十年トス

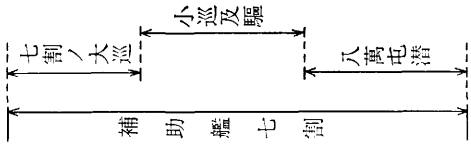
艦型ノ縮小ニ関シテハ大勢ニ順応シ差支ナシ

我主張ノ解説

一、米ニ対シテ総括的七割ノ補助艦

二、米ニ対シテ七割ノ八吋砲艦

三、米ニ対シテ均等八万噸ノ潜水艦



㈠米保有量（米ガ駆逐艦150,000潜水艦80,000ト想定ス）

大巡(8″)	180,000	×0.7＝	126,000	
大巡(8″)又ハ小巡(6″)	30,000	×0.7＝	21,000	又ハ 175,850 (0.62)
小巡	105,500	×0.61＝	154,850	
駆	150,000			
水上補助艦	465,500			
潜水艦	80,000	× 1.0＝	80,000	
	545,500	× 0.7＝	381,850	

㈡日本保有量

米ノ545,500ニ対シ総括的七割ハ日　381,850　ナリ

之ヲ分類シテ考フルトキハ

大巡(8″)ニ於テ七割
潜水艦ニ於テ八万噸　ヲ要求スレバ

小巡及駆逐艦ニ充ツベキモノハ154,850ニシテ米ノ六割一分ニ相当ス

若シ米ガ一万噸三隻ヲ6″艦ト変更スレハ

我小巡及駆逐艦ハ175,850ニシテ米ノ六割二分ニ相当ス

何レニシテモ六割強トナル

㈢日本現有勢力（建造中及既定計画ノ駆逐艦ヲ加フ）

八吋巡	108,400
小巡	98,415
駆	132,495（掃海艇ヲ加フレバ136,185）
水上補助艦	339,310
潜水艦	78,497
計	417,807

㈣縮少量

日本現有勢力　417,807（米545,500ノ7.7割ニ相当ス）

米ノ七割　381,850

縮少　35,957

縮少ノ内訳

	(米ガ8″砲艦21隻トスルトキ)	(米ガ8″砲艦18隻トスルトキ)
一万噸巡洋艦（八吋）	＋38,600	＋17,600
潜水艦	＋ 1,503	＋ 1,503
小巡，駆逐艦	－76,060	－55,060
計	－35,957	－35,957

196　昭和4年11月(12)日　在英国松平大使より外務大臣宛（電報）

日英予備交渉開始、英米妥協点低下及び比率の各問題に関するマクドナルド首相との会談について

本省　ロンドン　11月12日後着

第四一三号（極秘）

「マ」首相帰来後直ニ面会ヲ求メ置キタルカ先週中議会ニ問題続出セル為会見ノ機会無ク今十一日一時間ニ亘リ会談セルカ首相ハ直ニ会見出来サリシ次第ヲ謝シタル上何時ニテモ予備交渉ヲ開キ出来得ル丈諒解ヲ得置キ度ク自分ハ頗ル多忙ナルニ付或ハ外相ト話サルル事トシテ可ナルモ先ツ当分ハ自分ニ於テ当リ差支無キ旨ヲ述ヘタルニ付本使ハ既ニ政府ヨリ訓令ニ接シ居ルニ付今日ヨリニテモ話ヲ為ス準備アルノミナラス出来得ヘクンハ大要ニテモ今日御話シ度シトテ先ツ首相ノ英米諒解ノ努力ニ対スル（日本）政府ノ同情ヲ述ヘ詳細ナル点ハ後廻シト為シ日本政府ノ最モ重キヲ置ク点ハ二アリトテ軍縮会議ノ真ノ目的ヲ達スル為殊ニ巡洋艦ニ関スル英米間ノ妥協点ヲ成ルヘク低ク決定セラレタク若シ米十八隻ノ如キ標準ニ定マル時ハ日本ハ約二万噸ヲ更ニ増加セサルヘカラス若シ二十一隻ヲ有スルカ如キ場合ニハ約四万噸ヲ要スル事トナリ国民ノ期待ニ背ク虞アルニ付更ニ一層ノ努力ヲ希望スル旨並ニ日本政府ハ補助艦総括的七割ヲ要求スル旨ヲ述ヘ此ノ点ハ米ノ「パリチー」ヲ要求セルト同シク我方ニ於テ重要視シ居ル旨ヲ述ヘ我カ根本方針タル何国ヲモ侵サス何国ニモ侵サレサル原則ヲ説明シ七割要求ノ理由トシテ我国海岸線ノ長キコト海外領土トノ交通確保食物工業材料輸入ノ必要其ノ通商路ノ保護支那西比利亜等ニ於ケル居留民ノ保護緩急ノ場合ニ於ケル造船材料設備等ノ不足等詳細説明シ首相ノ同意ヲ求メタル処「マ」ハ之等ニ対シ即答スルコトハ困難ナルモ英国ニ於ケル各領

土トノ連絡及交通通商路保護ノ必要等ヨリ多数ノ巡洋艦ヲ要スル事情ヲ説明シ十五隻ノ大型巡洋艦ヲ更ニ減少スルコト困難ナル旨ヲ述ヘ七割希望ニ対シテハ噸数隻数備砲等ノ総テノ点ヨリ考慮ヲ要スヘキ処日本側ニ於テ一万噸級八吋四隻又ハ二隻ノ如キ増加ニ対シテハ同意スルコト困難ナリ自分ハ米国ニ対シ八吋十五隻ニ対スル十八隻ト雖「パリチー」ノ意味ニ於テハ応諾スルコト能ハス何トナレハ六吋ト八吋トノ威力ヨリ考慮シ「パリチー」トナルコト能ハス併シ必要上十八隻ヲ希望スルナラハ自分ノ方ニ於テモ好意的ニ考慮スヘシト言ヒ居ル次第ナリ併シ二十一隻ト言フカ如キコトニ付テハ同意スルコト能ハス日本ニ於テ米国ヲ基礎トシテ七割ト言フコトニ成レハ英国トノ関係ニ於テ均衡ヲ維持ストハ思ヘストテ難色アリタルニ付本使ハ其ノ事情充分諒トスルモ日本カ一面通商保護ノ必要ニ於テ英国ノ立場ト近似シ居ルト同時ニ他面海軍根拠地ヲ各地ニ有セサル点ニ於テハ米国ト立場ヲ同シフシ居ルニ付大型艦ニ無関心ナル能ハス単ニ我方ヨリ言ヘハ英米同数ノ大小巡洋艦ヲ有スル事最モ希望スル所ナルモ貴国ノ都合上米国トノ差異ヲ付ケラルルニ至ルモ日本ハ国防ノ安全上大型ニ於テ優勢ナル方ヲ基礎トセサルヘカラサル次第ヲ説キタルカ「マ」ハ三国ノ均衡論ヨリ説キテ容易ニ動カス本使ハ然ラハ何レカヲ基礎トシ又ハ何隻ヲ要スル如キ問題ハ後トシ兎ニ角米国ノ「パリチー」ニ対スル希望ハ先ツ承諾シタル後談判ニ入レラレタルカ如ク補助艦ニ対スル総括的七割ノ主義ニ先ツ同意セラルル事ヲ切望スル旨述ヘタル処「マ」ハ即答ハシ難キニ付今日述ヘラレタル処ヲ篤ト研究シ自己ノ見解ヲ覚書ニ認メタルモノヲ送ルヘク其ノ上ニテ充分討議致度シト述ヘタリ尚本使ノ問ニ対シ「マ」ハ英全権ハ未タ決定セサルモ自分ノ考フル所ニテハ自分ノ外外相及海相ノ三名ニスル積リナルカ米国側ニ於テ或ハ五名トナルヤノ噂モアルニ付目下確メ中ナルカ其ノ上ニ於テ更ニ付加スルヤモ知レス会期ニ関シテハ一月廿一日頃ノ積リナルカ一両日中外務省ヨリ通報ノ筈ナリト述ヘタリ

米へ転電シ仏、伊へ暗送セリ

197　昭和4年11月(13)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

マクドナルド首相との会談要領に関し仏国大使より内報について

第四一四号　ロンドン　本省　11月13日後着

十一月十二日仏国大使来訪昨日貴大使首相ト会見セラレタル趣ナルカ自分モ同日首相ト会見シ仏国新政府ハ会議開催前ニ於テ非公式交渉ヲナス意アル旨ヲ申入レ先ツ二ツノ質問ヲナシタルカ一ハ首相渡米ノ結果「ドーズ」大使トノ間ニ為サレタル話合ニ更ニ一層ノ進歩ヲナシタルヤ否ヤヲ尋ネタル処「マ」ハ何等進展セサル旨ヲ答ヘ二ハ海洋自由問題ニ関シテ尋ネタル処「マ」ハ本件ハ大統領ト話シヲナシタルモ「フーバー」ハ来ルヘキ五国会議ニハ提議セサル意向ヲ述ヘタルニ付自分モ先夜市長晩餐会ノ席上其ノ旨ヲ述ヘタル次第ナル旨答ヘタリ右ヲ政府ノ訓令ニ依リ尋ネタル次第ナルカ予備交渉ノ実質ニ付テハ未タ何等ノ訓令ニ接セサルニ付右以上深入リシタル話ハナササリキ尤モ「マ」ハ潜水艦ニ関シ仏国ノ意向ヲ尋ネタルニ付自己ノ思付キトシテ仏国ノ輿論即チ各方面ヨリ新聞ヘノ投書等ニ依リ判断スルモ之カ廃止ニハ到底仏国トシテ同意スル能ハサル旨述ヘタル処首相ハ然ラハ数及其ノ大キサニ対シ制限ヲナシ度キ旨述ヘタルニ付自分ハ之ニ対シ仏国従来ノ主張即チ各国ニ対スル「グローバルトンネージ」主義ヲ適当ト思考スル旨話シ置キタリ今後交渉ヲ始ムルニ於テハ時々其ノ模様ヲ御通報致スヘシト述ヘタルニ付本使モ昨日首相トノ談話要領ヲ内報シ今後モ随時我方ノ交渉経過ヲ御話スヘキ旨申置キタリ伊国大使ハ明日帰国スル由ナルカ何レ米国政府ト直接打合ノ上帰任後非公式ノ話ヲナスコトト思ハル又「ドーズ」ハ十六日頃帰任ノ筈尚往電第四一三号首相ト会談中「マ」ハ七割要求ニ関連シ潜水艦ニ関スル件並代艦問題ニ付テモ我意向ヲ尋ネタルモ本使ハ本件ニ関シテハ既ニ訓令ニ接シ居ルモ詳細ニ亘リテハ紛糾スル虞アルニ付次回ニ其ノ説明ヲ譲ルヘキ旨ヲ述ヘ先ツ第一回ニハ既報ノ二点ヲ力説シ先方ノ注意ヲ之ニ集中セシムル様試ミタリ右通報ス

米、仏ニ転電シ仏ヲシテ伊ニ暗送セシム

198　昭和4年11月(13)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

大戦休戦記念日の際の大統領の演説に対する新聞論評について

ロンドン　本省　11月13日後着

第四一五号

十二日各新聞ハ休戦記念日ニ於ケル米大統領ノ演説特ニ後段ニ於ケル食糧輸送船ノ自由ニ関スル提議ニ対シ論評ヲ加ヘ居ル処其ノ主ナルモノ左ノ通

一、海洋自由ノ問題カ仮定的問題タル事ハ米大統領ノ演説ニモ明カナル所ナルカ吾人ハ来ル可キ海軍会議ヲ成功セシメントスル実際的且直接ノ事業ヲ控ヘ居ル次第ナルヲ以テ斯ル仮定的問題ノ為五国海軍会議ノ成功ヲ妨クヘキニ非ス況ヤ該会議ノ成功ハ本問題ノ論議解決ヲ頗ル容易ナラシムヘキニ於テヲヤ（タイムス）

二、戦時封鎖ノ権利ニ対シテハ英国ハ不変ノ主張者タリ米国ハ不断ノ反対者ニシテ本提議ハ米国従来ノ伝統ヲ履メルモノナル処「マツク」首相ハ英国従来ノ主張ヲ固守スヘキヤ或ハ右主張ヲ醸成セル情況今ヤ全ク変化セルヲ認メテ米国ニ同意スヘキヤ英国ノ二大目的ハ戦争ノ渦中ニ投セサルコト及戦時其ノ人口ヲ飢餓ニ陥レサルコトニ存スル処米大統領ノ提議ハ以上二目的ノ達成ニ顕著ナル貢献ヲナスモノナリ（ガーデイヤン）

三、重要食料品ニシテ同時ニ火薬製造ニ必要ナルモノアリ例ヘハ油脂穀類其ノ他食料品ハ工業用酒精製造ニ用ヒラルヘク且両交戦国ノ食糧補給カ一ハ海路ニ依リ他ハ陸路ニ依ル場合本提議ニ依レハ前者ハ無制限ニ供給ヲ受ケ後者ハ供給ヲ断タルルモ右ハ不法トナラス従テ本問題ハ更ニ慎重考慮ヲ要スヘシ要スルニ米大統領ノ海洋自由問題ニ対スル態度ハ英首相ノ如ク楽観的放任的ニ非スシテ建設的ナリ（テレグラフ）

米ニ転電ス

199　昭和4年11月(13)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

大戦休戦記念日に際しロンドン軍縮会議の成功を期待した大統領の演説概要について

ワシントン　本省　11月13日後着

第四一五号

十一日大戦記念日ニ際シ大統領ハ「アメリカン、リーヂャン」主催ノ会合ニ於テ演説ヲナシ先ツ世界大戦ノ教訓ニ鑑ミ平和維持ノ肝要ナル所以ヲ述ヘ次テ不戦条約ノ成立ニ言及シタル後同条約ノ企図スル各国民間紛争事件ノ平和的解

決方法ハ未タ充分ナラス而シテ我国務省ハ米国自身トシテ有スル最初ノ平和的解決機関ナルカ吾人ハ同省ヲ更ニ有力ナラシムルコトヲ要ス又吾人ハ平和的解決ヲ目的トスル諸条約ヲ一層拡充スルコト及権威アル国際法ヲ完成シ尚適当ナル留保ノ下ニ国際司法裁判所ニ指示ヲ与フルコトヲ必要トス強制条項ヲ含ム連盟規約モ亦平和維持ノ一ノ方法ナルカ吾人ハ右方法ヲ取ルコトヲ拒否スル者ニテ少クトモ西半球ニ於テハ強制方法ノ必要ナク単ニ輿論ノ力ヲ以テ暴力ヲ阻止スルニ充分ナリト確信ス従テ吾ハ直接行動ヲ抑制シ侵略国ヲ輿論ノ監視下ニ置ク為ニ紛争事件ヲ紛争当事国及友好国ノ関係セル共同調査ニ付スル方法ヲ一層発達セシムルコト緊密ナリトスル者ナリト述ヘ軍縮問題ニ関シ軍備競争ヨリ生スル危険ヲ除去センカ為余ハ再ヒ海軍ニ関スル協議ヲ開始セリ余ハ来ル倫敦会議ノ成功ヲ確信スル者ニテ右会議ヲ提唱スルニ当リ既ニ英国ト均勢ニ付合意ヲ遂ケタルカ海軍ノ serious reduction ノ行ハレンコトヲ希望ス凡ソ紛争平和的解決方法ヲ確立シ又侵略ヲ阻止スル輿論ノ力カ多年ノ試練ヲ経タル後ニ非サレハ適当ナル国防ヲ放棄スルモ差支ナシトノ確信ヲ生スルモノニ非ス故ニ余ハ国防ノタメニ適当ナル用意ヲ備ヘ置クヘキコトヲ主張ス尤モ適当ナル国防ハ相対的ノモノナルニ付我国ハ他国ニ比例シテ海軍ヲ縮少スヘキヲ以テ他国側ニ於テ如何ナル程度迄切下ケ得ルカヲ明カニスヘキ筋合トナルヘク米国トシテハ如何ナル切下ケモ低キニ過クトナスカ如キコトナシト述ヘ更ニ海洋自由ノ問題ハ国際紛争平和的処理方法確立セハ単ニ学究的議論トナルヘキモ余ハ此処ニ之カ実際的解決ヲ提案セントス右ハ単ニ一般ノ考慮ヲ求ムル為ニシテ如何ナル国ニ対シテモ政府ノ提案トシテ提出セラレタルコトナク又今提出スルモノニ非サルハ勿論今次ノ倫敦会議ニ提出セントスルモノニモ非ス余ノ提案ハ食糧船ヲ病院船ト同様ニ取扱ハントスル者ニシテ今後ハ饑饉ニ瀕セシムルコトヲ戦争ノ一方法トスルヲ廃止セサル可ラスト論シ最後ニ国際間ニ親善及友好並ニ相互尊敬ノ念ヲ養フコトコソ平和ノ為ニ最モ有力ナル方法ナリトテ予ノ南米訪問及英首相ヲ迎ヘタルハ右ノ趣旨ニ出タル次第ナルカ吾人ハ何等約束ヲナサス又如何ナル議論ニモ結論ヲ与ヘスシテ成シ得ヘキ建設的行動及起リ得可キ紛議ノ範囲ヲ討究シタル者ニシテ如斯クシテ相互ノ間ニ困難トスル点及希望スル処ヲ理解シ得ハ吾人ハ各自ノ限界

内ニテ世界平和ニ一層貢献シ得ヘシト述ヘタリ
英ニ転電シ、英ヲシテ仏ニ転電セシム

200　昭和4年11月13日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題などに関する国務長官への回答要旨回示方稟請について

ワシントン　11月13日前発
本　省　11月13日後着

第四二一号（極秘）
往電第四一九号ニ関シ
去ル八日他用ヲ以テ「コットン」次官ニ会談ノ際同官ハ長官ハ貴大使ニ渡スヘキ軍縮会議ニ関スル覚書ヲ折角自ラ起草中ナルカ遠カラス回答ノ運ニ至ルヘシト極ク内密ニ洩シタルコトアリタルカ長官ノ今回ノ書面及之ニ関シ長官カ敷衍説明シタル事項ニハ腑ニ落チサル点モアリ不取敢本使限リノ意見トシテ腹蔵ナク応酬シタル次第ハ同電申進ノ通ナルカ長官ノ申出ハ要スルニ比率問題ニ関スル我方ノ主張ヲ斥ケ実際的ニ何等カノ解決ヲ計ラムトノ下心ヲ有スルモノト思ハルル処此ノ辺ニ対スル我方ノ主張ヲ明カニスルト共ニ覚書全般ニ亘リ明確ナル回答ヲ為スコト必要ト思考セラル右回答内容ハ倫敦ニ於ケル松平大使ト「マ」首相及「ドウズ」大使トノ会談ノ際引用セラルルコトト存スルニ付統一ヲ保ツ為英文ニテ電報アリタシ
尚右回答ニ関連シ本使ヨリ特ニ口頭ニテ説明スヘキ事項ハ成ルヘク詳細ニ御回示相成度シ
英ニ転電シ、英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

201　昭和4年11月13日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

海軍軍縮に関するイタリア海軍省官房次席局員の内話について

ローマ　11月13日後発
本　省　11月14日後着

第九四号
海軍軍備縮小ニ関シ伊国各新聞ハ近来其ノ記事ヲ増加シタルモ孰レモ英仏各新聞記事ノ転載ニ過キス特ニ伊国政府ノ意見等トシテ記事ナキモ潜水艦保有率ニ関シ仏ヨリモ低率ニ甘ンスルモ可ナリトスル趣旨ノ新聞記事（「ナポリ」発行「マチノ」記事トシテ九日「タイムス」ニモ転載セラル）ニ関連シ丹羽武官カ伊国海軍省官房次席局員ニ質シタル処左ノ通内話アリタル趣ナリ
㈠伊国ハ水上艦ニ於テ仏ト同一比率ヲ保持シ得ハ均勢上潜水艦ノミハ低率ニテ可ナリ現ニ仏国ハ潜水艦ニ於テハ伊国ヨリモ多数ヲ保有セリ
㈡其ノ他ノ各国間ニ於テモ水上艦比率ニ甚シキ差異ヲ付セサル限リ潜水艦ノ必要ヲ特ニ認メサルモ真ニ潜水艦ハ弱者ノ武器タルコトニ変化アルナシ
㈢海上自由問題ニ関スル「フーバー」氏ノ主張ニハ同意スヘキ点アルモ更ニ深ク研究スルトキハ之カ解決ハ不可能ナルヘシ（英「モーニングポスト」ノ所見トシテ「メッサジロ」ニ載セラレタル所ト符合ス）
仏、伊間ノ予備交渉ハ仏政変ノ為其ノ後進捗ヲ見ス新聞紙上互ニ自論ヲ主張シ譲ラサルカ如キモ内情ハ然ラス当事者間特ニ海軍間ニハ相当ノ理解アリ孰レモ大勢力ノ保持ハ経済上之ヲ許ササルヲ以テ何トカ協定ヲ見ルモノト思考スト
尚倫敦会議ニ於ケル伊国全権ハ未タ決定セラレサルモ本官ノ得タル情報ニ依レハ現司法大臣「ロッコ」ハ予テヨリ軍（縮）問題ニ興味ヲ有シ居リ今ノ処有力ナル全権候補者ニテ其ノ他ニハ外務大臣海軍大臣等噂ニ上リ居ル趣ナリ
在米大使ヘ転電シ英、仏ヘ暗送セリ

202　昭和4年11月13日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

比率問題に関し英国自治領側の不安除去方訓令について

本省　11月13日後2時発

第二八三号（極秘）
「マクドナルド」首相ハ帰英早々ノコトニモアリ「ドーズ」大使モ未タ帰任セサル模様ニテ往電第二六一号㈠ノ非公式会談ヲ直チニ進行セシムル運ヒニ至リ難キ実情ト推察セラルル処我カ全権一行ノ出立期モ本月末ニ迫レルコトニモアリ一日モ速カニ比率ニ付テノ我カ要求ニ対スル英米両国側ノ大体ノ意見ヲ知リ会議ニ対スル我カ方針ノ決定ニ資スルコトト致度キニ付貴官ハ成ル可ク最近ノ機会ニ於テ「マ」首相ニ面会ノ上非公式会談ノ開催ニ付打合セヲナスト共ニ在米大使宛往電第三三五号後半ノ趣旨ヲ以テ比率問題ニ付懇談ヲ遂ケラレ度ク右ノ機会ニ於テ過般寿府ニ於ケル会談ノ際首相ヨリ日本ノ比率要求ハ大型巡洋艦ニ重キヲ

措キ米国ノ保有量ヲ標準トスルモノナル結果日英間ノ大型巡洋艦保有量著シク近接シ英国政府ハ此点ニ於テ輿論ニ対シ困難ナル立場ニ陥ルヘシトノ趣旨ヲ述ヘラレタル処（寿府発貴電第三号）実ハ我カ国トシテハ我カ七割比率カ英国側ニ対シ脅威ヲ感セシムルモノトハ夢想タモセサリシ次第ヲ打明ケ或ハ英国海外領殊ニ豪州方面ニ於テ我カ態度ニ不安ヲ抱キ之ニ対シ異論アリ為メニ英国当局ニ於テモ我カ要求ノ承認ヲ困難トセラルル事情ニテモ存スル次第ナルヤヲ尋ネ「マ」首相ノ率直ナル回答ヲ求メラレ度ク若シ斯カル事情存ストノコトナラハ右ハ全ク根拠ナキ疑惑ニ基クモノト云フヘク本来我カ国カ七割比率ヲ要求スル所以ハ厳格ナル意味ノ国防及通商路ノ保護ニ在リテ何等侵略的意図ヲ蔵スルモノニアラス我カ回答中特ニ不戦条約ニ言及セルハ此趣旨ニ出ツルモノナリ又日英両国間ノ友誼ハ伝統的ニ我カ国民ノ信念ト化シ居リ両国間ニ戦端ヲ開カルルカ如キ場合ヲ想像スルコト不可能ナルハ勿論我カ国民中誰レ一人トシテ英帝国海外領土ニ対シ政治上ノ野望ヲ抱クカ如キモノ無キコトハ之ヲ確言シテ憚ラサル所ナリ然カレトモ万一英国側ニ於テ何等不安ノ念ヲ抱ク点アルニ於テハ我カ国トシテハ之ヲ一掃スルカ為メ適当ナル保障ヲ与フル方法ヲ考究スルコトヲ躊躇スルモノニアラサルカ故ニ若シ首相ニ於テ此点ニ付何等考案モアラハ承知シ度旨申入レ其ノ回答振回電アリ度シ尚ホ労働党ノ主張トシテ政治的色彩ヲ帯ヒ易キ個々ノ保障条約等ノ締結ニハ反対アルヘキモ調停条約仲裁裁判条約等連盟規約若クハ不戦条約ノ精神ニ基ク協定ハ労働党ノ主張ニ反スルモノニ非スト察セラレ若シ此種ノ協定ニ依リ英国並ニ其ノ海外領ノ不安ヲ除キ以テ我海軍力比率ノ要求ニ対スル同意ヲ容易ナラシムル見込アラハ我ニ於テ斯カル協定案ヲ考量スルノ意向ナルニ付右御含アリタシ尤モ斯クノ如キ英国側ノ不安ヲ除クヘキ具体案ニ付テハ我方ヨリ進ンテ之ヲ指摘スルコトナク先ツ英首相ヨリノ意見開示ヲ誘ハレタシ、将タ又各国保有噸数ヲ一律ニ低下シ軍縮ノ実ヲ挙ケンコトハ比率問題ト並ンテ我カ国ノ最モ重キヲ措ク主張ナルカ故ニ今後ノ会談ヲ通シ機会アル毎ニ大勢ヲ此方向ニ導ク様御留意アリ度シ

本電内容在米大使ヨリ国務長官ヘ内話ノ筈

米、仏、伊ニ転電アリ度シ

203　昭和4年11月13日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

比率問題につき国務長官に対し重ねて懇談方訓令について

本省　11月13日後2時5分発

第三六五号　極秘

在英大使宛往電第二八三号ニ関シ

貴官ニ於テモ最近ノ機会ニ於テ国務長官ト面会ノ上比率問題ニ関シ重ネテ懇談ヲ進メラレ度ク其ノ際前顕在英大使宛訓電ノ内容ヲ適宜取捨ノ上内話セラレ米国当局ニ於テ七割比率ノ我カ要求ニ対シ好意アル考慮ヲ加ヘラレ居ルコトハ深ク多トスル所ナリト雖大型巡洋艦ノ保有量日英両国間ニ著シク接近スル結果英国海外領殊ニ豪州ニ於テ我カ国ノ態度ニ関シ何等カノ誤解ヲ抱クカ如キ情勢アルニ顧ミ松平大使ヨリ「マ」首相ニ対シ海軍協定ノ成功ヲ容易ナラシムルカ為メ此種ノ障碍ヲ除去スルコトヲ相談セシムルニ至リタル次第ナルコトヲ説明シ本来我カ国トシテハ劣勢ノ海軍力ニ満足スルモノニシテ七割比率ノ要求ハ英米ニ対シ何等脅威ヲ与フル性質ノモノニアラサルコト明カナリト考フ此点ハ米国官民ニ於テモ充分理解アリ米国輿論カ軍備縮小ニ対スル我カ誠実ナル態度ヲ能ク了解シテ一般ニ我カ国ニ対シ友誼的論調ナルヲ見ルハ米国政府当局ノ指導ニ負フ所多キハ勿論ナルモ同時ニ近年日米両国民ノ間ニ著シク相互ノ了解ヲ進メ親善ヲ厚クシ来タリタル結果ト云フヘク慶賀ニ堪ヘサル次第ナルカ今回ノ海軍協定ノ成否ハ此親善関係ニ重大ナル影響ヲ及ホスモノナルニ付両国民間ニ疑惑危惧ノ念ヲ抱カシムルカ如キ禍根ヲ貽サス之レヲ絶滅シテ将来長ク日米間和親協同ノ基礎ヲ築ク様此上トモ尽力セラレンコトヲ希望スル旨ヲ述ヘ之ニ対スル長官ノ応答振電報アリ度シ（日米調停条約及仲裁裁判条約ニ付テハ未タ商議ヲ進ムル運ヒニ至リ居ラサル処右ハ専門的見地ヨリ研究ヲ要スル点アリシカ為メ事務的ニ遅延シ居ルモノニテ主義トシテ此等条約ノ締結ニ異議アル次第ニアラス御含迄）

英仏伊ニ転電アリ度シ

204　昭和4年11月(14)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

シンガポール海軍根拠地工事延期に関する海相の下院における答弁について

ロンドン
本省　11月14日前着

第四一八号

十三日海軍大臣ハ下院ニ於ケル質問ニ対シ来ルヘキ海軍会議ノ決定ハ新嘉坡海軍根拠地問題ニ影響ヲ及ホスヤモ計ラレサルニ付政府ハ目下施行中ノ工事ハ凡テ之ヲ遅ラセ(「スローダウン」)停止スヘキモノハ凡テ停止シ新規工事ハ之ヲ見合セ会議ノ結果ヲ俟ツニ決定セル旨並ニ一九二五年労働党内閣ハ該根拠地工事ヲ停止スヘキコトニ決定シタルモ前内閣時代ニ大ニ事態ノ変化ヲ来シタルコト及ヒ右経費ノ半分ハ香港、馬来連邦「ニュージーランド」海峡植民地ヨリノ寄付ニ依ルコトヲ述ヘタルカ更ニ他ノ質問ニ答ヘテ右方針ハ各自治領ニ通知セラレ自治領各政府ノ差当リノ見解ト矛盾セサルヘシト信スル旨答弁セリ

米ニ転電シ仏伊ニ郵送ス

205 昭和4年11月(14)日 在米国出淵大使より幣原外務大臣宛(電報)

スティムソン国務長官より比率問題に関する覚書手交及び右に関する同長官との会談について

別電 十一月十四日着在米国出淵大使より幣原外務大臣宛第四二〇号

比率問題に関する国務長官覚書並びに仮訳

十一月十五日付古賀海軍省副官覚

国務長官覚書に対する意見

付記

ワシントン 本省 11月14日前着

第四一九号(極秘)

十二日国務長官ノ求メニ依リ往訪軍縮問題ニ関シ会談ノ結果左ノ通

(一)先ツ長官ヨリ過般来貴大使ヨリ再三申出ラレタル補助艦比率就中米国ノ保有スヘキ大型巡洋艦ニ対スル七割ノ主張ハ如何ニモ困難ナル問題ニテ遂今日迄回答遷延シ居タル次第ナルカト言訳シタル上本日ハ会談ノ基礎トシテ自分一己ノ考ヲ率直ニ開陳シタル一ノ「テンタティブ、ステートメント」ヲ差上クル積リニテ此処ニ用意シ置キタルカ右ニ対シ説明ヲナスニ先立チ万一ノ誤解ヲ避クル為特ニ申上度キ事ハ物事ハ之ヲ書付ニ認メル場合ニハ自然堅苦シクナル事ハ免レサル次第ナリ此ノ覚書ハホンノ口上代リニ認メタルモノニテ今後会談ノ結果自分ニ於テ誤解シ居ル点アリトセハ何時タリトモ喜テ訂正スル覚悟ナ

レハ其ノ点ヲ特ニ諒解セラレ本日ノ会談ヲ貴国政府ニ報告セラルル場合ニハ辞句ノ末ニ於テ無益ノ誤解ヲ惹起スカ如キコト無キ様特ニ御配慮ヲ得タシト念ヲ押シタリ

(二)次ニ長官ハ右覚書(全文別電第四二〇号ノ通)ヲ手ニシツツ要処要処ニ付敷衍説明シ先ツ第一ニ比率ナル言葉ハ成可ク避クルコトトシ実際的ニ解決ノ途ヲ計ルコト最適切ト思考スル旨ヲ繰返シ述ヘタルニ付之ニ対シ本使ヨリ軍縮ニ関シ協定ヲナス以上何等カノ標準ヲ必要トスル次第ニテ漫然実際的ノ事情ニ依リ協定ヲ遂ケントスルモ容易ニ其ノ目的ヲ達シ得サルヘシト思考ス米国側ニ於テ主張セラルル「パリティー」モ実ハ比率ニ外ナラサルヘシト応酬シ置ケリ

(三)次テ長官ヨリ日本側ニ於テ七割ヲ主張セラルルハ軍縮問題ノ歴史ニ徴シ其ノ態度ノ変更ト認メルノ外ナク日本側ニ於テ新ニ斯ル主張ヲ固執セラルルハ会議ノ円満ナル進行ヲ期スルニ非サルヘシトテ華府会議ニ於ケル加藤全権ノ陳述ヲ援用シ五五三ノ比率ハ独リ主力艦ノミニ対スルモノニ非スシテ他ノ艦種ニモ適用アルコト当時ノ記録ニ依リ明カナリ日本ハ当時事実上補助艦ニ関シテモ六割ヲ同意シタルノミナラス別ニ太平洋防備協定ニ依リ頗ル有利トナリタリ

換言スレハ日本ハ六割ノ比率ト防備ノ現状維持ニ依リ二重ニ「セキユウリテー」ヲ得ラレタル次第ナリ自分ハ最近迄比律賓総督タリシ関係上防備問題ニ関スル米国人ノ感想ヲ最モ良ク承知シ居ルモノナルカ日本ニ於テ若シ補助艦ニ関シ飽迄七割ヲ主張セラルルコトヲ知ラハ比島方面ニ於ケル米国人ハ頗ル不安ニ感シ必ス種々ナル議論沸騰スルニ至ルヘク独リ比島ノミナラス本国ヨリ隔絶セル豪州等ノ英領諸島ニ於テ必ス問題起ルヘシト語レリ

右ニ対シ本使ヨリ本日長官ヨリ日本ノ七割要求ハ其ノ態度ヲ変更セルモノナリトノ御話ヲ承ルハ真ニ意外トスル所ナリ自分ハ予テ申上ケタル通リ華府会議当時ハ随員ノ一人トシテ参与シタル関係上或ル程度迄ノ知識ヲ有スルモノナルカ今長官ノ述ヘラレタル加藤全権ノ陳述ナルモノハ主義上米国側ノ提案ニ同意シタルコトヲ述ヘタル迄ニテ六割ノ比率ヲ其ノ儘是認シタル次第ニハアラス日本カ会議ノ当初ヨリ七割ヲ主張シ居リタルコトハ明瞭ナリ唯会議ノ円満ナル進行ニ貢献スル為難キヲ忍ヒテ主力艦

ニ関シ大体六割ノ比率ヲ承諾スルト同時ニ右承諾ニ関連シ太平洋防備現状維持ニ関スル提議ヲナシ関係国ノ同意ヲ得タル次第ニテ防備現状維持ハ六割ヲ受諾スル為ノ付帯条件ト称スヘク右両者カ二重ニ日本ノ「セキュリチイ」ヲ保障スルニアラス日本ハ両者ヲ併セタルモノニ不承不承同意ヲ表シタルニ過キサル次第ナリ又長官ハ加藤全権ノ陳述ニ依リ日本ハ補助艦ニ付テモ六割ノ比率ヲ受諾シタルモノト諒解シ居ラルルカ如キモ斯ル協定ヲナシタル事実ナキコトハ当時ノ記録ニ依リ明瞭ニ諒解セラルヘシ即チ英国全権ハ補助艦ニ関シ大体米国原案ノ比率ニ同意スル意味合ヲ表明スルト共ニ英国ノ国情上多数ノ小型巡洋艦ヲ必要トスル事ヲ他日ニ留保シ又仏国全権ハ補助艦ニ関スル限リ米国案ニ絶対ニ反対シタリ

従テ其ノ実完全ニ同意成立シ居ラサリシ補助艦比率問題ハ漸ク最近ニ至リ英米間ニ大体話合付キタル次第ト認メラル日本ニ於テ今般補助艦ニ付七割ヲ主張スルハ華盛頓会議ニ於テ右ニ関スル比率纏ラサリシニ鑑ミ既ニ解決セル主力艦問題ハ之ヲ切放シ其ノ未解決ナル補助艦ニ付主張スル場合ニテ右七割ハ前ニモ申シタル通リ華盛頓会議ニ於テモ当初ヨリ主張シタルモノニシテ断シテ日本政府ノ態度変更ニアラサルコト特ニ念頭ニ置カレ度シト述ヘタルニ長官ハ実ハ今般初メテ軍縮問題ヲ研究シタル関係上本日御話シタル事柄ニ付テハ多少調査洩レノ点モアルヘキニ付更ニ研究シ置クヘシト語レリ

我全権ハ関係各国ニシテ補助艦ニ関シ何等カノ協定ニ達シ得ルニ於テハ米国側ノ提議ヲ考慮スルニ吝ナラストノ意味合ヲ述ヘタリト記憶ス兎ニ角華盛頓会議ニ於テハ補助艦割当ニ関シ何等協定ヲ見ルニ至ラサリシ事周知ノ事実ナリ貴長官ハ英米ノ関スル限リ巡洋艦ニ関シ均勢ノ約束成立シ居リタルカ如ク語ラレタルモ自分ノ見ル所ヲ以テスレハ大体ノ諒解ハアリタルニモセヨ実際問題トシテハ所謂均勢ナルモノニ付適確ナル約束ナカリシコトハ華盛頓会議以後ニ於ケル英米ノ関係ニ徴シ歴然タルモノアルモノナルノミナラス現ニ昨夜大統領ハ公開ノ席上倫敦会議ノ前提トシテ英米間ニ「パリチイ」ノ成立シタルコトヲ高唱セラレタリ

(四)長官ハ日本ニ於テ当初ヨリ七割ヲ主張セラレ居ルコトハ御話ノ通トシテ七割主張ノ論拠ヲ承リ度シト論鋒ヲ転シタルニ付本使ヨリ右ニ付テハ屢々御話シタル通日本ハ島国タル国情食糧原料等ノ自給自足不可能ナルコト並世界各方面ニ通商商路ヲ有シ居ルコト其ノ他種々ナル事情ニ基クモノナルカ右ニ関シ進ムテ議論スルニ先立チ本使ヨリ淡白ニ長官ニ伺ヒ度キハ国情及天然資源ニ於テ著シキ相違アル米国カ英国ニ対シ何故ニ絶対的均勢ヲ主張セラルルヤ其ノ理由ヲ承リ得ヘキヤト反問シタル処長官ハ頗ル当惑シタル態度ヲ示シ米国カ英国ニ対シ均勢ヲ主張スルハ斯クスルニ非サレハ米国民ハ其ノ「セキユウリチー」ニ関シ不安ヲ感スルカ為ナリト逃ケタルニ付本使ヨリ日本ニ於テ七割ヲ主張スル根本的動機ハ取リモ直サス米国同様「セキユウリチー」ノ問題ニ帰着スルニ外ナラスト応酬シ置キタリ

(五)長官ハ今日米国ニ於テ大統領始メ熱心ニ希望シ居ルコトハ真実ニ海軍ヲ縮小セムコトニアリ其ノ点ニ付テハ終始日本ノ同情ヲ得幸ニ感シ居ル次第ナルカ日本カ軍縮会議ニ臨ムニ当リ七割ヲ主張セラルルニ於テハ大型巡洋艦ニ付却テ拡張ノ結果トナルニ非サルヤト述ヘタルニ付本使ヨリ日本ハ真実ニ軍縮ヲ希望シ居ル次第ニテ現ニ屢々自分ヨリ長官ニ対シ保有総噸数殊ニ大型巡洋艦ニ於テ切下ケヲ望ム旨申述ヘ置キタルカ若シ米国ニシテ此ノ上トモ英国ヲ説キ補助艦総噸数就中大型巡洋艦ノ数ヲ減少セシムルコトヲ得ラルルニ於テハ日本ハ同艦種ノ噸数ヲ増加スル必要ナキノミナラス英米側ノ真実ナル軍縮遂行ニ対シ飽迄協調スヘキコト申ス迄モナシ昨夜大統領ノ演説中米国ハ serious reduction ヲ希望スル旨言明セラレタルカ米国カ英国トノ間ニ大型巡洋艦ニ付二十一隻乃至十八隻ヲ議論シ居ラルルコトハ英国トノ均勢維持上相当理由アルヘシトハ思考スルモ観方ニ依リテハ拡張ヲ主張セラルルモノト認メラルヘク日本カ軍縮会議ヲ控ヘ乍ラ軍備ノ拡張ヲナスモノナリトノ御意見ハ甚タ当ラサルモノト認メラル要スルニ比率問題ト比率ニ達スル迄ノ建造ハ別問題ナリ日本ノ主張スル所ハ総体的勢力ニ於ケル七割ナルヲ以テ米国ニ於テ此ノ上トモ極力英国ヲ引摺リ軍縮ヲ断行セラルルニ於テハ日本ニ於テモ出来得ル限リ縮小ニ努ムルモノナルコトヲ篤ト諒解セラレタシト切言シ置キタリ

(六)最後ニ長官ヨリ先般来英米間ニ協議シタル事項ニ付テハ

大体随時貴大使ニ御話シ置キタルモ今後ノ会談ノ参考トシテ書付トシテ差上クル方然ルベシト思考シ本日ノ覚書中ニ列挙シ置キタル次第ナルカ潜水艦駆逐艦ノ問題ハ後日ノ会談ニ譲リ本日ハ特ニ主力艦ニ付御話シ貴国政府ノ考慮ヲ煩シ度シ実ハ英国側ニ於テハ主力艦艦型ノ縮小ニ依リ軍縮ノ目的ヲ達スル一端ト為シタキ意向ナルカ米国側ニ於テハ艦型ヲ小ナラシムル事ニハ絶対ニ反対ニシテ艦型ハ華府条約規定通トシ出来得ル限リ関係国ノ保有艦数ヲ減小シ度キ意向ナリト語レリ

(七)右会談ハ約一時間ニ亘リタルカ双方共ニ本日ハ当座ノ思付ニヨリ遠慮無ク所見ヲ述フベシトノ前提ノ下ニ行ハレタルモノニシテ可成リノ議論ヲモ戦ハシタル次第ナル処別ルルニ臨ミ長官ヨリ米国ノ当惑シ居ルハ日本ヨリ七割ナル抜差シナラス比率ヲ提議セラレ而モ大型巡洋艦ニ対シ米国ノ保有量ニ対スル七割ヲ主張セラルル点ニ在リ米国側ニテハ若シ日本カ比率問題ヲ前提トセス何々艦ハ之ヲ保有シ度シトカ何々艦種ハ是非共何隻ヲ必要トスルトカ実際問題ニ付申出テラルルニ於テハ充分考慮ヲ加フル覚悟ナルニ付他ノ点特ニ含置カレ度シ尚本日ノ覚書ノ性質ニ付テハ会談ノ始ニ特ニ申上ケタル通ナリ又米国政府ハ日本ノ協調的態度ヲ深ク感謝シ居リ今回ノ会議ニ付テハ飽迄日本ト協調シタキ精神ヲ有スルコトハ充分諒解セラレタシト繰返シ説明シ尚自分ハ明日ヨリ数日間ノ休暇ヲ得タルニ付次回ノ会談ハ来週始ト致度シト述ヘタリ

本電別電ト共ニ英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

(別　電)

No. 420

Aide-mémoire

You have asked me for an expression of my policy as to the proposed ratio for Japan in the several classes to be dealt with at the London Conference, and you have suggested that Japan desires ratio not of 5-3 but 10-7 in the cruiser class particularly as to the type armed with 8- inch guns.

You will realize that one of the great difficulties of the Conference will come in the desires of France and Italy to keep same ratios with each other and it may well be said(?) that the word "ratio" will be an unfortunate word in the London Conference. It may be possible that the eventual settlement will be made as a result of actual conditions in ships rather than ratios.

I have not reached final opinions on Conference matters and hope to go to the Conference with no fixed positions on the topics that are to come up. I look forward to the personal meetings with your representatives to get a knowledge of your particular problems and wishes, and recall the effective support for reduction which the Japanese delegation afforded our delegation both at Geneva and Washington. In that light you will understand my answer. You will understand also I am speaking what is in my mind with great frankness and not guardedly as if I were stating final positions.

I do not believe that a change in the attitude of the Japanese Government on its ratio in the cruiser class increasing it to 10-7 is likely to be conducive to the success of the Conference. I desire to state quite frankly and at some length my reasons for my belief.

The Washington Conference was an attempt to limit naval armament in order to remove the incentive of one nation to build against another. The formula which was proposed by that Conference to end the competition was that Great Britain and the United States should agree that their fleets should be equal, the theory being that inasmuch as future building could not change that equality, the incentive to build would be gone. The formula between Japan and the United States was that a ratio of 5-3 would result in satisfactory naval strength in Japanese waters. If you will refer to the record of the Conference you will find that the original formula proposed by this Government covered not only capital ships and aircraft carriers but also all auxiliary combatant craft, and specifically covered cruisers, destroyers, and

submarines. This proposition was accepted on behalf of Japan by Baron Kato.

He said: "Gladly accepting therefore the proposal in principle Japan is ready to proceed with determination to a sweeping reduction in her naval armament."

And again he said: "Japan has never claimed nor had any intention of claiming to have a naval establishment equal to that of either the United States or the British Empire. Her existing plan will show conclusively that she had never in view preparation for offensive war."

Later the position of Japan was greatly solidified by Article 19 of the Treaty under which Japan, Great Britain and the United States undertook to maintain the status quo to military stations in Pacific waters within a large radius from Japan. The point I am emphasizing at the moment is that the net result gave Japan a naval position in the East which more than adequately protected her interests without any increase in the 5-5-3 formula. Under these circumstances it would seem that to increase Japan's ratio to 10-10-7, would in view of these restrictions on American and British defenses in Eastern Waters, tend to increase her strength beyond that which is necessary for defensive purposes.

Therefore I had considered that I should accept the statements made on behalf of Japan at the Washington Conference, in view of the circumstances attending their utterance, as a considered and final statement of naval policy largely dependent on the agreement as to bases, in the same way that the agreement as to bases is dependent on it.

After the Washington Conference, it is true, there was substantial building in the cruiser and submarine classes by various nations, and the race for armament seemed again to be forcing a needless and dangerous financial burden on the nations.

To attempt to deal with that situation the Geneva Conference was called, and if you will refer to the invitations to that Conference you will remember that it was called in an attempt to carry on the principles laid down at Washington.

The Geneva Conference failed largely because of difficulties between Great Britain and the United States, and in that Conference Japan always took the position that she desired to limit the tonnage in each class, and to put that limit down as low as other nations would agree. At that time Great Britain desired a large number of cruisers; the United States was not willing to accede.

Recently we have entered into the communications which you know about with Great Britain. In those communications and in our conferences with Mr. MacDonald we have not discussed the Japanese ratio or the Japanese position, feeling that it would not help to discuss such questions when the representatives of Japan were not present, therefore what I am now saying to you is in no wise a statement of the British position, nor am I informed whether or not the British agree with what I am saying.

The general range of our discussions with the British has been as follows:

We considered the submarine category together and found that both of us would be willing to abandon the submarine entirely. We felt doubt as to whether either Japan or France and Italy would so agree. We felt that, if submarines were not to be abolished we were willing to limit the building of them, and we expected that Japan would probably have the same idea as to submarines although we knew that Japan had, built and building, a very substantial submarine tonnage, probably above any ratio of 5-5-3.

When we came to discuss the destroyer class we found that the United States was at the moment possessed of a large number of destroyers built for

the purpose of the last war. We have discussed this class with Great Britain and feel that we should be glad to put the limit of this destroyer class as low as practicable, and we talked of a limitation, between 150,000 and 200,000 tons.

In respect to capital ships, the United States' suggestion was that there should be no replacements or a minimum of replacements other than those necessary to work out in 1936 the 5-5-3 ratio. That, as pointed out, would mean a large saving in money. Great Britain did not take any final position as to capital ship replacements but suggested that, all nations should make some replacements in a smaller type of battleship perhaps 25,000 tons. We are not inclined to accord with this last suggestion as it is out of accord with our historic naval views. We have promise Great Britain to consider it and feel that it is a matter which could safely be left to the London Conference.

When we came to more difficult cruiser class our effort was to persuade Great Britain to be satisfied with what we regarded as small number of units and lower tonnage than they asked at Geneva. They finally made suggestion that they would be satisfied with about 50 units with tonnage of about 340,000 tons in 1936 (this is about their present strength), with replacement program of, say, two cruisers a year until 1936, making a total of 14 replacements. That would make the 1936 cruiser status fifteen 8-inch gun cruisers, a total of 146,000 tons, and about 192,000 tons smaller 6- inch cruisers, many of which would be old. Suggestions were mede between us of some method of providing a common yardstick for measurement which would make due allowance for greater age and inferior gun calibre of the British fleet as compared with American cruiser fleet which, Great Britain suggested should consist of 10 of our Omaha class (7,000 ton 6- inch); 18 of 10,000 8-

inch class and a further number of smaller 6-inch gun cruisers to accomplish parity with Great Britain under such terms as we might agree on as constituting total cruiser equality. United States naval advisers on the other hand felt that the United States should have at least 21 of the 10,000 ton 8-inch gun type to make up for the disparity in displacing tonnage. When we reached this point we thought we were near enough agreement with Britain to leave the matter safely to the conference, and in that situation the matter has been left.

（右訳文）

比率問題ニ関スル米国務長官覚書（仮訳）

（昭和四年十一月十二日「スチムソン」長官出淵大使ニ手交）

貴官ハ倫敦会議ニ於テ取扱ハルヘキ数艦種ニ関スル日本ノ要求比率ニ付予ノ政策ヲ表明セントコトヲ求メラレ且日本ハ巡洋艦殊ニ八吋砲装備ノ艦船ニ付五―三ノ比率ニ非スシテ一〇―七ノ比率ヲ希望スル旨ヲ申述ヘラレタリ

貴官モ御察知ノ通今次会議ノ最大難関ハ一ハ仏伊両国カ其ノ相互ノ間ニ於テ同一比率ヲ保持セントト希望スルコトニ存スヘク従テ倫敦会議ニ於テハ「比率」ナル文字ハ甚タ面白カラサル文字ト云フコトヲ得ヘシ或ハ比率ニ依ラスシテ寧ロ艦船ノ現実状態ノ結果トシテ究局的解決ヲ遂クルコト可能ナルヤモ知レス予ハ未タ会議ノ事項ニ関シ最終的意見ニ接シ居ラス且会議ニ上ルコトアルヘキ問題ニ付何等確定セル見解ヲ持セスシテ会議ニ臨マントト欲スル予ハ貴国ノ特殊問題並欲求ヲ知ラシカ為貴国代表諸氏ト親シク会合セントコトヲ鶴首スル又予ハ寿府及華府ニ於テ日本代表カ米国代表ニ与ヘラレタル縮少ニ対スル有効ナル支持ヲ回想ス此ノ意味ニ於テ貴官ハ予ノ回答ヲ良解セラルヘシ貴官ハ又予カ予ノ胸中ニ蔵スルモノヲ極メテ率直ニ陳述シツツアルモノニシテ恰カモ最終的意見ヲ述ヘントスルカノ如キ慎重ナル言葉使ヒヲナスモノニ非サルコトヲ了解セラルヘシ

予ハ日本政府カ其ノ比率ニ関スル態度ヲ変更セラレ巡洋艦種ニ於テ一〇―七ニ増率セラレタルコトハ恐ラク会議ノ成功ニ発スル所ナカルヘシト信ス予ハ率直ニ且稍詳細ニ右予ノ所信ノ理由ヲ陳述セントト欲ス

華府会議ハ或ル一国ヲシテ他国ニ対シテ建造ヲ為サシムヘキ誘因ヲ除去センカ為海軍軍備ヲ制限セントスル試図ナリキ競争阻止ノ目的ヲ以テ同会議ニ依リテ提議セラレタル方式ハ英国及米国ハ其ノ艦隊ヲ均勢タラシムルコトニ同意スヘキコトニアリ即チ将来ノ建造ハ右均勢ヲ変更スルコト能ハサルカ故ニ建造ノ誘因ハ除去セラルヘシト云フニアリ日本ト米国トノ間ノ方式ハ五ー三ノ比率ハ日本近海ニ於テ充分ナル海軍力ヲ日本ニ与フヘシト為スニアリ若シ貴官ニシテ同会議ノ記録ヲ参照セラルルニ於テハ貴官ハ米国政府ノ原提案ハ主力艦及航空母艦ノミナラス一切ノ補助艦艇ヲモ包含シ特ニ巡洋艦、駆逐艦及潜水艦ヲ包含セシコトヲ見出サルヘシ右提議ハ加藤男爵カ日本ヲ代表シテ受諾セラレタル所ナリ

加藤男爵ハ『故ニ日本ハ右提案ヲ主義上受諾シ日本海軍軍備ノ大々的削減ニ着手スルノ用意アリ』ト述ヘラレタリ

同男爵ハ更ニ『日本ハ未タ曾テ英国又ハ米国ノ海軍ト均勢ノ海軍ヲ有センコトヲ主張シタルコトナク又之ヲ主張セントスルノ意思ヲ有シタルコトナシ日本ノ既定計画ハ日本カ未タ曾テ攻撃戦争ノ準備ヲ企画シタルコトナキヲ明確ニ立証スヘシ』ト述ヘラレタリ

其ノ後日本ノ地位ハ華府条約第十九条ニ依リテ大ニ確保セラレタリ即チ同条ニ依リ日本、英国及米国ハ太平洋上日本ヲ中心トシテ長距離ノ行動範囲内ニ在ル要塞及海軍根拠地ノ現状維持ヲ約定セリ予ノ茲ニ力説セントスル点ハ此ノ結果ハ極東ニ於テ五ー五ー三ノ比率ヲ増加セストモ其ノ利益ヲ充分保護シ得ヘキ以上ノ海軍力ヲ日本ニ与ヘタルモノナルコトニアリ右ノ事情ヨリ考フレハ日本ノ比率ヲ一〇ー一〇ー七ニ増加スルコトハ東部海洋ニ於ケル此等英米防備ノ制限ニ鑑ミ日本ノ勢力ヲ防禦ノ目的ニ必要ナル以上ニ増加スルノ嫌アルヘシ

故ニ予ハ華府会議ニ於テ日本ヲ代表シテ為サレタル陳述ハ右陳述ノ為サレタル当時ノ事情ニ鑑ミ根拠地ニ関スル協定カ海軍政策ニ依拠スルト同様ニ海軍政策カ主トシテ根拠地ニ関スル協定ニ依拠スルコトヲ熟考ノ上最終的ニ陳述セラレタルモノナリト解スルモノナリ

華府会議後各国ニ依リテ巡洋艦及潜水艦ノ多大ノ建造行ハレ軍備競争ハ再ヒ各国民ニ危険ナル財政的負担ヲ強フルノ観ヲ呈セリ此ノ事態ニ処センカ為寿府会議召集セラレタル

カ若シ貴官ニシテ同会議招請状ヲ参照セラルルニ於テハ貴官ハ右会議ハ華府ニ於テ規定セラレタル原則ヲ続行スルノ目的ヲ以テ召集セラレタルコトヲ記憶セラルヘシ

寿府会議ハ主トシテ英米間ノ難局ニ依リテ失敗セリ同会議ニ於テ日本ハ常ニ各艦種ノ噸数ヲ制限シ他ノ諸国カ合意シ得ヘキ最低限度迄右制限ヲ低下センコトヲ欲スル旨主張セリ其際英国ハ巡洋艦ノ多数ヲ要求シ米国ハ之ニ同意スルノ意ナカリキ

最近吾人ハ貴官御了知ノ如ク英国ト交渉ニ入レリ右交渉並「マクドナルド」氏トノ会談ニ於テ吾人ハ日本ノ比率又ハ日本ノ地位ヲ討議セルコトナシ蓋シ吾人ハ日本ノ代表者ノ列席セサル際右ノ如キ問題ノ討議ヲナスモ益ナシト信シタレハナリ故ニ今予ノ貴官ニ述ヘントスル所ハ決シテ英国ノ立場ニ非ス又予ハ英国カ予ノ言ハントスル所ニ果シテ同意スルヤ否ヤヲ知ラサルナリ

吾人ノ英国トノ討議ノ一般的範囲ハ次ノ如シ

吾人ハ潜水艦種ニ考慮ヲ加ヘ双方共潜水艦ノ全廃ヲナスノ用意ヲ有スルコトヲ明カニシタルカ日本又ハ仏伊カ右ニ同意スルヤニ付疑ヲ感セリ又若シ潜水艦ニシテ全廃セラレストセハ吾人ハ其ノ建造ヲ制限スルノ意図ヲ有スルコトヲ明カニシ尚日本カ既成及建造中ノモノヲ合シ五ー五ー三ノ比率ヨリ恐ラク遙ニ大ナル潜水艦ヲ有スルコトヲ承知セルモ右制限ニ付テハ日本モ同様ノ意向ヲ有セサルヘシト期待シタリ

駆逐艦種ノ討議ニ当リ吾人ハ米国カ世界大戦ノ目的ノ為建造セラレタル多数ノ駆逐艦ヲ有スルコトヲ注意セリ吾人ハ英国ト本艦種ヲ討議シ駆逐艦種ヲ実際上出来得ル限リ制限スヘク十五万噸乃至二十万噸ノ間ニ於テ右制限ニ関シ意見ヲ交換セリ

主力艦ニ関シ米国ハ一九三六年ニ於テ五ー五ー三ノ比率トナスニ必要ナル代換以外ニハ何等代換ヲ行ハサルカ又ハ最小限ノ代換ヲ行フニ止ムヘキコトヲ提議シ右ハ多大ノ節約ヲ意味スヘキヲ指摘セリ英国ハ主力艦代換ニ関シ何等最終的主張ヲナササリシカ各国民ハ二万五千噸程度ノ小型戦闘艦ニ依リ若干ノ代換ヲナスヘシト提議セリ吾人ハ右最後ノ提議ハ吾人ノ海軍ニ関スル歴史的見解ト合致セサルヲ以テ之ニ同意スルノ意ナシ吾人ハ英国ニ右ヲ考慮スヘキコトヲ約シタルモ右ハ倫敦会議迄未解決ノ儘残サルルモ差支ナキ

問題ナリト思惟ス一層困難ナル巡洋艦問題ノ討議ニ当リテハ吾人ハ英国ヲ説服シ英国カ寿府ニ於テ要求セル隻数及噸数ヨリ少ク且低キモノト吾人ノ考フル点ニテ英国ヲ満足セシメント努力セリ英国ハ遂ニ一九三六年迄ニ毎年二隻宛総計十四隻ノ代換ヲナス計画ニテ同年ニ於テ約三十四万噸五十隻（是レ殆ント英国ノ現在勢力ナリ）ノ勢力ヲ以テ満足スヘキコトヲ提議セリ右ハ英国ノ一九三六年ニ於ケル勢力ヲ八吋砲巡洋艦十五隻総噸数十四万六千噸及小型六吋砲巡洋艦十九万二千噸（右ノ中多数ハ老齢艦ナリ）トナスモノナリ英国艦隊ヲ米国巡洋艦艦隊ニ比較シ英国側ニ老齢艦多ク又劣勢ノ大砲ヲ有スル艦船多キヲ以テ之カ調節ヲ計ル為共通ノ尺度ヲ作成スル方法ヲ講スヘシトノ提議アリタリ右米国艦隊ハ英国側ノ提議ニヨレハ「オマハ」級（七千噸六吋）十隻、一万噸八吋級十八隻及小型六吋砲巡洋艦数隻ニシテ右ハ英米ノ巡洋艦勢力ヲ同等ナラシムルモノトシテ吾人カ合意シ得ヘキ条件ノ下ニ英国トノ均勢ヲ成就スルモノナリ然レトモ一方ニ於テ米国海軍顧問ハ米国ハ噸数ニ於ケル不平等ヲ調節スル為少クトモ二十一隻ノ一万噸八吋砲巡洋艦ヲ有セサルヘカラスト信ス此ノ点ニ達シタル時吾人ハ英国トノ間ニ於テハ最早ヤ協定ニ近ツキタルモノニシテ右ノ点ヲ会議迄未決トスルモ安全ナリト信シ且右事情ノ下ニ同問題ヲ未決ノ儘残シタリ

（付　記）

覚　　昭和四年十一月十五日　省副官

別紙案ヲ供覧セル処大臣ヨリ左ノ申付ケアリタリ

一、米覚書電文ヲ見ルニ日本ノ主張ニ対シテハ頗ル重大ニ考ヘ慎重ニ取扱ヒツツアルカ如シ我方ニ於テモ慎重ニ考慮シテ取扱フヲ可トスヘシ

二、別紙回電案ハ米覚書内容各条ニ対スル所見トシテ異存ナシ但シ左ノ意味ノコトヲ付ケ加ヘテ外務省ニ申入ルル様取計フコト

(イ)比率ナル言葉ヲ避ケ話ヲ進ムルコトニ強テ不同意ト云フ訳ニハアラサルモ各国保有量ハ相対ノ考ヲ離レテ定ムルヲ得サルモノナルヲ以テ此ノ考ヲ捨ツルヲ得サルコト勿論ニシテ亦我補助艦総括的七割ハ決シテ之ヲ捨ツルモノニアラス、此ノ観念ヲ持チツツ同時ニ具体的数量ノ問題ニ入ルコトニハ異存ナキコト

(ロ)右ト関連シ英米協定案ニ依ル英米保有量ヲ大体ノ基準

トスル場合日本ノ保有量ニ対スル米国ノ率直ナル考ヲ質問スルコトモ一策ナルヘシ

(ハ)同時ニ稍機微ニ亘ルモ仏、伊ノ保有量ニ対シテモ日本ハ全然無関心ト云フ訳ニハ行カサルヲ以テ仏、伊ニ対スル先方ノ考モ機会ヲ捕ヘテ聞キ置クノ必要アルヘシ

出淵大使ヘ返電起案資料（四、一一、一五）

一、貴方ニ於テハ比率ナル言葉ヲ避ケタキ意向ナルカ如ク察セラルル所最後ノ決定ハ貴方ノ云ハルル如ク各艦ノ実状ヲ按配スルコトニ何等異存ナキモ、夫ニ達スル迄ノ標準トシテハ予メ比率ニ依ルヲ必要且便宜トスルモノニシテ英米両国カ保有量ノ実数関係ニ到達スルニ先チ「パリティー」ナル主義ヲ認メタルハ之ト同一ノ趣旨ニ出テタルモノト思考ス

二、華府会議ニ於テ加藤全権ハ Gladly accepting, therefore, the proposal in principle, Japan is ready to proceed with determination to a sweeping reduction in her naval armament

ト述ヘタルモ、同時ニ左記ノ条件ヲ付シタル次第ナリ

即チ It will be universally admitted that a nation must be provided with such armaments as are essential to its security. This requirement must be fully weighed in the examination of the plan. With this requirement in view, a few modifications will be proposed with regard to the tonnage basis for replacement of the various classes of vessels. 尚同会議ニ於テ帝国ハ繰返シ七割ヲ主張シ又寿府会議ニ於テモ同様ノ主張ヲナセシハ周知ノ事実ニシテ今日ニ至ルマテ何等其ノ態度ヲ変更シタルコトナシ

三、華府会議ニ於テハ補助艦ニ於テモ六割比率受諾ノ意アリタルコトヲ指摘シテ、今日ノ七割主張ヲ排斥セントスルコトモアルヘキヤニ想像セラルル所同会議ニ於テ不成立ニ終リタル事項ニ関スル会話等ヲ引用スルコトハ全ク謂ハレナキモノニシテ華府会議以後華府条約ニヨリ補助艦ハ何等ノ拘束ヲ受ケスシテ今日ニ及ヘリ且其ノ艦型及武装等ニ於テモ革新的発達ヲナセル事実ニ鑑ミ全ク新ナル事態トシテ之ヲ考察スルヲ至当ト認ム

四、帝国カ補助艦ニ於テ最大海軍国ノ七割ヲ保有セントスルハ、一ニ国家ノ自衛ノ見地ニ立チ国防ヲ全フスル最小

限度ナリト信スル所ニシテ此ノ七割維持ヲ目標トシ逐次補助艦ヲ整備シ今日ニ及ヘリ而テ此ノ最小限度ヲ下ルトキハ国民ハ絶ヘス不安ヲ感スルニ至ルヘシ斯ノ如キ守勢的軍備カ何等他国ヲ脅威スルモノニアラサルコトハ明白ニシテ即チ相互ニ相侵サス且脅カサレザルハ国民ノ不安ヲ一掃シ平和保持ノ目的ヲ達成スル基調ナリ

五、帝国カ軍備制限ニ止マラス縮小ニ進ムヘシトスルハ屢次声明セル所ナリ然ルニ這次提示セラレタル英米間談合ノ結果ニヨル英米ノ保有量ハ米大統領声明ノ主旨ニモ反シ稍大ニ過クト思考セラルルモノニシテ若シ斯ノ如クナラハ帝国トシテハ若干ノ造艦ヲ余儀ナクセラルルニ至ルヘシ

六、主力艦ニ関シテハ艦型ノ縮少艦齢延長ニヨリ軍縮ノ目的ヲ実現スルヲ最モ妥当ナリト認ム

七、英米両国ハ潜水艦廃止ニ同意ナル旨ノ所元来潜水艦ハ劣勢海軍国カ守勢的ニ国防ヲ完フスルニ極メテ重要ナルハ言ヲ俟タス、帝国ハ潜水艦ノ廃止ニ同意シ難ク又地理的環境ニ基キ比率ニ関係ナク一定量ヲ保有スルヲ絶対必要トスル所ナリ

206　昭和4年11月(14)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

大統領の演説中の軍備縮小及び海洋自由問題に関する提案に対する各紙の論評について

ワシントン　本　省　11月14日後着

第四二二号

往電第四一五号大統領ノ演説ニ関シ各新聞ハ十二日及十三日ニ亘リ論評ヲ掲ケタルカ其ノ大部分ハ米国ハ他国ニ比例シテ海軍ヲ縮小スヘク如何ニ切下ケ行ハルルモ米国トシテハ低キニ過クトハ為サストノ演説中ノ一項ヲ特ニ掲記シ右ハ米国人ノ一斉ニ支持スル所ナリトノ趣旨ヲ述ヘ紐育「タイムス」ハ右ハ大統領ノ誓約ナルト同時ニ他面他ノ諸国ニ対スル挑戦的言葉ト解スヘシト述ヘタリ又海洋自由問題ニ関スル大統領ノ提案ニ関シ多数新聞ハ各種ノ議論生スルコトハ当然ナルモ此ノ種ノ議論アルカ故ニ同提案ノ意義重大ナラストハ言ヘス大統領ハ本問題解決方法考慮ノ出発点ヲ示シタルモノニシテ将来ニ亘リ充分考慮ノ価値アルヘシト述ヘ居レル外紐育「ワールド」ハ本提案ハ連盟規約第十六条ヲ修正シ従テ連盟ノ制裁ヲ弱ムルコトトナルヘシトノ反対論アルヘキモ先ツ考慮ヲ要スルコトハ規約第十六条ハ米国ノ援助ナクシテハ実施不可能ナルコト是ナリト論セリ尚本案ニ関シ上院方面ニ於テハ大体ニ於テ其ノ実現如何ハ別トシ趣旨ニ於テハ賛成シ居ル旨伝ヘラル

本演説ニ対シテハ右ノ外当局ノ平和論者ハ反動的傾向ヲ有スル向等モ夫々ノ見地ヨリ賛意ヲ表シ居リテ当国各方面ヨリ称賛ヲ博シ居レリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ郵送セシム

207　昭和4年11月(15)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

国際連盟事務総長ドラモンドの地中海保障条約提議などに関する報道について

ロンドン　本　省　11月15日後着

第四二一号

十三日「ヘラルド」（労働党機関紙）寿府通信ハ目下帰英ノ途ニアル連盟事務総長「ドラモンド」ハ英外相ニ対シ地中海保障条約(Mediterranean Locarno)ニ関スル提議ヲナスヘク右ハ「ロカルノ」条約ノ如ク英国カ仏伊両国ニ対シ其ノ一方ヨリ攻撃ヲ受クル場合被攻撃国ヲ援助スヘキヲ約セントスルモノニシテ其ノ結果ハ仏伊両国間ニ「パリテイ」ヲ受諾セシメ従テ五国会議ノ協定達成ヲ促進セシメ得ヘシトノ趣旨ヲ掲ケ次テ十四日同紙巴里通信ハ海軍軍縮ニ関スル仏伊間ノ目下ノ難関ハ仏カ一般的「パリテイ」ニ非スシテ地中海ニ於ケル伊国トノ均等ヲ主張スルニアル処右英国ノ被侵略国援助保障提議ハ右部分的「パリテイ」ニ対スル仏国側ノ主張ヲ緩和スルニ力アリト報ス

十四日「ポスト」（保守党系）ハ本件報道ニ対スル寿府羅馬巴里ニ於ケル反響ヲ掲載シ本件ハ輿論ニ探リヲ入レンカ為仏国筋ヨリ出タルモノナルヘキ処相互保障条約ノ如キハ「ドラモンド」ノ職権外ニシテ労働党政府カ両羅典国間ノ紛争ノ渦中ニ投セントスルカ如キ条約ノ締結ヲ考慮スルハ驚クヘシト論ス

米仏ニ転電セリ

208　昭和4年11月15日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

日英間非公式交渉の内容漏洩防止に対する配慮方禀請について

ロンドン　11月15日後発

第四二三号　　本省　11月16日前着

本十五日「タイムス」「テレグラフ」其ノ他ノ新聞ニハ東京電報トシテ「マ」首相及本使ノ会見ニ於テ「マ」ハ我方主張ノ二点トモ拒絶セル旨及之ニ対シ海軍大臣ハ七割ヲ一歩モ譲ル能ハサル旨ノ方針ヲ掲ケ一般ノ注意ヲ喚起シ居レリ非公式交渉ノ内容ハ英米ノ場合ニ於テ何等漏洩セス為ニ率直自由ニ論議スル上ニ極メテ便宜ヲ感シ居リタル様子ナル処未タ「マ」首相ニ於テモ決定的回答ヲ為シタル次第ニモ非サルニ拘ラス右ノ如ク我方ニ於テ内容発表又ハ漏洩スルニ於テハ先方ニ対スル徳義上ノ責任ニモ背キ今後非公式交渉ニ鮮カラサル不便ヲ感スヘク殊ニ当地輿論ニ不必要ノ刺激ヲ与ヘ結局我方ノ立場ヲ不利ニ導ク惧アルヤニ思考ス右当方ヨリ見タル懸念ヲ忌憚ナク申上ケ切ニ御考慮ヲ仰キ度シ

209　昭和4年11月15日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議開会期日に関する外務省アメリカ局長の談話について

ロンドン　11月15日後発
本　省　11月16日後着

第四二九号

海軍会議開催期日ニ関シ英国政府ハ一月二十一日ト予定シ居ルモ国際連盟理事会期日ト搗合フ為之ヲ一月二十七日ニ繰下方連盟事務総長「ドラモンド」ヨリ英国政府ニ交渉中ナル趣新聞紙上ニ報道セラレ居ルヲ以テ十一月十五日若杉ヲシテ外務省亜米利加局長ニ問合セシメタル処同局長ノ語ル処ニ依レハ右ハ事実ニシテ英政府ハ一月二十一日ヲ以テ会期開催日ト定メ関係国政府ノ同意ヲ求メ中ナルカ連盟側ニ於テハ予定ノ理事会期日ヲ大国ノ都合ニ依リ変更スルハ小国理事国ノ感情ヲ害スルニ付本件海軍会議開催日ヲ二十七日ニ繰下ケシムル様「ドラモンド」ヨリ申入アリ目下交渉中ナルカ政府ハ今回ノ理事会ハ左シテ重要事項ナキ故双方期日衝突スルモ差支ナキ意向ニテ予定ノ通一月二十一日開会ヲ主張シ居ルモ米国以外ノ関係国ヨリハ未タ同意ノ回答来ラス確定セサルカ確定次第更ニ通知スル趣ナリ

尚若杉ハ往電第四二一号地中海協定ニ関シ同局長ニ聞合セタル処同局長ハ右ハ全然新聞記者ノ想像説ニシテ之ニ関シ何等「ドラモンド」ヨリ申出テタルコトナク本問題ノ如キハ余リニ重大問題ニテ只今ノ処英国政府ハ何等斯ノ如キ協定ヲ考慮スルノ意思ナク仏伊間ノ関係ハ斯ノ如キ協定ニ依ラスシテ今少シク簡単ナル方法ニ依リ調整シタキ考ナリト語レル趣ナリ

米ヘ転電シ、仏伊ヘ暗送セリ

210　昭和4年11月15日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

米国大統領の演説中の海洋自由問題に関する提案への各紙の論評について

ローマ　11月15日後発
本　省　11月16日後着

第九四号

米大統領ノ十一日ノ演説中海洋自由ニ関スル部分ハ当国ノ輿論ヲ刺戟シ今日迄論評ヲ試ミタルモノ少カラサルカ其ノ多クハ「フーバー」提案ハ戦時ニ於ケル通商擁護兵力ノ減少ヲ齎ス効果アルヘク曩ノ「ムソリニ」声明即チ他ノ欧州大陸海軍国ニシテ誠意ヲ以テ海軍ノ縮少ヲ行フ限リ如何ナル低率ニテモ受諾スヘシトスル伊国ノ立場ト合致スルモノニシテ仏国其ノ他ノ輿論カ之ニ反対スル謂レナシトスルニ一致スル処「メツサヂエロ」「トリブーナ」各々十五日「テヴエレ」（十五日）ハ不戦条約成立ノ同日「フーバー」ノ提案ハ左程必要トモ思ハレス万一採用ヲ見ルニ至ラムカ従来仏国トノ「パリテイ」維持ヲ戦時食糧供給確保ニ置キタル伊国ノ主張ハ根拠ヲ失フニ反シテ仏国ノ「アフリカ」植民地トノ連絡維持ノ論拠ハ何等影響ヲ蒙ムルコトナカルヘシト指摘セリ

米ニ転電シ英仏ニ郵送セリ

211　昭和4年11月18日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

日英米間の巡洋艦隻数による均衡論をマクドナルド首相より提案について

ロンドン　11月18日後発
本　省　11月19日後着

第四三六号（極秘）

十一月十八日「マ」首相ニ面会先ツ本使ハ過日御話セシ件ニ付テ考究セラレタリヤト尋ネタル処「マ」ハ篤ト考究セリ諸般ノ状況ニ鑑ミ此ノ際七割比率ヲ「プレス」セラルルモ英国政府ハ之ニ対シ会議ノ前ニ於テ回答スルコト困難トスルニ付寧ロ之ヲ見合サレンコトヲ希望ス若シ強テ之ヲ主

張セラルレハ日本カ一面ニ於テ英米協定率ヲ成ル可ク低下スヘキコトヲ唱ヘ乍ラ他面ニ於テ比率ヲ増加セントスルハ如何ニモ矛盾スル如ク見エサルニ非スト述ヘタルニ付本使ハ前段ニ対シテハ往電第四三三号「ドウズ」ニ述ヘタルト同様ノ説明ヲナシ後段ニ対シテハ何等矛盾セス即チ日本ハ何レノ国トモ同シク国防ノ安全ヲ図ルコトヲ第一要義トシ而シテ日本政府ノ見解トシテハ最大海軍勢力ノ七割ヲ以テ国防ノ保障ト信シ居リ此ノ範囲ノ下ニ於テ出来得ル丈英米及自国ノ保有量ヲ低下シ以テ軍縮ノ本義ヲ達セントスル次第ナレ共若シ最大勢力ヲ高キ程度ニ決スルニ於テハ国防第一要義トシテ已ムヲ得ス増艦ヲナササルヘカラス此ノ間ニ何等矛盾ナシト説明セル処首相ハ之ヲ諒シ更ニ極メテ打解ケタル態度ニテ全ク友誼的且非公式ノ話トシテ政府ヲ拘束セス且又提議ト云フ深キ意味ニテモナキカ英国三十三万九千噸米国三十一万五千噸ノ数ニ対シ日本カ何程ノ数ヲ要求セラルルカヲ申出サレ研究スルコトモ一策ナリ大巡英十五隻、米十八隻、日本十二隻ト言フコトトナサハ如何ナルヘキヤ右日本ノ中ニハ古鷹級モアルヘク又英国ノ中ニハ「ヨーク」級モアリ若シ日本カ之ニ同意セラルルナラハ自分ハ握手スヘシ勿論他国トノ関係モアリ又会議ノ際総テ決定スヘキモノ故何等「コンミツト」スルコト出来サルモ右ノ数ナレハ日英米間ニ均衡「エクリブリアム」ヲ維持スルコトヲ得ヘシト述ヘタルニ付本使ハ右英国十五隻ノ中「ヨーク」級代換ノ際ハ一万噸ニ代ヘラルル趣旨ナリヤト尋ネタル処艦齢ノ達スル迄ハ其ノ儘ト為スモ其ノ際一万噸ト為スヤ否ヤ未定ナリト言ヒタルニ付本使ハ隻数ニ於テハ一見均衡ヲ取リ得ルモノノ如キモ噸数ニ於テハ米ノ約六割ニ付此ノ点ハ日本政府ノ同意ヲ得ルコト困難ト思ハルト述ヘタル処「マ」ハ一般ノ人ハ隻数ニ重キヲ置クニ付英十五隻、日十二隻ト言ヘハ納得シ得ヘキモ噸数ヲ基礎トシ若シ更ニ日本側ニ於テ二隻ヲ増シ十四隻トナラハ英国人ハ断シテ納得スル能ハスト述ヘタリ本使ハ隻数ヲ本トシ十二隻ト為シ之ヲ全部一万噸ト為スカ或ハ代換ノ際一万噸級ニ為サハ米七割ニ近キモノナルヘク又斯ノ如キハ「マ」ノ隻数ニ重キヲ置ク点ヨリ見テ協定不可能ニ非スト思ハレタルモ帝国政府ノ最後ノ御意図ヲ承知セサルニ付深入スルコトヲ避ケ一応右ノ次第ヲ政府ニ報告シ其ノ回答ヲ待ツテ御話シスヘシト述ヘ置キタリ更ニ本使ハ貴電第二八三号ノ御趣意即チ日本側ニ

於ケル七割要求ニ対シテハ英国自治領方面ニ異存アル次第ナリヤト尋ネタル処首相ハ今日迄ハ何等斯ノ如キコトヲ聞キタルコトナシト述ヘタルニ付本使ハ斯ノ如キコトナカリシヲ喜フモ過般新聞等ニ此ニ類スルコトヲ見タルコトモアルニ付万一斯ノ如キコトアラハ日本政府ハ何等カ誤解ヲ一掃スルノ方法ヲ講スルコトヲ躊躇セサル旨貴電御訓示ノ次第ヲ述ヘタル処自分ハ勿論其ノ方面ヲ注意シ居ルモ未タ議会等ニ於テモ亦自治領政府等ヨリモ何等質問又ハ申出ノ次第ナキ旨ヲ述ヘ何等興味モ必要モ認メサル様見受ケタリ

「ド」及「マ」ノ話ニ依リ大体英米ノ連絡及我方ニ対スル両国目下ノ態度ヲ察知セラルル処右ニ対シ至急回答振御回電ヲ請フ

尚「マ」ハ最近英米間ニ商議ノ発展アリタリト言ヒ又「ド」ノ話ニ依リ綜合シ今朝ノ両氏会見ニ依リ英国側従来ノ主張噸数ニ対シ米大十八隻小十八隻トナルモノト思ハル詳報ハ更ニ確カメノ上申進スヘシ

英米大使ヘ転電シ仏、伊ヘ暗送セリ

212　昭和4年11月(19)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題への米国政府の態度に関するドーズ大使の内話について

ロンドン　本省　11月19日後着

第四三三号（極秘）

「ドウズ」大使帰任セルヲ以テ十一月十八日会見過日「マ」首相ト会見セル趣ヲ話シ我要求ニ対スル米国政府部内ノ空気ヲ尋ネタル処「ド」ハ華府ニ於テ「ネービー、ボード」ヨリ種々専門的見地ヨリ面倒ノ事ヲ持出シ世論ヲ刺戟スル如キ状態アリ実ハ全ク自分一己ノ思付且極秘ノ話ナルカ米国政府ノ態度（国務長官非公式ノ覚書）ハ変更セラルル事アルヘシ但シ自分ハ国務長官ニモ意見ヲ述ヘ置キタルカ此ノ際七割ノ如キ比率ヲ強テ主張スル事ハ徒ニ米国海軍及輿論ヲ刺戟シ同時ニ日本側ノ輿論モ刺戟セラレ米国側態度モ却テ変更ヲ困難ナラシムル惧アリ自分ハ予テ申シタル如ク日本ノ比率ニ関スル希望ニハ好意ヲ有シ居レリ併シ会議前ニ焦ツテ突止メントスレハ米国人ノ癖トシテ反動ヲ起シ却テ日本ニ不利トナルヘキニ付自分ハ切ニ日本ノ友人トシテ勧告スル事ハ日本側ニ於テ此ノ際七割ノ比率ヲ以テ「プレス」セス寧ロ所要ノ額ヲ以テ調節ヲ計ラレン事ニアリ例ヘ

ハ米ノ十八、英ノ十五、日本ノ十二ト言フ如キ事トナレハ潜水艦ノ「パリチー」等ノ割合ヨリ見テ結局事実ニ於テハ七割位ニ上ルヘク而シテ米国側ニ於テモ斯ノ如キ方法ニ依リテ決定スル事ハ困難ナラスト思ハルル旨述ヘタルニ付本使ハ右好意ヲ謝スト共ニ本使一己トシテハ右ノ事情ヲ諒トスルモ日本側ニ於テハ華府会議ノ際米国側ニ於テ総テ決定的案ヲ提出シテ之ヲ挨ルカ或ハ会議ノ決裂ヲ見ルカト云フ如キ状況ヲ今回ノ会議ニ見サラン事ヲ望ムト同時ニ米国側ニ於テモ英国ニ対シ「パリチー」ノ原則ヲ先ツ会議ニ入ル前提トシテ確認ヲ求メタル事実モアリ日本ニ於テモ会議ノ円満成功ヲ切望スル為米ノ「パリチー」ト同シク重要視シ居ル原則ヲ予メ英米側ニ於テ同意セラレムコトヲ希望シ居ル次第ナリ勿論此ノ際無用ニ輿論ノ刺戟又ハ妨害ヲ惹起スルカ如キハ望ム所ニアラス左リトテ何等ノ保障モナク会議ニ臨ムコトハ避ケタキ趣意ニ外ナラス勿論七割ノ比率ヲ唱ヘサルモ事実ニ於テ日本ノ要求カ達セラルルコト確カナルニ於テハ敢テ比率ヲ論議セサルモ差支ナシト思フカ此ノ点ハ政府ノ意向ヲ確カムヘシト述ヘタリ尚本使ハ全ク「アントル、ヌ」ノ話ナルカ米国海軍ノ代表某提督ノ如キハ五、三ノ比率ニアラサレハ極東ニ於ケル日本ノ勢力均衡ヲ得スト言ヘル趣ナルカ自分ハ斯ノ如キ感ハ全ク誤レリト思考ス日本ハ英米トノ間ニハ劣勢ヲ以テ甘ンスルヲ以テ何等英米沿岸ヲ侵スカ如キ虞ナキハ明カナリ然シ極東ノ海面ニ於テハ日本カ他国ニ比シ優秀ノ勢力ヲ有スヘキコトハ当然ノコトト思フ何トナレハ日本ニトリテハ国自体ノ死活ノ問題ナルニ反シ米国ニトリテハ僅ニ比律賓ノ如キ小島ノ利害関係ニ関スルノミニテ何等本国ノ死活ニ関スル問題ニアラスト云ヘル処「ド」モ其ノ点ハ御尤千万ナリ然シ今回ハ「ジョウンズ」ノ如キハ代表トシテ来ラサル故安心ナリト言ヘリ「ド」ハ今朝「マ」首相トモ会談シ右本使ニ話シタルコトヲ「マ」ニモ話シタル処「マ」モ同意ヲ表シタル旨語リタリ「マ」ハ其ノ節東京方面ニテ過日本使トノ話洩レタル為各方面ヨリ種々本件ニ関シテ申込マレ当惑シ居タル模様ナル旨ヲ述ヘ尚英米トノ間ニ於テハ多分米ノ大型巡洋艦ヲ十八隻迄下クルコトヲ得ヘシト信ス但本件及米国政府態度変更スヘシトノコトハ未タ政府ニ報告セラレサラムコトヲ望ムト述ヘ漏洩ヲ虞レ居ルニ付御含置ヲ請フ

米ヘ転電シ、仏、伊ヘ暗送セリ

213

昭和4年11月(19)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議に顧問として出席予定の駐スイス公使ウィルソンとの比率問題に関する会談について

第四三四号　　ワシントン　本　省　11月19日後着

華盛頓会議前後ヲ通シ参事官トシテ本邦ニ在勤シ次イテ国務省情報部長ニ転シ現ニ瑞西公使タル「ヒユー、ウイルソン」十八日午前本使ヲ来訪セルニ付本使ヨリ貴公使ハ倫敦会議ニ於ケル米国全権随員タルヘキ旨聞キ及ヒ密ニ喜ヒ居ル次第ナルカ右ハ事実ナリヤト尋ネタルニ「ウ」ハ自分カ顧問ノ一人タルコトハ国務長官限リニテ内定シ居レルカ明後二十日当地出発一応帰任スヘキニ付本日午后長官ト会見スルコトトナリ居レリト答ヘタリ依テ本使ハ比率問題ニ関スル長官トノ会談ノ要旨ヲ告ケ日本ノ主張ノ存スル処ヲ了解セシムルト共ニ我方七割要求ハ従来ノ態度ヲ変スルモノトノ考ヘノ誤レルコトヲモ指摘シ且公使ノ関係セラレタル「ゼネバ」会議ニ於テモ日本側ハ熱心ニ七割ヲ主張シタル次第ヲ述ヘタル処「ウ」ハ日本側ニ七割ヲ認メルコトハ相当困難ナル問題ナルカ実際上ノ状態ニ基キ考慮ヲ廻ラセハ何トカ解決ノ途アルヘキ旨繰返シ述ヘタリ

右会談ノ際「ウ」ハ自分一己ノ気付トシテ過般来日本ヨリ海軍当局談又ハ新聞報トシテ頻リニ七割要求ニ関スル報道伝ヘラレ居ル処此ノ調子ニテ進マハ当国新聞モ此ノ報道アル毎ニ一々之ヲ取上ケテ議論スルニ至ルヘキノミナラス其ノ間当国海軍々人中ニモ新聞ヲ突ツクモノ生セントモ限ラス結果両国新聞カ議論ヲ交ヘ往々ニ輿論ヲ刺戟スルカ如キ状態ニ立至ルコトナキヲ保セス元来日本政府及国民ニ於テ七割ヲ要求スルコトハ米国側ノ十二分ニ承知セル所ナルノミナラス自分ノ経験ニ徴スルモ新聞ノ論戦カ国際商議ノ円満ナル進行ヲ妨ケタルコト多々アルニ顧ミ会議ニ先立チ此ノ際両国新聞カ角立チタル議論ヲ交フルカ如キ事態ニ立至ラサル様希望ニ絶ヘスト語レリ尚「ウ」ハ「ジョウンズ」少将米国側随員ノ一人トシテ倫敦会議ニ赴クヤ否ヤニ付テハ世上種々ナル噂行ハレ居ルカ実際ノ所本人ニ於テハ個人的理由モアリ目下随員タルコトヲ躊躇シ居ルコトハ大体事実ト思ハルルモ結果ハ之ヲ承諾スルニ至ルヘシト観察セラ

ルト語レリ
英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

214　昭和4年11月19日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

軍縮会議開会期日などに関し英国大使より通報について

本省　11月19日前11時45分発

第二九二号
十一月十一日付書翰ヲ以テ在京英国大使ヨリ英国政府ハ倫敦海軍会議第一回会合ヲ明年一月二十一日火曜日午前中開催シ度帝国政府ニ於テ異存ナキニ於テハ右会合ノ日時及場所ニ関スル細目ヲ追報スヘキ旨並英国政府ハ従来ノ慣例通会議参加各国カ専門家ヲ其ノ全権委員ニ任命セサルヘキコトヲ希望スル処帝国政府ニ於テモ右ニ同意センコトヲ望ム旨申越シタルニ付同十四日付書翰ヲ以テ帝国政府ニ於テハ右申越ノ趣ニ異存ナキ旨回答シ置キタリ
米、仏、伊ニ転電アリ度シ

215　昭和4年11月20日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

仏伊両国間の軍縮会議予備交渉などに関するロッソ外務省連盟局長の談話について

ローマ　11月20日後発
本省　11月21日後着

第九八号
在仏伊国大使ハ「ブリアン」トノ間ニ倫敦会議予備交渉会談ヲ開始シタル旨十九日夕刊ニ伝ヘラレタルヲ以テ当国外務省係官連盟局長「ロソ」ヲ往訪本件成行キニ付質シタル処其ノ内容左ノ通リ
一、対英国回答ト同時ニナシタル伊国側申入ニ対シ仏側ヨリ十月十八日付交渉ノ基礎ヲ示サンコトヲ求メ来レル処数日ナラスシテ「ブリアン」内閣倒潰後継内閣成立行悩ミニテ引続キ交渉不能トナリタルカ（十七日ノ「ジョルナルジタリア」ニ依リ交渉停滞ノ責伊国ニ在リト「タン」ノ非難ニ対シ此ノ間ノ事情ヲ指摘シ居レリ）此ノ間ニ在巴里大使ニ対シ必要ナル訓令ヲ発シ居レルカ同大使ハ愈々仏政府モ安定シタルヲ以テ交渉ヲ開始シタルモノナルヘク自分ハ未タ報告ヲ受ケサルモ事実ナルヘシ
二、本件会談ニ当リ伊国側ノ採ルヘキ「ライン」ハ既ニ累

次ノ声明ニ明カナルカ如ク伊カ仏ヨリ劣勢ナラサル海軍力ヲ維持スルコトヲ仏ニシテ認ムルニ於テハ保有量ノ問題ニ付テハ伊ハ実際上ノ縮少ヲ目的トスル限リ仏ノ提示スヘキ限度ヲ受諾スルノ用意ヲ有スルト云フニアル処自分（「ロソ」）ハ仏側ハ右ノ如キ伊国ノ提案ニ何等反対スヘキ理由ナシト思ハルルヲ以テ此ノ「ライン」ニテ協定ニ達スルコト困難ナラサルヘシト信スル旨再三繰返シ居レリ
三、往電第九四号「マチノ」ノ記事ト同様ノ趣旨其ノ後モ引続キ仏国ニ於テ論議サレ居ル様ニテ（当国新聞ニハ其ノ後何等記事ナシ）右ハ何等今次ノ対仏交渉ト関連アル次第ナリヤト試ニ尋ネタル処局長ハ潜水艦問題ニ付テハ当初廃止ニ絶対反対ナリシモ其ノ後関係部内ニモ議論分レ来リ他ノ方面ニ充分ノ保障ヲ得ルニ於テハ潜水艦ノ縮少乃至廃止ヲ考慮スルモ差支ヘナシトノ意見ヲ見ルニ至レルコトハ事実ナルモ今ノ処全ク抽象的議論ノ域ヲ脱セス云々ト答ヘタリ
四、尚会議期日ニ付テハ伊国政府ハ理事会トカチ合ハサルヲ好都合ト認ムルモ他ノ関係国ニシテ同意ナルニ於テハ一月二十一日トスルモ反対セサルヘシ此ノ趣旨ニテ既ニ英国政府ニ回答セリ
英ニ転電シ英仏ニ暗送セリ

216　昭和4年11月20日　佐藤連盟海軍代表より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

比率問題などに関する意見申進について

パリ　11月20日後7時25分発
海軍省　11月21日前10時25分着

機密第二十八番電
軍縮問題其ノ後ノ情況ニ鑑ミ左記卑見御参考迄申進ス
㈠帝国カ補助艦比率七割ノ要求ニ対シ当方面ノ新聞論調ハ曾テ之ヲ不合理トセルモノナク最近「エコード、パリ」ハ之ヲ当然ノ要求ナリトスル論説ヲ掲ケタリ但シ我主張ノ論拠及其強硬ノ度ニ関シテハ尚充分ニ徹底シ居ラサルカ如シ
㈡各国保有噸数ヲ一律ニ低下シ軍備縮少ノ実ヲ挙グルハ比率問題ト共ニ帝国ノ最モ重ヲ置ク所ナルモ今日之ヲ過度ニ強調スルハ英米ニ対シ帝国ハ財政能力上現勢力維持ヲ以テ限度トスルヤノ印象ヲ与ヘ却テ比率問題解決ノ障害

トナルコトナキヤヲ恐ル（出淵大使発電報外務大臣宛第四一九号参照）
思フニ比率問題カ下協議ヲ措テハ容易ニ目的ヲ達シ得難キニ反シ軍縮ハ公開ノ席上大呼シ得ル絶好題目ナリ
従テ問題ノ紛糾ヲ避クル為兵力縮減ハ之ヲ会議日ニ譲リ此際下協議ニ於テハ最重点タル比率問題ノ解決ニ専心集中スルヲ有利ト認ム
㈢英米ノ下協議ニ依レハ米国巡洋艦ノ勢力其ノ現勢力ニ比シ異常ノ拡張ニシテ大型巡洋艦ニ於テ彼ノ七割ヲ保持スル為ニ帝国海軍カ（不明）ハ当然来ルヘキ（不明）代換補充ノ為研究セラレタル計画予定数ニモ満タサル次第ヲ此際内外ニ徹底セシムルハ会議ニ於ケル我目的達成上有利ナリト思考ス
㈣曩ニ小官等松平大使ト会談ノ節七割主張ニ対スル政府決意ノ度明確ナラサル為英米側トノ応接上大ナル不利ヲ感シツヽアル旨漏ラサレタルコトアリ三国会議当時ヲ顧ミ殊ニ最近一般情勢ヲ察スルニ大使所言ニ多大ノ共鳴ヲ感セスンハアラス英米下協議ノ劈頭米ハ「パリチー」ノ了解成ラサル限リ英米間海軍交渉ハ永久ニ不可能ナリトセルカ如シ七割要求カ帝国ノ絶対要求ナルヲ示シ下協議ニ於ケル戦論上二方ノ指針タラシムルト共ニ之ヲ英米両国政府ニ徹底セシムルハ帝国ノ主張貫徹上極メテ必然ト信ス

217　昭和4年11月21日　在仏国三浦大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

仏伊間軍縮交渉の現状などに関する仏国海軍当局との会談要領について

パリ　11月21日後11時　発
海軍省　11月22日前7時50分着

機密第三十八番電
官房機密第百六十五番電ニ関シ本日佐藤三川同伴 Darlan 海軍少将デ（不明）海軍大佐ト会見セシニ先方談話ノ要領左ノ如シ
一、仏伊間交渉ハ昨日伊国大使仏国外務卿間ニ会見アリタルノミニテ何等具体的進展ヲ見ス仏伊海軍間ニハ絶対ニ交渉シタルコトナシ
二、潜水艦ニ対スル伊国ノ態度変更ハ秘密外交政策ニ基クモノナラハイサ知ラス有リ得ヘカラサルコトナリ
三、潜水艦問題ハ帝国政府ニ於テモ強硬ナル決心ヲ有スルモノナルカ伊国ノ態度如何ニヨリテハ貴国ト了解ヲ遂ケ置クコト必要ナル旨小官ヨリ意見具申致度思ヘトモ如何ト質シタルニ勿論快諾スルノミナラス仏国ハ此ノ問題ニ就テハ容レラレサレハ旗ヲ巻キ帰ル考ヘナリト
四、今後日仏海軍間ニ於テ意見ノ交換ヲ行ハント欲ス如何ト尋ネラレタルニ依リ小官ヨリ本件仏国代理大使ヨリ帝国外務大臣ニ既ニ申進セル所故差支無シト思考スト答ヘタルトコロ再ヒ仏国案細目ヲ説明シ且本案海軍省案トシテ陸軍省航空局大蔵省ト内議済ニシテ一両日中ニ閣議決定ヲ求メタル後国防会議ニ付スルコトトナリ居ルニヨリ来週中決定案ヲ示スヘシ云々
仏国案細目及当方ノ意見佐藤ト協議ノ上後電ス

二十一日

218　昭和4年11月21日　在仏国三浦大使館付武官より山梨海軍次官、末次軍令部次長宛（電報）

軍縮会議についての仏国提案に関するダルラン少将の説明要領について

パリ　11月21日後10時40分発
海軍省　11月22日前11時25分着

仏海機密第三十九番電
D少将説明要領
一、原則ハ仏国トシテハ軍縮ハ三軍不可分主義ナルヲ以テ最終決定ハ国際連盟準備委員会ニ於テナサルベキコト今回ノ会議ハ華府会議ノ延長ニアラスシテ寿府軍備縮少本会議ノ序幕ナルコト各国平等自由ナル立場ヨリ自主的ニ縮減数量ヲ提示スヘキモノニシテ決シテ法廷ニ臨ムモノニアラストナス
二、仏国案
今回ノ仏国案ハ第三回軍備縮少準備委員会ニ於ケル仏国妥協案（昭和二年陸軍省兵器局印刷会議経過概要六十七頁参照）ト同様形式ノ具フルモノニシテ内容ハ右妥協案、英仏妥協案及今回ノ英米交渉ヲ実際ニ加味シテ修正ノ施サレ表題ハ修正融通案ト記ス修正サレタル主ナル事項左ノ如シ
㈠艦種別　主力艦航空母艦一万噸以下八吋砲搭載艦右以外水上艦、潜水艦及雑務艦（敷設艦等）ノ六種トシ備砲六吋以下二十節未満二千噸未満ノ水上艦及六百噸未

満潜水艦ヲ制限外トス

(ロ)融通方法　右艦種別ノ相互融通量ハ一定噸数トシ之ノ会議ニテ決定シ連盟国ハ右融通ヲナサントスルトキハ一年前之ヲ予告スルモノトス

以上説明ニ当リD海軍少将ハ屢々具体的数字ヲ以テセルカ察スレハ仏国ノ第一欄ハ海軍法ニ定メタル噸数約七十万乃至八十万噸第二欄ハ其ノ四分ノ三トナスモノノ如シ英米ニハ第一欄百二十万噸トシ第二欄ニ今回ノ協定噸数ヲ充テ日本ニハ夫々百万及八十五万噸ヲ与フ斯クスレハ日本モ文句ナカルヘシト云ヒタルニ付小官英米ノ噸数ヲ更ニ減少スルコトカ日本ノ希望ナリト述ヘタル処、日本カ屢々軍備縮少ヲ強調スルハ可ナルモ頑強ニ英米噸数ヲ引キ下ケント考フルカ如キハ大ナル誤ナリ他国ノ噸数ニ干渉セントスルハ自然自己ノ噸数ニモ干渉ヲ許スコトトナル日本ハ比率ニ捕ハレ過キサルヤト云ヘリ

三、以上ノ案ニシテ原則的ニ容認セラルル上ハ仏国ニ於テハ主力艦噸数砲種口径引下ケ艦齢延長ニ同意ス

四、潜水艦ニ対スル廃止ニハ絶対ニ反対ス六百噸未満潜水艦カ制限外ニ置カルルモノトシ九万噸然ラスンハ十二万四千噸ヲ要求ス艦型制限三千六百噸以下トスルコトニハ同意シ難シ

五、終リニ臨ミD少将ハ日本ガ目下英米ト内交渉ノ道程ニ在ルカ故他ニ拘束セラレサルヘキハ充分了解シ居レト意見交換ノ形式トシテ特ニ貴海軍ニ内報スル次第ナリ何カ対策アラハ内示セラルレハ幸ナリ

(意見)

仏国海軍カ帝国海軍ニ対シテノミ以上ノ如キ好意的表明アルニ対シ不即不離ノ御趣旨ハ充分了解シタレトモ尚内交渉ノ実情ヲモ考慮シ適当ニ友誼的接触ヲ保ツコトハ必要ト存スルニ付今後モ時々意見交換ノ形式ヲ以テ応酬スルコトト致度之ニ依リ仏伊交渉ノ内容ヲ探知シ得ト思考ス尚東京仏国大使館付武官ヨリモ電報アリタリトノコトナルカ東京ニ於ケル交渉ノ内容心得ノ為承知致度

219　昭和4年11月23日　在メキシコ青木公使より幣原外務大臣宛（電報）

米国大使モローの軍縮会議全権任命について

メキシコ　11月23日前発
本　省　11月24日前着

第一二〇号

廿二日「モロウ」米国大使ハ本官ニ対シ先月帰国ノ節倫敦軍縮会議ニ出席方相談ヲ受ケタルカ一ケ月後ニハ巴里ヘ出発ノコトトナルヘシト云ヘルニ依リ本官ハ同氏ノ前途ヲ祝シ日本ノ念トスル所ハ平和人道ト国防ノ安全ニ在ルヲ以テ能ク我カ立場ヲ諒解シ大局ヨリ会議ノ円満ナル成功ニ尽力アランコトヲ望ム旨述ヘ置キタリ同氏自身ハ軍縮問題ニハ素人ナリト云フモ特殊ノ財政外交方面ニ於テ複雑ナル問題ヲ単純化シ穏健ナル解決ヲ見出ス特徴アルニ依リ相当重要ナル役ヲ努ムヘシト思ハル

在米大使ヘ暗送セリ

220　昭和4年11月23日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題に関する国務長官覚書への回答電報方稟請について

ワシントン　11月23日後発
本　省　11月24日後着

第四四三号（至急極秘）

十二日ノ国務長官覚書ニ対スル我方回答ニ付テハ折角御詮議中ト存セラルル処往電第四二一号末段ニ申進メタル通リ長官ハ来週ノ初ニ本件ニ関シ会談ヲ行ヒ度キ旨申居リタル関係モアリ来週トナラハ御承知ノ通二十八日（木曜）ハ感謝祭ニ当リ当日前後ヨリ週末ニ掛ケ休暇ヲ取ル事一般ニ習慣トナリ居ル次第ナルカ一方帝国全権ノ出発期日モ間近ニナリ居ルニ付全権出発前ニ我方回答ヲ提示シ一応ナリトモ先方ノ態度ヲ探リ置クヲ好都合ト思料セラル就テハ全権出発期日トノ関係上来週火曜日ニ長官ト会見シ得ル様本件回答電報方至急御詮議ヲ請フ

221　昭和4年11月23日　伊藤連盟事務局長代理より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議へのイタリアの態度に関する同国外相の内話について

パ　リ　11月23日後発
本　省　11月24日前着

第一五一号

客月末伊国政府ヲ訪問セル「ドラモンド」ト同国外務大臣トノ会見録内密ニ連盟事務局原田ヨリ入手セルカ（全文原田ヨリ杉村公使宛郵送済）右ニ依レハ同外務大臣ハ

㈠伊国政府ハ倫敦海軍会議ヲ以テ一般軍縮会議ニ到ル一階梯且其ノ準備ト考ヘ居リ従来屢々解決困難ナリト認メラレタル或ル種ノ問題ヲコノ機会ニ於テ打開セントスルノ希望ヲ以テ同会議ニ臨ムヘシ

㈡伊国政府ノ態度ノ最モ顕著ナル変化ハ潜水艦ニ関スル英米提案ヲ討議ノ基礎トシテ受諾スルノ用意アル点ニ在リト内話セル趣ナリ

多少旧聞ニ属スルモ御参考迄

英米伊ニ暗（送）シ仏ヘ転報セリ

222　昭和4年11月23日　伊藤連盟事務局長代理より幣原外務大臣宛（電報）

英国労働党議員の戦艦全廃案提出の意向について

パリ　11月23日後発
本省　11月24日前着

第一五三号

二十日倫敦ヨリ帰寿セル連盟事務局英部員「ジリアウス」カ原田ヲ来訪内話セル所左ノ通

倫敦ニテ労働党議員ニシテ「ヘンダーソン」ノ秘書タル「ベーカー」ニ面談ノ際「ベ」ノ語ル所ニ依レハ「ヘンダーソン」及「スノーデン」ハ今回戦闘艦全廃案（代替ヲ行ハス艦齢ニ達シタル分ヨリ廃棄ス）ヲ提出セン事ヲ熱望シ居リ本案ニハ「フーバー」モ賛成ニシテ英国労働党ノ連中ハ自由党ノ連中ト共ニ民間ニテ気勢ヲ挙ケン事ヲ企テ居リ米国側ニテモ之ニ応シテ既ニ烽火ヲ揚ケタル趣ナリ尚「ベ」ハ「ジ」ニ対シ右ノ趣ヲ杉村公使ニ伝ヘ日本ニ於テモ民間ニテ本案賛成ノ声ヲ揚クル様致度シト依頼セル由ナリ聞込ミノ儘

米ヘ転電アリ度シ（転電済）

英、仏、伊ヘ暗送セリ

223　昭和4年11月26日　閣議決定

ロンドン海軍軍縮会議全権委員に対する訓令について

付記　十一月十四日陸軍省梅津軍事課長持参全権に与うる訓令中陸軍として包含せしめたき事項

昭和四年十一月二十六日閣議決定

倫敦海軍会議帝国全権委員ニ対スル訓令案

一　今次ノ会議ニ於テ帝国政府ノ目的トスル所ハ海軍軍備ノ制限縮少ニ関シ内ハ我国防ノ安固ヲ期スルト共ニ国民負担ノ軽減ヲ図リ外ハ列国間ノ平和親交ヲ増進スルニ足ルヘキ方法ヲ主要海軍国間ニ協定スルニ在リ

二　我国防ノ安固ヲ期セムカ為ニハ帝国ノ国情並四囲ノ状勢ニ顧ミ海軍兵力ニ付自衛上絶対必要トスル最少限度ノ比率及兵力量ヲ確保スルコトヲ要ス

三　軍備ノ実力ハ単ニ正規ノ兵力ノミナラス資源、商船隊及工業力等ノ潜在勢力モ亦其一部ノ要素ヲ成スモノニシテ帝国ハ此等潜在勢力ニ於テ列国ニ劣ル所アルカ故ニ海軍軍備ノ制限縮少ヲ協定スルニ当リテハ特ニ此事情ヲ考量セラルヘシ

四　英米両国補助艦勢力均等ノ原則ハ帝国政府ノ異議ナキ所ナルモ両国間ノ協定ニ適用シタル勢力測度規準ヲ其儘帝国トノ協定ニ適用スルノ当否ニ付テハ右測度規準ノ内容ヲ検討シタル上帝国ノ態度ヲ決定スルコトトス

五　仏伊両国ノ要望スル比率ハ亦帝国ノ利害ニ関スル所アルヲ以テ両国交渉ノ推移ニ付テハ絶ヘス注意セラルヘシ

六　会議ノ結果成立スヘキ条約ノ有効期間内ニ世界ノ如何ナル方面タルヲ問ハス著ク海軍ノ現勢ヲ変更スルノ事態生シ之カ為締約国ノ一国カ其海軍力ニ依ル国防上ノ安全ニ付重大ナル脅威ヲ感スルニ至リタルトキハ締約国ハ之ニ応スル措置ヲ協議スヘキ旨ノ条項ヲ設クルコトヲ要ス

七　陸軍及空軍問題ニ触ルルコトハ徒ラニ論議ヲ錯雑セシメ会議本来ノ目的タル海軍問題ノ解決ニ困難ヲ加フル虞アルヲ以テ之ヲ避ケ万一此等ノ問題ニ論及スル必要ヲ見ルカ如キ場合ニモ陸軍、空軍ニ関スル国際連盟軍備縮少会議準備委員会ノ決定事項ニ累ヲ及ホササルコトニ留意セラルヘシ

八　国民負担ノ軽減ヲ図ラムカ為ニハ補助艦協定ノ一部ニ於テ現有勢力ノ拡張ヲ見ルノ已ムナキニ至ルコトアリトスルモ右協定ノ全部ヲ秤量シテ軍備制限ニ止マラス更ニ進ンテ軍備縮少ノ実ヲ挙クルコトヲ要ス

九　国防ノ安固ト国民負担ノ軽減トヲ調和セムカ為ニハ我所要ノ比率ヲ保持スルト共ニ彼我保有兵力量ヲ減少スルノ方途ニ出ツルノ外ナシ仍テ兵力量ノ協定ニ当リテハ最大海軍国タル英米両国ノ保有兵力量ヲ縮少シ以テ一般ニ

各国保有兵力量ヲ逓減スルコトニ力ヲ致サルヘシ

十　華府海軍軍備制限条約中一部ノ条項ヲ改訂シ以テ国民負担ノ軽減ニ資スルハ亦帝国政府ノ重要視スル所ナリ之カ為帝国政府ハ関係列国ト共ニ特定ノ事項ニ関シ之カ改訂ヲ議スルノ用意アリト雖既定ノ基礎ヲ変改シテ条約自体ノ存続ヲ危クシ若ハ現存ノ制限ヲ緩和シテ同条約ノ効果ヲ減殺スルカ如キコトナキヲ要ス

十一　列国間ノ平和親交ヲ増進セムカ為ニハ各国共ニ他国ニ脅威ヲ感セシムルカ如キ軍備拡張ノ新計画ヲ避ケ国民ノ間ニ猜疑、敵視ノ感情ヲ生セシメ易キ製艦競争ノ弊ヲ絶チ各自国ノ国防ニ関スル危惧不安ノ因ヲ除キテ相互信頼ノ念ヲ深クスルニ足ルヘキ協定ノ途ヲ講スルコトヲ要ス

十二　会議各参列国ニ対シテハ等シク公平中正ノ態度ヲ持シ特定ノ国ト結ヒテ他ニ当ルカ如キ感ヲ与ヘサルコトヲ旨トセラルヘシ

十三　或ハ英米ト仏伊トノ間、或ハ仏伊両国ノ間ニ意見衝突シテ事態紛糾ヲ来スカ如キ場合ニハ帝国全権委員ハ前項ノ趣旨ニ依リ何レノ一方ニモ偏倚セサルト共ニ我立場ニ不利ノ影響ヲ来ササル限リ調停斡旋ノ労ヲ執リ以テ会議ノ円満ナル進捗ニ努力セラルヘシ

十四　主要海軍国タル日、英、米、仏、伊五国共ニ協定ノ当事者トナルコトハ素ヨリ望ム所ナリト雖事情已ムヲ得サル場合ニハ帝国政府ハ日、英、米三国間ニ限ル協定モ次善ノ策トシテ其成立ニ協力スルノ用意ヲ有ス

十五　一般軍備ノ制限又ハ縮少ヲ目的トスル国際連盟ノ事業ニ付テハ帝国政府ハ従来常ニ誠意ヲ以テ之ニ賛同シ今後モ引続キ之カ完成ニ協力スルノ方針ナリト雖必スシモ陸海空軍全部ニ亘ル協定ヲ同時ニ成立セシムルノ要ナク主要海軍国ノ間ニ先ツ海軍軍備問題ニ関シテ協定スルハ最実際的ニシテ又国際連盟ノ事業ニ寄与スル所以ナリト認ム

十六　海洋自由ノ問題其他海戦法規又ハ中立法規ノ制定又ハ改訂ニ関スル問題ニ付テハ従来英米両国ノ主張スル所相反スルノミナラス我国トシテモ其利害得失ハ別ニ慎重ナル攻究ヲ要スルモノアリ且之ヲ軍備問題ト直接関連セシメテ一挙ニ協定セムトスルニ於テハ会議ノ紛糾ヲ来スノ虞ナシトセス従テ会議ノ形勢ニ伴ヒ前記国際法問題ヲ議題トスル必要アル場合ニハ討議ノ範囲ヲ極メテ少数ノ原則ニ限リ以テ海軍協定ノ成立ヲ阻礙セサルコトニ留意セラルヘシ

十七　補助艦ニ関スル協定不幸ニシテ完全ナル成立ヲ見サル際ニ於テモ主力艦ニ関スル協定ハ尚之ヲ成功セシムルヲ可トスルニ依リ此目的ヲ達セムカ為会議ノ大勢ニ鑑ミ審議ノ順序其他折衝ノ方法ニ付深甚ノ注意ヲ加ヘラレ度シ

十八　補助艦比率及兵力量ニ関シ予備的非公式会談ニ於テ了解ヲ遂クルコトハ帝国政府ノ最重キヲ置ク所ナルヲ以テ之カ達成ニ努メラルヘキハ勿論右了解ノ成立ニ先チ過早ニ本会議ニ上程セラルル如キコトハ極力之ヲ避クルニ努メラレ度シ

十九　会議ノ議題トナルヘキ諸事項ニ関シ従来帝国政府ヨリ関係国駐在帝国使臣ニ与ヘタル累次ノ訓電ハ本訓令ノ補則トシテ了知セラルヘシ

二十　会議ニ於テ帝国ノ執ルヘキ態度ト措置トハ我国家ノ前途並世界ノ政局ニ至大ナル影響ヲ及ホスヘキコト言フヲ俟タス政府ハ茲ニ深ク帝国全権委員ニ信頼シ此重要且機微ナル任務ヲ嘱スルニ当リ叙上ノ趣旨ト左記ノ方針トニ依リ又海軍専門事項ニ関シテハ海軍首席随員ノ意見ヲ徴シ適宜折衝セラレ万難ヲ排シテ一意会議ノ成功ヲ期セラレムコトヲ望ム

記

一、帝国海軍軍備ノ要旨

帝国海軍軍備ハ国家ノ自主独立ヲ擁護スルヲ目的トシ固ヨリ何等侵寇的意図ヲ有スルモノニ非ス之カ為ニハ西部太平洋方面ニ於テ或ル一国ノ使用スル海軍兵力ニ対抗シ以テ我国土ノ安全ヲ期スルト共ニ帝国ノ特殊国情ニ基キ国家存立ニ必要ナル海上交通線ヲ防護スルニ足ルモノタルヲ要ス

二、補助艦所要兵力量及比率

(一)華府海軍軍備制限条約ノ存続スル現状ニ於テ前号ノ任務達成ニ必要ナル帝国ノ所要補助艦兵力ハ量ニ於テ昭和六年度末ニ於ケル我現有量（付表参照）ヲ標準トシ又比率ニ於テハ米国ニ対シ少クモ総括的ニ七割トス

(二)所要兵力量ノ標準右ノ如シト雖帝国海軍軍備ノ要旨ニ悖ラス且所要比率ヲ失ハサル限リ各国ト協調シ之ヲ縮

減スルニ吝ナラス

但シ潜水艦ニ付テハ此限ニ在ラス

㈢二十糎砲搭載大型巡洋艦ニ於テハ特ニ対米七割ヲ又潜水艦ニ於テハ昭和六年度末我現有量ヲ保持スルヲ要ス

此等ノ要求ヲ補助艦対米総括的七割ノ主張ト両立セシメムカ為ニハ帝国海軍軍備ノ要旨ニ悖ラサル限リ軽巡洋艦、駆逐艦ニ於テ多少ノ犠牲ヲ忍フハ已ムヲ得サルコトニ属ス

三、補助艦代換艦齢

代換艦齢ハ軍備縮少ノ本旨ニ鑑ミ軍艦固有ノ任務ニ堪エ得ルヲ程度トシ可成長ク之ヲ協定スルニ異議ナシ但シ各国勢力ノ権衡及代換実施ノ調節並工業力ノ維持上既成艦ノ一部ニ付テハ協定艦齢内ニ於テモ代換シ得ル如ク規定スルヲ要スル場合アルヘシ

四、制限外艦船

制限外艦船ヲ定ムルニハ概ネ左ノ考慮ヲ要ス

㈠艦型、武装、行動力等小ナル為専ラ防禦的用途ニ充ツル軍艦ハ制限外トス

㈡商船ニ僅ノ改装ヲ行ヒテ容易ニ付与シ得ル程度ノ戦闘力ヲ有スルニ過キサル軍艦ハ制限外トス

五、華府海軍軍備制限条約ノ一部変更ノ範囲及程度ハ左記ニ拠ル

㈠主力艦

主力艦ノ廃止又ハ其ノ協定隻数変更ニハ同意シ難キモ同条約ニ依ル制限ヲ左ノ範囲ニ於テ変更スルコトハ軍費ノ軽減ニ貢献スル所アルヲ以テ之ヲ希望ス

㈠代換期間ノ伸長

㈡艦型縮小

㈢艦齢延長

代換開始期ノ延期ニ関シテハ大勢ニ順応シ差支ナシ

㈡航空母艦

帝国ノ国情ニ稽ヘ航空機ヲ帝国ノ近海ニ持チ来ス仲介タルヘキ艦船ハ成ルヘク少量ニ制限スルヲ可トシ尚軍費ノ軽減ニ貢献スル為同条約ニ依ル航空母艦ノ制限ハ左ノ範囲ニ於テ変更スルヲ有利トス

㈠一万噸以下ノ補助航空母艦ヲ華府条約ノ規定スル航空母艦保有量中ニ包含セシムルノ目的ヲ以テ同条約ニ依ル航空母艦ノ定義中一万噸ヲ超ユル件ノ制限ヲ廃スルコト

㈡艦齢ノ延長、艦型ノ縮小ニ関シテハ大勢ニ順応シ差支ナシ

付表　昭和六年度末（一九三二年三月末）帝国現有兵力

艦種	有効艦齢細別	有効艦齢内 隻数	有効艦齢内 噸数	艦齢超過艦 隻数	艦齢超過艦 噸数	制限外艦船（訓令記載ノモノ） 隻数	制限外艦船（訓令記載ノモノ） 噸数	合計 隻数	合計 噸数
主力艦	—	一〇	二九二、四〇〇	—	—	—	—	一〇	二九二、四〇〇
航空母艦	—	二	五三、八〇〇	—	—	—	—	二	五三、八〇〇
補助航空母艦	二〇	二	一五、〇七〇	—	—	—	—	二	一五、〇七〇
二十糎砲艦	二〇	一二	一〇八、四〇〇	—	—	—	—	一二	一〇八、四〇〇
軽巡洋艦	二〇	二〇	九四、六五五	一	三、七六〇	—	—	二一	九八、四一五
旧型巡洋艦	二〇	—	—	九	六六、〇四〇	—	—	九	六六、〇四〇
駆逐艦	一六	一〇四	一二二、六一五	一五	九、八八〇	—	—	一一九	一三二、四九五
潜水艦	一三	六一	七八、四九七	—	—	—	—	七一	七八、四九七
敷設艦	二〇	四	五、九九〇	二	一六、四二〇	—	—	六	二二、四一〇
砲艦	二〇	—	—	一	一、三二〇	一二	三、九八〇	一三	五、三〇〇
潜水母艦	—	—	—	—	—	四	二一、〇一五	四	二一、〇一五
掃海艇	一六	六	三、六九〇	—	—	—	—	六	三、六九〇
練習標的測量砕氷艦	—	—	—	—	—	七	五三、七六五	七	五三、七六五
運送艦	—	—	—	—	—	一八	二一三、〇三三	一八	二一三、〇三三

㈢右ノ外条約ノ効力ニ重大ナル影響ナキ小変更ハ支ナシ

備考一、米国海軍ノ本年度補助艦新補充計画ニ対スル我新補充計画ハ目下詮議中ニシテ二十糎砲搭載巡洋艦ニ関スル限リ少クモ対米七割ヲ保有スル方針ナリ

二、表中ノ有効艦齢ハ寿府三国海軍軍備制限会議ニ於ケル仮協定ニ準シタルモノナリ

（付　記）

全権ニ与フル訓令中陸軍トシテ包含セシメタキ事項

陸軍、空軍問題ニ関シテハ本会議ニ於テ論議セサルヲ方針トセラレタシ若シ万一之ニ論及スルカ如キ場合ニモ陸軍、空軍問題ニ関スル軍縮準備委員会ノ決定事項ヲ覆スカ如キコトハ極力阻止セラレタシ

防備問題ニ対スル陸軍ノ方針

防備問題ヲ我ヨリ進ンテ提議スルノ趣旨ニアラサルモ会議ノ情勢ニ依リ英米ノ太平洋ニ於ケル防備ヲ現情以上ニ更ニ制限スルコトハ希望スル所ナルモ我防備ヲ現情以上ニ制限セラルルコトハ絶対ニ阻止セラレタシ

（欄外記述）

昭和四年十一月十四日陸軍省軍務局梅津軍事課長持参（海軍省ニ於テハ異存ナキ由）

224　昭和4年11月27日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

仏伊間の軍縮会議予備交渉の進捗ぶりなどに関するイタリア外務省係官の内話について

ローマ　11月27日後発
本省　11月28日前着

第九九号

二十七日最近ノ新聞記事ニ付丹羽武官カ当国海軍省官房長「ペリゴネー」大佐ヲ往訪シ質シタル処左ノ通内話アリタル趣ナリ

一、伊国代表ハ未タ決定セサルモ「グランヂー」ヲ長トシテ海軍大臣「シリアニ」ノ任命セラルルハ確実ナルヘシ

二、仏伊間ノ予備交渉ハ其ノ後進捗セス伊ハ議案ヲ完成セルモ仏ハ目下基礎案ニ付研究中ナル由ナレハ具体的交渉ニ入ルハ明年一月六日頃ヨリナルヘシ尚両国交渉ニ当リテハ両国ノ所要標準ヲ一般的政治的ニ協定セムトスルニアリテ互ニ専門的ニ深入セサル事ト思フ

三、潜水艦問題ニ付テハ仏其ノ他ノ地中海ニ面スル諸国カ何レモ潜水艦ヲ保有スル時ハ伊ハ甚タシキ脅威ヲ感スルヲ以テ寧ロ伊トシテハ各国ト共ニ潜水艦ヲ減少又ハ廃止スルコトヲ可トスルコト新聞論調ノ如ク伊トシテハ特ニ他ノ国程之カ必要ナキモノト思フ

米ヘ転電シ英、仏ヘ暗送セリ

225　昭和4年11月27日　在パリ伊藤連盟事務局長代理より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議開会期日の変更に関する情報について

パリ　11月27日後発
本省　11月28日前着

第一五五号

伊国外務大臣ヨリ一月理事会ニ自身出席ノ希望ナル処倫敦海軍会議出席ノ都合アルニ付開会予定日（一月二十日）ヲ一週間繰上ケ方申出アリ各理事ノ意見ヲ求メタルカ当方ハ別ニ異議ヲ称ヘサリシモ事務局原田ヨリノ情報ニ依レハ独逸ハ二十日ヲ希望シ仏国、西班牙ハ寧ロ倫敦会議延期方ヲ交渉スヘシトノ意見ナリシニ付二十六日事務総長ヨリ英国外務大臣ニ対シ右ノ趣ヲ通シ米国政府ト交渉ノ上倫敦会議延期取計方希望スル旨申入レタル由

英、米ヘ転電、仏ヘ転報シ、白、伊、蘭ヘ暗送ス

226　昭和4年11月27日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

日本政府の補助艦対米七割主張に基づく具体的試案に関し回訓について

本省　11月27日後6時発

第三〇四号　極秘

貴電第四三六号ニ関シ

㈠英国側ニ於テハ比率ナル用語ヲ好マサル模様ナル処最終ノ決定ニハ自然噸数ヲ取扱ヒ按配スルコトトナルヘク之ニハ固ヨリ何等異存ナキ次第ナルモ英米ヲ基準トシテ自国ノ保有量ヲ決定セサルヲ得サル立場ニアル我国トシテハ英米ノ保有量確定セサル現状ニ於テ交渉ノ中心カ比率問題トナルコトハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ本来比率ニ関スル我主張ハ在米大使宛往電第三三五号後段ノ通ニテ英米間商議ニ於テ均勢ノ原則ヲ基礎トシタルト同一趣旨ニ出ツ殊ニ我国トシテハ英米ニ対シ一定程度ノ劣勢ナル保有量ヲ承認セムトスルモノナルカ故ニ比率ヲ重要視スルコトモ自然深カラサルヲ得サル次第ナリ

㈡巡洋艦全体ノ保有量英国三十三万九千噸、米国三十一万五千噸ノ協定成立スルモノト仮定スルモ我方トシテハ潜水艦ノ保有量ト補助艦総括的七割要求トノ調節ヲ小型巡洋艦及駆逐艦ノ保有量ニ求メムトスルモノナル

結果（往電第二一二号㈣）未タ駆逐艦潜水艦ノ保有噸数判明セサル今日巡洋艦全体ニ付テノ我要求ヲ正確ナル数字ニテ示スコト不可能ナリ仍テ我国トシテハ八吋砲巡洋艦ニ付テ其最大保有国タル米国ノ七割ヲ要求スルト共ニ補助艦総括的七割ノ主義的要求ヲ提出セサルヲ得サル次第ナリ

㈢八吋砲巡洋艦ニ関シテモ英米ノ保有量未タ決定セサル現状ニ於テ最終的具体案ヲ提示シ難キ次第ナルカ仮ニ米国十八万噸ニ決定スルモノトスレハ我国ハ之ヲ基準トセル七割即チ十二万六千噸ヲ要求スヘシ英国側ニテハ隻数ニテ協定セムコトヲ欲スルカ如キモ我方トシテハ噸数ニテ之ヲ定メ隻数ハ拘束セス自由ニ委スルコトトシタキ意向ナリ然レトモ隻数ヲモ同時ニ規定スルノ已ムナキ情勢ナルニ於テハ米国ノ十八隻ニ対シ我国ハ総噸数十二万六千噸ヲ超過セサル範囲ニ於テ十三隻ヲ保有セムコトヲ要求スヘシ（日本ハ米国ノ十八隻ニ対シ十二隻ニテ満足スルモノトノ印象ヲ先方ニ与ヘサル様此点特ニ留意アリ度）

㈣前項ノ趣旨ニ依リ試ニ具体案ヲ立ツレハ終局ニ於テ一万噸巡洋艦若干隻一万噸未満巡洋艦若干隻合計噸数十二万六千噸隻数十三隻ノ八吋砲巡洋艦ヲ保有セムトスルモノニシテ古鷹級代換迄ノ過渡期ニ於テハ一万噸未満ノ小型八吋砲巡洋艦二隻ヲ建造シ現有一万噸級八隻及古鷹級四隻ト加ヘテ合計十二万六千噸ヲ保有セムトスルモノナリ尤モ此場合ニ於テハ隻数十四隻トナリ著シク英国保有数ニ接近スルカ如キ観アルモ要スルニ過渡期ニ於ケル一時的便法ニ過キス而カモ仔細ニ其ノ内容ヲ検スルニ「ホーキンス」級ニモ比スヘキ劣勢ナル古鷹級四隻及新ニ建造スヘキ小型八吋砲巡洋艦二隻ヲ含ムカ故ニ一万噸級八隻以外ハ実質ニ於テ甚タ劣勢ナル小型巡洋艦ニシテ其勢力ハ噸数比例ヲ遙ニ下ルモノナルコトヲ充分ニ了解セシメラレ度シ

㈤以上ハ米国ノ八吋砲巡洋艦保有量ヲ十八万噸十八隻トシテ試ミニ立案セルモノナルカ帝国政府トシテハ軍備縮少ノ実ヲ挙ケムカ為各国ノ保有量ヲ出来得ル限リ低減セムコトヲ主張スルモノニシテ前顕ノ試案ハ決シテ此主張ノ抛棄ヲ意味スルモノニアラサルニ付此点ニ付テハ将来誤解ナキ様明確ニ留保シ置カレ度シ

在米大使ヘ転電アリ度シ

227　昭和4年11月(28)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議日本全権への訓令内容に関する各新聞掲載記事について

ロンドン
本　省　11月28日後着

第四四二号

「タイムス」二十六日発東京特電ハ倫敦会議帝国全権ニ対スル訓令同日御裁可アリタル処其ノ要点ハ左ノ如シト報ス尚略之ト同様ノ路透通信各新聞ニ掲載セラル

㈠(イ)㈠八吋一万噸巡洋艦ニ於テ七割㈡現有潜水艦噸数ノ保有潜水艦廃止反対㈢軽巡洋艦及駆逐艦ニ於テモ七割要求但シ一万噸級ニ於ケル七割比率及潜水艦ニ於ケル「パリテイ」要求貫徹ノ場合ニハ日本全権ハ軽巡洋艦及駆逐艦ニ於テヨリ少ナキ比率ヲ受諾スルノ権能ヲ付与セラレ居レリ

(ロ)会議招請国ハ英国ナルヲ以テ日本全権ハ英国側提案ヲ待ツヘキモ実質的縮少ヲ行ハムカ為英米「パリテイ」ノ標準低下ヲ提議スヘシ

(ハ)㈠主力艦ニ付テハ噸数ハ二万五千噸口径ハ十四吋ニ減スルニ賛成ス㈡航空母艦ニ付テハ噸数ヲ一万五千噸乃至二万噸ニ減スルニ賛成ス㈢左ノ如キ艦齢制度ニ賛成ス主力艦二十五年、巡洋艦二十年、駆逐艦十六年、潜水艦十三年

米ニ転電仏ニ郵送セリ

228　昭和4年11月28日　在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮問題に関する日本の主張への新聞論評について

パリ　11月28日後発
本省　11月29日前着

第四〇六号

二十七日ノ当地各新聞紙ハ東京電報トシテ軍縮問題ニ関スル帝国政府ノ訓令ノ内容ナルモノヲ詳細報道シタルカ右ニ関シ同日ノ「タン」ハ日本カ潜水艦ノ廃止若ハ急激ナル制限ニ反対スルコトハ其ノ地理的事情ヨリ見テ当然ト謂フヘク仏伊モ日本ト利害関係ヲ同フス又軍縮問題ニ関スル日本

ノ主張ハ其ノ実際的必要ヨリ出テタルモノナルモ恐ラク英米ノ容ルル所トハナラサルヘシトノ観測ヲ下シタル上英米両国ハ自国ノ都合ノミヲ考慮シ他関係国ノ実際的必要ヲ無視スルカ如キコトナキヲ望ムト論結セリ

英、米、伊ヘ郵送シ連盟事務局ニ通報セリ

229　昭和4年11月28日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

比率問題に関する国務長官覚書に対し回訓について

本省　11月28日後7時発

第三九二号（極秘）

貴電第四一九号ニ関シ

㈠国務長官ニ対スル貴官ノ説明ハ大体我方ノ意向ヲ尽シ居リ且意見ヲ文書ニ認ムルコトハ双方ノ態度ヲ窮屈ニシ論議ヲ硬化セシムル虞アルニ付此際同長官覚書ニ対シ書面ヲ以テ回答スルコトハ之ヲ避ケ次回会談ノ節ニハ左ノ各項ノ趣旨御含ノ上可然応酬セラレ度シ

㈡覚書ニ引用セル加藤全権ノ陳述ハ貴官ヨリ説明ノ通帝国政府ノ態度ヲ一般的ニ表明シタル主義上ノ声明ニテ保有噸数及比率等ノ問題ニ関スル具体的意見ヲ示シタルモノニ非ラサルコトハ一読シテ明ナル所ナリ

元来華府会議当初ニ於ケル米国提案ニハ補助艦協定ヲモ含ミタルモノナルカ同問題ニ付テハ会議参加国間ニ意見ノ調和ヲ図ルコト到底不可能ナル情勢ナリシ為主力艦問題ニ力ヲ傾注スルコトトナリタル結果補助艦ニ関シテハ殆ント討議ヲ行フ運ヒニモ至ラスシテ協定不成立ニ終リタルモノナルカ故ニ今日ニ至リ華府会議当時ノ論議ヲ穿鑿スルモ格別有益ナル結果ヲ齎スヘシトモ思ハレス来ルヘキ倫敦会議ハ右華府会議ノ失敗ニ顧ミ過去ノ行懸リヲ離レ全然新シキ見地ヨリ補助艦問題ニ付協定ヲ行ハントスルモノナルカ故ニ比率ニ関スル我要求ニ対シテモ米国側ニ於テ徒ラニ過去ノ行懸リニ捉ハルルコトナク新シキ見地ヨリ之ヲ考量センコトヲ希望ス

㈢我国トシテ比率ニ重キヲ置ク所以及差当リ巡洋艦全体ニ対スル具体案トシテ数字ヲ示スコト不可能ナル事情ハ在英大使宛往電第三〇四号ニテ御了知アリ度シ

㈣我方ニ於テモ一方比率ノ主張ハ飽ク迄之ヲ維持スルト同時ニ他方実際的事情ニ依ル解決方法ニ付攻究スルハ必シモ無用ニ非スト認メ倫敦ニ於ケル「マ」首相トノ非公式会談ニテ先ツ八吋砲巡洋艦ニ関シ具体案ニ依ル意見交換方在英松平大使ニ電訓シタル趣長官ニ内話シ右非公式会談ノ模様ハ松平大使ヨリ逐一「ド」大使ニ通報スヘク又「ド」大使トモ同様ノ会談ヲ行フ次第ナルニ付倫敦、華盛頓両地ニテ同時ニ具体的協議ヲ進メ混乱ヲ来タスカ如キコトナキ様暫ク倫敦ニ於ケル会談ノ進捗ヲ待ツコトトシ度旨懇談シ置カレ度シ

㈤英米仮協定ニ拠レハ駆逐艦保有量ハ英米各十五万噸乃至二十万噸トナリ居ル処我方ノ見ル所ニテハ更ニ之ヲ低下スルニ非サレハ全般ニ於テ軍備拡張ノ結果トナル危険多大ナリト認メラル

㈥潜水艦ニ付質問アル場合ニハ我海軍トシテハ十万噸ヲ目標トシテ計画ヲ進メ来リタルモノナルカ協定ノ成立ヲ阻礙センコトヲ避ケムカ為漸ク八万噸ニ切リ下ケタル実情ナル旨内話シ且潜水艦ハ弱者ノ武器トシテ特ニ我方ノ重キヲ置ク所ニシテ比率ニ関係ナク右保有量ヲ要求スルモノナルカ敢テ英米トノ均勢ヲ主張スルモノニアラサルカ故ニ英米ニ於テ我保有量ヲ超過セル噸数ヲ要求スルコトニ対シテハ我国ニ於テ何等異存ナキモノナル旨ヲ説明シ置カレ度ク其機会ニ於テ参考トシテ本問題ニ関スル仏伊ノ態度ヲ質シ置カレ度シ

在英大使ヘ転電アリ度シ

230　昭和4年11月29日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

日米間予備交渉回避に関するドーズ大使の意向について

ロンドン　11月29日後発
本省　11月30日前着

第四五一号（極秘）

十一月二十九日「ドウズ」ニ会見往電第四五〇号「マ」首相ニ述ヘタルコトヲ詳細説明シ米国政府ノ好意アル考慮ヲ得タキ旨述ヘタルカ「ド」ハ右ノ話ヲ米国政府ニ取次クコトハ喜テ為スヘキモ実ハ従来大使トシテ訓令ノ下ニ英国政府ト交渉シ尚貴大使ニ対シテモ訓令ニ依リ総テ隔意ナク御話シ居リタルモ米国政府ニ於テ既ニ多数ノ全権ヲ任命シタル以上ハ特ニ政府ヨリ訓令ナキ限リ今後貴大使ト discuss ス

ルコトハ頗ル機微ノ関係アリト述ヘタルニ付本使ハ全権ノ職務ハ会議ノ開始ト同時ニ生スルモノト思ハルルノミナラス予備交渉ハ単ニ外交的ニ意見ヲ交換スル次第ニ付自分モ大使トシテ米大使ニ御話ヲスル次第ナリ仮令非公式ノ交渉ニシテモ二ケ所ニ於テ話ヲ為スコトハ動モスレハ混乱ヲ来ス虞アルニ付英国政府トノ交渉ト関連シ当地ニ於テ御話ヲスルコトヲ便宜ト思考シ此ノ点ハ出淵大使ヨリモ国務長官ニ話セラルル筈ナリト述ヘタル処「ド」ハ不取敢右ノ次第ヲ報告スヘキ旨述ヘ我説明ニ付テハ何等ノ批評ヲ避ケタリ右「ドウズ」ノ態度ニ対シテ考フルニ既ニ華盛頓ニ於テ出淵大使国務長官ノ間ニ話始マリ国務長官ヨリ覚書迄提出スルニ至リタルコトト予期以上ニ多数代表ノ任命ノ結果内輪ノ連絡ヲ面倒ト思ヒ居ルコトト日本ノ要求カ困難ヲ来スモノト考ヘタルコト等ノ為交渉ヲ避ケントセルモノカト思ハル何レニセヨ「マ」首相ト話シ居ルコトハ同時ニ米国側ト関連シテ交渉スルニ非サレハ纏リ付カサル次第ニ付当地ニ於テ従来ノ如ク隔意ナク「マ」「ド」トノ間ニ話シスル方便宜ト思考スルモ前記ノ如キ次第ニ付特ニ国務長官ヨリ訓令ヲ出サシムル様華盛頓ニ於テ話セラルルコト必要ト思ハル

米ニ転電シ仏、伊ニ暗送ス

231　昭和4年11月(30)日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

八吋砲搭載巡洋艦の隻数などをめぐるマクドナルド首相との会談について

ロンドン
本省　11月30日後着

第四五〇号（極秘）

十一月二十九日「マ」首相ニ会見シ貴電第三〇四号御訓示ノ次第ヲ詳細説明シ尚之ニ関連シ潜水艇ニ対スル我方ノ態度即チ之カ廃止ニ反対ナル次第及我保有量八万噸ニ対スル主張ヲ米宛貴電第三九二号ノ趣旨ニ依リ説明シタルニ「マ」ハ比率ヲ重要視スル我理由ニ対シテハ何等批評ヲ加ヘサリシカ八吋搭載巡洋艦ニ対スル我方ノ申出ニ対シテハ十二万六千噸カ英ノ保有量ノ七割ヨリ遙ニ超過スルコト及隻数ニ於テ十二隻トナルコトニ対シ頗ル当惑ノ色ヲ表ハシ前回同様一般ノ人ハ一見隻数ニ重キヲ置クヲ以テ斯ノ如キ日英ノ接近スル処ニ対シテ同意ノ頗ル困難ナル意ヲ表シタルニ本

使ハ然ラハ隻数ノ上ヨリ見レハ米十八隻ニ対シ英十五隻ニテハ到底英国民ノ同意ヲ得ラレサルニ非スヤト述ヘタル処「マ」ハ実ハ其ノ通ニテ国民ノ同意ヲ得ル事困難ト思ハルルモ何トカシテ之ヲ抑ヘント苦心シ居ル次第ナリ日本ノ今回ノ提議ハ重要ナルニ付静カニ研究ノ上成ルヘク速ニ意見ヲ申述フヘシト述ヘタリ

尚当分調停ニ付テモ噸数ヲ基礎トスルヨリ隻数ヲ基礎トシ其ノ内何噸ノ者ハ何隻ト言フ如ク計算スル事ヲ希望シタルカ本使ハ我方ニ於テハ噸数ヲ基礎トシテ方針ヲ立テ居リ寿府ノ会議ニ於テモ右ノ方針ニテ審議シタリト承知スル旨述ヘタルカ「マ」ハ我方ノ説明ヲ聞キ居リタルノミニテ夫レ以上何等ノ批評又ハ反対ヲ述ヘサリキ文書ニ依リ意見ヲ提出スルコトハ避ケ度キ旨述ヘ首相モ同感ナル旨申居リタルカ同首相ノ希望ニ依リ単ナル非公式心覚ヘトシテ殊ニ数ニ関スル要点ヲ記載シタルモノヲ交付スルコトトセリ

米ヘ転電シ仏伊ヘ暗送セリ

232　昭和4年11月30日

日本出発の際の若槻全権のメッセージ

昭和四年十一月三十日

若槻全権「メッセージ」

不肖今般大命ヲ拝シテ倫敦ニ使スルニ際シ一言所懐ノ一端ヲ陳フルコトヲ得ルハ最モ光栄ト感スル所テアル。御承知ノ通軍備縮小ノ事業ハ各国国情著シク相異セル今日ノ情勢ノ下ニ於テハ尚幾多ノ曲折アルヲ免レス前途坦々テアルト云フコトハ出来ナイ。不肖微力菲才ナルモ幸ニシテ政府ノ訓令指導並国民ノ支持激励ヲ得微力ノ最善ヲ致シテ此ノ重任ヲ辱シメサルコトヲ庶幾スル次第テアル。

世界ノ平和ヲ確立シ国民ノ負担ヲ軽減シ軍備縮小ノ実現ヲ期スルコトハ帝国政府ノ伝統的政策テアルコト云フ迄モナイ。帝国カ曽テ華府会議及寿府会議ニ参加シタノモ実ニ此ノ大目的ニ対スル誠意ノ一表現ニ過キナイ。今次倫敦会議ノ招請ヲ欣然受諾シ不肖等ヲ全権委員トシテ特派セラルルニ至ツタコトモ亦此ノ帝国政府ノ意ノアル所ヲ徹底セムカ為ニ外ナラナイモノト確信スル。

云フ迄モナク軍備縮小協定ノ徹底ヲ期スル為ニハ宜シク世界各国カ其ノ相互ノ関係ニ於テ一切ノ誤解及猜疑ヲ除去シナケレハナラナイ。之カ為ニハ関係各国ノ国防上ノ安全感

ヲ確立シ各国ハ相互ノ国情ヲ諒解シ苟クモ疑念ヲ挾ムヘキ余地ヲ無カラシメナケレハナラナイ。帝国政府ハ未タ曾テ何国ニ対シテモ攻撃戦争ノ準備ヲ企画シタコトハナク帝国ノ要求スル所ハ要スルニ他国ノ攻撃ニ対シテ防禦スルニ足ル程度ノ軍備テアル。帝国ハ何時ニテモ此ノ意味ニ於ケル最少限度迄ノ大々的縮小ヲ実行スルノ用意カアルモノテアツテ帝国ノ主張ハ実ニ公正ニシテ合理的ナモノテアル。若シ倫敦会議ニ於テ此ノ帝国ノ主張カ各国ニ依ツテ受諾セラレルコトトナレハ各国ハ内ハ国民負担ヲ軽減シ外ハ世界平和ノ保障ヲ確立スルモノテアル。

不肖ハ任ノ重且大ナルヲ自覚シ鋭意最善ノ努力ヲ尽サムト堅ク決意スルモノテアルカ国民一般ニ於テモ此ノ世界的大事業成就ノ為充分ナル協力ト支持トヲ与ヘラレムコトヲ希望シテ止マナイモノテアル。

233　昭和4年12月3日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題などに関するスティムソン国務長官との会談について

ワシントン　12月3日前発
本　省　12月3日後着

第四六二号（極秘）

貴電第三九二号ニ依リ二日国務長官ニ会見軍縮問題ニ関シ一時間余ニ亘リ懇談ヲ遂ケタル結果左ノ通

㈠先ツ本使ヨリ十一月十二日貴長官ヨリ手交セラレタル覚書内容及当日会談ノ次第ハ早速本国政府ニ電報シ置キタル処右ニ対シ今般回訓ニ接シタルカ政府ハ右会談ノ際本使限リノ腹蔵ナキ意見トシテ申上タル事項ニ対シ大体承認ヲ与フルト共ニ特ニ次ノ二点ニ付長官ノ注意ヲ喚起スヘキ旨申越セリト前置シ貴電第三九二号ノ㈠ノ要旨ヲ述ヘタル処長官ハ本使ノ提言ヲ熱心ニ聞キタル上華府会議当時補助艦ノ比率ニ関シ何等協定ヲ見ルニ至ラサリシコトハ成程貴説ノ通ナルヘシ自分カ態度変更ナル言葉ヲ用ヒタルハ或ハ実際ニ当ラサルヤモ知レサルニ付此ノ点ハ訂正スヘキカ只茲ニ特ニ御諒解願ヒタキハ華府会議ニ於テ主力艦ニ関スル五五三ノ協定成立シタル事実ニ鑑ミ今回補助艦ニ関シ夫ヨリ大ナル比率ヲ定ムルコトハ米国国論ノ容易ニ容認シ得サルヘキコトナリト述ヘタルニ付是ニ対シ本使ヨリ先般来屢々御話シタル通七割ノ主張ハ実際ノ必要ニ基キ且日本国論ノ一致セル処ナルニ付是非トモ貴国側ノ同情アル考慮ヲ求メサルヲ得ス尤日本政府トシテハ右主張ハ飽ク迄之ヲ支持スル建前ノ下ニ貴長官カ過日覚書中ニ述ヘラレタル実際ノ事情ニ基キ意見ノ交換ヲ試ミルコトニ付テハ素ヨリ異存ナキ処ナリト述ヘタルニ長官ハ日本側ニ於テ右ノ如キ意見ノ交換ノ有益ナルコトヲ認メラレタルコトハ自分ノ深ク満足トスル処ナリト述ヘタル後御話ノ途中別問題ニ移ル嫌アルヤモ計リ難キモ倫敦会議ニ対スル根本方針ニ付卑見ヲ述ヘ幣原男ノ御同意ヲ得タキコトアリトテ次ノ如ク語レリ

㈡華府会議当時米国政府ノ執リタル態度カ果シテ適当ナリシヤ否ヤハ今日批評スルコトヲ欲セサルモ当時米国政府ハ関係各国ノ海軍縮少ニ関シ一定ノ案ヲ携ヘテ会議ニ臨ミタル為関係各国ヨリ恰モ米国ハ自己ノ成案ヲ押付ケムトスルモノナリトノ誤解ヲ受ケ又米国自身トシテハ同会議ノ結果最多クノ犠牲ヲ払フノ已ムヲ得サルニ至リタル事情ニ顧ミ今回ハ華府会議ト全ク行方ヲ変ヘ会議ノ劈頭公開ノ席上ニテ各国全権ヨリ軍縮問題ニ関スル各自ノ理想ヲ述ヘ引続キ秘密会ニ於テ各国夫々其ノ希望スル処ヲ陳述シ互ニ胸襟ヲ開キ所見ヲ交換シ大体ノ協定ニ達スル見込付キタル場合ニ適宜会議ヲ公開シテ其ノ結果ヲ世上ニ知ラシムルカ如キ仕組トシ始メヨリ議論ニ花ヲ咲カセ新聞記者ニ材料ヲ与フルカ如キコトトナラサル様致シタク右ニ関シテハ何レ関係各国トモ追々相談致スヘキカ先ツ以テ日本政府ノ賛同ヲ得タシト切言セリ

右ニ対シ本使ヨリ御話シノ次第ハ幣原大臣ニ於テモ同感ナルヘシト思考スルモ兎ニ角早速電報ノ上何分ノ儀改メテ御返事スヘシト述ヘタリ

㈢次ニ本使ヨリ補助艦ト比率問題トノ関係ニ付先刻日本政府ノ所見ヲ申上タルカ要スルニ日本トシテハ今日ニ於テハ華府会議ノ際トハ事情変化シ居リ今更既往ノ行懸リニ付論議ヲ重ヌルモ詮ナカルヘシトノ意見ニテ専ラ新ナル事態ヨリシテ協定ニ達セントスル趣意ナリ而シテ前述ノ如ク飽迄モ七割ノ比率ヲ支持スルハ勿論ノ次第ナルカ実際ノ事情ニ基キ討議ヲ進ムルコトモ一ノ方法ト認メタル次第ニテ先ツ松平大使ヲシテ「マ」首相トノ間ニ不取敢八吋砲巡洋艦ニ付談合ヲナサシムルコトニ決シ同大使ハ既ニ「マ」首相ト一応ノ会談ヲナシ其ノ結果遂ニ「ド」大使ニ御話ヲ致シタル筈ナレハ既ニ「ド」大使ヨリ報告

ニ接セラレタルナラント述ヘタルニ長官ハ確ニ「ド」大使ヨリ報告ニ接シ居レリ尤モ未タ篤ト研究ヲ遂ケ居ラサルモ右松平大使所述ノ貴国政府ノ希望諸項ハ米国ニトリテモ同意ヲ困難トスル所ナルカ英国政府トシテハ最モ困難ヲ感スヘシトノ意向ヲ洩ラシ

(四)右ノ機会ニ貴電第三九二号ノ(四)及松平大使発閣下宛第四五一号末段ノ次第モアリタルニ付本使ヨリ長官ニ対シ此ノ際実際ノ事情ニ基ク意見交換ヲ華府及倫敦ノ(脱)ニテ行フハ混乱ヲ来ス虞アルニ付「ド」大使ニ就キ同大使ニ於テ松平大使ヨリ聞込マレタルコトハ一々詳細華府ニ報告スル一方松平大使ト随時意見ノ交換ヲ行ヒ倫敦ニ於テ日英米三国間ノ談合進行ヲ促進スルコト適当ナラスヤト思ハルト述ヘタルニ長官ハ松平大使ト「ド」ノ間極メテ隔意ナク談合行ハレ居ルコトハ自分ノ頗ル満足ニ思フ所ナルカ実ハ「ド」ハ英米間ノ談合ニ関スル方針ハ能ク心得居ルモ日本其ノ他ノ国トノ関係ニ付テハ未タ深ク承知スル所ナシ又今日ノ時期ニ於テ日米関係ニ関シ一々「ド」ヲ指図スルコトモ種々ナル事情ヨリ不便ナリ貴見ノ次第ハ一応尤モナルモ暫ク熟考ノ時日ヲ与ヘラレ度シト述ヘタリ

(五)次ニ本使ヨリ実際ノ事情ニ基ク意見交換ニ付日本政府ニ於テ別段異存ナキ次第ハ前ニ申上ケタル通ナルカ英米国間ノ談合カ的確ナル具体的協定ニ達シ居ラサル現状ニ於テハ日本側トシテモ一定ノ具体案ヲ提示スルコト困難ナル次第ニシテ松平大使ノ「マ」首相ニ申出テタルコトモ実ハ仮ニ米国ニテ大型十八隻ニ同意スルモノト看做シ口ヲ切リタル迄ナル次第ニ付其ノ辺誤解ナキヲ希望ス将又貴長官ニ於テ実際ノ事情ニ基ク意見交換ヲ主張セラルル以上日米間ノ具体的解決案ヲ有セラルルカト察セラルル処右ニ付テ長官限リノ御意見ヲ承ルヲ得ヘキヤト述ヘタルニ長官ハ暫ク考ヘシ後日本側ニテハ米国保有ノ大型巡洋艦ニ対スル七割ノ比率ト補助艦全体ニ対スル七割ノ主張ト何レニ重キヲ置カルルヤト尋ネタルニ本使ヨリ両者共ニ重キヲ置ク点ニ於テ毫モ異ナル点無シト答ヘタルニ長官ハ兎ニ角尚篤ト考慮ヲ廻ラシタキニ付右ニ対スル意見ノ開陳ハ今少シ待タレタシト述ヘタリ

(六)次テ本使ヨリ各艦種ニ言及シ主力艦ノ問題ニ付テハ先日御話ノ次第東京ニ電報シ置キタルモ折角考究中ト見エ今

以テ何等回訓ニ接セス又潜水艦ニ関シ日本ハ八万噸ノ「パリチー」ヲ主張スル考ナル旨過日来新聞紙ニ伝ヘラレ相当世人ノ注意ヲ喚起シ居ル如キモ日本政府ニ於テハ八万噸ヲ必要ト思考シ居ルノミニテ決シテ「パリチー」ヲ主張スルモノニ非サルニ付其ノ点誤解ナキ様願度シト述ヘタルニ長官ハ米国ノ現在保有量ハ約七万五千噸ニ過キサルヲ以テ八万噸ヲ主張セラルルコトハ甚タ米国ノ意外トスル処ナリト述ヘタリ次テ英米側ノ駆逐艦保有量十五万噸乃至二十万噸ハ日本側ニ於テ多キニ失スルモノト認メ居ル旨ヲ告ケタルニ長官ハ自分トシテハ駆逐艦問題ハ更ニ重キヲ置カス他日充分相談ノ余地アルヘシト語レリ

(七)最後ニ貴電第三六五号御訓令ノ要旨ヲ述ヘ日本ニ対スル米国ノ輿論概シテ友誼的ナルハ長官始メ政府当局者ノ輿論指導ニ負フ処大ナルヘク右ハ日本政府ノ多トシ居ル処ニシテ幣原大臣ハ海軍問題ノ円満ナル協定ニ依リ日米ノ親善関係増進ノ為益々貴長官ト協力シタキ意見ナルコトヲ述ヘタルニ長官ハ米国ノ国論指導ノ如キハ微力ナル自分一己ノ容易ニ為シ得ル処ニ非サルモ幣原男ノ見ラルル通リ日本ニ対スル一般国論ノ良好ナルコトハ正ニ事実ニ相違ナキヲ以テ此ノ傾向助成ノ為努力スルコトハ自分ノ最モ本懐トスル処ナリ右ノ点特ニ幣原男ニオ伝ヘヲ請フト述ヘタリ右ニ関連シ本使ヨリモ自分ハ日米間ニ経済的文化的提携ヲ促進スルコトヲ以テ自分ノ重要ナル使命ト心得居ルト共ニ差向キ海軍協定及排日立法修正ノ二問題ヲ満足ニ解決スル様努力シタキ決心ヲ有スル次第ナルカ海軍問題ハ倫敦会議ニ於テ必ス円満ナル解決ヲ見ルニ至ル可ク又排日立法修正問題モ親シク日本ヲ承知セラルル「フーバー」大統領及貴長官ノ在任中ニ円満解決ヲ見ルニ至ルヘシト確信シ居ル旨ヲ特ニ思フ処アリテ付言シタルニ長官ハ排日立法通過ノ際ニハ自分モ深ク之ヲ遺憾トシタル一人ナルヲ以テ将来適当ノ時機ニ至ラハ右修正ノ為ニ努力ヲ試ミル積ナリト極メテ熱心ナル態度ヲ以テ応酬セリ

英ニ転電セリ

234　昭和4年12月9日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議への仏国の態度及び仏伊関係に関するクローデル仏国大使及びキャッスル国務次

官補の談話について

ワシントン　12月9日後発
本　省　12月10日前着

第四九三号

㈠御承知ノ「フランク、サイモンズ」ハ往電第四九二号ノ通当地「スター」紙ニ寄稿シ居レル処八日夜仏国大使「クロウデル」ニ面会ノ際夫レトナク其ノ底意ヲ探リタル処同大使ハ仏国トシテハ華府会議当時ト同様主力艦ノ比率ヲ補助艦ニ其ノ儘適用スル事ハ絶対ニ承諾スルヲ得ス一方伊国ノ対仏「パリチー」要求モ容認不可能ナリ聞ク所ニ依レハ日本ハ七割ヲ要求シ居ラルル趣ナルカ之等ノ事態ヨリ考フルニ倫敦会議ハ満足ナル結果ヲ得ラレサルヘシトテ極メテ悲観的観察ヲ下シタリ

㈡九日「キヤツスル」次官補ニ面会シタルニ仏伊ノ関係ニ付同官ノ腹蔵ナキ意見ヲ求メタルニ大要左ノ通

仏ハ補助艦ニ対シ華府条約ノ比率以上ニ多大ノ要求ヲナスコト並英国ハ仏ニ強大ナル補助艦ヲ与フルヲ欲セサルコトハ周知ノ事実ナリ昨年英仏間ノ海軍協定成立セル際仏ニ対シ補助艦ニ付「パリチー」乃至可成大ナル比率ヲ認ムル秘密協定成立セル旨伝ヘラレタルコトアリシモ米国政府ハ斯ル事ナシト認ム「タルジュウ」内閣ハ相当保守的ニテ比率問題ニ就テ可ナリ強キ主張ニ出ツヘシト観察セラルルモ「タ」自身ハ会議ニ二十三日出席スルノミニテ其ノ後ハ主トシテ「ブリアン」カ衝ニ当ル模様ニ付旁ラ米国トシテハ仏ノ態度ニ対シ新聞紙ノ伝フルカ如キ悲観論ヲ有セス尤モ極ク内密ノ御話ナルカ実ハ最近「クロウデル」大使来訪ノ際依然トシテ倫敦会議ノ決定ハ国際連盟ノ承認ヲ前提トスル如キ主張ヲナシ居タルニ付自分ハ同会議ノ決定ハ definite and final ナルコトヲ明カニシ置キタリ仏国トシテハ連盟トノ関係上倫敦会議ヲ最終的ノモノトセサルコトヲ主張スヘシト思ハルルカ右ハ素ヨリ吾人ノ念頭ニ置カサルヘカラサル処ナリ又伊国ハ独リ海軍ノミナラス陸軍及空軍ニ就テモ仏ト均勢ヲ維持シ度キ考ト認メラルル処海軍ニ関スル仏伊交渉ノ真相ハ実ハ米国政府ニモ余リ良ク解リ居ラス唯最近ノ情報ニ依レハ伊ハ対仏「パリチー」ノ主張ヲ幾分緩和シツツアリ結局何等カノ妥協点ヲ発見シ得ルニ至ルヘキカト思考セラル尤モ伊モ仏同様今回ノ会議ニ対シ非常ニ熱心ト云フ次第ニハ非サルコトニ付テハ申ス迄モナシト述ヘ大体

ニ於テ全ク悲観シ居ラサル模様ニ見受ケタリ

英ニ転電シ、英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

235　昭和4年12月9日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

非公式会談内容漏洩防止に関する希望及び隻数による均衡論などに関するマクドナルド首相の談話について

ロンドン　12月9日後発
本　省　12月10日前着

第四七一号

十二月九日「マ」首相ニ会見ス「マ」ハ先ツ甚シク自分ヲ悩マセルコトアリトテ非公式会議ノ内容殊ニ自分ノ貴大使ニ述ヘタルコト迄日本新聞ニ現ハレ之カ為多少反英気分煽ラレ居ル如キ模様アルコトハ頗ル迷惑トスル所ナリト述ヘタルニ付本使ハ交渉ノ初メニ当リテ或ハ漏洩セルニ非スヤト思ハルル東京通信電報ヲ当地新聞ニテ見タルコトアリタルヲ以テ直ニ政府ニ電報シ極秘ニ付スヘキ手段ヲ講スル様希望シ置キタルカ其ノ後何等漏洩セル如キ報道ヲ見ス尤モ其ノ後到着セル日本新聞記事中ニハ既ニ帝国政府当局カ言明セル我方針ヲ貴我交渉ニ適用シ記事ヲ作成シ居ルモノヲ散見セルモ右ハ素ヨリ正確ナルモノニ非スト述ヘタル処首相ハ隔意ナク自由ニ意見ヲ交換シ居ル際ナル故会見ノ事実ニ付テハ素ヨリ秘密ニ付スル要無キモ内容ニ関シテハ漏洩無キ様希望スル旨述ヘ本使ハ至極同感ナルニ付尚一層注意スルコトトスヘキ旨ヲ述ヘタリ「マ」ハ前回述ヘラレタルコトニ付テハ篤ト考慮ヲ加ヘタルカ日本カ現ニ建造シ又ハ建造シツツアル八吋搭載艦ノ噸数ハ既ニ英国ノ夫レニ比シ七割四分ヲ占メ居ルニ付夫レ以上トナスコトハ頗ル困難トスルノミナラス仮ニ日本ノ云フ如ク更ニ過渡期ニ於テ二隻ノ建造ヲ許ス事トセハ古鷹級ノ艦齢ヲ二十年ト看做シ一九四六年又ハ七年ニ至ル迄十四隻ヲ日本ニ於テ維持スルコトトナリ一時的ノ便法ト云フモ可成リ長期ニ亘ル事トナリ到底英国民ヲ納得セシムル事能ハサルヘシ米ニ於テモ未タ十八隻ヲ以テ満足シタル次第ニモアラス又日本モ十二隻ヲ以テ満足セラレサルニ付自分トシテハ英十五米十八日十二トセハ「エクリブリアム」ヲ保ツヘキ旨繰返シタリ又潜水艦ニ付テハ日本ニ於テ八万噸ヲ要求セラルルコトハ現在日本ノ有スル所ニ比シ更ニ一万噸ノ拡張トナリ英国ノ有スル所ノ

モノニ比シ三万噸ヲ超過スルコトトナルトテ難色ヲ示シタリ本使ハ第一ノ点ニ付テハ日英両国ノミノ関係ニ於テハ七割ニ下ル迄更ニ減縮スルコトモ差支ナカルヘク又米国ノ数カ英国ノ保有量ト同数ニ下リ居レハ之亦日本ノ数ヲ低下シ得ヘキモ英国側ニ於テ米国ノ十八隻ヲ認ムルコトトナレハ日本ハ国防安定ニ関スル既定ノ方針上米国ヲ標準トシテ計算ヲ立テサルヘカラサルニ付其ノ結果英国側トノ比率カ上ルモ已ムヲ得サル次第ナリ又第二点ニ関シテハ隻数ニ於テ十四隻トナルモ古鷹級及新造セラルヘキ二隻ヲ加ヘタルコトハ代艦期後ニ造ラルヘキ十三隻ノ勢力ヨリ劣勢トナルヤニモ見ラレルニ付必スシモ隻数ヲ以テ論スル必要モナキ様思ハル何レニセヨ貴総理ノ御話ハ帝国政府ニ報告スヘシ潜水艦ノ現在ニ関シテハ首相ノ有シ居ル数ト本使ノ有シ居ル数ト多少相違アリ本使ハ日本ニ於テハ既製艦六万六千六百二十七噸建造中ノモノ一万一千八百七十噸合計七万八千四百九十七噸トナリ約八万噸トナル次第ナルカ将来十万噸迄ニ達セシムル目的ヲ有シ居リタルモ右ハ今回ノ会議ニ鑑ミ打切リ八万噸ヲ以テ満足スル次第ナル旨ヲ述ヘタルカ数ニ於テ多少差異アリタルニ付更ニ双方研究スルコトトセリ首相ハ尚潜水艦ニ関シテハ英国トシテ既ニ表明セル如ク全廃ヲ希望スルモ多数海軍国カ之ニ反対ナル模様ニ付決シテ右主張ヲ押シ通サントスル如キコトハ無カルヘシ併シ成ルヘク各国ノ所有量ヲ制限シタキ希望ナルカ此ノ点ニ関シテハ先ツ欧州諸国トノ振合ヲ考量セサルヘカラス今日迄未タ仏伊ノ意向ニ付何等通報ニ接セス併シ日本ニ於ケル八万噸ノ如キハ或ハ欧大陸諸国ヲ却テ刺戟スル虞ナキヤヲ憂フル旨ヲ述ヘ居リタリ此ノ点ニ付テハ面会人等多数来訪ノ為引続キ論議スル暇ナク次回ニ譲ルコトトセリ首相ハ最後ニ日本側ニ於テ前回述ヘラレタル主張ヲ飽迄維持セラルルニ於テハ到底協定ノ成立ヲ見ルコト不可能ナルコトヲ恐ルル旨ヲ述ヘタリ尚大分時期モ迫リ来レルニ付成ルヘク急ク必要アリト述ヘタルニ付本使モ全権一行既ニ出発セルニ付促進ノ必要ヲ述ヘタルカ「マ」ハ細カキ点ニ付テハ或ハ貴館付海軍武官ヲシテ米国局長「クレーギー」ト会談セシムルモ一策ナリト申居リタルニ付先方ヨリ通報アリ次第佐藤、島津両大佐ヲ差出ス積リナリ

236 昭和4年12月11日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

交渉行詰りの局面打開方に関し請訓について

ロンドン 12月11日後発
本省 12月12日前着

第四七三号（極秘）

往電第四七一号「マ」首相ト会談ノ結果ニ対シテハ目下御考量中ノコトナルヘク又会議ニ於テ帝国政府最後ノ態度ニ付テハ既ニ首席全権ニ対シ御訓示相成居ルコトト思考スル処既ニ今日迄累次ノ報告通リ英米ニ対シ我方主張ハ反復説明セラレ居ルニ拘ラス我方今日迄ノ提議ノ形ニ於テハ到底応諾ノ模様ナキコトハ「マ」首相最近ノ会見ニ於テ言明セル通リニ有之此ノ上同様ノ理由ヲ以テ会見ヲ重ヌルモ本使ノ得タル印象ニテハ先方ヲシテ同意セシムルコト不可能ト観察セラル而シテ万一帝国政府ニ於テ七割説殊ニ大型巡洋艦ニ於テ米ノ七割ヲ要求スルコトニ付一歩モ譲ラレサル御方針ナルニ於テハ結局我方ノ関スル限リ決裂スルノ外ナカルヘシト思考セラル而シテ万一帝国政府ノ御方針トシテ会議ヲ成功セシムル為妥協案ヲ用意シ居ラルル場合予備交渉ニ於テ之ヲ開示セラレ英ニ交渉ヲ継続スルコトトセラルルカ或ハ少クトモ巡洋艦ニ関スル部分ヲ打切リ会議開催後ニ更ニ論議ヲ新ニセラルルカニ関シテハ既ニ御成案アルコト思考スルモ当方ニ於テ見ル処ニ於テハ若シ帝国政府ニ於テ万已ムヲ得スンハ必スシモ対米七割ニ固執セラレス成ルヘク之ニ近キ割合ニ於テ纏マル御方針ナルニ於テハ目下ノ如ク極メテ非公式ニ且輿論等外部ノ刺戟ヲ受ケスシテ卒直ニ話シ得ル機会ニ於テ英米トノ諒解ヲ得置クコト有利ニ非サルヤト思考ス

会議開催後ノ発展ハ勿論今日予測シ得サルモ仏、伊カ参加ノ結果之等トノ権衡上且彼等ニ対スル英米態度ノ振合上並新聞等ノ宣伝等モ相当進展スヘク旁我方ニ取リ今日ヨリ不利ナル状況ヲ来ストモ一層有利ノ状態ヲ来スコトハ困難ニ非スヤト思考ス素ヨリ此ノ際仮令妥協点ヲ提出セラルルモ果シテ夫ニテ纏マルコトハ期シ難キモ之ニ依リ充分論議ヲ尽シタル上纏マラサルニ於テハ会議ニ移スモ遅カラサルヘシト思考ス当国議会モ多分二十日ヲ以テ休会トナル模様ナルニ付首相モ其ノ後ハ休暇ヲ取ルニ至ルヤモ知レス従テ「クリスマス」前ヨリ年末迄ハ交渉中止トナルヘキニ付成ルヘク速ニ何分ノ御回示ヲ仰キ尚今十一日朝他用ヲ以テ「ドウズ」ニ面会ノ際「ド」ハ矢張政府ヨリ訓令ナキ限リ

「マ」ト本使トノ交渉ニ立入リ又ハ本使トノ間ニ非公式交渉ヲ為スコトヲ避ケ居ル旨申居リタリ
米ヘ転電セリ

237 昭和4年12月11日 幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）
会議の議事方法及び主力艦問題などに関し回訓について

本省 12月11日後6時発

第四一三号（極秘）
貴電第四六二号ニ関シ
㈠倫敦会議ノ議事方法ニ関スル国務長官ノ意見ニ対シテハ我方ニ於テ何等異存ナキニ付其旨同長官ニ回答セラレ度ク帝国政府トシテハ対英回答中ニモ明記シタル通会議開催前ノ非公式会談ニ重キヲ措クモノニシテ重要問題ニ付テハ右非公式会談ニ依ル予備的交渉ニテ協議ヲ纏メ置キ本会議開会ノ際ニハ最モ平和ナル空気ノ中ニ国際和親ノ実証ヲ中外ニ示シ度希望ナルニ付国務長官ニ於テモ此意味ニ於テ会議開催前ノ予備的交渉ヲ是非成功セシムル様協力アリ度旨申添ヘラレ度シ
㈡我方ニ於テ実際ノ事情ニ依ル解決方法ノ攻究ヲ倫敦ニ於テ為サムコトヲ希望スルハ固ヨリ日米間ノ非公式会談ヲ華府ニ於テ為スコトヲ避ケムトスル次第ニハ非ス唯タ具体案ニ付テノ交渉ヲ両地ニテ同時ニ行フトスレハ実際上ノ問題トシテ混雑ヲ来タス虞アルヘシト考ヘタル為ニシテ此辺ノ事情ニ付テハ国務長官ニ於テモ何等誤解ナキコトトハ存スルモ為念同長官ニ篤ト説明シ置カレ度シ
㈢主力艦協定隻数ノ減少ハ保有隻数ノ少キ国ニ不利ノ結果ヲ齎シ減少ノ程度ニ依リテハ比率改訂ノ必要ヲ生スルニ至ルヘキヲ以テ我方トシテハ右ノ如キ困難ナル問題ヲ伴フ虞ナキ艦型ノ縮小ヲ採用シ度キ意向ナルカ何レニスルモ代換開始期ノ延長ニ付テハ各国トモ強キ反対ナキ模様ナルニ付先ツ以テ此点ニ付協議ヲ纏メ右協定ノ見込立チタル後隻数、艦型、艦齢等ノ問題ニ移ルコトヲ適当トスヘシ就テハ米国側ヨリ重ネテ主力艦問題ニ関スル我方ノ所見ヲ求ムルニ於テハ右ノ趣旨ニテ可然応酬セラルル様致度シ
英ヘ転電シ英ヲシテ往電第三九二号及貴電第四六二号並在英大使宛往電第三〇四号ト共ニ仏伊ニ暗送セシメラレ度シ

238 昭和4年12月12日 在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）
比率問題に関する日米の争点を紹介したタイムス記事について

別電 十二月十二日在英国松平大使より幣原外務大臣宛第四七九号
右タイムス記事内容

ロンドン 12月12日後発
本省 12月13日前着

第四七八号
「ドウズ」過般華府ニ立寄リ帰任シタル際在華府「タイムス」通信員ハ時々大統領国務長官ニ面会シ居リ其ノ通信ハ其ノ筋ヨリ「インスパイヤ」サレ居ル様子ニ付今後該通信ニ対シテハ相当注意スルコト然ルヘキ旨内話シタルコトアリタルカ別電第四七九号ノ如キモ或ハ其ノ一ニ非サルカトモ思ハルルニ付御参考迄ニ詳報ス
別電ト共ニ米ニ転電セリ

（別電）

ロンドン 12月12日後発
本省 12月13日前着

第四七九号
十一日発「タイムス」華府特電
米国全権ハ日本全権ノ華府到着ト共ニ開カルヘキ会議ニ対スル準備中ナルカ日本カ其ノ際巡洋艦ニ関スル限リ五—五—三比率ヲ十—十—七ニ変更方ヲ提議スヘキハ疑ナキカ如ク同時ニ右ハ米国ノ承認ヲ得ル能ハサル事モ亦明白ナリ本問題ニ就テハ未タ何等公式ノ言及ナシト雖右日本ノ申出ニ対シ米国側カ如何ナル反対理由ヲ持出スヘキヤハ予言スルニ難カラス恐ラク米国ハ日本全権ニ対シ五—五—三ノ比率ハ華府条約ニ規定セラルル唯一ノモノニ非ス之ヲ前後ノ関係規定ヨリ切離シ得ヘキモノニ非サルコト注意スヘシ即チ右比率ト太平洋防備現状維持ヲ規定スル華府条約第十九条トハ直接関係アリ米国政府ノ見ル処ニ依レハ右関係ハ頗ル密接ニシテ若シ根拠地ニ関スル自制的協定ナカリセハ五—五—三比率ニ同意スルコト殆ト不可能ナリシナルヘク従テ同時ニ右第十九条及其ノ包含事項ヲ再考スルニ非サレハ比率ノ重要ナル変更ハ不可能ナルヘキ処如斯ハ頗ル多数ノ重大問題ヲ包含シ結局華府会議ノ主タル業績タル西部太平洋主要国間関係ノ改善ヲ阻止スルノ虞アリ尤些少ノ譲歩又ハ細目ノ改正ヲ妨クルモノニ非ス要スルニ右ハ米国カ華府会議規定ノ基礎的事実ヲ変更スルヲ欲セサルコトヲ示スモノ

ナリ華府ニ於テハ日本全権トノ接触ハ協定ノ成立ニ資スルコト大ナルヲ確信シ日本ニ対スル各艦種ヲ含ム五―五―三比率ノ維持モ交渉可能ナルヲ信シ居レリ

米ニ転電シ仏ニ郵送セリ

239　昭和4年12月13日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議へのイタリアの態度及び全権の顔触に関するロッソの談話について

ローマ　12月13日後発
本　省　12月14日後着

第一〇八号

伊国ハ潜水艦問題ニ付英米ト協調スルニ決シタル旨「タイムス」ニ掲載セラレタリトノ倫敦電報十二日夕「ステフアニ」ニ発表セラレタルカ右事実確カメ旁十三日「ロソ」ヲ往訪シタルカ其ノ聞込左ノ通

㈠伊国ハ場合ニ依リテハ潜水艦全廃又ハ制限ノ問題ヲ討議スルモ差支ナシトノ意向ヲ有シ右ハ会議開催後ノ形勢如何ニ関スルコトトナルヘキヲ以テ何等予メ態度ヲ決セサル次第ナリ

㈡「ブリアン」外相ヨリ在仏伊国大使ニ対シ手交セル回答ハ伊国側ノ提案ニ何等直接触ルルコトナク伊国側カ曩ニ寿府軍縮準備委員会ニ提出シタル所ヲ繰返シ提出シ居レリ伊国政府ハ差当リ英国政府ヨリノ会議 procedure ニ対スル通知ニ付研究中ニシテ自然対仏交渉ハ一時中止ノ状態ナルカ右仏回答ニ対シテハ其ノ後ニ態度ヲ定ムルコトトナルヘキ処最近仏国側ノ態度硬化ノ徴アルハ確カナルモ伊国ハ尚交渉ノ成立ニ希望ヲ繋キ居レリ万一会議開会迄ニ何等解決ヲ見サルニ於テハ倫敦ニ持越スノ外ナカルヘシ

㈢伊国全権ハ昨日確定シ英国政府ニ通知シタルカ其ノ顔触左ノ通

外務大臣　Grandi
海軍大臣　Sifianni
在倫敦伊国大使　Bordonaro
上院議員海軍大将　Acton
尚専門家トシテハ外務省側ヨリハ自分（「ロソ」）海軍側ヨリハ軍令部長 Burzaglo カ顧問タル外 Raireri Biscia 両大佐其ノ他数名任命セラルヘシ右ノ内「アクトン」大

将ハ華府会議等ノ伊国全権顧問タリシ人ニシテ「ルスポリ」「ビシヤ」ハ従来連盟軍縮会議事業ニ関係アリ「ルスポリ」ハ寿府会議ニ伊国「オブザーバー」トシテ出席セリ

米ニ転電シ英、仏ニ暗送シ仏ヲシテ連盟事務局ニ転報セシム

240　昭和4年12月13日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

会議の議題及び議事手続に関し英国側より覚書手交について

本省　12月13日後6時発

第三二〇号

十二月十日在京英国大使館参事官外務次官ヲ来訪シ左記要旨ノ覚書ヲ手交シ帝国政府ノ所見ヲ求メタルニ付次官ヨリ研究ノ上追テ何分ノ回答ヲナスヘキ旨挨拶シ置キタリ

覚　書

英国大使ハ来ルヘキ海軍会議ノ議題案及同会議ノ議事手続ニ関スル英国政府ノ所見ヲ日本国外務大臣ニ提示ス

英国政府ハ会議ノ目的ヲ to attain agreement on the reduction of existing naval strength and programmes, and on the limitation of war vessels on the basis of mutually accepted strengths ト定メンコトヲ提議スルモノナルコトヲ日本国政府ノ内密ノ参考迄ニ申進ス右均衡ノ達成セラルヘキ日時ハ一九三六年十二月三十一日タルヘク該協定ノ基礎ハ将来ノ会議ニ於テ改訂セラルル迄引続キ列国海軍ノ規準タルヘキモノトス

英国政府ハ成ル可ク早目ニ帝国政府カ右提議ニ対スル何分ノ所見ヲ回示セラレンコトヲ希望ス

覚書別紙

㈠会議ハ「セント、ヂエイムス」宮ニ於テ之ヲ開催ス但シ第一回公開総会ハ上院「ローヤル、ギヤラリー」ニ於テ開催ス

第一回公開総会ハ一月二十一日午前十一時開会シ議長副議長及事務総長ノ選任ヲナシ英国首相ノ歓迎演説（簡単ニ海軍々縮ノ歴史ヲ概説スルニ止メ何等具体的提案ヲナサス）及各国首席全権ノ一般的答辞（各全権ノ会議ニ対スル協力及会議ノ成功ニ対スル希望ヲ宣明スルニ止メ討議ヲ開始シ又ハ各国ノ立場ヲ陳述スルモノニ非ス）アル

ヘシ

(一)非公開ノ総会ハ一月二十三日午前十時開会シ議事手続ヲ討議シ且二個ノ委員会ヲ任命ス

第一委員会ハ各艦種ノ凡テニ付別個ニ且順次ニ討議ス討議ノ順序ハ委員会之ヲ決定ス（各艦種ニ付各別ノ委員会ヲ設クルハ各艦種間ノ interconnection ヨリ見テ望マシカラスト思考ス）本委員会ハ艦種間ノ噸数融通問題ヲ考慮ス又一般的又ハ専門的性質ノ小委員会ヲ任命スルコトヲ得

第二委員会ハ議事手続ノ問題ヲ取扱ヒ各国二名以下ノ全権委員ヲ以テ構成シ会議ノ当初並会合ノ各階程ニ於テ議事日程及議事手続ノ問題ヲ取扱フヲ以テ其ノ目的トス

(三)第一委員会ノ議長ニシテ同委員会ノ任務終了セリト思考スル場合ハ其旨会議ニ報告シ会議ハ総会ヲ再開スヘシ

(四)会議ノ公式用語ハ英仏語トス

尚本件覚書ノ原文ハ直接英国外務省ヨリ入手セラレ度シ米ヘ転電シ仏伊ヘ暗送アリ度シ

241 昭和4年12月13日 幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

我が全権と大統領、国務長官との会談に関する新聞発表の形式など連絡方について

本省 12月13日後6時発

第四一七号

帝国全権及大統領国務長官ノ会談ニ関シテハ不必要ニ世論ヲ刺激セス又第三国ノ疑惑ヲ招カサル範囲内ニ於テ或程度迄新聞紙ニ発表スルコト輿論ヲリードスル見地ヨリ必要ナリト認メラルルニ付右予メ米国側ト打合セノ上会談終了後発表ノ形式内容範囲等遅滞ナク電報アリ度シ

242 昭和4年12月14日 在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議の議事方法、比率問題及び輿論指導方法などに関する国務長官との会談について

ワシントン 12月14日後発
本省 12月15日前着

第四九九号（極秘）

貴電第四一三号及第四一七号ニ関シ

十四日国務長官ヲ往訪会談要領左ノ通

(一)本使ヨリ貴電第四一三号(一)ノ趣ヲ述ヘタルニ長官ハ深ク

満足ノ意ヲ示シ英国政府ニ於テモ大体米国側ノ意向ニ同意ヲ表シタル旨内話セリ

(二)次テ本使ヨリ前記貴電(二)ニ付篤ト御趣旨ノ存スル処ヲ説明セル処長官ハ軍縮問題ニ付テハ現ニ当地ニ於テ貴大使ト意見交換シツツアルノミナラス近ク日本全権トモ腹蔵ナク会談ヲナスコトトナリ居ルニ顧ミ今暫ク従来通リ華府ニテ話合ヲ継続スルコトト致シタシ尤前回ニモ御話シタル通「ドーズ」大使ハ松平大使ヨリ承リタルコトハ詳細報告スルコトトナリ居ルニ付右御含ヲ願ヒ度キ旨申添ヘタリ

(三)本使ヨリ貴電第四一七号ニ基キ新聞発表ノ件ニ付懇談シタルニ長官ハ日本全権ト会談後何等カノ公表ヲナスコト輿論指導上極メテ有益ナルヘシト考ヘラルルニ付適当ノ案文ヲ考ヘ置クヘシト答ヘタリ

(四)辞去スルニ当リ長官ハ本使ヲ引止メ今回ノ倫敦会議ハ極メテ重要ナル会議ト認メラルル処其ノ目的達成ノ為ニハ米国トシテハ日本ノ真実ナル協調ト援助トヲ求メサルヘカラス此ノ点重ネテ幣原男ニ電報相成タシ尚比率問題ニ付テハ屢貴大使ヨリ主張セラレタル次第モアリ米国政府トシテハ日本側ノ御趣旨ノ在ル処ハ充分ニ諒解シ居ル積ナルカ倫敦会議ニ於テ本問題ニ付議論ヲ戦ハス事ハ会議ノ紛糾ヲ来シ甚タ面白カラサル結果ヲ招ク虞アルニ付成ルヘク之ヲ避クル様致シ度ク少クトモ日米両国間ノ関スル限リハ互ニ胸襟ヲ開キ所要海軍力ニ付太平洋ノ各事情ニ基キ意見ヲ交換スルニ於テハ必ラスヤ両国間ニ満足ナル解決案ヲ発見シ得ヘシト確信スルニ付其ノ辺ノ事モ御見込ニ依リ幣原大臣ニ伝ヘラレ度シト極メテ熱心ナル態度ヲ以テ述ヘタリ右ニ対シ本使ヨリ比率問題ニ対スル日本ノ主張ハ既ニ幾度モ申述ヘタル通日本政府ニ於テ特ニ重キヲ置ク処ナルヲ以テ右ニ関スル主張ヲ棄ツル事絶対ニ不可能ナルモ実際ノ事情ニ基キ意見ヲ交換スル事素ヨリ有益ト認メラルルニ付来ル十七日ノ貴長官帝国全権会談（長官ハ表立チタル形式ヲ避クル為自分ノ外国務省側ヨリ一二名ヲ出スニ止ムル積リナリ日本側ヨリハ両全権及貴大使ノ出席ヲ希望スト語レリ）ノ如キ場合ニハ米国側ヨリ腹蔵無ク具体的意見ヲ述ヘラレ予備的商議ノ促進ヲ計ル事ト致シ度シト応酬シ置ケリ尚二日長官ト会見ノ際本使ヨリ日本全権ノ華府滞在ハ短時日ナレハ予メ米国

側ニ於テ準備ヲ進メ具体的意見ヲ交換シ得ル様致シ度キ旨注文シ尚「キヤツスル」ニ対シテモ特ニ同様ノ趣旨ヲ申入置キタル処最近国務長官ハ連日長時間ニ亘リ軍縮問題ニ関スル全権会議ヲ催シ居ル次第アルモ本日モ重ネテ長官ニ対シ前記ノ趣旨申入置キタリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

243　昭和4年12月14日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

日本の大型巡洋艦対米七割要求へのジョーンズ少将の不満に関するキャッスル新駐日大使の内話について

ワシントン　12月14日後発
本　省　12月15日前着

第五〇〇号（極秘）

十四日「キヤツスル」ニ面会ノ際「キヤ」ハ自分ハ暫ラク軍縮問題ニ付深キ相談ニ与ル機会ナカリシカ（往電第三二一号末段参照）今回駐日大使トナリシ関係上連日会議ニ加ハリ最近ノ経過等ニ付知ル処アリ何レ当地出発赴任ノ途ニ就ク積リナルニ付是非共其ノ前親シク内状ヲ打チ明ケ懇談致タシト語リ尚昨日ノ会議ニ於テ「ジョウンズ」ハ日本ノ大型艦ニ関スル対米七割要求ハ不条理ニテ殊ニ寿府会議当時ニ於ケル日本ノ態度トハ如何ニモ一致セサル点モアリ甚タ諒解ニ苦シムト熱心ニ語リタル旨極秘トシテ述ヘタリ

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ暗送セシム

244　昭和4年12月(18)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

若槻全権の記者団への応答に関する新聞記事について

ワシントン
本　省　12月18日後着

第五一三号

㈠両全権ノ記者団接見ノ際ニ於ケル若槻全権ノ記者側質問ニ対スル応答ニ関シ十七日ニ各新聞ハ主要欄ニ記事ヲ掲ケ居レルカ其ノ大要左ノ通

(イ)日本ハ巡洋艦駆逐艦及潜水艦ノ補助艦総噸数ニ付総括的七割ヲ要求スルト同時ニ各艦種間ニ多少噸数ノ融通ヲナシ得ルコトヲ主張スルモノニテ即チ大型巡洋艦ニ付テハ最大海軍国ノ七割ヲ要求シ潜水艦ニ付テハ国防上必要ナル噸数ヲ保有セムトスルモノナルカ右ノ場合特ニ潜水艦ノ割当ニ充当スル為例ヘハ小型巡洋艦又ハ駆逐艦ニ付テハ七割以下ノ噸数ニテ満足スヘシ潜水艦ハ日本ノ地理的状態ニ鑑ミ並ニ日本カ劣勢ナル海軍ヲ以テ満足スル以上欠クヘカラサルモノニシテ之カ廃止ニハ賛成スル能ハス

(ロ)潜水艦問題ニ付テハ日本ハ仏伊ト何等協議シタルコトナク日本ノ所要量ハ其ノ独自ノ立場ニ基クモノナリ但シ六百噸以下ヲ無制限トスル要求ハ之ヲ主張スルモノニ非ス

(ハ)此ノ際主力艦廃止問題ヲ考慮スルハ時期尚早ナリ尤モ日本ハ将来右廃止問題ヲ考慮シ得ヘキ時機到来セムコトヲ希望ス

(ニ)新嘉坡軍港問題ニ付テハ英国ヨリ何等特ニ聞ク処ナキモ日本トシテハ進ムテ同軍港廃止問題ヲ今次会議ニ提起スル考ナシ

(ホ)日本ハ不戦条約ノ精神ヲ尊重スルモノニシテ同条約ヲ軍縮問題ノ出発点トスルコトニ賛意ヲ表スルハ言フ迄モナキモ倫敦ニ於テ成立スヘキ協定中ニ同条約ノ趣旨ヲ繰返シ挿入スヘキヤ否ヤハ同会議ノ状勢如何ニ依リ定ルモノニシテ今直ニ何等言明スルヲ得ス

(ヘ)倫敦ニ於テハ三ケ国間ニ協定成立スヘキコトヲ確信スルモノニシテ右五国協定不成立ト言フカ如キ仮定的ノ場合ニ付議論スルヲ得ス

㈡紐育「ウワールド」ハ右記事中日本ハ駆逐艦及潜水艦ヲ特ニ重要視シ居ル為ニ之ニ割当ツヘキ噸数ヲ巡洋艦ヨリ融通セムトスルモノニテ大型巡洋艦ニ付テハ必スシモ米国ノ七割ヲ主張セサルヘシト述ヘ華府「ポスト」モ同記事ヲ殆ト其ノ儘掲ケ居レルカ右ハ全権ノ応答ヲ誤解シタルモノト認メラル

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

245　昭和4年12月18日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

補助艦比率問題をめぐる若槻・財部両全権とスティムソン国務長官との会談について

ワシントン　12月18日前発
本　省　12月19日前着

第五一五号（至急、極秘）

両全権ヨリ

本十七日午後三時予定ノ通国務長官ヲ往訪(出淵斎藤同行)

但シ長官微恙ノ為会場ハ長官私宅トナリ先ツ若槻ヨリ

自分ハ率直ニ意見ヲ開陳スルモノナルカ日本ハ予テ中外ニ声明セル通切ニ倫敦会議ノ成功ヲ祈リ而モ其ノ協定ハ単ニ制限ニ止マラス実際ニ減縮ノ実ヲ挙ケン事ヲ希望スルモノナリ日本ノ要求スル比率ニ付テハ予々出淵大使カ本国政府ノ訓令ニ基キテ申上ケ来リ居リ既ニ御承知ノ事ト考フルモ由来日本ハ其ノ軍備ノ根本義トシテ国民ノ安全感ヲ動揺セシメサル事即チ攻ムルニハ足ラス守ルニハ足ルトノ程度ノ勢力ヲ保有セントシテ努力モシ主張モシ来リシカ七割トハ即チ日本近海ニ於テ防衛ノ目的ヲ達スルニ必要ナリトノ基準ヨリ割出サレタルモノニシテ是非共関係諸国ノ賛成ヲ得度キ点ナリ故ニ之ニ対シテハ同情的御考慮ヲ仰カサルヲ得ス本件ニ付テハ先頃出淵大使ニ対シ実際ノ事情ニ即シテ解決スルノ方法ヲ講セントノ御申出アリタル処日本ハ勿論喜テ之ヲ講究スヘキモ英米間ノ仮協定ナルモノノ内容殊ニ大型巡洋艦ニ関スル点ヲ詳カニセサル為話ヲ進ムル根拠ヲ欠クノ嫌アルニ付或ハ此ノ機会ニ長官ヨリ御洩ラシヲ願フ事ヲ得ハ最便宜カト思

考スト述ヘタル処

「スチムソン」ハ自分モ貴全権ト同シク亦予々出淵大使ニ対シ為シ来レル通虚心坦懐ニ所見ヲ申述度思フ次第ナリ自分ハ貴全権ノ言ハレシ如ク倫敦会議ノ成功ヲ望ムモノナルカ

(一)御質問ノ英米協定特ニ大型巡洋艦ニ関スル協定ハ嘗テ出淵大使ニ申上ケタル以外ニ何物モ無ク米国ハ海軍側顧問ノ進言ニ基キ二十一隻ヲ要求セシモ英国側ハ之ヲ十八隻ニ切リ下ケ然ルヘキモノナリトノ意見ヲ有セリ此ノ僅カニ三隻ノ相違ハ他艦種ノ間ニ融通シテ何等カ協定ヲ見ルヲ得ヘシトノ見地ヨリ之レ丈ケノ仮約束ヲ其ノ儘倫敦会議ニ持越シ差支ナキモノトノ見込ヲ付ケタリ尤モ其ノ三ニ関シ隻数ヲ如何様ニスルヤノ実際ノ数字ハ未タ之ヲ作製スルノ運ヒニ至ラサル現状ナリ

(二)質問ノ他ノ点ナル「ヨリ大ナル比率」ノ問題ニ付テハ自分自ラモ充分ニ之ニ考究ヲ加ヘ又種々関係者ノ意見ヲモ徴シ国民ノ意ノアル所ヲ察知シテ得タル結果トシテ申上クル次第ナルカ今回ノ会議開催サルルニ至リシ基礎的事態ヲ造リ上ケタル華府会議ニ関シ米国国民ハ米国カ大ニ

寛容ナル態度ヲ執リ其ノ犠牲ニ於テ最先ニ立チ始メテ条約ヲ成立セシメ得ルニ至レリトノ感ヲ有シ居レリ一九二一年ニハ米国ハ世界第一ノ海軍力ヲ保有セルニ拘ラス其ノ立場ヲ棄テ競争心、猜疑心、嫉妬心ヲ去リ軍縮ヲ容易ナラシメンカ為ニ努力シ尚日本側ノ不安ヲ除カンカ為ニ「ヒリツピン」「グアム」島ニ関シ防備現状維持ノ約ヲ結ヒ会議ノ成功ニ資スルニ努メタリキ全権ニ於テ今日日米間ノ感情ノ融和セルコトヲ認メ居ラルル如ク又出淵大使ヨリモ度々伺ヒタル処ナルカ現ニ斯ノ如ク両国ノ関係良好トナリタルハ華府会議ノ協定其ノ大ナル原因ヲ為セルモノト謂フヲ得ヘシ米国ハ当時有シタル海軍拡張案ノ半以上ヲ放棄シ更ニ日本ニ近接スル領土ニ於ケル防備ノ現状維持ヲ諾シ始メテ同協定ヲ見タルコト米国民ノ「グッドフエース」ト確信シ居ル処ナリ要スルニ華府会議ノ根本精神ハ列国間ニ相互信頼ノ時代ヲ現出セシメ軍備競争ヲ避ケントスルコトニ存シタル次第ナルカ実際ノ状況ヲ見ルニ過去七八年間ニ華府条約ニ規定ナキ艦種ニ付又復新ニ競争ノ現出セルハ吾人ノ甚タ遺憾トスル所ニシテ従テ華府会議ハ全然成功ニハ非サリシトノ感想モ行ハルルニ至レリ尤モ米国ハ当初此ノ競争ニ加ハラサリシモ最近寿府会議失敗ニ終リタル以来再ヒ軍艦建造ニ着手スルコトノ已ムヲ得サルヲ感スルニ至レリ即チ議会ハ二三隻ノ大型巡洋艦ノ建造ヲ大統領ニ要求シ而モ何等カノ列国協定成立セサル限リ大統領ノ裁量ニ依リ右建造ヲ阻止スルコトヲ得サル旨ヲ決議スルニ至リ加之米国海軍側ハ更ニ右拡張ニ伴フ丈ノ他ノ補助艦ヲモ建造セムトシテ一大拡張案ヲ作成スルニ至レリ右ハ米国民カ何等カ満足ナル協定ニ達シ得サル限リハ他国ノ海軍力ニ是非共対抗セサルヘカラストノ点ニ重キヲ置クコトヲ示スモノト考ヘサルヘカラス斯様ノ次第ナレハ出淵大使カ先頃日本ハ主力艦ニ関スルヨリモ尚高キ比率ヲ要求スルコトヲ述ヘ余ノ意見ヲ求メラレタルトキ余ハ率直ニ右ハ米国民ニ対シ甚タ悪シキ印象ヲ与ヘ毫モ会議ノ成功ニ寄与スル所以ニアラサルヘキヲ答ヘタリ自分ハ米国ノ大多数ハ斯ノ如キ比率ノ変更ハ不公平ナルモノト感スヘシト考フルモノナリ

(三)米国国民ハ今尚戦艦カ其ノ海軍力ノ中心ナル事ヲ確信スルモノトシテ決シテ時代後レノモノトハ考ヘ居ラス然レトモ若シ其ノ勢力ヲ減縮スルノ協定ニ達スルコトヲ得ハ

無論欣ヒトスル所ナリ日本側ニ其ノ希望アル事ハ自分就任ノ途次日本ニ立寄リシ際岡田大臣ヨリ親シク承ハレル所ニシテ同大臣ハ若シ此ノ点ニ付列国間ニ協定出来サレハ遠カラス高価ナル代換ヲ開始セサル可カラサル次第ヲ縷述セラレタリ併シ自分等ハ日本ニ於テ五対三ノ比率ニ立ツ戦艦ノ勢力ヲ縮減シ其ノ財政ノ余力ヲ以テ十対七ノ比率ヲ要求シ居ラルル巡洋艦ノ勢力ヲ増大セムトセラルルハ米国側トシテ甚タ不利ノ地ニ陥ラシムルモノト感スル次第ナリ従テ余ハ日本側ニ於テ比率問題ヲ提起セラレサラム事ヲ欲ス勿論自分ハ如何ナル国家ニ対シテモ強ヒテ劣勢ヲ押付ケムトスルモノニ非ス又其ノ名誉及自尊心ヲ傷クルカ如キ協定ニ調印ヲ求ムルモノニモ非ス此ノ点ハヨク御了解ヲ願ヒタシ従テ予テ出淵大使ニ対シテモ寧ロ比率ノ問題ヲ離レ現実ノ状態ヲ基礎トシテ討議スルノ然ルヘキ旨申上ケタル次第ナリ即チ日本カ先ニ巡洋艦勢力ニ付執リ来レル増艦政策ヲ考慮ニ入レ何等カノ了解又ハ協定ニ到達セムコト然ルヘシト考ヘ居レリ従テ自分ハ日本側ヨリ二十万六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ二十二万六千噸ニ増加セムコトヲ申出ラレシ際稍失望ノ念ヲ禁スル能ハサリシモノアリタル儀ナリ自分トシテハ比率ノ関係ヨリ割出サレタル数字ヨリモ現有ノ二十万六千噸ヲ以テ討議ノ目的物ト考ヘタシ日本カ防禦ノ為ニ現実ニ必要ナル点迄其ノ海軍力ヲ切下ケ各国ニ対セラルルナラハ何等カノ協定ニ達スルコト難カラサルヘシト思ハル現ニ英国ハ既ニ一九二七年ニ於ケルヨリモ其ノ巡洋艦勢力ヲ減スルコトヲ承諾シ居リ米国海軍ハ英国ヨリモ更ニ少ナキ勢力ヲ以テ満足セムトシ居ルノミナラス英国カ更ニ其ノ勢力ヲ低下スルニ於テハ米国モ亦喜ムテ之ヲ低下スルノ覚悟ヲ有ス然レトモ自分ハ日本ノ要求ヲ出来得ル限リ同情的考慮ヲ加ヘ度シト考ヘ居ルモノナリト答ヘタリ

次テ若槻ヨリ

自分ノ申上ケシ事ヲ良ク御聴取アリタル事感謝ノ至ナリ又日本ノ態度ニ同情的考慮ヲ加ヘントノ御言葉ハ欣快ニ堪ヘス今米国国民ノ感情ヲ率直ニ話サレタルカ自分モ日本側ノ感情ヲ同シク率直ニ申上度シ過去ノ歴史ヲ繰返スハ余リ利益ハ無キヤモ知レサレトモ自分ノ感想ニ依レハ日本国民ハ貴長官御話ノ通華府会議ニ処シテハ或ハ無理遣リニ軍備縮減ヲ強要セラルルニハ非スヤトノ感ヲ抱キ

タルハ事実ナリ今此処ニ華府会議ノ結果ニ付彼此評スル事ハ避クルモ日本側ハ初ヨリ七割ヲ主張シ居ル次第ニテ其ノ主張ノ貫徹セサリシ事ニ付国民カ深ク遺憾トシ居リ防備ノ現状維持ト言フ事ヲ説明シ国民中之ヲ諒解セルモノモアルモ一般ノ抱懐セル遺憾ノ念ハ拭フヘカラス今後軍縮会議開催ノ場合ニハ華府会議ニ於テ協定セラレサリシ艦種ニ付是非共七割要求ヲ貫徹セサルヘカラスト為シ居ル次第ニテ右ハ既ニ国民ノ信念トナリ居レリ

防備現状維持ヲ米国ニ於テ自制セラレシコトハ尤モナルモ日本側亦防備現状維持ヲ約シタルモノニシテ矢張リ自制ヲ行ヒタル次第ナリ米国側ニ於テ軍艦抛棄ノ犠牲ヲ提供セラレタリトノオ話ナルモ日本側ニ於テモ同シク多大ノ犠牲ヲ払ヒタリ従テ新ニ今後会議ヲ開クナラハ七割ヲ用意セサルヘカラストノ国論ニシテ万一之ヲ得難キ場合ニハ国防ノ上ヨリ不安ヲ感ストナス現状ナリ勿論主力艦五五三ノ比率ハ華府会議ノ際確定的ニ決定セルモノニシテ今此ノ問題ヲ改メテ論議ニ上スコトハ毫モ考ヘ居ラス併シ当時主力艦以外ノ艦種ニ付テ何等決定ニ至ラサリシコトハ事実ナリ巡洋艦ニ付テハ一万噸ヲ限度トスルコトニ決定シタルカ斯ル巡洋艦ハ当時存セサリシナリ其ノ後何国ト云フコトナシニ次第ニ一万噸級増加シ来リ其ノ他ノ兵器モ発達シテ状況ハ既ニ其ノ当時トハ非常ノ相異ヲ来セル事態ナレハ此ノ点ヨリ見テ華府条約ノ比率ヲ基礎トシテ今日軍縮問題ヲ議スルハ当ヲ得サルコトト考フ此ノ点ハ充分ニ御諒承ヲ願ヒ度シ

主力艦ニ付テハ日本ニ於テモ決シテ之ヲ時代後レトハ思ヒ居ラス依然軍備ノ中核ト考ヘ居レリ就テハ成ルヘク海軍軍備ヲ縮少スルコト必要ナリトノ見地ヨリ艦齢ノ延長艦型ノ縮少、代換期間ノ延長等ヲ考慮シ然ルヘシトノ考ナルカ斯ノ如キ縮減ニ依リ利益ヲ受クルハ独リ日本ノミニ非スシテ各国共ニ利益ヲ受クトノ見方ヨリ之ヲ主張シタキ次第ナリ決シテ貴長官ノ議論ニ対シテ反駁ヲ試ムルニハ非サルモ主力艦ノ勢力ヲ減シ其ノ余力ヲ以テ巡洋艦ノ噸数ヲ増加セント言フ如キ考ハ全クナシ右ハ決シテ一時ノ思付ニテ申上クルニハ非ス日本国民ノ信念トシテ自分ノ見ル処ハ実ニ其ノ通ナリ尚成ルヘク比率ニ言及セス実際状態ヲ基準トシテ研究ヲ進メタシトノ御趣旨ニハ強テ反対スルモノニハアラス併シ英米間ニ於テモ先ツ均勢

ノ原則ヲ定メ之カ適用トシテ具体的数字ニ研究ヲ加ヘ話ヲ纏ムルニ至ルモノト承知ス之ト同シク標準ヲ定メテ話ヲ進メタシトノ意味ニ於テ日本ノ希望スル比率ヲ申上ケタル次第ナルカ実際問題トシテ自ラ比率ヲ含マセテ具体的決定ヲナスモ亦一方法ト謂フヘシ夫レ故尚此ノ上トモ時間ヲ与ヘラルルナラハ其ノ方面ヨリ見タル具体案ヲ申上ケ度シト考フ

尚稍話ハ前後シタルモ二十万六千噸ノ現有勢力ヲ以テ日本カ二十二万六千噸ト言フ数字ヲ持出シタルコトハ稍失望ノ感ヲ抱キタリトノ御話アリシカ之ハ察スルニ十万八千四百噸ノ大巡洋艦ト約九万噸ノ小巡洋艦トノ噸数ヲ合算シテノ御話ナルヘシト想像スル処此ノ二万噸ノ差ハ御察シノ通七割ト言フ比率ヨリ割出サレタルモノニシテ従テ優勢海軍国ノ方ヨリ数字ヲ下ケテ来ラルレハ自ラ下ルヘキ筋合ノ数字ニ過キスト言フコトハ御承知願度シ

「ス」具体案ヲ有セラルルナラハ伺ヒタシ

「若」　夫レナラハ茲ニ申上ケテ御考慮ヲ願フ方好都合ト考フト前置シテ八吋一万噸巡洋艦ニ関スル米国ノ保有量ヲ仮ニ十八隻トスレハ日本ニ於テハ一万噸巡洋艦若干一万噸未満ノ巡洋艦若干ヲ合セテ十二万六千噸十三隻ヲ保有シタキ希望ナリ然レトモ之ハ結局ノ数字ニシテ過渡時代即チ古鷹級代換迄ノ期間ハ今日現有ノ一万噸巡洋艦八隻古鷹級四隻及一万噸未満二隻合セテ十四隻トシタシト考フルハ一見隻数多キカ如キモ其ノ実力ヲ検スルニ古鷹級四隻一万噸未満二隻ト言フカ如キ劣勢ノモノヲ含ミ居リ一万噸八吋砲巡洋艦ヲ揃ヘテ有スル海軍勢力ニ対シ遙ニ劣レルコトハ一目瞭然タリ次ニ潜水艦ニ付テハ劣勢海軍ヲ保有シ且島国タル関係ヨリ見テ日本トシテハ必要ノ自衛的武器ナリ今日日本ノ有スル造艦計画丈ニテハ実ハ日本ハ不充分ト思ヒ居ル次第ナルモ軍縮会議モ開カレムトスル現勢ニ鑑ミ現有勢力七万八千五百噸ヲ以テ満足セムトシ居ル次第ナリ乍併他国ニ向テ均勢ヲ要求スルモノニハ非ス其ノ比率カ七分ノ十トナルモ何等異議ヲ有スルモノニ非ラス尚小巡洋艦駆逐艦等ニ付テハ他国ニ於テ其ノ保有量ヲ減少セラルレハ日本モ従テ減少スルニ決シテ吝ナルモノニ非ラス之即チ現状ニ即シテ案出シタル日本側ノ案ニシテ長官ノ御考量ヲ煩シ度ク長官ヨリ此ノ案ニ対スル腹蔵ナキ御意見ヲ聞ク事ヲ得ハ幸ナリ

「ス」彼様ニ双方ヨリ忌憚無ク意ヲ吐露シテ御話ヲ重ネ行ク事ハ真ニ有益ト考フ今述ヘラレタル具体案ハ先頃出淵大使ヨリ伺ヒシ処ト同様ト考フルモ之ニ対シテ米国側カ今一度考量ヲ加フル事ヲ希望セラルルニ於テハ欣テ左様致スヘシ若シ御希望ナラハ御出発前今一度御目ニ掛リテモ宜シク又倫敦ニ行キテ後御目ニ掛リテモ宜シク或ハ貴全権一行中ノ何人カト米国側顧問ト打合ヲサルル事ニ取計ヒテモ可ナリ唯一般的感想ヲ申上ケレハ此ノ問題ハ一万噸級ニノミ議論ヲ集中セス他ノ艦種ト併セテ考量スル必要アルモノト考フ唯一万噸級巡洋艦ノミヲ取リテ論スレハ曩ニモ申述ヘタル通リ米国民ヲ満足セシムル如キ結果ニ到着スル事ハ仲々困難ナリト思考ス二十二万六千噸ナル数字ハ一方ニ於テ日本海軍力ノ増加ヲ意味シ他方米国海軍力ノ低下ヲ要求スルモノナリトノ感想ヲ与フルコトヲ免カレスシテ自分ハ此ノ感想ノ非ナルコトヲ証明シ得サルヲ虞ル然レ共自分ハ決シテ日本ノ提議ニ対シ門戸ヲ閉鎖スル考ヲ有セサルニ付喜テ此ノ上共討議ヲ継続シ度シト考フ

「若」御病気中ノ処長時間会談セラレタルコトハ誠ニ多トスル所ナリ本問題ハ或ハ当地ニ於テ又ハ倫敦ニ於テ協定ヲ重ネタシト考フ何レノ途此ノ問題ハ会議開催前ニ英米側ト大体ノ協議ヲ遂ケ置クコトハ是非共必要ナリ従テ自分等出発後モ出淵大使ト引続キ協議ヲ続ケラレタシ又若シ専門家間ニ討議ヲ行ハシムルコト可然トノ御考ナラハ一行中ノ適当ナルモノヲ其ノ任ニ当ラシメ差支ナシト考フ

右ニテ話ヲ打切リ雑談ノ末木曜日（十九日）午前十時ヨリ再ヒ会見スルコトニ決シ別室ニテ「ス」夫人ヨリ茶菓ノ饗応ヲ受ケ引取リタリ

尚新聞ニ対シテハ共同声明書ヲ出スコトトシ夫レ以外ハ一言モ会議内容ヲ洩ササルコトニ申合セタリ共同声明特電ノ通

英ニ転電シ英ヲシテ仏、伊ニ転電セシム

246　昭和4年12月18日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

国務長官より日本の補助艦対米比率増率要求への不満の意向を記した覚書手交について

別　電　十二月十八日在米国出淵大使より幣原外務

大臣宛第五一七号
スティムソン国務長官より手交の覚書

第五一六号（至急、極秘）　本省　ワシントン　12月18日前発　12月18日後着

両全権ヨリ

往電第五一四号会談後長官ヘ別電第五一七号ヲ斎藤ニ手交シ同官ニ対シテハ本日ノ準備トシテ作成シ置キタル心覚ナリト説明シタル趣ナルカ内容会談中談及セラレサリシ点アルヲ以テ全文電報ス尚右ノ内ニハ国民ノ感情ヲ刺戟スル惧アル部分モアルニ付関係者以外ニハ極秘ニ御取扱相成度シ

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ転電セシム

（別電）

No. 517 (Urgent)

Washington, Dec. 18th, a.m.

Rec'd, Dec. 21st, a.m., 1929

Since the Washington Conference nearly all other countries except the United States have been building rapidly in the unrestricted classes. Pending attempts at restriction we have delayed our cruiser and submarine programs.

After the failure of the Geneva Conference, however, our people evidently determined that this must cease and that the United States must build up to what other nations were doing. This was shown by the passage of the cruiser bill by Congress making it obligatory to building twenty-three large cruisers unless an international agreement of naval limitation was reached.

In the furtherance of this armament the general board of the navy also presented a general building program for the United States in proportion to what other countries were doing. It is a very large program, very large indeed. It brings us to the parting of the ways, we must either build or reach an agreement. To make agreement easier, we have not made this program public, because if each nation states its desires publicly before the Conference it concentrates the attention of the press of the world on the differences which makes agreement more difficult. More-

over, we hope that in this conference the theme will be reduction rather than an increase, for we believe that this tends to the creation of confidence on which good will rests.

We have taken for granted that the same basis which Japan was willing to agree to in 1922 for all categories would still hold in seeking the agreement. At that time we gave what we thought was a generous agreement, especially in the almost unprecedented agreement not to fortify our western Pacific possessions. If the basis then discussed is changed there will be pressure to discuss our bases again. We have now so happy a relation with Japan that we should regret anything that would in any way upset it.

It would, of course, be difficult for us to make any reduction in the battleships which our naval board holds to be the core of the fleet, in which we have an agreement, if the money saved thereby is to be used in a new competition in other classes on a different basis. To reduce battleship strength in which our advisers so strongly believe, and in which we hold now a treaty giving us a 5 to 3 ratio, at the same time that Japan insists on a higher ratio in the remainder of the fleet, would seem to place us at a double disadvantage.

We should like to work out some plan that would take account so far as possible of Japan's present tonnage in the unrestricted classes without disadvantage if that is possible.

These comments are made with the utmost frankness because from the Washington Conference, our contacts on this subject have bred in us a complete confidence in your desire to work out these problems with us so that step by step we may remove all the fears and suspicions that arise from naval building from the minds of all the people of both nations.

247　昭和4年12月18日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

国務長官との会談に関する感想及び今後の会談への対策について

ワシントン　12月18日後発
本　省　12月19日後着

第五一八号（極秘）

両全権ヨリ

昨十七日国務長官トノ会談ニ関スル感想及之カ対策ノ要旨等左ノ如シ

一、会談ニ於ケル先方ノ態度ハ妥協的ニシテ厚意ヲ示シ日本ト協調ヲ計リ以テ会議ノ成立ニ努ムルモノト認メラル而シテ長官ノ話シ振リハ慇懃注意周到ニシテ遠慮深ク先方ニ於テ会談ノ為用意セル斎藤手交ノ心覚ヘ（往電第五一七号）ノ協調点ヲモ遂ニ会談中切リ出シ兼ネタル模様ナリ

二、会談中若シ先方カ日本ニ於テ七割ヲ飽迄主張スルニ於テハ米国ハ自然防備制限撤廃問題ヲモ考慮セサル可カラサル旨言及スルカ如キ場合ニハ当方ニ於テハ日本ハ防備制限ハ米国ノミナラス日本モ之ヲ行ヒタル次第ニテ勿論主力艦比率ノミ決定ノ場合ニ考慮セラレタル既決ノ問題ニシテ補助艦問題トハ全然関係ナキ旨ヲ力説シタル上今更防備制限撤廃ノ如キ軍縮平和ノ精神ニ逆行セル問題ヲ討議スルコトトナレハ日本ハ勢ヒ主力艦比率ニモ言及セサル可カラス斯クテハ折角国際平和ノ為大ナル貢献アル華府条約ノ根柢ヲモ動揺セシムルニ至ルヘキヲ恐ルル次第ニシテ吾人ノ取ラサル所ナル旨ヲ陳述スル積リナリシモ昨日ノ会談ハ往電第五一五号ノ如ク此ノ点ニ関シ深刻ナル論議ヲ為スニ至ラサリシカ米国ノ態度ハ見様ニ依リテハ補助艦問題ト防備制限問題トヲ関連セシメ一種ノ交換条件タラシメン腹ナル如クニモ察セラレ此ノ点ハ今後大ニ考慮ヲ要スト思考ス

三、会談中先方ノ希望ニ依リテハ専門委員ノ会談モ差支ナキ旨申置キタルモ一般ノ状勢及時日ノ点ニ観テ之ヲ差控フルコトトセリ

四、明十九日ノ会見ニ於テ我方ノ主張ヲ更ニ繰返スコトハ却テ我態度ヲ弱ムルノ虞モアリ且既ニ我方トシテ主張スヘキ点ハ全部説明ヲ了セシ次第ナレハ此ノ上ハ主トシテ我主張ニ対スル先方ノ意見ヲ聴取シ且主力艦問題ヲ初メトシテ補助艦全部ニ亘ル米国ノ主張並八吋搭載巡洋艦以外ノ英米両国間ノ談合等ヲ聞質シタル上適当ノ機会アラハ仏伊ノ態度並之ニ対スル米国側ノ胸算用等ヲモ質問スル心組ニシテ日本ハ今回ノ会議ニ於テハ弗々ト其ノ要求ヲ主張スルト共ニ飽迄協調的態度ヲ以テ会議ノ成功ヲ祈念スルモノナリトノ印象ヲ残シ且今回話題ニ上リシ重要問題ニ付テハ本会議前ニ夫々解決セムコトヲ切望スル次第ナル旨力説シタル上華府ヲ辞去セム方針ナリ

英ニ転電シ英ヲシテ仏伊ニ転電セシム

248　昭和4年12月(19)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

全権の記者団との応答に関する主なる新聞論評について

ワシントン
本　省　12月19日後着

第五一九号

全権ノ記者団ニ対スル声明並ニ記者ノ質問ニ対スル応答ニ関シ当国諸新聞ハ十七日及十八日ニ亘リ論評ヲ掲ケ居レルカ其ノ重ナルモノ左ノ通

一、紐育「ワールド」　日本全権ノ来米ニ際シ華府会議ノ成功ヲ想起セサルヲ得ス同会議ニ於テハ補助艦ニ関スル協定成立セサリシ為議会ニ於テハ之ヲ非難スルコト常例トナリ居レルモ現ニ日米両国カ互ニ他ヲ依頼尊敬シテ交渉シ居ル事実ニ徴スルモ同会議カ外交上大成功ヲ収メタルコトヲ実証シ得ヘシ即チ同会議ノ前後ノ日米関係ヲ比較スルニ格段ノ差アリテ右ハ「フューズ」カ日本要求ヲ認メ其ノ大国ナルヲ尊敬シ且其ノ目的ヲ信頼スルコトヲ米国ノ政策ノ基礎トセルニ依ルモノニテ当時ニ於テハ右ハ一ノ「リスク」ナリシモ其ノ後日本ハ平和ノ為ニ最モ誠実ナル協同者トナリタル次第ナリ右ノ成行ハ今般ノ会議ニ際シ米国人ニ大ナル教訓ヲ与フルモノナリ

二、費府「レッヂヤー」　日本ノ主張スル七割ノ比率問題ハ英米保有量カ数字的ニ均等ナルニ於テハ大ナル反対ナカルヘシト信セラルルモ大型巡洋艦ノ隻数カ英米相異ル為問題ハ困難トナリタル次第ナリ若シ日本カ対米七割ヲ得ハ却テ軍拡トナルヘキ処此ノ矛盾ハ日本始メ各国ノ好マサル処ナリ然レ共本問題ハ結局二隻カ三隻カノ小問題

ニテ之カ為会議ノ失敗ヲ招クヘシトハ信シ難ク殊ニ日米両国カ率直且善意ヲ以テ交渉シ互ニ敵意又ハ猜疑ノ念ヲ抱キ居ラサル事実ハ討議ノ前途極メテ有望ナルヲ思ハシム

三、華府「スター」　若シ率直カ外交談判ノ秘訣ナラハ日本ハ倫敦会議ノ成功ヲ確保スヘキ役目ヲ果セリト謂フヘシ日本全権ハ華府到着後僅ニ数時間後ニシテ其ノ手札全部ヲ示シ概括論ニ逃避セスシテ進ンテ個々ノ問題ニ触レタリ唯補助艦噸数ヲ如何ニ融通スルヤニ付テハ之ヲ明ニセサリシモ右ハ会議ノ状勢如何ニ依ルヘキモノナルコト疑ヒナシ要スルニ日本ノ主張ハ確固タルモノナルト同時ニ他国側トノ調和ヲ熱心ニ計ラムトスル精神ハ全権声明ノ核心タリ吾人ハ其ノ目的ヲ一致シ互ニ他ヲ信頼シ他国ニ属スルモノヲ欲セス且不戦条約ノ精神ニ依頼スルモノナルニ付会議ノ成功ハ確保セラレ居レリ

四、紐育「タイムス」　日本全権ハ寿府会議当時ト同様友好的態度ヲ示シ居レリト称揚シタル後日本ハ七割ヲ要求スルト同時ニ現実ノ軍縮ニ賛成スルモノナルカ右七割要求ヲ意外トスルモノアルカ如キモ日本ハ華府会議当時ヨリ終始一貫之ヲ主張シ来レル処ニシテ唯同会議ニ於テハ防備現状維持ヲ含ム政治的譲歩ヲ得テ始メテ六割ニ低下スルコトトシタル次第ナリ然レ共右条件ハ今尚存続スルモノニシテ日本ハ其ノ地理的位置ニ顧ミ他国ノ侵害ヲ受クル惧ナキノミナラス亜細亜ノ如何ナル国ニ対シテモ優越セル勢力ヲ有シ居ルニ付補助艦ノ比率ヲ主力艦ノ比率以上トナスヲ重要ト認ムル理由ハ解シ難シ

五、尚華府「ポスト」ハ元来日本ノ主張ハ普通ナラハ協定ノ望ヲ少クスルモノナルモ一般ニ軍縮ノ気運満チ居ル此ノ際早速此ノ機会ヲ利用シテ最少限度ナル動カスヘカラサル要求ヲ持チ出シタルモノナリト述ヘ（十七日）更ニ日本ハ会議ニ於テ英米ノ共同提案ニ抑ヘ付ケラレサル中ニ率先シテ最少限度ナル要求ヲ提出シテ英米ノ連繋ニ対抗セントシ居ルカ仏国亦同様ノ立場ヲ採リ居レリ尤モ日仏両国ノ右態度ハ偶然一致セルモノナルヘキモ結果ハ同一ニシテ要スルニ右ハ予備的商議ノ不充分ナリシカ為ナルカ此ノ点ハ会議ノ最弱点ナリト述ヘタリ（十八日）

英ニ転電シ英ヨリ仏伊ニ転電セシム

249　昭和4年12月19日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率、食糧船の自由、主力艦、潜水艦の各問題に関する大統領との会談について

ワシントン　12月19日前発
本　省　12月19日後着

第五二一号（極秘）

両全権ヨリ

十二月十八日大統領晩餐後喫煙室一隅ニ於テ大統領ト会談ノ機会ヲ得タルカ

㈠若槻ヨリ今回ノ軍縮会議ハ日本側ニ於テ大ニ重要視シ居リ其ノ成功ヲ切望スルモノナルカ大統領カ其ノ卓絶ノ識見及創意ヲ以テ倫敦会議開会ノ発意ヲ為シタルコトヲ祝シ

㈡日本ハ事国防ニ関スルヲ以テ慎重考慮ヲ加ヘツツアル次第ナルカ補助艦ノ関スル限リ最大海軍力ニ対シ七割ノ比率ヲ要求スルハ全ク国民ノ安全感ヲ動揺セシメサル点ヨリ割出サレタルモノニシテ此等ノ点ニ付テハ自分ヨリ国務長官ニモ申入レ尚出淵大使ヨリモ予々説明シ来レルコトナレハ貴大統領ニ於テ充分御承知ノコトト存ス何分トモ同情的ノ考慮ヲ之ニ加ヘラレ円満ナル解決ヲ来ス様御尽力アラムコトヲ切望スト述ヘタルニ対シ（大統領）ハ其ノ点ハ予々出淵大使ヨリモ申出アリタルニ依リ承知シ居レルカ自分ハ比率ノ問題ハ動モスレハ国民ノ自尊ヲ傷クル虞アリ寧ロ夫ヲ離レテ何等カ他ノ「フヲームユラ」ニ依リ解決スル事然ル可シト考ヘ居ル次第ナリ日本側ニ於テモ其ノ点ニ考慮ヲ加ヘラレタル事アリヤト尋ネタルニ付（若槻）ハ日本側ニ於テハ決シテ自尊心ノ見地ヨリ七割ノ比率ヲ主張スルモノニ非ス全ク国防ノ立場ヨリ其ノ必要ヲ確信スルモノナリ而シテ比率ヲ明示セサル具体案ハ現ニ夫ニ考慮ヲ加ヘ居ルモ結局必要ノ比率ヲ包含セシメサル可カラスト考ヘ居ル次第ナリト答ヘタリ

㈢（大統領）ハ繰返シ難問題ナリ難問題ナリト言ヒタル後日本側ニ於テハ嘗テ仏国ノ提議シタルカ如ク艦種相互間ニ例ヘハ二割五分ト謂フカ如キ融通ヲ認ムル案ヲ如何ニ考ヘ居ラルルヤト問ヒタルヲ以テ（若槻）ハ之ニ対シ艦種間ニ融通ヲ認ムルモ差支ナキモ或ル艦種ニ付テハ之ヲ余リ自由ニ動カスコトハ協定ノ精神ニ反スルモノト考ヘ居レリト応酬シ置キタリ

(四)（大統領）ハ由来軍縮問題ニハ二箇ノ要点アリ第一ハ競争ノ終止ニシテ第二ハ財政的節約ナリ仮ニ第一ノ点丈ニテモ之ヲ達成スルコトヲ得ハ国家間ノ軋轢及猜疑心ヲ減少シテ平和ノ確立ニ資スルコト大ナルヘシ第二点ニ付テハ其ノ根源ハ英国ニアリ英国ニシテ其ノ海軍力ヲ縮小スルヲ得ハ米国モ日本其ノ他ノ諸国モ夫ニ伴ヒテ軍縮ヲ行フコトヲ得問題ヲ余程緩和スルコトヲ得ヘシ従テ自分ハ先頃英国ノ国家安全ノ程度ヲ増加スル意味ニ於テ食糧船問題ヲ提起シタル次第ナリ蓋シ食糧船ノ自由ハ英国ノ如キ（日本モ之ト同様ト思考スルモ）島国ニシテ食糧ヲ外国ニ仰カサルヘカラサル立場ニアル国ニ付テハ国家安全ニ資スル所大ナルヘシト考ヘタレハナリ然ルニ意外ニモ英国側専門家ニ於テハ之ニ反スル意思ヲ表明シタル趣ニテ失望シ居ル次第ナリト述ヘタルニ付

（若槻）ハ第一ノ競争終止ノ点ハ全ク同感ナリ次ニ食糧船ノ問題ニ付テハ日本亦貴大統領ノ御趣旨ニ同感ニシテ（脱）ノ自由ハ軍備縮少ニ有害ナル基礎ヲ提供スルモノト考フル旨ヲ述ヘタリ

(五)（大統領）ハ米国ノ一部人士中ニハ西部太平洋ニ於ケル防備ノ問題ハ比率ノ問題ト緊切ナル関係ヲ有シ離ルヘカラサルモノト看居ルモノ多シト述ヘタルニ付若槻ハ日本側ニ於テハ防備ノ問題ハ華盛頓条約ニ依リテ規定セラレタル主力艦ニノミ関係アルモノニシテ同条約ニ規定セラレサル補助艦ニ就テハ関係無キモノト考ヘ居レリ若シ今日防備問題ヲ論議スルコトトナレハ自然主力艦ニ関シ比率ノ問題ヲ論議セサル可カラス結局華盛頓条約其ノモノヲ根本ヨリ動カスコトトナリ甚タ難問ヲ生スヘシト答ヘ

(六)尚主力艦問題ハ今回ノ会議ニ上程セラルルコトト考フル処日本側ハ艦齢ノ延長艦型ノ縮小代換期間ノ延長等ニ依リ之カ縮減ヲ行フコト然ルヘシト考ヘ居ルモノナルカ此ノ点ニ関スル貴見如何ト尋ネタルニ（大統領）ハ自分モ主力艦ノ縮減ヲ必要ト感スルモノニシテ米国ハ千九百三十六年迄代換ヲ延期セムト希望スルモ英国ハ之ニ反対ニシテ工業力ノ関係上成ルヘク製艦ヲ毎年平均ナラシムルコトヲ必要ト主張シ居レリ乍併自分ハ其ノ必要ヲ見サルモノニシテ五年間延期ハ一方ニ於テ経費節約トナルノミナラス他方其ノ期間ニハ自ラ事態ノ変遷ヲ来シ海軍専門家ニ於テモ主力艦ノ必要ニ付今日トハ別個ノ見解ヲ持スルニ至ルヤモ知レス此ノ点ニ関シ特ニ重要ト考フルモノナリト語リタルニ付（若槻）ハ自分モ同様ノ考ナリト答ヘ置キタリ

(七)（大統領）米国ハ潜水艦ノ全廃ヲ希望スルモノナルカ他ノ諸国ニ於テハ種々ノ事情ヨリ之ヲ必要トスル事ハ充分諒解シ得タリ但出来得ル限リ其ノ保有量ヲ減シ以テ経費節約ノ実ヲ挙ケム事ヲ切望スルモノナリト述ヘタルニ対シ（若槻）ハ日本側ノ見ル処ニテハ島国タル関係ヨリ自衛上是非或ル程度即具体的ニ言ヘハ現有ノ勢力ヲ保有セム事ヲ主張セサルヲ得スト答ヘタルニ（大統領）ハ笑ヒ乍ラ自分ノ各方面ヨリ聞キタル処ニ依レハ潜水艦ハ最早今日ニ至リテハ何等ノ実力無ク飛行機其ノ他ノ発達ニ伴ヒ数年ノ後ニハ全ク不要ノ長物トナルヘシト言ヘリ之ニ対シ（若槻）ハ曩ニモ申述ヘタル通日本ハ海洋自由ノ主義ニ対シ賛意ヲ有スルモノニシテ潜水艦ヲ以テ商船ヲ攻撃スルカ如キ意思毫モ無シ単ニ防禦ノ具トシテ之ヲ使用セムト欲スルモノナリト答ヘタリ

（若槻）ハ貴大統領カ自分ノ所見ニ対シ傾聴セラレタル事ヲ感謝ス倫敦会議開催迄ニハ相当ノ期間モアルニ付自分ハ猶軍縮問題ニ関シ考慮ヲ重ヌヘキモ貴大統領ニ於テモ此ノ上トモ日本側ノ立場ニ対シ充分好意的考慮ヲ加ヘラレン事ヲ切望スト述ヘタルニ（大統領）ハ utmost consideration ヲ加フヘシト述ヘ会談ヲ終レリ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

250　昭和4年12月19日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題などをめぐる日米両国全権第二回会見について

ワシントン　12月19日後発
本　省　12月20日後着

第五二二号（極秘）

両全権ヨリ

十九日午前十時国務省ニ於テ第二回会見ヲ行ヒタルカ（前回列席者ノ外「ジョーンズ」少将出席）

（若槻）

(一)昨夜大統領ニ於テ懇篤ナル盛宴ヲ催サレタルハ単ニ我々ニ対スル御好意ノミナラス日本国ニ対スル友誼ノ表象トシテ感謝ニ堪ヘス尚其ノ際大統領ハ時間ヲ割キ自

分等ヨリ我々ノ任務ニ関スル御話ヲ為ス機会ヲ与ヘラレタルコトハ多トスル処ナリ右話ノ際自分ハ一昨日閣下トノ会見ニ於テ申上ケタル内容ノ要領ヲ陳述シ置キタリ

㈡扨今日ハ前回申上ケタル諸点ニ付閣下ノ御意見乃至御批評ヲ聞クコトヲ得ハ幸甚ナリ

「スチムソン」

㈠喜テ貴需ニ応セム考ナリ閣下ハ余ニ虚心坦懐ナラムコトヲ求メラレタルカ本日ハ風邪ノ為声ヲ嗄ラシ居リ余リ長々ト御話モ出来サル次第ナルニ付旁簡明淡白ニ所見ヲ申述フルコトト致度シ自分ハ華府会議ニ依リテ招来セラレタル日米間ノ良好ナル感情ニ最重キヲ置クモノナリ米国ノ立場ヨリ之ヲ観察スルニ閣下モ御記憶ノ如ク華府会議以前ニ於テハ甚タ難局ヲ現出シ居リ又両国間ニ面白カラサル感情アリタリ然ルニ出淵大使ヨリモ屢々伺ヒタル通リ之等ノ悪感情ハ次第ニ消滅シ去リ今ヤ両国ハ好感ヲ以テ結ハレツツアリ自分ハ倫敦会議ニ参列スルニ当リ此ノ良感情ノ変更又ハ減少セサル様是非共務メタキ考ナリ此ノ見地ヨリ閣下ノ御質問ニ対シ御答セムトス

㈡先日モ申上タル通自分ハ日本ノ防備上ノ必要ニ付何等ノ批評ヲ加ヘムトスルモノニ非ス之ハ全然日本政府ノ自ラ決定スヘキコト申ス迄モナシ併乍ラ先日御提出ノ数字ハ米国民ノ心理ニ圧迫ヲ加フルモノナルコトヲ確信ヲ以テ申上ケサルヲ得ス軍備縮少ヲ求メツツアル米国行政部ニ於テハ右数字ニ付多大ノ失望ヲ禁スル能ハサルモノニシテ実ハ大統領モ失望セラレ居ル次第ナリ何トナレハ日本ノ数字カ高率ナルニ於テハ米国民モ米国議会モ米国トシテ欲スル処以上ノ増艦ヲ余儀ナクセラルルニ至ルヘケレハナリ御承知ノ如ク大統領ハ輿論ノ趨向ヲ察シ熱心ニ縮減ヲ希望シ居ル次第ナル処米国ノ輿論ニ徴スルニ米国民ノ考ハ米国ノ如ク両洋ニ跨ル長キ海岸線ヲ有スル国ハ日本ノ如ク一国ノ島嶼ヨリ成ル国ヨリモ更ニ大ナル軍備ヲ要スルコト当然トナスモノニシテ従テ日本ニ於テ比率ヲ増シ軍備ヲ増大セムトセハ米国モ亦其ノ軍備ノ増大ヲ要求セサルヘカラストノ結論ニ達スル訳ナリ日本ニ於ケル輿論ニ関スル御意見ハ既ニ閣下ヨリ御話シアリタルカ自分ハ会議ニ於テ

日本国民ノ自然ノ感情ヲ尊重シ或ハ無理矢理ニ劣勢ヲ押付ケタリト言フカ如キ或ハ主権ノ侵迫ヲ加ヘタリト言フカ如キ感想ヲ残ササル方式ヲ案出シ度希望ヲ有スルモノニシテ目下同僚並ニ国民トノ間ニ斯ル解決方法ヲ熱心ニ研究シ居ル次第ナリ

此ノ見地ヨリ先日出淵大使ト共ニ申上ケタルコトナルカ今日又繰返シ申上ケタキハ数字又ハ比率ヲ挙ケ新聞紙上ニ於テ軍縮問題ヲ論議スルコトハ単ニ両国間ニ感情ノ疎隔ヲ誘致スヘキノミナラス満足ナル解決ヲ見出スコトヲ益々困難ナラシムル虞アルハ事実ナリ併乍ラ外部ニ漏洩ノ危険ナキ此ノ席上ニテハ数字ヲ挙ケテ御答ヘスヘキカ自分ハ米国民及議会カ二十二万六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ以テ米国ヲシテ対抗的増艦ヲナスノ余儀ナキニ至ラシムルモノナリトノ考ヲ懐クヘキコトヲ惧ルルモノナリ自分ハ充分ニ熟慮シ又議員タル同僚ノ意見ヲモ求メタル次第ナルカ此ノ点ニ付テハ自分ノ観察ノ誤ラサルコトヲ確信スルモノナリ

㈢尚潜水艦ニ就テハ御承知ノ通米国政府ハ之ヲ商船破壊ニ用フルコトニ強キ反対ヲ有セリ従テ華府会議ニ於テ潜水艦濫用ヲ取締ル条約ヲ締結セル際日本ノ参加ヲ得ラレタルモノナルコトヲ信シ居レリ従テ余リニ之ニ信頼ヲ置キ余リニ其ノ噸数ヲ増大スルハ結局戦時法規ニ従ヒ得サルカ如キ状況ノ下ニ於テ商船攻撃ノ用ニ供スルノ誘惑ヲ感セシムルノ惧アルモノト考ヘサルヲ得サル次第ナリ勿論他国ニ於テ此ノ点ニ付別様ノ意見ヲ有セラルルコトハ之ヲ認ムルモ少クトモ此ノ種ノ艦種建造ヲ縮減シ大戦中コノ批難ヲ蒙ムリタル如キ非人道的使用ノ制限セラレンコトヲ切望スルモノニシテ従テ倫敦会議ニ於テモ華府会議ノ際ト同趣旨ノ潜水艦ニ関スル条約ノ成立センコト希望ニ堪エス而シテ閣下ノ挙ケラレタル約八万噸ノ数字ハ米国国民ヲシテ右ハ商船攻撃ノ誘惑ニ陥ルノ惧アル数量ナリトノ感想ヲ抱カシムヘシ即チ此ノ数字ハ曩ニ申述ヘタル日米間ノ良好ナル感情ニ禍スルノミナラス米国ヲシテ駆逐艦及軽巡洋艦等潜水艦ニ対抗スヘキ艦種ヲ多数建造スルノ余儀ナキニ至ラシムルモノト言ハサルヘカラス従テ会議ノ成功ヲ切望スル米国トシテハ此ノ数字ヲ危険ナリト考フルモノナリト述ヘ尚日本国民ノ感情ヲ尊重スヘキコトヲ

繰返シ又ハ倫敦会議ニ於テ胸襟ヲ開イテ解決ニ努力センコトヲ付言セリ

（若槻）率直ニ米国当事者議会国民等ノ感情ヲ種々御話相成良ク諒察セリ同時ニ又日本国民ノ期待感情等ニ重キヲ置カルル事ハ自分ノ欣トスル所ナリ余ハ本日余リ同シ事ヲ繰返スノ考ナク唯一言シ置キタキ点ハ日本国民ノ考ニ依レハ日本ハ英米等ヨリ軍備劣勢ナルノミナラス右ハ全ク国防ノ見地ヨリ保有シ居ルモノナルカ故ニ外国ニ対シテ脅威ヲ与フルト云フカ如キ事到底想像シ得サル所ナリ唯今閣下ヨリ巡洋艦及潜水艦等ニ関シ先日ノ数字ニ付テ御批評アリシカ其ノ際モ申上ケタル通巡洋艦ノ噸数ハ結局相対的ニ割出サレタル数字ニシテ他国ニ於テ之ヲ低下スレハ日本亦低下シ差支ナキモノナリ又潜水艦ニ付唯今御話ノ条約ヲ締結スル義ハ日本ノ最賛意ヲ表スル所ナリ元来日本カ潜水艦ヲ保有セント欲スルハ決シテ商船攻撃ノ考慮ニ出ツルモノニ非ス劣勢海軍国タル立場上防禦ノ武器トシテ之ヲ必要トスルモノナリ兎ニ角之等ノ点ハ先日申上ケタル事ニモアリ茲ニ詳シク繰返ス事ヲ避クヘキカ他日専門家等ノ間ニ細密ニ亘リ談合ヲ行ハシムルニ於テハ自ラ御諒解出来得ヘキ事ト思考ス尚折角良好ナル両国民間ノ感情ヲ尊敬シテ解決ニ達シタシト云フ閣下ノ御精神ニハ全ク同感ナルカ夫ト同時ニ日本国民カ何国ヲモ侵ササル比率ヲ要求シ之ヲ認メラレサル場合ニ抱クヘキ感情ニ付テハ充分御諒承願ハサルヲ得ス日本ハ比率ノ増加ヲ云フニ非スシテ釣合ノ悪シキ防備ヲ不可トスルニ過キサルモノナリ（此ノ時「モロー」ハ長官ノ傍ニ来リ頻リニ耳打チセリ）尚本問題ニ付予メ大体ノ解決ニテモ付ケ得ルニ於テハ会議ニ於テ最後ノ決定ニ達スル事ヲ容易ナラシムヘシト思考スルニ付自分出張後モ出淵大使ト引続キ御相談ヲ願ヒタク尚又倫敦到着後会議開催前ニ時間アル事ト思ハルルニ付同地ニ於テモ更ニ御相談致シタク閣下ノ友誼的且率直ナル御話ノ通倫敦会議ノ結果両国民間ノ関係愈良好トナラン事ヲ切望シテ已マス

「スチムソン」只今ノ御話ノ通倫敦ニ於テ尚御相談ノ機会アルヘク又引続キ出淵大使トモ相談致スヘシ自分ハ今（日）貴全権等ニ御目ニカカリ倫敦会議ニ於テ必ス満足ナル解決ニ到達シ得ヘシトノ強キ希望ヲ抱クニ至レリト語リ尚今日モ前回同様共同新聞公表案ヲ作製スルコトトシタキ旨ヲ述ヘタリ

（若槻）申忘レタルカ新聞ニ数字比率等ヲ掲ケテ議論スルノ不可ナルコトヲ述ヘラレタルカ日本政府ニ於テモ全ク同意見ナリ近来新聞紙等ニ現ハレ居ル数字ハ決シテ我方ヨリ出シ居ルモノニ非サルコトヲ御承知アリタシ

「スチムソン」自分モ米国新聞紙ノ如何ナルモノナルカハ良ク承知シ決シテ貴方ヨリ洩ラサレタルモノト疑ヒ居ラス又同時ニ我方ヨリ洩レタルモノト疑ハサランコトヲ望ム

右ニテ会見ヲ終レリ

新聞公表特電ノ通

英ニ転電シ英ヲシテ仏伊ニ転電セシム

251　昭和4年12月19日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議への英国政府の意向に関するクレーギー外務省アメリカ局長の談話について

ロンドン　12月19日後発
本　省　12月20日後着

第四八八号（極秘）

往電第四七一号末段本使「マクドナルド」打合セノ趣旨ニ従ヒ我補助艦ノ勢力ニ関スル数字等ヲ明確ニ説明セムカ為堀参事官佐藤、島津両武官ヲシテ外務省米国局長「クレーギー」ヲ訪問セシメタル処

一、右説明ノ後先方ヨリ相互事前ノ研究ニ便セムカ為主力艦其ノ他ニ関シ現在ノ意向ヲ示シ合フコトニ致シタシトノコトニ付本使ノ予メ指示シタル処ニ従ヒ佐藤ヨリ日本政府カ之等各種ノ問題ニ付研究シアルコトハ申上ケ得ルモ自分等ハ今直ニ内容ヲ示シ得ヘキ立場ニアラスト答ヘタル処然ラハ英政府ノ意向ヲ開示スヘキニ付日本政府ニ取次カレタシ尚日本政府ヨリモ同様ノ開示ヲ得ハ幸甚ナリトテ各艦種ニ就キ提案セムトスル処ヲ左ノ如ク語レリ

㈠主力艦

イ、艦齢ヲ二十六年ニ延長ス

ロ、艦型ヲ備砲十二吋（三十糎）排水量二万五千噸トス

ハ、代換第一艦ハ規定通一九三一年ニ起工スルモ以後ノ起工隻数ヲ成ルヘク英、米毎年一隻日本隔年一隻ニテ足ル様代換期間ヲ伸張ス

ニ、現規定ノ隻数ハ動カサス

㈡航空母艦
イ、艦齢ヲ二十六年ニ延長ス
ロ、最大排水量ヲ二万五千噸ニ減シ
ハ、現規定ノ隻数ハ動カサス
ニ、一万噸以下ノ母艦ニ就キ何等カ研究シアリヤトノ当方ノ質問ニ対シ何等考究シアラスト答フ
㈢駆逐艦
概ネ寿府会議仮協定通ニテ最大排水量嚮導駆逐艦一、八五〇〇噸、駆逐艦一、五〇〇〇噸、備砲五吋以下艦齢十六年トス
今次会議ノ協定量ハ日仏ノ大潜水艦要求如何ニ依リ変化アルヘキモ英、米従来ノ話合ハ英、米各十五万乃至二十万噸ニ落着ケタキ希望ナリ
㈣潜水艦
寿府会議仮協定通ニテ最大排水量一、八〇〇〇噸、機関砲五吋以下艦齢十三年
㈤制限外艦艇
寿府会議仮協定ノ通
㈥艦齢超過艦ノ保有ニ付意向ヲ尋ネタル処決定セルモノナキカ如ク保有ノ必要ヲ認ムル国ハ武装撤去速力低下等ニ依リ制限艦艇トシテ保有スルコトトセハ概ネ目的ヲ達シ得ヘキニ非スヤト稍々曖昧ニ答ヘタリ
㈦右ニ対スル英政府ノ意向ハ既ニ米政府ニモ回示シアリ但シ立入リテ討議シ若ハ何等協定ヲ見タル訳ニ非ス
二、参事官ヨリ英米間ノ交渉ニ於テ英国ハ米国ノ大型巡洋艦十九隻ヲ認メタルヤノ新聞記事モ散見スル処真相如何トノ質問ニ対シ左様ノ話ハ全然無根ニテ英国ヨリハ十八隻ヲ主張セル儘物別レトナリ居ルモノナリト語レリ
三、我補助艦勢力ノ説明ニ当リテハ佐藤公使ニ托送ノ本年十一月十三日調製明年一月一日現在現有勢力比較表其ノ一ノ数字其ノ儘ヲ示シ且日本ノ分丈ケヲ英訳シテ交付スル様約束セリ
四、尚「ク」ハ仏国側ハ一月二十三日ノ会議ヲ公開シ其ノ席ニテ各国ノ主張ヲ陳述スルコトトシ度キ希望ナル処右ハ会議ノ終局目的達成ニ関シ障碍ヲ与フルモノトシテ仏国側ヲ説得スル考ナルカ尚二十日午前首席全権ノミノ非公式会合ヲ開キ其ノ席上一般ノ「プロセデユアー」ノ問題及右ノ点ヲ決定スルコトト致シタキ希望ナリト述ヘタリ

米国及紐育ニ転電セリ

252　昭和4年12月19日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

全権着英後会議開催までの予備交渉に関し打合わせについて

ロンドン　12月19日後発
本　省　12月20日後着

第四九一号
往電第四七三号ニ関シ
本使ハ帝国政府ノ御方針ハ予備交渉ニ重キヲ置キ重要ノ問題ハ出来得ル丈会議開催前ニ片付ケ本会議ハ和気藹々ノ裡ニ進行セシムヘシトノ御趣旨ニ重キヲ置キタル為前記往電ノ通請訓ニ及ヒタル次第ナルカ佐藤公使帰来大臣ヨリノ御話又打合セ会等ノ様子モ詳細承知シ少クトモ両全権米国官憲ト協議セラルル様子ヲ充分確メラルル迄ハ本使請訓ニ対シテモ御回示御困難ノ事情アルヘキコトハ拝察スル所ナリ而シテ会議前ニ於ケル当地ノ予備交渉ハ通常ノ外交機関ニ依リ行フヘキ様双方ニ於テ諒解シ（往電第三五九号参照）居ルモ既ニ本月二十七日両全権着英ノ後ハ必スシモ外交機関ニノミ依ル必要モナカルヘク即チ両全権着英後会議開催ニ至ル迄ノ間ノ予備交渉ハ本使ノ手ヨリ会議全権ノ手ニ移スコト可能カト思考スルカ此ノ点ハ他国トノ振合モアルニ付一応「マ」首相ノ同意ヲ取付クル必要アリト思考ス若シ政府ニ於テモ御異存ナクハ適当ノ機会ニ右様首相ト打合スヘク今後予備交渉ニ関スル電報等ハ本使ノ名ニ依ラス全権ノ名ニ於テ発送スルコトトスヘク右予メ御回示ヲ請フ

253　昭和4年12月20日　在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

ロンドン軍縮会議に対する仏国政府の方針及び潜水艦廃止問題に対する伊国政府部内の論議について

パリ　12月20日後発
本省　12月21日前着

第四三五号
諜報者ノ内密報ニ依レハ十六日「タルジウ」首相ハ「ブリアン」外相其ノ他関係大臣ト協議ノ結果軍縮会議ニ対スル仏国政府ノ方針ヲ決定シタルカ其ノ内容ハ大要左ノ通
一、倫敦軍縮会議ハ国際連盟軍縮事業ノ一部タルコトヲ要

ス

二、陸海空三軍ノ縮少ハ相関連スルモノナルヲ以テ倫敦会議ニ於テ作成セラルヘキ海軍々縮ニ関スル協定ハ今後連盟ニ於テ作成セラルヘキ陸空両軍々縮ニ関スル協定ト同時ニ効力ヲ発生スヘキモノナリ

三、仏国ハ其ノ本国ヲ廻ル三海面以外広大ナル植民地ノ防禦並ニ北「アフリカ」トノ連絡ヲ保全スルニ足ルヘキ海軍力ヲ保有セサルヘカラス又倫敦会議ニ於テ採用スヘキ制限方式ハ総噸数主義ニ依ルヘク艦種別主義ニ依ルヘカラスト言フニアリ而シテ伊国トノ「パリチー」ノ問題ニ付テハ何等ノ記載ナキモ仏国側トシテハ此ノ問題ニ付伊国ト議論上下スルコトハ出来得ル限リ避ケ度キ意向ニテ旁仏国側ノ主張スル最高保有噸数ハ実際上伊国カ追随シ能ハサル程度ノモノトシ度シト云フ

尚先般在伊仏国大使ハ前記諜報者ニ対シ過般軍縮会議ニ関スル英国政府招請状発送ノ翌日「ムツソリーニ」首相ト会見セルニ同首相ハ潜水艦廃止ニ反対ノ意向ヲ述ヘ居タルカ其ノ後二三週間ヲ経テ「グランジー」外相ト会見シタルニ同外相ハ其ノ後廃止ニ賛成ノ意向ヲ洩ラシタルニ付仏国大使ヨリ前記「ムツソリーニ」ノ意見ト一致セサルコトヲ指摘シタルニ同外相ハ当惑ノ色ヲ示シタリ惟フニ本件ニ関シテハ伊国政府部内ニハ賛否両論アルモノノ如ク其ノ中海軍部ノ意見ハ「ユウゴウスラブ」カ潜水艦ヲ保有スル結果「アドリア」海ニ於ケル伊国ノ制海権ヲ脅威センコトヲ惧レ潜水艦廃止説ニ傾キ居ルカ如シ云々ト内話セル趣ナリ

英、米、伊ニ転電シ、連盟事務局ヘ通報セリ

254　昭和4年12月20日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

我が全権との会談日程打合わせなどに関するマクドナルド首相との会見について

ロンドン　12月20日後発
本　省　12月21日後着

第四九七号

往電第四九〇号ニ関シ

十二月二十日「マ」首相ニ面会我首席全権一行本月二十七日ニ到着後成ルヘク早キ機会ニ於テ会見ヲ希望スル旨申入レタル処「マ」ハ実ハ昨夜ヨリ休暇旅行ノ計画ナリシモ議事非常ニ多キヲ以テ来週火曜日迄延期シ即日出発郷里「ロシマス」ニ赴キ疲労静養ノ為大体一月十四日頃迄留マリタキ希望ナル旨ヲ述ヘ十四日、十五日、十六日、十七日連日午后時間ヲ繰合セ会談致スコトト為シタキ旨ヲ述ヘタリ

右ハ当方ニトリ不便ト思ハルルモ首相ニ於テモ非常ニ疲労シ居ル模様ニモアリ強テ休暇ノ切詰ヲ要求スルコトモ如何ト存セラレ且目下ノ状況ニ於テハ首相以外ト会談スルモ殆ト要領ヲ得ルコト困難ノ状況ニ付右短期間ニ於テ充分腹蔵ナキ意見ノ交換ヲ為ス外ナキカト思考ス

本使ハ予備交渉ハ最初普通外交機関ニ依リ行フ諒解ナリシト思考スルモ既ニ我全権到着ノ上ハ全権トノ間ニ忌憚ナキ意見ノ交換ヲ為ス事便宜ナルヘシト述ヘタル処首相モ之ニ異議ナク但シ自分モ一二他ニ立会ハシムルヤモ知レサル旨述ヘタリ首相ト面会ノ機会尠クナリタルヲ以テ往電第四九一号ノ御回示ヲ俟タス右取計ヒタリ尚「マ」ハ議会出席中僅カノ時間ヲ繰合セ会見シタル事トテ充分話ヲ為ス機会無カリシモ主力艦問題ニ付往電第四八八号堀以下「クレーギー」トノ会談ニ関連シ日本ニ於テハ主力艦ノ代換期日延長艦型縮小及艦齢延長ニ関シテハ之ヲ希望スル旨述ヘタル処首相ハ如何ナル程度ノ艦型縮小ヲ考量シ居ルヤヲ尋ネタルニ付此ノ点ハ未タ言明スヘキ材料ヲ有セサルニ付追テ話シスヘキ旨ヲ申述ヘ置キタリ尚本使ハ首相出発前或ハ何等申入ルヘキ訓令ニ接スル事アル場合ニハ是非申出テノ時間ヲ与ヘラレ度キ旨述ヘタル処殆ト面会ノ時間約束済ミナルモ月曜午后二時半ナラハ何トカ都合スヘキ旨申居リタルニ付若シ何等申入ルヘキ事アラハ成ルヘク其ノ時間ニ間ニ合フ様御電報ヲ請フ

米ヘ転電シ仏、伊ヘ暗送セリ

255　昭和4年12月20日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

会議の目的及び議題などに関する日本政府回答交付について

別　電　同日幣原外務大臣より在米国出淵大使宛第四三〇号
会議の目的及び議題などに関する日本政府回答

第四二九号　12月20日後6時40分発

在英大使宛往電第三二〇号ニ関シ

英国政府ニ対スル別電第四三〇号回答覚書二十日付ヲ以テ明二十一日吉田次官ヨリ在京英国大使館「ドーマー」参事

官ニ手交ノ筈
両全権並英ニ転電ン英ヲシテ仏伊ニ転電セシメテレ度
(別　電)

Memorandum.

The Japanese Government have carefully considered the proposals contained in the Memorandum of the British Embassy on the agenda and the procedure to be followed at the forthcoming Naval Conference in London, and they venture to offer the following observations.

2. It is intimated in that Memorandum that the British Government propose to define the aim of the Conference as being "to attain agreement on the reduction of existing naval strength and programmes, and on the limitation of war vessels on the basis of mutually accepted strengths". Having regard to the communication of the British Government dated October 7, stating that the Conference is intended "to consider the categories not covered by the Washington Treaty, and to arrange for and deal with the questions covered by the second paragraph of Article 21 of that Treaty", the Japanese Government understand it to be implied in the proposals now made by the British Government for the definition of the aim of the Conference——

(a) that the arrangement which the Conference is to seek to attain for "the reduction of existing naval strength and programmes", as mentioned in the Memorandum under review, is to include all categories of ships, whether covered or not covered by the Washington Treaty ;

(b) that with regard to the categories covered by the Washington Treaty, the same basis of limitation as is laid down in that Treaty shall continue to govern any arrangement which may be reached at the London Conference with a view to further reduction and limitation of armaments ; and

(c) that with regard to the categories not covered by the Washington Treaty, a new basis of reduction and limitation is to be agreed upon at the London Conference.

3. The British Government suggest that the date by which the agreed equilibrium is to be reached should be December 31, 1936. It is presumed that the proposed date relates only to the categories not covered by the Washington Treaty. The Japanese Government welcome the suggestion as a basis of discussion, but they would prefer to reserve the definite decision on the date, until the whole plan affecting the naval strengths of the several Powers shall have been made more fully known.

4. Referring to the suggestion of the British Government respecting the duration of the period within which the basis of agreed strength is to continue in force, the Japanese Government are of the opinion that the question might conveniently be left for the Conference to examine.

5. The Japanese Government highly appreciate the elaborate care taken by the British Government in working out the agenda and the procedure to be followed at the Conference. It is hoped that the British Government will arrange with the Japanese Delegates upon their arrival in London as to the particulars of such agenda and procedure.

6. Subject to the observations above set forth, the Japanese Government are happy to concur in the proposals embodied in the Memorandum of the British Embassy.

256　昭和4年12月21日　在仏国安達大使より幣原外務大臣宛(電報)

下院海軍予算討議の際のレイグ海相及びヒット大急進社会党首領の発言について

パリ　12月21日後発
本省　12月22日前着

第四三九号
二十日下院海軍予算討議ニ際シ当国海相「レイグ」ハ仏国

政府ハ既定ノ海軍計画ヲ遂行スル方針ナル旨ヲ述ヘタル後軍縮問題ニ対スル仏国ノ方針ハ陸海空三軍牽連性倫敦会議ノ連盟ニ対スル従属性並ニ仏国ノ保有スヘキ海軍力ハ連盟規約第八条ニ準拠セサルヘカラサルコトノ三点ニ在リ而シテ倫敦会議ニ於テ右仏国ノ保有スヘキ海軍力ニ関シテハ数学的数量ヲ提起スルコトナク政治的数量ヲ提起スヘク又仏国トシテハ華府会議ノ際主力艦ニ付キナシタル犠牲ヲ補助艦ニ於テ補フノ要アリト述ヘタリ

尚右討議ニ際シ急進社会党首領「エリオ」ハ来ルヘキ倫敦会議ニハ海洋自由問題提起セラルルヤモ知レサルコト並ニ倫敦会議ニ参加セサル独逸ノ新型一万噸艦六隻ヲ完成セル場合ノ危険ヲ指摘シ軍縮問題ハ五国間ノミノ協定ニ依リ解決セラルヘキニハアラス国際連盟ニ依ルノ外ナキ旨ノ意見ヲ発表シタリ

英、米ニ転電シ連盟事務局ニ通報セリ

257 昭和4年12月21日 在ニューヨーク沢田総領事より幣原外務大臣宛（電報）

両全権のニューヨークにおける記者会見の模様について

ニューヨーク 12月21日後発
本省 12月22日前着

第八八号

若槻、財部両全権一行ハ十九日午後九時華府ヨリ来紐同夜九時半新聞記者ト会見シ質問ニ答ヘタルカ翌二十日ノ各紙ハ右ニ関シ何レモ詳細ナル報告ヲナシ特ニ日本カ大巡洋艦ノ七割要求ヲ強固ニ主張シ居ル点並ニ主力艦代艦問題ニ注意ヲ払ヒ居リタリ二十日両全権ハ「ホテル、プラザ」ニ於ケル本官主催午餐会ニ臨ミタルカ米人側ヨリハ「ラモント」其ノ他財団ノ有力者ヲ始メ知名「アソシエーテッドプレス」「ユナイテッド、プレス」代表者其ノ他新聞記者及日本協会役員等出席シ主客合セテ約六十名ニ達セリ席上本官ハ両全権ノ略歴及ヒ功績ヲ語リタル上日本国民カ国際平和ヲ懸念セルコト切ナルモノアリ特ニ倫敦会議ノ成功ヲ期待シ居ル次第ヲ述ヘタル後「ラモント」ニ一言ヲ求メタル処氏ハ金解禁ニ言及シ日本カ其ノ困難ナル事情ニアリテ克ク難局ヲ切抜ケ英米ニ於ケル「クレヂット」設置ニ対シテモ慎重ナル準備ヲ遂ケタルコト及之等ノ問題ニ携ハリタル米国銀行家カ日本ノ誠実及協調実行ノ精神ニ対シ充分ノ信用及ヒ信頼ヲ有スル旨ヲ述ヘ米国実業家ノ関スル限リ国民

ノ負担ヲ軽減スルコトトナルヘキ軍縮ノ運動ハ何レモ挙ツテ之ヲ支持スルモノナルコトヲ言明シ今回ノ会議ニ当リ日本全権カ華府会議ト同様ノ熱心ナル協調的態度ヲ持セラルルヲ知リ満足ニ堪ヘストノ趣旨ヲ語リ最後ニ若槻全権ハ「シヤトル」上陸以来米国官民ヨリ受ケタル好意ヲ謝シ倫敦会議カ不戦条約締結後ノ好時機ニ招集セラレタルコトヲ述ヘタル後日本トシテハ防衛上必要ナル充分ノ海軍力ヲ維持セサルヘカラサルモ本会議ノ成功ニ対シテハ其ノ最善ノ努力ヲ尽スノ用意アルヲ語リ次テ本邦金解禁ニ言及シ政府カ極力緊縮政策励行ノ結果内外貿易及ヒ国際貸借ノ「バランス」等ハ著シキ改善ヲ見ツツアル時米国財団カ今次ノ解禁ニ関シ与ヘラレタル好意ヲ感謝シ終リニ日本ハ金本位制ニ復帰セルコトニ依リ世界ノ経済的復興ニ貢献ヲナシタルモノト考ヘラルルカ此ノ時ニ当リ世界ノ平和ト人類ノ福祉トヲ増進スヘキ本会議ニ参加スルコトトナレルハ欣幸ニ堪ヘスト述ヘ来会者一同ニ深キ印象ヲ与ヘタリ

尚一行ハ同夜在留本邦人発起ノ歓迎会ニ臨ミ別ニ財部夫人ハ同日午後本官妻主催ノ茶会ニ出席シ一行ハ午後十一時出帆ノ「オリンピック」号ニテ渡英ノ途ニ就ケリ

258 昭和4年12月22日 在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議への米国政府の意向に関するキャッスル駐日大使の談話について

ワシントン 12月22日後発
本省 12月23日後着

第五三五号（極秘）

二十一日「キャッスル」大使ヲ往訪軍縮問題ニ関シ会談セルカ大要左ノ通

㈠先ツ本使ヨリ今回若槻、財部両全権米国通過ニ際シ大統領国務長官始メ各方面ニ於テ多大ノ好意ヲ示サレ且相互ノ意見交換ノ機会ヲ与ヘラレタルコトハ自分ノ深ク感謝シ居ル処ニテ米国側ノ歓迎振ハ詳細日本政府ニ電報シ置キタリト告ケタルニ「キャ」大使ハ日本両全権ノ真摯ナル態度ト腹蔵ナキ意見ノ交換ハ米国官辺ニ多大ノ好感ヲ与ヘタリ今次ノ会談ニ依リ仮令実質的ニハ別段纏リヲ見ルニ至ラサリシニモセヨ会議ノ成功ニ対シ多大ノ貢献ヲ為シタルコト言ヲ俟タスト認メ米国政府ハ深ク満足シ居レル旨切言セリ

㈡次テ本使ヨリ国務長官ハ我全権トノ二回ノ会議ニ於テ日本側ノ比率ニ関スル要求等ニ対シ従来通熱心且率直ニ反駁ヲ加ヘラレ又米国民ノ感情ヲ引合ニ出シ日本ハ六割比率ニ基ク主力艦ニ於テ著シク減縮ヲ為シ之ニ依リテ生スル財政上ノ余力ヲ七割ノ高率ナル巡洋艦ニ振向クト言フカ如キ新論法ヲ用ヒラレタル処右ハ若槻全権ノ直ニ反駁シタル通甚タ謂レナキコトニシテ要スルニ日本トシテ七割ノ比率ヲ主張スルト共ニ英米ニ於テ低下シ得ル限リ之ニ比例シテ之ヲ低下スル決意ヲ有スル次第ナリ此ノ点誤解ナキコトヲ希望スト念ヲ押シ

㈢引続キ本使ヨリ本日ハ全然非公式ニ貴大使ヨリ稍々具体的ニ米国側ノ意向ヲ承リ度シト前置キシ日本ハ大型巡洋艦ニ関シ米国ノ七割即チ英米ノ各保有量ハ十五及十八ニテ落付クモノト仮定シ十二万六千噸十三隻ヲ要求スルモノナルカ右ニ関スル米国政府ノ意向ハ貴大使ニ於テ此ノ際述フルコトヲ欲セラレサルヘキモセメテ米国海軍側ノ大体ノ空気ナリトモ承ルヲ得ヘキヤト尋ネタルニ「キャ」ハ噸数問題ハ結局倫敦会議ニ持越サルヘキ事項ニシテ仮令平素懇意ノ間柄ナル貴大使ニ対シテスラ此ノ際米国ノ意向ヲ申上クルコトハ不可能ナリト述ヘ適確ナル意見ヲ述フルコトヲ躊躇シタルカ結局日本ニ於テ一万噸巡洋艦十二隻ヲ割当ツル態度ナラハ米国海軍側ヲ納得セシムル望アルモ十三隻殊ニ過渡案トシテ十四隻ノ如キハ同海軍側ニ於テ容易ニ同意シ得サルヘキノミナラス英国側トシテモ愚味ナル豪州ノ輿論ニ刺戟セラレ到底是ヲ承知セサルヘク殊ニ「マ」内閣ハ最近八票ノ差ニテ漸ク敗北ヲ免レタルカ如キコトモアリ日本ノ要求ヲ容認スルコト一層困難トスル処ナルヘシト述ヘタルニ付此ノ機会ニ於テ本使ヨリ貴大使ハ愚昧ナル豪州ノ輿論ヲ云々セラレタル処国務長官モ比律賓ニ関スル米国ノ輿論ヲ引合ニ出サレタルカ右米国ノ輿論モ甚タ諒解ニ苦シム処ナリ日本ハ既ニ華府会議ノ際日英同盟ヲ潔ク捨テ爾来極東ニ於テ独立独歩平和政策ニ則リ経済的立国就中日米支間ニ経済的提携ヲ旨トシ居リ豪州若クハ比律賓ニ対シ是ヲ脅威スルカ如キ意図ヲ抱クコトハ絶対ニ有リ得ヘカラサル処ナルニ付斯ル誤レル米国ノ輿論ハ政府当局ニ於テ適当ニ啓発セラレンコトヲ希望スル旨述ヘ置キタリ

㈣次テ駆逐艦以外ノ各艦種ニ関シ意見ヲ交換シタル処「キャ」ハ大要左ノ通語レリ

（主力艦）米国政府ニ於テハ主力艦ヲ以テ海軍力ノ核心ト認メ之ヲ頗ル重要視シ居リ英国カ強大ナル商船隊ヲ有シ一朝有事ノ際何時ニテモ六吋砲ヲ搭載シ得ル現状ナルニ鑑ミ主力艦ヲ廃止スルカ如キハ思ヒモ依ラサル事ナリ又其ノ艦型縮小ハ英国ニシテ「ロドネー」「ネルソン」ヲ廃棄スル決意ヲ示ササル限リ相談ニ応スル余地ナシ曩ニ長官ヨリ貴大使ニ対シ御話アリタル事アル隻数減少ニ付テハ軍備縮小ナル見地ヨリ一案トシテ考ヘ出シタル次第ニテ必スシモ右主張ニ熱心ナル訳ニ非ラス要スルニ米国政府トシテハ日本政府ノ主張セラルル代換延長及艦齢延長ニ最モ賛成ナルモノニシテ之ニ依リ国費ノ節減モ割合ニ大ナルモノアルニ鑑ミ此ノ点ハ日米一致シテ達成セサルヘカラス

右「キヤ」ノ所言ニ対シ本使ヨリ主力艦ノ隻数減少ナル案ハ日本ニトリテ容易ニ同意シ得サル処ナル旨更ニ念ヲ押シ置キタリ

（巡洋艦）米国海軍部内ニハ大型巡洋艦ノ建造ニ熱心ナルモノ多キモ右ハ概シテ老人連ニ多ク若手中ニハ大型艦ノ必要ヲ認ムルト同時ニ欧州大戦ノ結果ニ徴シ相当多数ノ軽快ナル小型巡洋艦ヲ有スルコトハ得策ナリト熱心ニ主張スルモノアリ

又英米協定ノ十五対十八ノ数字ハ最早低下セシムコト不可能ナルカ如ク総噸数ニ於テモ最近英国政局ニ顧ミ之以上低減スルコト困難ト見受ケラル右ハ誠ニ遺憾トスル処ナルモ英国カ最後ニ十五隻迄切リ下ケタル事情ヲモ汲ミ之レ以上ニ英国ニ迫ルコトモ実際気ノ毒ナル感ナキニモアラス

右ニ対シ本使ヨリ英米ニ於テ噸数ヲ一層低下セハ日本モ之ニ比例シテ低減シ軍縮ノ目的ヲ達成スル為協力シタキ決意ヲ有スルモノナルコトハ既ニ繰返シタル処ナルカ唯今貴大使ヨリ英米協定ノ数字ヲ最早此ノ上低減スルコトハ絶望ナルカ如キ意見ヲ承ルハ遺憾ニ堪エストノ趣旨ヲ述ヘ置キタリ

（潜水艦）米国側ニテハ飛行機ハ爆弾投下ヨリモ寧ロ偵察発見（sighting）ニ効力大ナルモノアリトシテ其ノ発達ニ注意ヲ払ヒ居ル次第ニテ飛行機ニ発見セラレサル進度ニ於テハ一時間八浬程度ノ速力ヲ有スルニ過キサル潜

水艦ハ戦闘上余リ価値ナシトノ見解ヲ有スルヲ以テ其ノ噸数ヲ増スカ如キコトヲ欲セスト語リ日本ニ於テ八万噸ヲ主張セラルルコト海軍側ニ頗ル難色アル旨ヲ洩シタリ

(五)尚「キヤ」ハ仏ノ態度ハ追々明瞭トナリツツアル処依然トシテ「グローバルトネエイジ」三軍牽連国際連盟関係ヲ主張スルト共ニ地中海ニ関シ関係国間ニ何等カノ協定ヲナサムト努メ加之「ケログ」条約ニハ安全保障ノ規定ナク又侵略国判定ノ方法ナキコトヲモ主張セムトスルモノノ如キ処右ハ素ヨリ幾分懸引アルヘキモ日英米ノ態度ニ比シ著シキ逕庭アリ果シテ同国カ倫敦会議ニ於テ誠意協調スヘキヤ心許ナシトテ前回ニ比シ（往電第四九三号「二」)稍々悲観的口吻ヲ漏セリ

(六)前記「キヤ」ノ意見ハ全然隔意ナキ態度ヲ以テ述ヘラレタルモノナルカ其ノ内特ニ注意スヘキ点ハ(イ)米国海軍ニ於テハ日本ニ対シ結局一万噸十二隻丈ケナラハ容認セムトノ意向ナルコト及(ロ)主力艦ニ付テハ代換延期及艦齢延長ニ依リ節約ヲ計リ軍縮ノ実ヲ挙ケタルコトヲ標榜セムトスルコトノ二点ナリト認ム

申ス迄モナキ事ナカラ本日ノ会談ハ絶対ニ外界ニ漏ササル様特ニ御留意願ヒ度既往ニ於ケル本使ト国務長官トノ会談カ屢々新聞紙ニ漏洩セル事実ニ鑑ミ特ニ右申添フ

英ニ転電シ英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

259　昭和4年12月(23)日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

我が全権のワシントンにおける記者会見及び米国一般言論界の動向について

ワシントン　本省　12月23日後着

第五三三号

今次我方全権ノ米国通過ニ際シ当国輿論ノ啓発ニ努力スルコト特ニ緊要ト認メタルヲ以テ予テ電報シ置キタル通華府到着当日両全権ニ於テ主ナル新聞記者ヲ集メテ「ステートメント」ヲ与ヘラルルト共ニ其ノ質疑ニ応シ淡白ニ所見ヲ開陳スルコトトシ「シアトル」ニ出迎ノ加藤ヲシテ予メ篤ト打合セヲ遂ケシメ予定通十六日両全権記者団ト会見セラレタル処幸有力ナル記者多数参集シ比率問題ヲ始メ種々際トキ質問モアリタルカ若槻全権ハ極メテ真摯ナル態度ヲ以テ懇切簡明ニ説明シタル為記者側ニ対シ多大ノ好感ヲ与ヘ

翌朝ノ諸新聞ハ何レモ其ノ主要欄ニ於テ前日ノ会見ヲ詳細ニ報道シ尚両全権ノ打解ケタル応答振リヲ賞揚シ輿論啓発上予期以上ノ好結果ヲ収メルヲ得タリ他面米国政府ニ於テハ主人側タル立場上両全権ニ対スル優遇ノ誠意ヲ示シ両全権国務長官トノ二回ノ会談内容ヲ固ク秘密ニ付シタルノミナラス（二三新聞紙ニハ米国海軍側ヨリ漏レタルモノカトモ思ハルル若干ノ記事表ハレタリ）機会アル毎ニ日本全権ノ軍縮問題ニ関シ開示セラレタル方針ハ米国側ノ方針ト合致シ会議ノ前途頗ル有望ナル旨ヲ声明シタル為大統領及国務長官ノ懇篤ナル接待振リト呼応シテ米国官民ニ極メテ良好ナル感想ヲ抱カシメタルモノノ如ク今日迄ノ処新聞紙ノ論調ハ概シテ良好ナリ

尤今回両全権ノ陳述ニ依リ愈日本カ七割ノ比率ヲ強硬ニ主張スルモノナリトノ感想一般ニ高マリ米国海軍側ハ勿論議会方面ニ於テモ相当刺戟ヲ受ケタルモノト見ヘ嘗テ上院海軍委員長タリ現ニ上院外交委員会民主党首席委員タル「スワンソン」ノ如キ十八日大統領晩餐会ノ食後本使ト会談ノ際自分ハ多年日本各大使ト親交ヲ有シ日本ノ友人ヲ以テ任シ居ルモノナルカ日本カ華府条約規定ノ比率ト防備制限維持ニ甘ンセス今回七割ノ比率ヲ主張スルハ甚タ其ノ意ヲ得ス若シ日本側ノ主張緩和ノ余地無キニ於テハ自分等トシテハ結局防備問題ヲ再考スルノ已ムヲ得サルニ至ルヘキヲ恐ルル旨ヲ熱心ニ主張シ本官ハ之ニ対シ適宜応酬シ置キタルカ「フレデリク、ワイル」ハ二十二日華府「スター」紙上ニ日本カ七割ヲ主張スル以上米国トシテハ華府会議当時ノ経緯ニ鑑ミ防備制限協定ノ改正ヲ提案セサルヲ得ストテ其ノ筋ノ息ノ掛レルモノカトモ思ハルル如キ記事ヲ掲ケ居レリ右様ノ次第ニシテ目下当国一般言論界ノ空気ハ概シテ我ニ有利ナルモノアルモ今後比率問題ト関連シテ防備問題等相当論議セラルルニ至ルヤモ計リ難シト思料ス以上屢次ノ電報ト多少重複ノ点アルモ何等御参考迄

英ニ転電シ、英ヨリ仏、伊ニ転電セシム

260　昭和4年12月23日　幣原外務大臣より在英国松平大使宛（電報）

補助艦比率対米七割要求貫徹方に関し回訓について

本省　12月23日後3時発

第三二九号（極秘大至急）

貴電第四七一号及第四七三号ニ関シ

一、我七割要求ニ対シ英米方面ニ於テ強硬ナル反対ノ存スヘキハ我方ノ予テ覚悟シタル所ナルカ右ノ主張ハ畢竟我国土ノ安全ヲ期スルト共ニ我国ノ特殊国情ニ基キ国家ノ存立ニ必要ナル海上交通線ヲ防護スル為ノ最少限度ノ必要ニ基クモノナルヲ以テ万策ヲ尽シテ之カ貫徹ヲ期セサルヘカラサルハ勿論ノ義ナル処若槻財部両全権ニ於テモ米国国務長官トノ会談ニ依リ切角本問題ニ対スル米国側ノ意向ヲ質シ漸ク第二段ノ交渉ニ入ラントスル状況ナルニ顧ミ今日迄ノ交渉経過ニ依リ直ニ譲歩的態度ヲ以テ之カ最終解決ヲ急クコトハ機宜ヲ得タルモノト認メ難シ就テハ貴官ノ困難ナル立場ハ充分之ヲ諒トスルモ近ク着英セラルル若槻財部両全権トモ御協議ノ上一層我要求貫徹ノ為努力セラルル様致度シ

二、英国首相ハ対米七割要求ニ基ク我方ノ八吋砲巡洋艦要求量カ英国要求量ニ接近スルコトニ対シ難色ヲ有スル処右ハ英国側ニ於テ多数ノ小型巡洋艦ヲ必要トスル事情ニ依リ英米均勢ノ関係上八吋砲巡洋艦ニ付テハ米国ヨリ少数ヲ以テ満足シタル結果ニシテ他面小型巡洋艦ニ付テ謂ヘハ仮ニ我方ニ於テ水上補助艦ニ付対米七割ノ要求ヲ為スモノトスレハ我国ノ小型巡洋艦保有量ハ貴電第三五〇号（米国大型二十一隻小型十五隻）ノ数字ニ拠レハ米国ノ十万五千五百噸ノ七割即チ七万三千八百五十噸トナリ又貴電第三六六号（米国大型十八隻小型十八隻）ノ数字ニ依レハ米国ノ十二万六千五百噸ノ七割即チ八万八千五百五十噸トナリ英国ノ十九万二千二百噸ニ比スレハ夫々其ノ三八・四「パーセント」又ハ四六・一「パーセント」ヲ保有スルコトトナルニ過キス以上ノ事態ハ英国側ニ於テ小型巡洋艦ニ重キヲ置ク特殊事情アルト同シク我方ニ於テ大型巡洋艦ヲ重視セサルヘカラサル事情アル以上免レ難キ所ニシテ英国側ニ於テ大型巡洋艦ノミニ付云為シ小型巡洋艦ニ付何等言及セサルハ公正ヲ得タリト謂ヒ難カルヘク大型及小型ノ両者ヲ併セ考フルニ噸数ニ於テハ我勢力ハ英国勢力ノ六割五分内外ニ過キサル次第ニシテ英国首相ノ懸念ハ何等根拠ナキ所ナリ屢次ノ訓電ニ詳述セル通リ元来我海軍軍備ハ本国ニ近接セル海上ノ安全ヲ擁護スルヲ目的トシ固ヨリ何等侵寇的意図ヲ有スルモノニ非サルコトハ英米ニ比シ或ル程度ノ劣勢海軍力ヲ以テ満足セムトスルニ徴シ明瞭ナルヘク単ニ八吋砲巡洋艦ニ於テ我方ノ保有量カ英国保有量ニ接近スルノ一事ヲ挙ケ恰モ英国ニ対シ重大ナル脅威ヲ構成スルモノノ如ク論スルハ我国トシテ甚タ了解ニ苦シム所ナリ依テ貴官ハ右ノ趣旨ニテ英国首相ノ再考ヲ促シ其ノ誤解ヲ一掃スル様努力セラレ度シ

三、貴電第四九一号ニ関シ若槻財部両全権着英後ノ予備交渉ニ付テハ両全権ト御協議ノ上適当ト認メラルル方法ニ拠ラルル様致度電報発送方ニ関スル貴見ニ対シテハ何等異存ナシ

米ヘ転電シ仏伊ヘ暗送アリ度シ

261　昭和4年12月24日　在仏国安達大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議において討議さるべき問題に関する仏国政府の対英覚書の概要について

パリ　12月24日後発
本省　12月25日後着

第四四六号

英発閣下宛電報第四九〇号ニ関シ

二十四日当国外務省ヨリ軍縮問題ニ関スル仏国政府ノ二十日付対英覚書写ヲ送付シ越シタリ右ハ九頁ニ亘ル長文ノモノニシテ二部ニ分レ(イ)其ノ前半ニ於テ英国政府ノ提議セルカ如ク不戦問題ヲ以テ軍縮ノ出発点トスルハ可ナルモ現在不戦問題ハ国際紛争平和的処理並侵略国ニ対スル制裁ニ関スル手続規定ヲ欠キ各国ノ安全ヲ充分ニ保障スルニ足ラサル有様ナルニ顧ミ仏国政府トシテハ連盟規約ヲ以テ軍縮ノ基礎トスヘキモノト思考ス連盟規約ハ不完全乍ラモ兎ニ角安全保障並相互援助等ノ制度ヲ規定シ居ルヲ以テ同規約ノ外部ヨリ充分守リ立ツルニアラサレハ各国ハ有効ニ軍備ヲ縮小スルヲ得ス従テ軍縮問題ニ関スル技術的協定ノ為ニハ先ツ以テ政治的協定ノ成立ヲ必要トシ又海軍問題ニ関スル完全ナル協定ノ為ニハ海洋自由ノ問題及侵略国ニ対スル他関係海軍国間ノ相互援助ノ問題ニ付テ完全ナル諒解ノ成立スルコトヲ要ストノ一般論ヲ試ミタル後(ロ)後半ニ於テ軍縮ノ方法論トシテ往年ノ華盛頓会議ノ如ク単ニ数学的ニ五大海軍国ノ軍備ノ状態ノミニ着眼スルコトナク連盟規約第十八条掲記ノ諸事情ヲ充分考慮スルノ要アリトナシ次テ仏国ノ主張トシテ左記四点ヲ挙ケタリ

一、倫敦会議ハ連盟軍縮事業ノ一階梯ニ外ナラサルヲ以テ

同会議ニ於テ作製セラルヘキ協定案ハ連盟ノ一般的条約ノ一部ヲ為スヘキモノナリ又海軍制限ノ方式ニ付テハ元来総噸数主義ヲ主張スルモノナルモ各艦種間ノ融通ヲ認ムルニ於テハ艦種別主義トノ折衷ヲ計ルモ差支ナシ

二、仏国ハ倫敦会議ニ於テ陸空二軍ノ縮少問題ヲ提起スルノ意思ハナキモ其ノ地理的事情ニ鑑ミ海軍軍縮ヲ論議スルニ当ツテハ陸、海、空三軍ノ牽連性ヲ主張セサルヲ得ス

三、仏国ハ其ノ地理的状況並ニ広大ナル殖民地ノ防禦ノ必要アルヲ以テ連盟規約第八条ニ依リ其ノ保有スヘキ海軍力ヲ定ムルニ当ツテハ右事情ヲ参酌セサル可カラス

四、太平洋四国条約カ華府海軍協定ニ及ホシタル良好ナル結果ニ鑑ミ仏国政府ハ地中海沿岸海軍国間ニ相互保障並ニ不侵略ニ関スル協定ヲ締結シ倫敦会議ニ参加セサル西班牙等ノ之ニ加入スルヲ認ムルニ吝ナラサルモノナルコトヲ声明ス（右覚書写郵送ス）

英、米、伊ニ転電シ連盟事務局ニ通報セリ

262　昭和4年12月24日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

滞米中の感想に関し両全権より申進について

ワシントン　12月24日後発
本　省　12月27日前着

第五四三号
両全権ヨリ左ノ通
外務大臣ヘ転電アリタシ

本官発外務大臣宛電報
第（番号不明）号

滞米中ノ感想何等御参考迄ニ左ノ通申進ス

一、累次ノ電報ニ依リ既ニ御推察ノ事トハ存スルモ米側ニテハ予テ我方ノ主張スル保有量ヲ比率ニ依リテ表示スルハ米国一般ノ輿論並ニ議会ノ同意ヲ得ルコト困難ナリトシ具体的解決ヲ希望シ居ルコト御承知ノ通ナル処我方ニシテ飽迄比率又ハ比率ヲ含ム具体案ヲ固執スルニ於テハ米ハ一方防備ト比率トヲ関連セシメテ審議セムトスルノ気勢ヲ示スト共ニ他方造艦ノ決意ヲ仄メカシテ我ヲ牽制セムトスル模様ノ如シ

二、米国側ニ於テハ我方ニ於テ主トシテ財政的考慮ヨリ主力艦代換延期ヲ欲シ居ルモノト推測シ右ニ対シ主義上同意シ乍ラモ直ニ賛成スルコトナク却テ之ニ依リ補助艦艇ニ関スル我方主張ヲ緩和セシメムト試ミツツアルヤニ観測セラル

三、国務長官ハ第二回会見ニ於テ米側立場ヲ説明スルニ当リ「ジョーンズ」ヲ列席セシメ且書付ヲ携ヘ今日述フル所ハ極メテ重要ナリト前提シ往電ノ趣旨ヲ述ヘタル処右ハ其ノ内容全然我方主張ニ対スル反駁ナリシニモ拘ラス最後ニ本会見ハ甚タ有益好結果ナリシト繰返シ申シ居タルハ先ツ米海軍側意向ヲ其ノ儘取リ継クト共ニ尚妥協ノ余地アルコトヲ仄カシタルモノト観測セラル右ハ在米大使発閣下宛電報第五二一号報告中ニ申進メラレタルカ其ノ際大統領ハ之ヲ要スルニ Give and take ノ問題ナリト述ヘ居タルニ符合スルモノノ如シ

四、国務長官トノ会談中同人ニ対シ「モロー」カ両三回耳打セルヲ見受ケタルカ紐育ニ於テ「ラモント」ハ若槻及財部ニ対シ今回米全権中最有力ナルト共ニ其ノ中心ヲ為スハ「モロー」ニシテ其ノ大統領ニ対スル信望ノ如キモ寧ロ「スチムソン」ヲ凌クモノアルヲ述ヘ重要案件ニ付テハ同人ト熟議アリタキ旨ヲ語リタル次第モアリ旁同人トノ接触ニハ特ニ留意スルコトト致スヘシ

五、米国通過中新聞記者トノ応答ニ際シテハ率直ニ我方立場ヲ宣明スルニ努メタル処米国新聞ハ好意ヲ以テ我所説ヲ忠実記載シタルカ其ノ後十九日ニ至リ一斉ニ出所ヲ示サスシテ日本ハ米ノ十八隻ニ対シ十二隻ヲ以テ満足スルモノナル記事ヲ掲ケタリ我方ニ於テハ何等右ニ類スル談話ヲ為ササリシニ拘ラス同記事ノ出タルハ蓋シ米国筋ヨリ何等カ為ニスル処アリテ之ヲ掲ケシメタルニ非スヤト想像セラル

英、仏、伊ヘ転電セリ

263　昭和4年12月27日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

若槻・財部両全権とスティムソン国務長官との会談議事録送付について

機密公第七七二号　（昭和五年一月二十五日接受）

昭和四年十二月二十七日
在米
特命全権大使　出淵　勝次（印）

外務大臣男爵　幣原　喜重郎殿

帝国全権国務長官トノ会談「ミニツト」送付ノ件

十二月十七日及十九日帝国全権国務長官ト会談ニ当リ「ミ

ニシト」ヲ作成シタ次第ニ既ニ電報ヲ以テ報告致置キタルカ該「ミニシト」（十七日ノ分ハ斎藤部長作成、十九日ノ分ハ国務長官秘書「ベシク」作成）各二通別添送付スルニ付御査収相成度

本信写送付先　在英大使

（別　添）

STRICTLY CONFIDENTIAL.

No. 1

DRAFT MINUTES OF THE INFORMAL CONVERSATIONS BETWEEN THE AMERICAN AND JAPANESE DELEGATES TO THE LONDON NAVAL CONFERENCE.

Present :

Mr. Henry L. Stimson, Secretary of State, Delegate.

Mr. Dwight W. Morrow, Ambassador to Mexico, Delegate.

Mr. Wm. R. Castle, Jr., Ambassador to Japan.

Mr. Reijiro Wakatsuki, Member of the House of Peers, Delegate.

Admiral Takeshi Takarabe, Minister of the Navy, Delegate.

Mr. K. Debuchi, Ambassador to the United States.

Mr. Hirosi Saito, Secretary to the Delegates.

Both delegations met at Woodley, Mr. Stimson's private residence, at three o'clock, P. M., Tuesday, December 17, 1929.

Mr. Wakatsuki said that he wished to express his opinion in the frankest manner. As had been repeatedly avowed, at home and abroad, Japan desired most earnestly the success of the London Conference and hoped that the agreement would not only be a limitation but an actual reduction in naval armaments. As to the ratio Japan desired to hold, Ambassador Debuchi had, he understood, often submitted it to his (Mr. Stimson's) consideration under instructions from the Japanese Government, and he thought that it was already known to the American delegation.

Japan had always made it the fundamental principle

of her national armament to hold such strength as would not disturb the sense of national security of the people. In other words, a strength insufficient for attack and adequate for defense. The ratio of 70 % of the largest naval strength was calculated from the necessity for defense purposes in the adjacent waters of Japan, and it was a point to which Japan desired to obtain an agreement from all powers concerned. It was, therefore, his sincere hope that the Secretary of State would give sympathetic consideration to this matter. He was given to understand that sometime ago the Secretary of State had proposed to Ambassador Debuchi to contrive to find some means of solving the question by taking into consideration the actual conditions. Japan would, of course, be glad to accede to that desire, but his Government rather lacked information as to the basis upon which to construct such a plan as desired by the Secretary of State, not having been advised of the details of the provisional arrangement between the United States and the British Government especially in regard to the large sized cruisers. If, therefore, the Secretary of State would be good enough to give such information to him he would consider it very useful.

Mr. Stimson replied that he wished to be frank in his statement of his views just as was Mr. Wakatsuki and just as he had always been in his negotiations with Ambassador Debuchi. He was equally desirous that the London Conference should be a success.

As to the first point of Mr. Wakatsuki's questions, namely, the question of provisional Anglo-American agreement with especial reference to 10,000 ton cruisers, there existed no agreement except what he had told Ambassador Debuchi sometime ago. The American Government demanded twenty-one such cruisers on the recommendation of naval advisers, while the British Government thought that the United States ought to be satisfied with eighteen ships. The

American Government had thought that that was a near enough agreement to enable the two countries to go to London with every hope of success. The difference of three ships could somehow be adjusted in other categories of auxiliary craft. However, he had as yet no figures of adjustment.

As to the larger ratio which formed another point in Mr. Wakatsuki's queries he would reply giving the result of his careful thought, his consultation with his colleagues, and his survey of the minds of the people. He considered the Government ought to represent such opinion as the people would think just and right.

As to the Washington Conference which brought about the fundamental condition of things that led to the convening of the forthcoming Conference in London, the American people had a feeling that this country had been very generous and made the greatest sacrifice of all in order that an agreement could be reached among the participating Powers. In 1921 America had the largest navy in the world, but she was ready to give up that position and, moreover, to pledge herself to maintain the status quo of the fortification in the Philippine Islands and other Pacific possessions in order to facilitate disarmament by removing the sense of rivalry, jealousy and competition, and particularly to relieve Japan of any anxiety as to her national security. He thought that Mr. Wakatsuki recognized, and he had often heard from Mr. Debuchi, that the feelings between America and Japan had been much improved. That was due, in his mind, greatly to the successful outcome of the Washington Conference. The American people believed in good faith that that agreement could only have been reached by the United States giving up more than half of her naval strength and by consenting to the maintaining of the status quo of fortifications in her possession in the vicinity of Japan. The basic

spirit of the Washington Conference was to bring about a period of confidence among nations and to avoid competition in armaments. However, in point of fact, for the past seven or eight years there appeared, it was much to be regretted, fresh competition of naval construction in regard to the classes of ships not covered by the Washington treaties. There was therefore abroad a feeling that that conference had not altogether been a success. America had not heen party to that competition in the beginning, but after the failure of the Geneva Conference, she felt constrained to take to naval building once again. That was shown by an Act of Congress authorizing the construction of twenty-three 10,000 ton cruisers. Mr. Debuchi would remember that that Act was peremptory which meant that the President must build unless some international agreement as to disarmament could be arrived at. Moreover, the American navy formulated a big navy plan involving an enormous expenditure to build the other classes of ships that might be necessary to make up fleets with these 10,000 ton cruisers. He had explained that to Mr. Wakatsuki to show him that the American people attached great importance to the necessity of catching up with the navies of the other Powers unless some agreement of disarmament could be concluded.

Such being the case, when he was asked by Mr. Debuchi as to the opinion of the United States in regard to the desire of Japan to hold a higher ratio in cruisers than in capital ships, he had replied in all frankness that that would give a bad impression to the American people and would not conduce to the success of the Conference. He would have thought that a great many Americans would feel such change to be unfair to themselves.

Further, as to battleships, the American people still felt strongly that they were the center of naval strength. They never considered a battleship fleet as

obsolete. It was true that the United States was willing to try to find a way to reduce the strength of that class of war craft. She knew also that that was Japan's wish. On his way from Manila to Washington he had touched at Tokyo and on that occasion he had heard personally from Admiral Okada, Admiral Takarabe's predecessor, that Japan wished such reduction and that, if an agreement could not be reached among nations on that point, they had to face the necessity of starting their expensive replacement. However, the United States would not feel it in her interest if Japan would reduce the battleship fleet in which the ratio of 5-5-3 had already been agreed upon and would turn the financial balance to the building of cruisers in which Japan was asking for a ratio of 10-10-7. His position was, therefore, that he hoped that the question of ratio would not be raised by Japan. It was clear that the United States did not seek to impose a position of inferiority on any nation, tn force any nation to sign an agreement which was repugnant to its sense of honor or pride. He wished that that point would be well understood. He had told Ambassador Debuchi, therefore, that they would rather discuss matters at the Conference, giving careful consideration to the actual conditions of the situation, without referring to the question of ratio. What he had in mind was this, that he had hoped that what Japan had actually been doing in regard to her cruiser strength might be considerd and that in some way in the light of what had been done, they might find a basis for an understanding or an agreement. He had, therefore, been a little disappointed when he had learned that Japan had increased her cruiser strength from 206,000 tons to 226,000 tons. He would rather make the subject of discussion the actual strength of 206,000 tons than any figure calculated merely on account of the ratio. So his opinion had been that if Japan

would keep her needs down to the actual necessity for defense, America would be willing to try to persuade other nations to come to an agreement. She would herself try to meet her on the same principle. They could have worked out an arrangement which would be honorable to all concerned and give hurt to no Power. Great Britain had already shown her willingness to reduce her cruiser strength lower than what she proposed in 1927. The American navy was also ready to consent to holding a strength smaller than that of Great Britain. Moreover, if the latter came down, America would go down even further.

All he could promise now was to give the utmost sympathy and fair consideration to the Japanese claim.

Mr. Wakatsuki thanked Mr. Stimson for listening so carefully to what he had stated and was much gratified that the latter was willing to give sympathetic consideration to the Japanese attitude. Mr. Stimson was good enough to explain the feelings of the American people in the frankest manner, and he would likewise state Japan's sentiments with candor. He did not think it would avail much to dwell upon past history, but according to his views it was a fact that the Japanese people had a feeling of having been pressed to accept the form of disarmament as stipulated at the time of the Washington Conference. He would refrain from criticising the results of that Conference, but Japan had claimed from the beginning seventy percent and the people deeply regretted that that claim had not been accepted. By explaining on the part of the Government the benefit of maintaining the status quo of fortifications in the Pacific, some portion of the people had been conciliated but the general feeling of regret could not have been wiped away. It was generally thought that at a future disarmament conference

seventy percent should strongly be put forward as to the class of ships not covered by the Washington Conference. This had become a national conviction. It was true that America exercised self-restraint in agreeing to maintain the status quo of fortifications in the Pacific but, for that matter, Japan also agreed to maintain the status quo of fortifications of her own islands. Mr. Stimson had referred to the sacrifice America had made in scrapping many warships, but Japan, on her part, also had made great sacrifice in kind. Therefore, it was Japan's national desire that at the forthcoming Conference in London she should claim seventy percent lacking which the sense of national security would surely be disturbed. As to the ratio of 5-5-3 agreed upon at the Washington Conference as to capital ships, that was already definite and he had no idea of re-opening that question. However, as to other categories of ships not covered by the Washington Conference, it was a fact that no agreement whatever had been completed at that Conference. It had only been agreed upon that the size of cruisers should be limited to 10,000 tons — a size which did not exist at that time. Later the number of cruisers carrying 10,000 tons had gradually come into existence and developments had been effected in other instruments of war, and the general situation had been greatly changed since the time the Washington treaties were concluded. From this point of view he thought it would not be adequate to make a ratio of the Washington treaties as the basis upon which to argue disarmament today. He wished that that point would be well understood.

As to capital ships, Japan had never thought that they were obsolete, but still constituted the center of armament. Japan thought that in order to meet the necessity of naval reduction it would be advisable to prolong the age, reduce the type, lengthen the period of replacement, and so on, of this class of warships. However, Japan was claiming such reduction in the sense that it was not Japan alone that would profit by it, but all nations concerned at the same time. He (Mr. Wakatsuki) was not arguing with Mr. Stimson but, from the point of view just put forward, it would be clear that Japan had no thought of utilizing the financial balance saved by reducing the capital ship strength for augmenting the cruiser tonnage. He was not saying that just on the spur of the moment, but he believed that that was the conviction of the Japanese people.

Further, he would not object to studying the matter as Mr. Stimson had suggested, from the point of view of actual conditions without reference to the question of the ratio. But he was given to understand that between the United States and Great Britain the principle of parity had first been decided upon and concrete figures were taken into consideration as an application of that principle. Japan had proposed to have an agreement as to the ratio first in the sense that some standard had better be adopted as in the case of the Anglo-American arrangement. He thought that it would not be inadvisable to approach actual conditions and concrete figures keeping the ratio always in mind. If, therefore, the Secretary of State would give him time he would be glad to submit for his consideration a plan conceived in that sense.

Mr. Wakatsuki said that he was sorry that he had not been answering Mr. Stimson's questions seriatim but would now refer to the Secretary's disappointment in regard to the figures of 206,000 tons which represented Japan's present cruiser strength and those of 226,000 tons which she now proposed. He supposed that the former figures had been obtained by an addition of 108,400 tons and about 90,000 tons, representing Japan's present strength in eight-inch gun cruisers and cruisers of lesser types, respectively.

The difference of 20,000 tons in the two tonnages was, as the Secretary thought, calculated on the basis of the seventy per cent ratio. Therefore, this suppositive tonnage would of its nature come down as the tonnage to be held by the superior navies would come down. The figures stood high simply because the superior navies seemed to claim high figures.

Mr. Stimson desired to be shown Japan's concrete plan.

Mr. Wakatsuki said that he would, in that case, submit his plan for the Secretary's consideration. On the supposition that America was going to hold eighteen 8-inch 10,000 ton cruisers, Japan would desire to possess a certain number of 10,000 ton cruisers and a certain number of cruisers with less than 10,000 tons, aggregating 126,000 tons distributed among thirteen ships. But this represented the eventual figures and in the transitory period, namely pending the replacements of the Furutaka class cruisers, Japan desired to hold fourteen ships, consisting of the existing eight 10,000 ton cruisers, four Furutaka class cruisers with 7,100 tons each, and two more ships with a tonnage of less than 10,000. Apparently this appeared as if the number was too large but when the real strength was studied it contained four Furutaka class ships and two cruisers with the tonnage of less than 10,000 tons, and accordingly very much inferior to a fleet consisting of cruisers with a uniform tonnage of 10,000.

Now as to the submarines. They were the most useful and adequate weapons of defense for a country like Japan consisting of islands widely scattered on the sea and holding an inferior naval strength. The Japanese navy did not think that the submarine strength now existing and being built in Japan would be sufficient for the defense of the country, but in view of the fact that the disarmament conference

was now going to be held and a reduction would be effected all round, Japan would be content to hold nothing more than her present existing strength of 78,500 tons. He wished to make it clear, however, that Japan was not demanding anything like parity with other nations. She would have no objection if other Powers held ten-sevenths of her submarine strength.

With regard to lesser type cruisers and destroyers, Japan stood ready to effect reduction according as the other Powers concerned decreased their holdings.

What he had just stated was the Japanese plan conceived upon the consideration of the actual conditions, and he wished the Secretary would give his careful thought to it. He would be glad if the Secretary would disclose his frank opinion as to its merits.

Mr. Stimson thought that it was of great value that uch unreserved and frank opinions were exchanged. He felt that the plan just shown him was the same as that which he had heard from Mr. Debuchi some time ago. But he was willing to give it further consideration if it was so desired. If it was Mr. Wakatsuki's wish, he would see him again before he left, or he might see him in London, or, if somebody in the Japanese Delegation would confer with some of the American advisers, that would be equally agreeable to him. In general, however, it might be preferable not to discuss only the question of 10,000 ton cruisers but to take other categories of ships into consideration at the same time. If the discussion was centered in the 10,000 ton cruisers alone it would be quite difficult, to his mind, to arrive at an agreement which would be satisfactory to the American people. They could not but entertain the feeling that the amount of 226,000 tons meant, on one hand, the increase of the Japanese naval strength, and demanded, on the other, a reduction of the American naval

strength. He would not be able to show that such feeling was wrong. But he was not going to close the door to the Japanese proposal. He would be glad to continue discussions.

Mr. Wakatsuki appreciated the courtesy of Secretary Stimson in having given him so much time when he was ill. He wished to continue conversations either here or at London. In any case, he thought it very essential that some agreement should be arrived at as to those questions previously to the opening of the Conference. Therefore, he would like the Secretary to continue to discuss them with Ambassador Debuchi after his departure and, further, if it was considered by the Secretary profitable to have discussions among experts he would be glad to appoint somebody in the delegation to take up the duty.

After deciding upon the joint statement for the press (annex 1) the meeting adjourned at 5 : 30 o'clock P. M. until 10 o'clock A. M. Thursday, December 19, 1929.

ANNEX 1.

Reijiro Wakatsuki, chief delegate ; Admiral Takeshi Takarabe, delegate ; Japanese Ambassador Debuchi and Hirosi Saito, secretary, visited the Secretary of State at his house this afternoon. The Secretary had with him Ambassador Dwight W. Morrow and Ambassador William R. Castle, Jr.

There was a frank and friendly discussion of the underlying problems of the two countries which affect the issues of the conference.

Both Mr. Wakatsuki and Secretary Stimson expressed optimistic hope for the successful termination of the conference and the increase of good will between the two countries which a solution of the naval problems helps maintain.

CONFIDENTIAL

No. 2

MINUTES OF THE INFORMAL MEETING BETWEEN THE JAPANESE AND AMERICAN DELEGATES, HELD IN THE SECRETARY'S OFFICE IN THE DEPARTMENT OF STATE, THURSDAY, DECEMBER 19, 1929, AT 10:20.

Present : Mr. R. Wakatsuki.
Admiral T. Takarabe.
Ambassador Debuchi.
Mr. H. Saito.
The Secretary of State.
Ambassador Morrow.
Ambassador Castle.
Admiral Jones.

Mr. Wakatsuki started by saying that yesterday the President was good enough to give them a magnificent dinner in their honor and he considered it not so much as tendered to themselves as to the Japanese nation. Moreover the President was good enough to give him time to talk about matters pertaining to the mission with which he was entrusted. On that occasion Mr. Wakatsuki discussed with the President the substance of the conversations at Woodley on the previous day.

Mr. Wakatsuki then asked the Secretary for his opinion or comment on the matters which he had discussed with him day before yesterday.

The Secretary said that he would be very glad to do so ; that Mr. Wakatsuki had invited frankness and candor ; that the limitations of his voice, being so hoarse, compelled him to be brief, but he wanted His Excellency to understand that he started from this idea, namely, that he attached the highest importance to the good feeling between this country and Japan produced by the agreements of the Washington Conference. The Secretary said that he was speaking from the standpoint of an observer in this country. He said that Mr. Wakatsuki remembered the difficult situation existing before that conference and the

irritated feeling which existed ; that now as Ambassador Debuchi frequently commented, such difficulties and irritations have passed and a feeling of friendliness and confidence has taken their place that is principally due to the Washington Conference. The Secretary said he knew that this friendly feeling existed in this country and that knowledge made him enter this conference anxious that nothing would change or diminish it, and that he would answer His Excellency's questions from that point of view.

The Secretary stated that, as he said the other day, he does not presume to pass upon the different needs of Japan ; that they are a matter for her Government to decide. The Secretary stated that he did not arrogate himself or put himself in the position in the slightest degree of giving suggestions to Japan in the matter of her national defense, but as Mr. Wakatsuki had asked questions based on figures relating to Japanese naval strength, he could tell him with a great deal of confidence that those figures would cause anxiety in American public mind.

In the first place, the Secretary stated that he knew that the Executive of this country, which is the branch or our Government which is seeking reductions, would be most disappointed. The Secretery said that he knew that the President would be disappointed because he knows - as we all know - that these figures presented would result in a feeling among our people and in our Congress, that we must build much higher than we hoped we would have to build. The Secretary said that as His Excellency knows, Mr. Hoover, our President, is most earnestly seeking reduction. The President is in touch with public opinion and he and the Secretary and all who also are in touch with public opinion realize that the American people would feel that this country with its immensely long coastline on two oceans, separated by the Isthmus of Panama, would have normally to require a much larger defensive force than a nation situated like Japan in a compact group of islands, and that the American

people would demand, if they heard that the ratio was being increased and Japan was seeking larger figures for her fleet, that instead of reduction they should likewise increase.

The Secretary said that he appreciated the considerations which His Excellency mentioned about the public feeling in Japan, and that he had earnestly hoped that we should be able at the Conference to find a way by which the natural feelings of the Japanese people could be protected, and that their national sensibilities should not in any way be offended by anything like an attempt to impose upon them or by anything approaching an invasion of their own sovereignty or by putting them in any position of inferiority to other nations.

The Secretary said that with his colleagues and advisers he was now earnestly studying ways to reach such a result after they go to London when he could confer with His Excellency again on that subject.

The Secretary said that it was for that reason that he suggested to Ambassador Debuchi some weeks ago and he renewed the suggestion now, that it would be well in his opinion not to discuss figures or ratios in the press because they simply aroused opposite feelings in each country, and would make more difficult the task of finding a solution which will be satisfactory to both countries, and which will not offend the national sensibilities of either one.

The Secretary said that speaking in the confidence of the group present, as His Excellency had invited him to do, and taking up the questions he asked, he was obliged to say that he feared the American people and the American Congress would regard a cruiser tonnage of 226,000 tons for Japan as so high that it would necessitate counterbuilding on the part of America.

The Secretary said he had reflected very carefully on this and had consulted with his colleagues, who are members of Congress, and he felt very clearly

that he was not in error in saying that.

The Secretary then said that His Excellency had asked him about submarines. The Secretary said that the American Government, as His Excellency knew, is very strongly opposed to the use of submarines for destroying commerce and that the American Government was very glad that it was joined by Japan in the Washington Conference in the Treaty which unfortunately was not ratified by all of the other nations, which forbade their use indiscriminately for destroying commerce. The Secretary stated that the American Government thinks that the uses of submarines apart from commerce destroying, are comparatively limited, and the American Government feels that the danger of too great a reliance upon submarines, and too large a construction of submarines, is that it creates a temptation to use them against merchant ships under conditions where they can not obey the rules of war.

The American Government recognizes that other nations may differ from it in their opinion as to the usefulness of submarines in legitimate warfare, and may think them more useful than we do, but it is our hope that at least the construction of submarines shall be restricted so as to avoid their use against merchant commerce in the inhuman way which excited so much reprobation during the Great War. The Secretary said that it has been the hope that at this Conference we might successfully reaffirm the humane principles of the 1922 Treaty on the subject of commerce destroying submarines.

The Secretary said that these views in regard to submarines which he had stated he thought were held by a large part of the American people and he thought that the figures which His Excellency suggested on Tuesday for Japan, of 80,000 tons of submarines, would be thought by the American people to be so high that they would feel that they would excite

great temptation for the use of such submarines in commerce destroying. The Secretary said that he was speaking only of the way he felt that our people would look at it, and he feared therefore that if Japan should insist on such a large construction it would tend to lessen that good feeling about which he spoke in the beginning of the conversation; that it would excite again a demand by our people and our Congress for the construction of a large force of anti-submarine craft like destroyers and light cruisers. The Secretary added that now that he had spoken his views very frankly and with great candor, as His Excellency had invited, he could only repeat that he did so from a sincere desire to have this Conference a success and because he feared that a demand for these figures might endanger the success of the Conference. The Secretary said that he had tried to bear in mind the viewpoint of the Japanese people and he begged His Excellency to remember also the viewpoint of the American people who are situated between two oceans with an enormous coastline which they regard as vulnerable in war, and who think that they have a very great need for naval defense. The Secretary said this was all he thought he could say on this situation, except to say again that he would meet His Excellency in London with an open mind and with the utmost friendly desire not to do anything which will offend the feelings of Japan, and to do everything to try to make this Conference a success. By success the Secretary said he meant to make the Conference further promote friendliness between the two people.

Mr. Wakatsuki said that he had listened with great interest to the Secretary's very frank views as to the feelings of the American people, and of the American Congress; that at the same time he was glad that the Secretary had understood very well the aspirations and the feelings of the Japanese people; that he did

not think that it would add very much if he repeated the same things, but he said that the Japanese people are content to hold the inferior naval strength compared with the other powers, and that they have in mind only the maintenance of national security ; therefore it had never entered their minds that the Japanese Navy would ever excite the feelings of other powers. Mr. Wakatsuki said that the Secretary had been good enough to comment upon what he said the other day, referring to the figures he gave as to the cruisers and submarines. As to the cruiser tonnage, as Mr. Wakatsuki said the other day, it is a relative question ; if other powers came down in their strength Japan's figures would naturally decrease. As to submarines, Mr. Wakatsuki said that Japan will be most willing to have a treaty such as the Secretary had referred to in the Treaty of 1922, forbidding illegal use of that class of warcraft at the forthcoming conference.

Mr. Wakatsuki said that as he had told the Secretary the other day, Japan's desire for retaining submarines is not in the least predicated upon the thought of destroying commerce, but from the necessity of possessing a weapon of defense, in view of the fact that she is to have inferior naval strength. Mr. Wakatsuki said that he had referred to these points at their previous meeting ; however, if both our Governments consult experts on these points they will become very much clearer.

Mr. Wakatsuki said that as to the good feelings existing between our two peoples, to which the Secretary had referred, he was entirely in accord ; that it would be very important to maintain them ; that while Japan has to give great consideration to the feelings of the American people, he, Mr. Wakatsuki, has to take into consideration the feelings of the Japanese because they are exercising self-restraint and are contemplating no aggression against other

countries, and therefore in case the ratio they are demanding is not recognized at the Conference he wished the Secretary to understand how high the feeling may run in Japan in that connection.

Mr. Wakatsuki said that he did not think that it is a question of the increase of ratio, but the most important thing was that the balance or equilibrium of naval powers should always be good ; that if this question is decided upon even in a general way previous to the opening of the Conference itself the discussions at the Conference would be made very much easier. Therefore Mr. Wakatsuki said after their departure he wished the conversations might be continued between the Secretary and Ambassador Debuchi. Further, that before the opening of the Conference in London they might have time to talk together again. Mr. Wakatsuki thanked the Secretary for his very friendly and candid talk and he shared the Secretary's views that good results should be attained at the forthcoming Conference so that in the future he would seek occasions to further submit his views to the Secretary's consideration.

The Secretary thanked Mr. Wakatsuki for his suggestion. He said that he would try to reach London several days before the Conference opened and he hoped to see him then before it opened. The Secretary said that he would also be glad to talk with Ambassador Debuchi in the meanwhile. The Secretary stated that he felt very hopeful after these talks with Mr. Wakatsuki and said that he felt with this spirit they would be able to work out the form of an arrangement which would give offense to neither country and which would be a satisfactory solution of the question of naval defense.

Mr. Wakatsuki said that he wished to say that he would be most happy to give consideration to any suggestions the Secretary might make in the future.

After the exchange of mutual farewells the conver-

sations ended at 11：45.

264　昭和4年12月30日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

仏伊交渉の進捗状況に関する伊国大使の談話について

第五一一号　　ロンドン　12月30日後発
　　本　省　12月31日前着

伊国大使漸ク帰任シタルヲ以テ十二月三十日往訪シ仏伊交渉ノ模様ヲ尋ネタル処伊国側ハ仏国ニ対シ其ノ最低所要額ノ提示ヲ求メ夫ニ対シテ「パリチー」ヲ要求シ居レルモ未タ仏国側ニ於テ其ノ要求額ノ提示ヲ為サス交渉モ余リ進捗シ居ラス尤伊国ハ仏国所要ノ額ニ対シ同数ノ増艦ヲナス意ニハアラサルモ増艦シ得ル権利ヲ保有シ置クヲ主張シ居ル次第ナリト述ヘタルニ付本使ハ伊国側ニ於テハ華府会議ニ於テ割当ラレタル伊国側ノ比率変更ヲ主張スル意思アリヤト尋ネタル処大使ハ伊国ハ仏国トノ「パリチー」ヲ求ムルノミニテ華府比率ノ増率ニハ重キヲ置キ居ラスト述ヘタルニ付本使ハ然ラハ仏国ノ所要額ニシテ大ナレハ従テ比率モ増加シ小ナレハ比率ノ減スルモ差支ナシトノ意ナルヤト尋ネタル処同大使ハ然リト答ヘ英米ニ対スル比率ノ関係ニ対シ無関心ノ意ヲ表セリ本使ハ潜水艦ニ関スル態度ヲ尋ネタル処伊国ニ於テハ海軍部内ニ潜水艦ニ対スル二ノ議論アリ一ハ之ヲ重要視スルモ他ハ之ニ反対シツツアリ何レニスルモ此ノ問題ハ大シテ重要ノ問題ニアラス何トナレハ英国ノ招請状ニモ廃止ニ対シ強硬ナル態度ヲ示シ居ラサルノミナラス仏国及日本ニ於テハ既ニ反対ノ意思表示ヲナシ居レルニ付其ノ実現ハ期スヘカラス依テ伊国ハ他国全部廃止ニ同意スルナラハ伊国モ廃止ニ異議ナシト言フカ如キ稍々曖昧ノ態度ヲ執リ居レリト述ヘ又同大使ハ仏国ノ主張スル今回会議ノ結果ヲ寿府ニ於ケル軍縮成立迄効力ヲ生セシメサラムトスル点ハ最モ会議ニ大ナル困難ヲ招来スヘシト述ヘタルニ付本使ハ此ノ点ニ関スル伊国ノ態度ヲ尋ネタル処伊国ハ三軍関連ノ態度ヲ執リ居レルニ付此ノ点ニ関シテハ仏国ノ態度ニ近キモノアリト答ヘ又仏国提議ノ地中海ヲ中心トスル何等カノ協定ニ関シテハ頗ル漠然タルカ新聞紙上ニ於テハ「メヂタレニアンロカルノ」等ノ名称ヲ付シ居ルモ敢テ第三国ヲ紛争ニ引入ルル如キコトヲナサス唯関係国間ニ

何等カ平和ニ関スル協定ヲ結フコト望マシト述ヘテ此ノ点ニ関スル仏国ノ態度ニ共鳴スル口吻ヲ漏ラシ居タリ本使ハ伊国全権ハ総テ会期中倫敦ニ居ラルル積リナルヤト尋ネタル処外相ハ必要期間倫敦ニ居ル積リナルカ余リ長引ク場合ニハ他ノ全権ヲ残シテ帰国スルヤモ知レスト述ヘ本使ハ英国首相トノ予備交渉ニ対スル意図ヲ尋ネタル処同大使ハ伊国ハ仏国トノ交渉ニ重キヲ置キ居ルヲ以テ英国首相トノ予備交渉ニハ重キヲ置キ居ラサル旨ヲ述ヘタリ米、仏、伊ニ転電セリ

265　昭和4年12月31日　幣原外務大臣より在米国出淵大使宛（電報）

我が方要求の巡洋艦保有量について

第四四〇号　　本省　12月31日後3時30分発

貴電第五一五号ニ関シ

国務長官カ両全権ニ対シ日本側ニ於テ二十万六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ二十二万六千噸ニ増加方ヲ申出テ失望ノ念ヲ禁スル能ハサリシ旨述ヘタルハ我方ニ於テ大型巡洋艦ニ付米国ノ七割ヲ要求スル関係上此種巡洋艦ニ於テ米国保有量ヲ十八万噸トセハ我保有量ハ十二万六千噸即チ現有噸数ヨリ約二万噸（実際ハ一万七千六百噸）増大ノ結果トナルヘキニ鑑ミ此事実ヨリ直チニ我方ニ於テ巡洋艦勢力ヲ二十万六千噸ヨリ二十二万六千噸ニ増加方要求スルモノナリト為シタルカ如ク推察セラルル処我方ニ於テハ嘗テ巡洋艦ニ付二十二万六千噸ヲ要求シタルコトナク他面之ヲ実際的事情ニ付考フレハ大型巡洋艦ニ付テハ米国側ニ於テ十八万噸ヲ要求スル以上我方ニ於テモ其ノ七割タル十二万六千噸ヲ必要トシ従テ我現有噸数ヨリ約二万噸増大ノ結果トナルヘキモ右ノ場合小型巡洋艦ニ於テハ補助艦対米総括的七割ノ主張並潜水艦昭和六年度末現有量保持ノ要求トノ調和ヲ図ル関係上恐ラク現有噸数ヨリ縮小スルコトトナルヘク大型巡洋艦ニ於テ約二万噸増大スルトスルモ巡洋艦全体ノ勢力ニ於テ必然的ニ二万噸増大スル次第ニハ非ス（従テ我方ニ於テ二十万六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ二十二万六千噸ニ増加方ヲ要求スルモノナリト為スハ謂ハレナキコトナリ）将又大型巡洋艦ニ於テ約二万噸増大スルト謂フモ右ハ米国側ニ於テ十八万噸ヲ要求スルカ為ニシテ若シ米国側ニ於テ之ヲ低下シ得ルニ於テハ我方ニ於テモ之ニ連レ要求噸数ヲ低下シ得ヘク

必シモ約二万噸ノ増大ヲ必要トセサルヘキ筋合ナリ此点誤解ナキ様適当ナル機会ニ米国政府当局ニ徹底セシメ置カレ度シ

英ヘ転電シ英ヲシテ仏伊ヘ暗送セシメラレ度シ

（欄外注記）
海軍側（　）内削除希望
右削除方大臣承諾（林秘書官）

266　昭和5年1月1日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議で討議さるべき問題への仏国の覚書に関するクレーギーの談話について

ロンドン　1月1日前発
本　省　1月2日前着

第一号

三十一日堀「クレイギー」ニ会見ノ際仏国覚書ニ対スル英国側意見ヲ求メタルニ「ク」ハ従来仏国側ハ自国ノ要求スル比率噸数其ノ他ノ具体的要求ヲ回示セス会議招請国タル英国トシテ大ニ当惑セル次第ナリシカ今回ノ覚書ニ依リ仏国ノ態度少クトモ「プリンシプル」ニ於テ判明シタル次第ナリ右覚書ハ種々対内的事情ヲ顧慮シ同情セサルヘカラサル点アルニ付此ノ際余リ「デイスカレジ」セス徐々ニ緩和ヲ計ル積リナリ

右覚書ニ付テハ悲観説ヲ為スモノアルモ自分ハ右発表前「マシグリ」ノ其ノ案文ニ付意見ヲ交換セルカ其ノ結果ヲ綜合スルニ毫モ悲観スルニ当ラス即チ仏国ハ会議ノ結果ヲ其ノ儘一九三六年迄ハ有効トシ若シ其ノ間ニ右協定カ軍縮準備委員会又ハ軍縮会議ニテ否認セラルルカ或ハ他国ノ造艦計画ノ為仏国ノ国防安全カ脅威ヲ受クルニ至ル場合仏国ノ立場ヲ再考スル自由ヲ保留スヘシト為スモノノ如シ

又地中海保障協定ニ付テモ仏国ノ態度ハ強チ之ナクハ軍縮ヲ議セスト云フカ如キ強硬ノモノニ非スシテ一方伊国トノ関係ニ於テ相当余裕アル比率ヲ要求スルト共ニ他方本協定成立セハ其ノ比率ヲ引下クルモ可ナリト云フカ如キ態度ニ出ツルモノト思ハル尚仏ノ予想セル右協約ハ「ロカルノ」式ノモノニ非スシテ寧ロ太平洋協定ニ類似シタルモノラシキ処果シテ然ラハ当方ノ研究ニ依レハ右程度ノ保障ハ連盟規約ニ依リ充分満サレ居リ特ニ新協定ヲ作ル必要ナキカ如シ兎ニ角仏国ノ態度ハ左程会議ヲ難関ニ陥ルルモノニ非ス日本ノ七割支持以上困難ナリトハ今ノ処感シ居ラスト述ヘタリ

尚右仏国ノ覚書中ニ見ヘタル西班牙トノ関係ニ関シ尋ネタル処極秘トシテ昨日西班牙側ヨリ若シ倫敦会議ニ地中海政治協定付議セラルル事アラハ西班牙トシテハ当然会議ニ招請セラルル事ヲ期待スルモノナル旨通告アリタリト語レリ米、仏、伊、西ニ転電セリ

267　昭和5年1月2日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

マクドナルド首相より絶対静養必要の為若槻全権との会談中止方申出について

ロンドン　1月2日後発
本　省　1月3日前着

第四号

全権ヨリ

二日外務省米国局長「クレーギー」若槻財部ヲ「ホテル」ニ来訪シ「マクドナルド」首相ノ伝言トシテ絶対静養必要ノ為未タ親シク歓迎ノ機会ナキハ申訳ナキ次第ナルカ若シ緊急ナル御用アラハ上京スヘキモ然ラサレハ差当リ外務大臣ヲシテ会見ノ任ニ当ラシメ追テ帰京ノ上悠々御相談致シ度トノ趣旨ヲ述ヘ尚外務省側ニ於テハ「マ」首相ハ十二月二十四日迄毎日十六日間宛モ激務ニ当リ居リ非常ニ疲労ノ体ニ見ヘタルノミナラス眼前ニ重要会議ヲ控ヘ尚今後数ケ月間ハ休養ノ機会ナキ身柄ナルヲ以テ此ノ際強テ帰京ヲ求メサルコトヲ希望シ居ル旨ヲ述ヘタリ

（若槻）ハ「マ」首相ノ好意ニ対シ謝意ヲ表シタル後予備交渉ニ於テ或種ノ事項ニ付事前ノ諒解ヲ遂ケ置クコトハ会議ニ於ケル議事ノ進行ヲ容易ナラシムル上ニ必要ト考ヘ成ルヘク速ニ首相ト会見ヲ希望スルモ既ニ松平大使ニ於テ親シク我カ所見ヲ披瀝セラレ居ルコトニモアリ又近ク外務大臣ト会見ノ機会モ有之其ノ際充分我方所見ヲ申入ルレハ自然首相ノ耳ニモ達スヘキニ付休養中ノ首相ニ御面会ヲ申入ルルノ非礼ハ差控ヘ度考ナリト答ヘタリ

（クレーギー）ハ御都合ヨクハ七日午前十一時半外務大臣ニ於テ会見ノ希望ナルカ如何ニヤ又右会見ニ若槻全権一名ノミ出席スヘキヤヲ尋ネタルニ付（若槻）ハ全権両名出席スヘキ旨答ヘタリ

尚（クレーギー）ハ予ハ会議中英国側全権秘書役トシテ事務ニ当ルコトトナル筈ナルカ首相及外務大臣ニ於テハ大綱

ハ全権ニ於テ交渉ノ任ニ当ルヘキモ専門的細目ハ予等ニ於テ地均ヲ為シ置クコトヲ希望シ居ルニ付予テ堀参事官ヲ通シテ申出テ置キタル通日本側ノ主張ヲ数字ニ依リ巨細ニ承ハルコトト致シタシ乍併右ハ決シテ最終的ノ案タルコトヲ要セス差当リ日本ノ御希望ヲ明記シ研究ノ資料トシテ提供セラレタシ、日英間ニ於テハ目下難問トセラレ居ル七割ノ点以外ハ協定ノ余地充分ナルモノト考ヘ居ルヲ以テ主力艦、航空母艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦ノ夫々ニ付日本側ノ所見ヲ詳細ニ承知致シタシト述ヘタリ

（若槻）ハ首相及外務大臣ノ御所見ニハ全然同意ヲ表スルモノナルニ付同行随員中適任者ヲ派シテ御希望ニ添フコトト致シタシト考フルモ能ク同僚ト相談ノ上何分ノ御挨拶ヲ致スヘシ

（クレーギー）ハ外務省ニ於ケル自分ノ事務室ヲ此ノ目的ノ為ニ提供スヘキ点ヲ打合ノ上全権一行ノ適任者両三名ト外務省側ノ者ト御相談致シタク場合ニ依リテハ英国海軍専門家ヲ参加セシムヘシト答ヘタリ

尚「クレーギー」ハ余談トシテ首相秘書官長「バンシター」「リンバー」ト代リ数日中ニ外務次官ノ職ニ就キ会議事務ニ当ル筈ナリト述ヘタリ

米、仏、伊ニ転電セリ

268　昭和5年1月3日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議で討議さるべき問題についての仏国覚書中イタリアの同感の点などに関するロッソの内話について

ローマ　1月3日後発
本　省　1月4日後着

第三号

二日面会ノ際仏覚書其ノ他ニ関スル「ロッソ」ノ内話左ノ通

一、仏覚書ノ内容ハ従来度々声明シタル同国ノ立場ヲ繰返シタルニ過キス何等新規ノ点ナキモ会議間際トナリタル今日改メテ斯ノ如キ文ヲ発送シタルコトニ付テハ伊国側トシテ多少ノ意外ノ感ナキ能ハス

二、覚書中ニハ伊国カ予テヨリ見解ヲ同シクスル点勘カラス即チ軍縮ノ基礎ヲ連盟ニ置カムトスル点ハ其ノ対英回答中ニ明カナルカ如ク伊国ノ全ク同意スル所ナルモ不戦

条約ハ規約ト相互ニ相補足スルモノト見ルヲ以テ之ヲ排除スヘキモノニ非ス満足ナル結果ヲ得ル限リ倫敦会議ノ出発点ヲ不戦条約ニ置クコト何等異議ナシトスルモノナリ

三、三軍懸連性軍縮ノ一般性総嚮数主義等ノ問題又予テノ伊国ノ主張ト合致スルモ伊国ハ倫敦ニ於テ之等ノ点ヲ飽迄主張シ他日建艦上ノ協定ヲ困難ナラシムルカ如キ意図ヲ有セス主義上ノ承認ヲ得ル限リ暫ク之ヲ度外シテ討議ヲ進ムルモ可ナリ

四、地中海協定ハ今回ノ案ニ依レハ「ロカルノ」条約トハ性質ヲ異ニシ居ルカ如ク大体「フアボラブル」ノ見解ヲ有ス本「ステートメント」ト仏伊交渉ニ於ケル所謂「パリチー」ノ問題トノ関係ニ付テハ此ノ種協定ノ成立ハ伊国側従来ノ主張ノ根拠ヲ弱ムルモノニ非ス却テ仏側保有量主張ヲ引下ケ得ルノ効果アルヘク仏ニシテ真ノ軍備縮少ヲ欲スル限リ両国間ニ円満ナル協定ノ成立ヲ容易ナラシムルモノト看居レリ

尚西班牙ヨリ同国ハ倫敦会議ノ成果如何ニ拘ラス地中海海軍軍縮問題ハ寿府ニ於テ論議スヘキモノナリトノ見解ヲ回示セル公文ニ接シタリ

五、客月二十一日公布セラレタル伊ノ対仏回答ノ内容ハ大体従来ノ立場ヲ繰返シタルモノナル処其ノ後仏国側ノ意見回示ニ接セス会議前ニ予備交渉ヲ遂クルコト依然トシテ望マシトハ考ヘ居ルモ余日モ勘クナリタル今日別ニ急キ立ツル必要モ認メ居ラス

外相及自分（「ロッソウ」）等ハ寿府ヨリ直ニ倫敦ニ向フヘシ米ニ転電シ英、仏ニ暗送ス

269　昭和5年1月（5）日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

若槻全権の内外新聞及び通信記者との応答大要について

ロンドン
本　省　1月5日前着

第十一号

全権ヨリ

三日大使館ニ於テ若槻ハ内外新聞及通信記者約六十名ト接見セリ席上記者ノ質問ニ対シ大要左ノ如ク応答セリ

路透記者一同ニ代リ謝辞ヲ述ヘ翌日各新聞ハ右応答ノ要旨

ヲ掲ケ率直懇切ナル態度ニ好感ヲ表シ居レリ

一、日本ハ倫敦会議協定ノ結果ハ独立ニ効力ヲ生スヘキ諒解ノ下ニ同会議ニ参列スルモノナリ

二、日本ハ英国政府カ恒久平和ノ為此ノ崇高ナル目的ヲ有スル同会議開催ニ付initiativeヲ捕ヘタルコトヲ大イニ多トスルモノニシテ他国カ其ノ海軍力ヲ縮減スルニ於テハ日本ハ之ト均衡ヲ保ツ限リ此ノ共同ノ目的ニ貢献スルノ用意アリ

三、仏国発表ノ覚書ハ未タ熟読セサルコトニモアリ之ニ関スル意見ヲ留保スルモ右カ会議ノ前途ニ悪影響ヲ与フルモノトハ思考セス

四、日本ハ主力艦ノ縮少ニ賛成ニシテ其ノ艦齢延長及代換延期ノ提議アルニ於テハ之ニ賛同スヘシ

五、潜水艦ノ撤廃ニハ同意スルヲ得ス蓋シ日本海軍ノ根本方針ハ防禦ニシテ潜水艦ハ防禦ノ武器ニ外ナラサレハナリ但シ潜水艦ノ艦型制限ハ結構ナルヘキモ如何ナル程度迄制限スヘキヤハ会議ニ於テ攻究スヘキ問題ナリ

六、日本ハ巡洋艦ノ縮少ヲ欲スルモノナリ華府会議五五三ノ比率ハ単ニ主力艦及航空母艦ニ関スルモノニシテ其ノ他ノ艦種ニ付テハ当時何等ノ決定ヲ見ス従テ今回討議ノ問題タルヘク全ク新ラシキ基礎ニ於テ考究セラルヘキモノナリ所謂日本ノ七割要求ナルモノハ大型巡洋艦最大保有国ニ対スルモノニシテ小型巡洋艦ニ付テモ同国ヲ標準トスルモノナリ即チ小型巡洋艦ノ最大保有国ニ対スルモノニハアラス右七割ハ我国ノ国防上国民ノ安全観ニ不安ヲ与ヘサル最小限度ノ勢力ナリ尤モ極端ニ切下クル場合ノ仮想ハ別トスルモ右七割ノ比率ヲ保持スルニ於テハ日本ハ大型十二隻以下ニ切下クルコトヲモ辞セス

七、七割ハ要求ナリヤ基準ナリヤトノ質問ニ対シテ双方ナリト答ヘタリ

八、日本ハ「ケロッグ」条約及国際連盟規約双方共会議ノ精神的基礎トナルモノト考フ特ニ「ケロッグ」条約ハ英国政府招請状ニモアル如ク会議ノ出発点タルヘキモノニシテ同条約ノ成立ハ軍縮ノ考究ニ対シ適当ナル根柢ヲ供スルモノナリ

九、防備制限殊ニ新嘉坡ノ問題ハ当国ヨリ提起セラルレハ兎モ角日本トシテハ之ヲ提議スルノ意思ナシ

米ニ転電シ仏ニ郵送セリ

270

昭和5年1月6日　在米国出淵大使より幣原外務大臣宛（電報）

我が方要求の巡洋艦保有量などに関するスティムソン国務長官との会談について

ワシントン　1月6日後発
本　省　1月7日後着

第四号（極秘）

㈠国務長官微恙ノ為会見ノ機会無カリシカ漸ク六日往訪客年貴電第五四〇号御訓令ニ基キ篤ト説明シタル処

長官ハ過日若槻全権トノ会談ノ際引用セル数字ハ当時自分ニ於テ多少考違ヒヲ為セル点モアリ実ハ右会談ノ際ハ専ラ八吋砲艦ニ付御話スル積ニテ貴大使ヨリ十二万六千噸ナル数字ヲ屢々承リ居リタル為右ハ日本ノ現有噸数ニ比シ約二万噸ノ差アル事ヲ言ハムトシタル次第ナレハ当時自分ノ言ハ其ノ意味ト御承知願度シト弁明シ事実米国ハ日本カ一定ノ計画ニ基キ有スル現在ノ勢力ニ七割ノ比率ヲ保ツ為ニ更ニ約一万噸ヲ増加セムトスルハ諒解ニ苦ム処ニテ少クトモ米国国論ヲ納得セシムル事ハ甚タ困難ト思考スト述ヘタルニ付

本使ハ長官ハ若槻全権ノ会談ニ於テ頻ニ米国国論ヲ繰返ヘサレタルカ日本側ヨリ見レハ米国側ニ於テハ現ニ一万噸級ハ一隻シカ完成シ居ラス七隻ハ建造中ニテ十万噸ニ達スル為ニハ更ニ十隻ヲ建造セサルヘカラス右ハ英国ニ対スル「パリチー」ノ関係上已ムヲ得サル事ハ自分ノ充分諒解シ居ル処ナルモ何レニスルモ事実上大拡張トシカ思ハレス斯ル大拡張ヲ為サムトスルニ当リ僅カ二万噸位ハ問題トスルニ足ラサルヘシ過日若槻全権ヨリ申シタル通リ日本ハ好ムテ十二万六千噸ヲ主張スルモノニアラス若シ英米ニ於テ大型艦ノ保有量ヲ更ニ引下ケ得ハ日本ハ之ニ比例シテ低下スルニ躊躇セサルモノナリ英米両国更ニ協議ノ上各自ノ大型艦保有量ヲ減少シ得ル余地無カルヘキヤ貴長官ノ御見込ヲ承リ度シト質シタル処

長官ハ其ノ点ハ自分ノ最念頭ニ置ク所ナルカ既ニ英米間ニ協定セル以上ニ英国ヲシテ切下ケシムルコトハ甚タ疑問ナリト答ヘタルニ付本使ヨリ繰返シ日本ハ八吋砲艦ニ就キ英米側ニテ低下シ得ル限リ之ニ比例シテ低下スヘキ決意ヲ有スルモノニ付其ノ点特ニ諒解セラレタシト念ヲ押シ置キタリ

㈡長官ハ巡洋艦殊ニ八吋砲巡洋艦ニ就キ英国ヲシテ引下ケシムルコトハ今申上ケタル通頗ル疑問ナレハ従テ軍縮ノ実ヲ上クル為ニハ主力艦ニ就キ出来得ル限リ減縮ヲ計ラサル可カラス右ニ対スル貴大使ノ御意見如何ト尋ネタルニ付

本使ハ若槻全権ノ言ハレタル通艦齢延長艦型縮小代換延期ノ方法ニ依リタキ考ナルカ米国側ノ意見如何ト反問セルニ

長官ハ代換延期艦齢延長ニ付テハ無論日本側ト全然意見一致スルモノナルカ唯一ツ困ルコトハ英国側ニ於テ工業力ノ関係上日本ノ如ク徹底的ニ代換延期ニ同意シ兼ヌルカ如ク右ハ「マ」首相カ労働党首領タル関係上失業問題ニ関連スルモノニアラスヤト思ハル従テ英国トシテハ日米ノ主張セムトスル代換延長期間ノ半分位ニテモ或ハ困難トスルヤモ計リ難ク（客年往電第五二一号ノ六参照）依テ米国トシテハ此ノ際艦数減少ノ方法ニ出ツルノ外ナシト認メ居レル処若シ公平ナル方法ニテ艦数減少ヲ為スコトトセハ日本ハ賛同セラルヘキヤト述ヘタルニ付

本使ハ日本ハ御承知ノ通主力艦ノ数少キヲ以テ此ノ上数ヲ減スルコトハ甚タ困難ナリ前申ス通リ日本ハ艦型縮小ノ方法ニ依リタキ考ナルカ貴方ニ於テ右ニ対シ考慮シ得サルヤト尋ネタル処

長官ハ米国海軍側ニ於テハ艦型縮小ニハ強ク反対シ居レルモ僅少ナル程度ナラハ考慮シ得ヘシト述ヘタリ

㈢別レニ臨ミ本使ヨリ倫敦会議ノ成功ヲ希望スル旨述ヘタルニ長官ハ自分ハ今回ノ会議ニ於テ日本ト充分ナル協力ヲ期待スルコトハ屢申上ケタル通ニシテ相互ニ満足ナル結果ヲ得サル限リハ会議ハ成功ト考ヘサル積リナリト述ヘ一昨日（四日）午后新聞記者ヲ招キ会議ノ背景ヲ示ス為秘密ノ会見ヲ為セル際ニモ日米国交ノ良好ナル状態ヲ充分説明スルト共ニ会議ニ於テ日本ト隔意ナキ協調ノ必要ナル所以ヲ特ニ説明シ置キタル旨付言セリ

英ニ転電シ英ヨリ全権ニ転報シ仏ニ暗送セシム

271 昭和5年1月6日 ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

第一回日英専門家打合会における主力艦及び航空母艦に関する討議の経過について

ロンドン 1月6日後発
本省 1月8日前着

第三号

一月六日午后外務省米国局長室ニ於テ英国側「クレイギー」「フイツシヤー」軍令部次長「ベレイル」計画課長日本側左近司、斎藤、中村出席松平大使発往電第四号準備打合セ会ヲ開ケリ

左近司ハ先ツ「ク」ニ対シ先日若槻全権ニ専門的細項ニ関スル問題ニ付打合ヲ希望セラレタルカ日本側ハ先ツ原則的問題ノ解決ニ重キヲ置クモノニシテ恰モ英米間ニ勢力均等ノ原則ヲ定メラレタルト同様重要ナル意義ヲ有シ不日貴国首相ト我方全権トノ熟議行ハレントスル此ノ際此等細目ニ付意見交換ヲ行フハ本末顚倒ノ感アルノミナラス専門的細目協議ノ如キハ漸次原則的懸案解決後ニ於テ如何様ニモ之カ進展ヲ期シ得ル事項ナルト共ニ我方トシテ元ヨリ之等問題ニ関スル討議ヲ避ケントスル意思ナク誠意ヲ以テ之カ解決ヲ計リ何等カノ妥協点ヲ発見セサル可カラスト認メ居レル次第ナルモ今日ノ如ク日本国民ノ信念タリ政府ノ強硬ナル主張タリ専門的立場ヨリモ方ニ斯クアルヘシト信スル原則的事項ノ未解決ナル現状ニ於テハ到底細項問題ヲ審議スルノ勇気ナシト切リ出シタルニ「ク」ハ語ヲ遮リ先日英首相松平会談ノ際比率ナル用語ヲ避ケ関係隻数砲数等実際問題ニ触レテ「イクイリブリユウム」ヲ考究スルコト然ルヘキ旨英側ヨリ申出タルカ本日ハ此ノ方面ヨリ見テ比率ニ関係ナキ点ニ付考慮ヲ進ムルコトト致シタシト云ヒ左近司ハ之ニ対シ一応尤ノ次第ナルモ原則的問題ニ関係アル補助艦即チ巡洋艦、駆逐艦、潜水艦ニ関スル諸項ハ結局我主張ノ根本ニ影響スル問題ナルヲ以テ之ヲ避ケ今日ハ嚮ニ堀参事官以下ニ対シ貴方ノ内意ヲ回示セラレタル主力艦及航空母艦ニ関スル諸件ノミニ付我方研究ノ程度ヲ御話シスルコトトスヘシト前提シ

一、主力艦

㈠艦齢二十六年ニ就テハ其ノ程度ノ延長ハ考慮シ得ヘシ

㈡主砲口径ヲ縮少シ排水量ヲ低下セムトスル点ハ主義トシテ然ルヘシト思フモ列国ノ現存十六吋砲及ヒ十四吋砲艦ヲ考慮スル時ハ此ノ際一挙ニ十二吋ニ低下スルヲ適当トスルヤ否ヤ頗ル疑問ナリ種々研究ニ依レハ十四吋程度ヲ適当トスヘシ

砲口径ヲ小ニセハ自ラ排水量モ減少シ得ヘク二万五千噸程度迄ハ可能ト認ム

(ハ)代換第一艦ヲ一九三一年ヨリ起工ノ件ハ艦型縮少ノ結果自ラ計画ノ大変更ヲ伴ヒ各国共ニ之カ準備ニ相当ノ年月ヲ要シ事実上実行不可能ナル無理ナル注文ナルヘシ

(ホ)主力艦ノ隻数ハ之ヲ変動セサル貴方ノ内意ナル趣ナル処日本トシテモ隻数変更ハアリ得ヘカラサルコトト思考シツツアリ

右ニ対シ「ク」ハ例ヘハ英案通リ主力艦ヲ縮少スルコトトセハ大約何年頃ヨリ代換ニ着手シ然ルヘキ考ヘナルヤト質問セルニ依リ代換開始ノ時期ニ就テハ計画並ニ準備ノミノ見地ヨリ決セラルヘキ問題ニアラスシテ軍縮本来ノ目的ニ適応スル別途ノ考慮ヲモ加味セサルヘカラサル次第ナルヲ以テ単ニ専門的見地ヨリ適確ナル所見ヲ申述フルコト能ハス此ノ点ハ全権ニ於テ審議セラルヘキ性質ノモノニ属スト応酬シ次イテ「ク」カ此ノ会合ニ於テ伺フ処ハ全部「テンタチーブ」ノモノニシテ何等拘束力アルモノニアラス唯腹蔵ナキ意見ヲ聞キ度右ノ質問ヲナセリ要スルニ一九三一年ヨリ A few years 遅ルルコト然ルヘキ意向ナルヤト質シタルニ対シ然リト答ヘタリ

次ニ「フ」次長ハ英国側ニテ主力艦主砲ヲ十二吋ニ低下シテ可ナリトスルハ次位ニアル八吋巡洋艦ニ対抗スルニハ之ヲ以テ充分ナリト思考スルノミナラス主力艦自体モ其ノ防禦力ノ関係上艦型縮少ヲ可能ナラシムヘシトノ見地ニ依ルモノナリト説明シテ日本側ノ所見ヲ求メ左近司ハ専門的見地ヨリスレハ今日十六吋砲及十四吋砲ノ混交ハ用兵上相当不便トスル処ナルニ今後更ニ十二吋砲ヲ之ニ混スルニ至ラハ一層甚タシカルヘシ今次ノ協定ニ於テハ先ツ以テ十四吋ニ低下シ漸ヲ追フテ進ムヲ適当トスル意見ナリト応シ「フ」カ十四吋ニテハ二万五千噸ニ収マラサル惧アリト認ムルカ如何ト質シタルニハ我方専門家ノ研究ニ依レハ可能ナリト答ヘ更ニ何門搭載可能ナリヤノ問ニ対シテハ尚今後専門的研究ヲ要スヘシト外ラシタリ

「ク」ハ更ニ代換開始時期問題ヲ繰返シ米ハ一九三六年迄建造ヲ開始セサル意見ナル処日本ハ之ニ賛成セラルル義ナリヤト問ヒ左近司ハ之等ノ点ハ相当重要ナルニ付各国ノ主張ヲ考慮セサルヘカラス且専門的見地ノミヨリ云フヘキモノニ非ラス何レハ全権ニ於テ考慮セラルヘキ問題ナリト答フ

此ノ時「フ」ハ口ヲ挟ミ若シ一九三六年迄建造延期スル時ハ艦齢相当大ナルモノヲ生スルカ如シト云ヘルニ依リ最大艦齢三十年位ノモノヲ生スル事トモナルヘシト応シ左近司ハ次テ今回ノ会議ニ於テ上程セラルヘキ重要問題ハ補助艦、主力艦ノ両者ニ亘ルヘキ処審議上両者ヲ如何様ニ取扱ハルル腹案ナルヤト質問シタルニ「ク」ハ議事日程ノ問題ハ二十日全権ノ会合ニ於テ講究セラルル筈ナルカ英側トシテハ先ツ主力艦問題ヲ上程シ度キ意向ナリト答ヘ「フ」之ニ同意ノ口吻ヲ洩ラシ「ク」ハ引続キ此ノ点ハ日本側ニ於テハ御異議無キ事カト想像スルモ仏伊側ノ意見ヲモ参酌セサルヘカラスト述フ依テ斎藤ハ仏伊側ニテハ何等カ反対ノ意向アル義ナリヤト質シタルニ「ク」ハ仏伊ハ先ツ総噸数ヲ討議シ度キ意向ナル趣ナルカ如シト説明セリ

三、航空母艦

(イ)艦齢二十六年ノ問題ハ一定噸数以上ノモノニ付テハ我方ニ於テモ考慮シ得ヘシ

(ロ)最大排水量ニ付英ニ於テハ二万五千噸ニ低下然ルヘシトノ内意ナル趣ナルカ僅二千噸低下ノ根拠ハ何ナリヤト尋ネタルニ「ベ」大佐ハ各艦種ニ付一般的ニ噸数ヲ低下スル主義ト共ニ二万五千噸ハ切ノ良キ数字ナリト微笑シツツ答ヘ左近司ハ我方ニ於テハ最大排水量ハ今一層低下シ得ルモノト考ヘ居レル旨ヲ述ヘタルニ「フ」ハ其ノ限度如何ヲ反問シ「ク」ハ又日本ハ一万噸迄低下然ルヘキ御意見ナルヤニ聞キ及ヘル処如何ト質シ左近司ハ左迄ニハ考ヘ居ラサルモ五千噸及至一万噸ノ低下ハ可能ナルヘシト答ヘタリ

次テ「フ」カ然ラハ之ニ比例シ列国保有噸数ヲ低下スル意思アリヤト質問セルニ対シテハ保有量低下ノ問題ハ華府条約ノ規定ヲ変更スル重大ナル問題ナルニ付今茲ニ即答ヲ逡巡スルト同時ニ航空母艦ノ関スル限リ隻数ニハ制限無キ次第ナルニ依リ主力艦トハ別途ノ考慮ヲ要スル問題ナリト答ヘ（「ク」ノ所有セル手控ニハ英ノ所有量ヲ十二万五千噸トセリ）又「ク」カ航空母艦ノ備砲口径ヲ六吋トスルニ関スル所見ヲ求メタルニ対シテハ今ノ処口径低下ノ考ヘナシ但シ将来艦型縮少セラルレハ之ニ応シテ砲口径低下モ可能トナルヘシト応セリ

右ニテ一応意見交換ヲ終リ次ニ斎藤ヨリ貴電第三二〇号会議ノ目的トシテ英側ノ掲ケタル to attain agreement 云

タノ字句意義ヲ質シタルニ「ク」及ヒ「ベ」ハ「プログラムス」トハ単ナル「ペーパー、プラン」ヲ意味シ主トシテ米ノ計画ヲ指スモノナリト答ヘ又「ミューチュアリー、アクセプテッド、ストレングス」トハ今回ノ会議ニ於テ決定セラルヘキ将来ニ対スル協定勢力ヲ指シ華府条約等過去ノ協定ヲ意味スルモノニ非サルコト勿論ナリ尤本字義全体ニ付テハ仏伊側ノ反対アリ今少シク漠然タル字句ヲ用フルコトトナル筈ナリト説明セリ

別レルニ臨ミ左近司ハ我方ノ最モ重キヲ置クハ原則的立場ヲ確立スルコトヲ先決スルニアリ此ノ点何等カノ進展ヲ見ルニ至ラハ此ノ種専門的研究ハ熱心誠意ヲ以テ之ニ当ルヘキ所存ナリト述ヘ置キタリ

右会談要領ハ当地ニ於テ米ニ内報スルコトニ英ト打合済

尚「プログラム」ナル用語ノ内容如何ハ我方ノ立場ニ関係アル問題ナルニ付追テ改案ノ提示ヲ待チ篤ト事理ヲ明白ナラシメ置クヘキ考ナリ

米、仏、伊、永井大使ヘ転電セリ

272 昭和5年1月7日 ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

英国との予備交渉を控え電報内容漏洩防止方について

ロンドン 1月7日後発
本省 1月8日後着

第六号（極秘）

往電第四号末段ニ関シ

又復当方電報ノ内容漏洩セルモノト察セラルル処英国側トノ予備交渉ヲ前ニ控ヘ頗ル機微ノ関係アル際ニ付今後一層電報配付先ヲ制限スル等徹底的ノ改善策ヲ講セラルルニアラサレハ会議ノ発展ニ伴ヒ種々収拾シ難キ事態ヲ現出スヘク誠ニ憂慮ニ堪ヘサルニ付本件対策ニ関シ更ニ切実ナル御考慮ヲ仰キタシ

273 昭和5年1月7日 ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

補助艦対米七割要求をめぐるヘンダーソン外相との会談について

ロンドン 1月7日後発
本省 1月8日後着

第七号

七日約ノ如ク外務省ニ於テ「ヘンダーソン」ト会見新任次

官「バンシタート」同席当方ヨリハ若槻、財部、松平列席斎藤帯同セリ

（若槻）ハ先ツ外相カ休暇ヲ切上ケテ早目ニ会見セラレタルコトヲ深謝ス余等ニ於テ成ルヘク早目ニ日本側ノ所見ヲ英国政府側ニ申入レタキ希望ナリシニ付此ノ機会ニ於テ閣下ニ対シ之ヲ述フルヲ得ルコトヲ欣幸トス本日ノ会談ハ自然「マ」首相ノ耳ニモ入ルコトト存スト述ヘタルニ

（「ヘンダーソン」）ハ右ハ自分ヨリ首相ニ対シ会談ノ内容伝達方依頼セラルル意味ナリヤ将又閣下ヨリ直接同趣旨ヲ首相ニ対シ繰返サルル御考ナリヤト尋ネタルヲ以テ

（若槻）ハ「マ」首相ニ対シテハ何レ直接申上ケル考ナリト答ヘ進ムテ日本側ニ於テ最モ重要視スル要点ニ付一応申入レ置キタキ希望ヲ以テ来訪シタル旨前置シ世界ノ平和ニ貢献シ人類ノ福祉ヲ増進セムカ為軍備ヲ縮少セムトスル大事業ニ対シテハ各国民トモ其ノ希望ヲ一ニスル処ニシテ従来モ各国ニ於テ多大ノ努力ヲ払ヒタル処ナルカ不戦条約ノ締結ニ依リ更ニ其ノ機運進メラレ「マ」首相始メ英国政府側ニ於テ鋭意其ノ精神ノ実現ヲ計ラレ先ツ以テ英米間ノ予備交渉ニ依リ原則的事項ニ関シ協定スル処アリ結局英国カ招請国トシテ愈五国会議ヲ開催ノ運ニ至リタル熱誠及努力ニ対シテハ深ク敬意ヲ表セサルヘカラス日本政府ハ此ノ会議カ充分ノ成功ヲ収メン事ヲ切ニ希念スルモノナリ日本ノ会議ニ対スル態度ニ付テハ予テ松平大使ヨリ首相及英国政府側ニ申入レタル通リ又我方ニ於テ屢々内外ニ声明セル通リ単ナル制限ヲ以テ満足セス現実ノ縮少ヲ要望セントスルモノナリ而シテ之カ実現ノ為ニハ各国特殊ノ国情ニ対シ同情的考慮ヲ加ヘ公平ナル立場ニ於テ協調的寛容的態度ヲ以テ討議ニ当ル事必要ナリト考フルモノナリ

今回ノ会議ニ当リ日本ノ最重キヲ置ク重要問題ニ付テハ本会議開催前予備会議ニ於テ充分ニ御諒解ヲ得置キ度キ点ニアリ予備会談ノ必要ナルハ貴方ヨリノ招請状ニモ又日本政府ノ回答ニモ明記シアル処ニシテ本会議ノ討議ヲ円満ニ進行セシムル上ニ最主要ト信スル処ナリ此ノ目的ヲ以テ松平ハ数次「マ」首相貴外相等ト非公式予備会談ヲ重ネタリ従テ我意向ノ存スル処ハ大体貴国政府ニ於テ既ニ御承知ト存スルモ猶其ノ要点ニ付本委員ヨリモ一応申述フル事ト致シ度シ帝国政府ハ補助艦艇ニ付米国海軍力ノ七割ヲ要求スルモノニシテ其ノ根拠ハ要スルニ日本カ極東ニ於テ防守的ニ

国防ヲ完フセントスルニ外ナラス凡ソ国際間ニ軍縮ノ実ヲ挙ケントセハ各国カ守ルニ足リ攻ムルニ足ラサル兵力ヲ有スル事ヲ規準トセサルヘカラサルモノト信ス若シ此ノ基準ニ照シ不満足ノ勢力ヲ無理強ヒセムトセハ当該国民ハ其ノ安全感ヲ動カサレ自ラ猜疑心ヲ誘致シ相互信頼及友誼ノ念ヲ失ヒ到底崇高ナル軍縮ノ大事業ヲ達成スルコト能ハサルヘシ七割ノ比率ハ華府会議以来我国ノ一貫シテ要求シ来レル処ニシテ今日全国民ノ信念トシテ動カスヘカラサルモノトナリ居リ此ノ信念ヲ裏切ルカ如キハ吾人ノ到底為シ能ハサル処ナリ此ノ点ハ日本ノ最モ重キヲ置ク処ニシテ充分閣下ノ御了解ヲ得度シト存スト述ヘタル処

（「ヘンダーソン」）ハ自分ハ閣下ノ所見ニ対シ全幅ノ賛意ヲ表スルモノナリ会議カ絶対的成功ヲ遂クヘキヲ希望スルハ全ク貴見ノ通リニテ英国ハ招請国トシテ会議ノ成功ヲ収メムカ為全力ヲ尽ス積リナリ「マ」首相カ態々米国ニ赴キ又松平大使其ノ他関係国代表者ト会談ヲ重ネタルハ皆会議ノ祈念スル熟誠ノ表徴ニ外ナラス余ハ又各国政府カ其ノ有スヘキ海軍力ニ付何等カノ最低限度ヲ考ヘ居ラルルコトモ当然ノ義ナリト思考ス而シテ七割ナル比率ハ貴説ノ如ク日本国民ノ強キ信念ナルコト勿論ナルヘシ唯私見ヲ申述フレハ何レノ国モ本会議ニ出席スルニ当リテ動キノ付カヌ cut and dried ノ提案ヲ持チ来ラレサルヲ希望ス是会議ヲ真ニ成功ニ導ク所以ニ非サレハナリ友誼的精神虚心坦懐ナル心持ヲ以テ会議ニ参集スルコト緊要ナリト存ス吾人ハ単ニ国家的ノミナラス世界的見地ヨリシテ重大ナル責任ヲ帯ヒ従テ充分会議ノ重大性ヲ知覚セサルヘカラサルヲ感スルモノナリ但シ今回ノ会議ニ関シテハ主トシテ首相自ラ事ニ当リ居ルニ付貴方ノ御希望ハ委細直接首相ニ申入レラルルコト可然首相ヨリ更ニ英国側各全権延テ英国政府ニ貴意ヲ伝達スルコトトナルヘシト述ヘタリ

（若槻）ハ会議ニ於テ友好的ノ精神ヲ持スヘキハ全ク閣下ト同感ナルモ唯我カ重キヲ置ク原則的事項ニ付テハ宛カモ英米間ニ於テ「パリチイー」ノ原則カ確立シテ後初メテ爾余ノ問題解決モ容易トナリ協定ノ望ヲ見ルニ至リタルト同様ノ関係ニアリ我比率ノ原則定マラハ其ノ適用ハ自ラ容易ニ考慮シ得ルニ至ルヘシ従テ此ノ点ニ付テ今少シク仔細ニ英国政府ノ御諒解ヲ得度キ所存ナルモ御話シノ次第モアリ此ノ点更ニ直接首相ニ申入ルルコトト致スヘシ唯日本側カ予備会議ニ重キヲ置キ居ル趣旨ハ充分御了承アリタシト述ヘタルニ

（「ヘ」）ハ唯一点試ニ御尋ネシタキハ閣下ハ先程日本政府ハ単ナル制限ニ非スシテ縮減ヲ希望セラルル旨申述ヘラレタルカ如何ナル論点ヨリ一方ニ於テ縮減ヲ主張シナカラ比率ヲ六割ヨリ七割ニ増加セラレムトスルモノナリヤ聊カ矛盾ノ感ナキニ非スヤト質問シタルニ対シ

（若槻）ハ六割トハ多分華府会議ノ比率ヲ意味セラルルモノト存スルカ右ハ主力艦ニ関スルモノニシテ日本側ハ其ノ当時ヨリ海軍力全体ニ付七割ヲ主張シ居タルカ主力艦ニ付テハ種々ノ関係ヨリ比率ヲ譲リタルモ其ノ他ノ艦種ニ付テハ希望ノ比率決定ニ到達セサリシ次第ナリ従テ今回ノ会議ニ於テ議セラルヘキ補助艦ニ付テハ現時諸般ノ状勢ニ基キ別ニ比率ヲ定メサルヘカラス而シテ右比率ヲ維持スル限リ日本ハ他国カ其ノ海軍力ヲ低下スルニ従ヒ其ノ海軍力ヲ低下スルノ用意アリト応シタリ

（「ヘ」）ハ六割カ主力艦ニ関スルモノナルハ貴説ノ通ナルカ其ノ他ノ艦種ニ付テハ何等ノ規定ナク其ノ儘ノ状態ニテ不戦条約ノ締結ニ及ヘリ右条約締結ノ後ニ至リ更ニ七割ノ比率ヲ主張セラルルハ自ラ之ヲ諒解シ難シトスルモノアルヲ免カレサルヘシト言ヘルニ対シ

（若槻）ハ米国ノ政治家ニシテ国防ハ相対的ナリトノ見解ヲ述ヘタルモノアルヲ記憶スルカ余モ全ク同感ニテ日本ノ海軍力ヲ相対的ニ減少スルヲ躊躇スルモノニ非ス只七割ノ比率ヲ維持スルコト必要ト信ス不戦条約ノ成立ハ勿論日本ノ喜ヒトスル所ニシテ其ノ精神ニ基キ軍縮ノ実現スヘキコトハ最希望スル所ナルカ相対的立場ハ之ヲ維持セサルヘカラス我カ七割ノ主張ハ不戦条約ニ関係ナク我カ国防上是非共必要ト信スル所ナリト答ヘ

（「ヘ」）ハ十日当地発寿府ニ赴キ十五日頃帰英ノ予定ナリト語リ会談ヲ終レリ

米、仏、伊、永井全権ヘ転電セリ

274　昭和5年1月8日（8日）　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

英国における日本全権の動向などに関するタイムス東京特電の報道について

ロンドン　本省　1月8日前着

第四号

六日後「タイムス」東京特電ハ英国ニ於ケル日本全権ノ歓迎振リハ米国ニ於ケル如ク熱誠ナラサリシ旨日本新聞ニ評論セラレ居ル処官辺ニ於テハ右ハ休暇ノ為已ムヲ得サル事情ヲ諒トシ居レリ日本側ハ今週外相及海相ト会見シテ其ノ意見ヲ開陳スヘキカ以前ノ会合ニ於テハ首相ハ比率ノ論議ヲ避ケ日本カ国防上必要トスル一万噸巡洋艦ノ数ヲ指示セムコトヲ求メ日本側ハ之ニ対シ右隻数ハ他ノ各国ニ割当テラルヘキ勢力如何ニ依ル旨ヲ答ヘ若槻全権ハ英米両国カ既ニ其ノ隻数ヲ論議スルニ先立チ「パリテイー」ノ原則ニ同意セルカ如ク日本ノ比率モ隻数問題論議前主義上之ヲ決定セサルヘカラサル旨ヲ提議スヘシト観測セラルト報シ又日本政府ハ松平大使ヲ通シテ仏国提議ノ意義ニ付問合セヲナサシメタル処仏国ハ

一、倫敦ニ於テ成立スヘキ比較的短期間ノ海軍協定ト

二、連盟ヲ通シテ其ノ効力ヲ発生スヘキ永久的性質ノ海軍協定

ノ二個ノ海軍協定ヲ欲シ居ル旨ノ通報ヲ受ケタル旨ヲ報シ居レリ

米、仏、伊、海牙ニ転電セリ

275　昭和5年1月8日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

若槻全権とアレキサンダー海相との会談において相互に会議の成功を熱望について

ロンドン　1月8日後発
本　省　1月9日後着

第一一号

一月八日午後「アレキサンダー」海相ニ会見ノ運ヒトナリタルニ付若槻、財部、松平（斎藤帯同）同官ヲ海軍省ニ往訪セリ

（若槻）カ敬意ヲ表スル目的ヲ以テ来訪セリト前置キシ英国政府ノ多大ノ努力ヲ以テ五国会議開催ノ運ヒトナレルヲ多トスル旨ヲ述ヘ日本カ会議ノ成功ヲ熱望スルモノナルコトヲ申入レタルニ対シ

（「ア」）ハ予テ寿府会議ニ於テ其ノ難局ニ陥リタル際日本側ハ之ヲ纏ムルカ為大イニ努力セラレタルコトヲ承知セリ今回ノ会議ニ於テモ日本側ノ努力ニ俟ツテ会議ノ成功セムコトヲ切望スト述ヘタリ

（若槻）ハ日本側ニ於テハ胸襟ヲ開キ又協調的精神ヲ以テ会議ニ臨ム覚悟ナルモ事国防ニ関スルヲ以テ日本ノ要求スル根本的事項ニ付テハ充分ノ御諒解ヲ得サルヘカラスト考ヘ居レリ之等ノ点ニ付首相始メ英国側当局ニ対シ充分御話シシ度ト存スト述ヘタルニ

（「ア」）ハ松平大使モ充分御承知ノ如ク国際会議ハ屢々地均ノ不足ナルカ為ニ不成功ニ終ルコト鮮カラス首相外相等ト予メ充分御協議アルコト真ニ然ルヘシト答ヘタリ

（若槻）ハ余ハ貴説ニ全然同感ヲ表スルモノニシテ其ノ目的ヲ以テ早目ニ倫敦ニ到着シタル次第ナルカ昨日ハ外相ト会見シ明日ハ又首相ト御懇談ノ機会ヲ得ル次第ニテ仔細ニ我立場ヲ申述フル所存ナレハ本日閣下ニ対シ管々シク申上クルコトハ差控フヘシ去リ乍ラ今回ノ会議事項ハ閣下ノ管轄ニ属スルヲ以テ自然今後モ度々会見シ御懇談スル機会有之ヘク又日本側随員ト海軍省員トノ間ニ内談ノ必要モ生スヘク御配慮ヲ煩スコト多カルヘシト存スト述ヘ会談ヲ終レリ夫レヨリ海軍省ト家続キナル海相官邸ニ於テ「アレキサンダー」夫人ヨリ茶ノ饗応ヲ受ケ退去セリ

米、仏、伊及永井全権ニ転電セリ

276　昭和5年1月10日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

比率問題及び八吋砲巡洋艦の価値に関するマクドナルド首相との第一回非公式会談について

ロンドン　1月10日前発
本　省　1月11日前着

第一五号（極秘）

一月九日予定ノ如ク首相官邸ニ於テ「マクドナルド」首相ニ会見ス「クレイギー」列席我方三全権

（若槻）ハ首相ト礼譲的挨拶ヲ交換シタル後日本カ会議ノ成功ヲ衷心ヨリ希望スル事ヲ述ヘ尚我方ニ於テ非公式会議ニ重キヲ置ク趣旨ヲ力説シ予テ松平ヨリモ充分申述ヘタル事柄ナルカ愈会議モ近ツキタルヲ以テ自分ヨリモ日本カ最重キヲ置ク原則的事項ニ付申入レ度キ希望ヲ以テ来訪セル旨ヲ述ヘタリ

（「マ」）ハ之ニ対シ会議ノ成功ニ対シテハ英国モ同シク衷心ヨリ之ヲ希望スルモノナリ之ニ付テハ是非共日本ノ協力ヲ請ハサルヲ得スト言ヘルニ対シ

（若槻）ハ今日非公式ニ御話シ度キハ帝国政府ノ最要点トスル比率ノ問題ナリト前提シテ外相ニ対スルト同シク日本ハ補助艦ニ於テ米国海軍ノ七割ヲ保有セン事ヲ主張スルモノナル所以ヲ詳述シ此ノ点ニ付是非共英国政府ノ諒解ヲ得置キ度ク松平ヨリモ予テ充分申上ケ置キタル処ト承知スルモ重ネテ好意アル御考慮ヲ煩度シト述ヘタルニ

（「マ」）ハ日本カ国家安全ノ問題ニ付深甚ナル関心ヲ払ハルルハ余ノ事実同情スル処ナリ国防ハ誠ニ海陸空軍ニ亘リテ常ニ考量セサルヘカラサル要素ナル事申ス迄モ無シ日本側ノ立場ニ付テハ予テ松平大使ヨリ最忠実ニシテ又力強キ説述ヲ聞キ之ニ対シ充分ノ考慮ヲ払ヒ来レリ

唯之ニ関シ申上ケタキ二点アリ第一ハ日本側ニ於テハ単ニ海軍力ノ制限ノミナラス縮減ヲ主張セラルル処之ヲ現在割合ニ基キ調和スルコト甚タ困難ナルヘシト言フ点ニ在リ日本側ニ於テハ最大海軍力ニ対シ七割ヲ要求セラルル処例ヘハ米国カ二十一隻又ハ十八隻ノ大型巡洋艦ヲ保有スルコトニナラハ日本ハ其ノ七割ヲ要求セラレ従テ拡張ノ結果トナルヘシ是太平洋ノ事態ヲ機微ノ関係ニ置クモノト言ハサルヘカラス此ノ故ニ曩ニ松平大使ニ対シテ申上ケタル通寧ロ比率ノ問題ヲ離レテ釣合（エクイリブリアム）ノ問題トシテ考量ヲ加ヘタシト考フル所以ナリ即チ何艦種ニ付テハ何隻ト言フカ如キ目安ヲ立テ国防ノ安全ヲ考ヘラルル方可然カト存ス英米間ニ於テハ此ノ見地ヨリ協定ヲ求メタリ斯ノ如クシテ日本ノ輿論ヲ満足セシムルコトヲ得ヘキモノニアラスヤト考フ英米間ニ於テハ所謂「パリチー」ノ問題ハ之ヲ論スルコトナク唯事実ニ基キテ造艦計画ヲ比較論議シタル次第ナリ畢竟戦争ヲ出発点トシテハ協定ノ余地ナク平和ノ状態ニ於テ最小限度ノ海軍力ヲ如何ナル程度ニ置クヘキヤニ付テ考慮ヲ運ラセリ例ヘハ先頃突発シタル「パレスタイン」事件ノ如キニ対シ之カ処置ニ充分ナル海軍力ヲ考量シタル次第ナリ日本ニ於テモ斯ノ如キ見地ヨリ最小限度ノ所要量ヲ計出セラレ比率ニ言及セラレサラムコトヲ希望ス比率ニ基キテ立論セラルル時ハ結局造艦競争ヲ誘致スルコトトナルノ虞アリ此ノ故ニ予ハ釣合ノ論ヲ主張スルモノナリ加之比率ノ論拠ニ依ル時ハ仏伊等モ亦夫々主張ヲ申出ツヘク結局我カ製艦計画ハ根柢ヨリ覆サルルノ虞アリ従テ余ハ日本側カ比率ヲ離レタル数字ニ依リ立論セラレンコトヲ切望スルモノニシテ其ノ裏面ニハ或ハ七割或ハ六割八分ト

云フカ如キ比率ヲ想像スルコトトナルモ然ルヘシ日本カ国防上必要トスル実際ノ数字ヲ基トシテ研究スルコト必要ナリト思考スト述ヘタリ

茲ニ於テ（若槻）ハ釣合ヲ立論ノ根拠トスヘキコトニ付テハ全然同感ナリ日本カ七割ヲ主張スルハ即チ其ノ意味ニ外ナラス日本ハ軍備ハ相対的ナリト考フルモノニシテ釣合ヲ維持スル限リ如何ナル縮小ヲ行フモ差支ナシト為スモノナリ大型二十一隻ニ対シ七割ヲ要求スル時ハ拡大トナルノ虞レアリトノ御話ナレトモ同時ニ小型ニ付テハ保有量自ラ減少シ巡洋艦全体ヨリ之ヲ見レハ依然釣合ヲ維持スルモノト云ハサルヘカラス比率ナル言葉ヲ避ケントスル御趣旨ハ必スシモ之ヲ否定セサルモ相対的軍縮ヲ実現セントセハ自ラ全然比率ノ観念ヲ脱スルコト能ハス然レ共比率ナル言葉ヲ避ケントスルニハ異議ナク従テ過般日本政府ハ松平ヲ通シテ其ノ必要トスル総数ヲ英国政府ニ通達セリ之ニ対シ閣下ニ於テハ日本ノ提案カ大型巡洋艦ニ付日本ノ勢力カ英国ノ勢力ニ余リニ接近スル点ヲ指摘セラレタルカ之英国カ小型巡洋艦ニ多数ヲ要求シ大型ニハ劣勢ニ甘セラレ之ニ反シ米国ニテハ大型ノ多数ヲ要求シ小型ノ劣勢ヲ受諾セル自然ノ結果ト云ハサルヘカラス日本トシテハ大型ニ重キヲ置ク関係上英国ニ対シ同艦種七割以上ヲ保有スルコトトナルモ巡洋艦全体ニ付テ観察スレハ英国ニ対シ遙カニ劣勢ナリ日本ハ由来補助艦全体ニ対シ七割ヲ主張スルモノナルモ問題ヲ簡単ニスル為仮ニ巡洋艦ノミニ付数ヲ挙ケンニ米国ノ保有量三十一万五千五百噸トシ一万噸巡洋艦十八万噸小型巡洋艦十三万五千五百噸ヲ基準トスレハ日本ノ小型巡洋艦保有量ハ九万四千八百五十噸トナリ之ヲ英国ノ十九万二千二百噸ニ比スレハ僅ニ四十九％ニ過キス之英国側ニ於テ小型ニ重キヲ置カルル特殊事情アル処ナリ我方ニ於テ大型ヲ重視セサルヘカラサル事情アルカ為自ラ免レ難キ処ナリト謂ハサルヘカラス要スルニ各国保有量ハ大小巡洋艦ヲ合併シテ考量セサルヘカラス英米ノ所謂均勢モ此ノ見地ヨリ考量セラレタルコトト了解ス而シテ我カ巡洋艦総括的保有量ハ前述ノ数字ニ依レハ英国ニ対シ六割五分ニ過キサルモノナリ加フルニ其ノ内容ヲ検スレハ日本ノ大型巡洋艦ハ将来ノ十三隻ハ其ノ総噸数十二万六千噸ヲ越ユルコトナク従テ一万噸級巡洋艦トシテハ十一隻ヲ越ユルコト無カルヘシ又過渡期ニ於テハ一万噸級ハ唯八隻ノミニシテ他ニ旧型劣勢ノ古

鷹級四隻アルモ之ハ英国ノ「ホーキンス」級ニ比スヘキモノナリ而シテ仮令八千八百噸ノ大型巡洋艦二隻ヲ追加スルモ之英国ノ「ヨウク」型ト相匹儔スルモノニシテ総体的勢力トシテ遙ニ英国ノ下位ニアルハ事実ナリ而モ英米両国ハ今後累年新艦ノ建造ヲ見ルヘキニ拘ラス日本ハ今後多年間多数ノ旧艦ヲ保有セサルヘカラサル実情ニアリ（此ノ時「マクドナルド」ハ右過渡期ハ十四年位ニ亘ルコトトナルヘシト言ヲ挾ミタリ）

之ヲ要スルニ日本ハ各国保有勢力ノ比較上大型ノミヲ切離シテ検討セントスルコトニハ同意ヲ表スルコト能ハス大小巡洋艦一併ニ考慮シ且其ノ実力ヲ審査シテ公正ナル結論ヲ求メサルヘカラスト信ス比率ヲ離レテ隻数噸数等ニ付釣合ヲ考フル様ニ希望アリタルニ対シ松平ヨリ帝国政府ノ所見ヲ披瀝シ之ニ対シ貴方ノ御批評アリタルコトヲ承知シタルニ付テハ一言ヲ申述ヘ御考量ヲ煩ハス次第ナリト述ヘタリ

（「マ」）ハ縷々御話ノ次第ニ依リ愈日英間ニ意見ノ開キ少キコトヲ看取セリ我方ニ於テハ釣合ヲ要求シ貴方ニ於テハ比率ナル言葉ヲ使用セラレムトス余ハ比率ナル語ヲ抛擲セラレヨト言ハムト欲ス貴方ノ御困難ハ充分之ヲ諒知スルモ英国ノ難点亦茲ニ有リ余ハ率直ニ申上クレハ誠ニ苦シキ立場ニ立ツ次第ナリ

此ノ際貴意ヲ得タキ第二点ハ閣下ハ恰モ英国カ八吋砲巡洋艦ニ対シ無関心ナルカ如キ所見ヲ述ヘラレタルカ右ハ全ク実状ニ反スルモノナリ英国トシテハ深ク研究ヲ加ヘ今日ノ世界ノ実状ニ於テハ是非共五十隻ノ巡洋艦ヲ必要トスルトノ結論ニ達セリ是英国カ豪州、新西蘭、阿弗利加、地中海及北海ニ於テ長キ防禦線ヲ有スル当然ノ結果ナリ由来巡洋艦ニハ八吋砲型及六吋砲型ノ二種アリ八吋砲型ハ戦闘力ニ於テ六吋砲型ニ比シ大差アルコト財部全権ハ充分御承知ノコトト存ス

而シテ英国ハ今日戦争ヲ目標トセス平和的協定ヲ念頭ニ置クカ故ニ八吋型十五隻ヲ以テ満足セムトスルモノナリ従テ六吋型ハ三十五隻ヲ要求スヘシ此ノ見地ヨリスレハ日本カ八吋型ニ於テ勢力大ナルモ六吋型ニ於テ勢力少キヲ以テ日英間ノ釣合上差支ナカルヘシト言ハルル御趣旨ニハ左袒スルヲ得ス日本側ニ於テハ大型ノ一噸モ小型ノ一噸モ同価値ト為シ居ラルルカ如キモ其ノ間ニ差異アルコトヲ認メサルヲ得ス

之ヲ要スルニ日英両国間ニハ尚其ノ立場ヲ異ニスル点アルモ之決シテ解決シ難ク打勝チ難キモノニ非サルコトヲ看取ス今日ノ会談カ大イニ有効ニシテ且事態ヲ鮮明ナラシメタルコトヲ多トスト述ヘタリ

之ニ付テ財部ハ先刻閣下ハ日本ノ申出ノ如ク保有量ヲ定メラルルトキハ日本ハ大イニ勢力拡張ノ結果トナルヘシトノ趣旨ヲ述ヘラレタルカ若槻モ申述ヘタル通日本ノ海軍ハ常ニ国防ノ安固ヲ其ノ骨子トスルモノニシテ其ノ立場ヨリ常ニ補助艦艇ノ補充ニ努メ年々間断ナク之ヲ補ヒ来レリ御承知ノ如ク日本ハ財政上ノ見地ヨリ必要ニ際シ発作的ニ大拡張案ヲ企ツルノ策ニ出ツルコト能ハサル事情ニアリ今日ニ於テハ恰カモ一九三一年迄ノ補助艦補充案ヲ有シ其ノ後ニ対シテハ若シ軍縮ノ協定ナキ場合ニ於テハ更ニ相当ノ補充計画ヲ立テサルヘカラサル立場ニアリ未タ議会ノ協賛ヲ経ルニ至ラサルモ既ニ其ノ準備ヲ整ヘ居ル次第ナリ従テ現ニ製艦計画ヲ有スル米国トハ稍々異ナレル立場ニアリ而シテ米国ハ右計画ニ従ヒ三十一年以後多数ノ軍艦ヲ建造スヘク日本ハ我要求通ノ保有量ヲ有スルコトトナル場合ニ於テモ二隻ノ新艦ヲ建造スルコトニ止マルヘク然ルニ甲ハ之ヲ拡張ニ非ストシ乙ノミヲ拡張ナリト云フハ偶然ノ経緯ヲ前提トシテ立論スルモノト謂ハサルヘカラサルカ如シ此ノ点御諒承ヲ請フ

（「マ」）ハ真ニ米国ハ紙ノ上ニ軍艦ヲ有シ日英ハ水ノ上ニ軍艦ヲ有スル次第ニテ財部全権ノ御説ハ反駁ノ余地ナシ唯一点申上度キハ此ノ会議ニ於テ万一協定ニ達シ得サル場合ニ於テハ英国ハ巡洋艦五十隻ノ主張ヨリ七十隻要求ノ昔ニ帰ラサルヘカラサル立場ニアリ大型巡洋艦ニ付テモ十五隻ヲ以テ満足シ得サルコトトナルヘシ英国ハ現ニ十八隻大型巡洋艦建造計画ヲ有セシモ唯今回ノ会議開催ノ精神ニ基キ現ニ着手セル建造ヲ中止シ居ルハ御承知ノ通ナリト述ヘタリ

若槻ハ今日仔細ニ数字ヲ挙ケテ一応申上ケタルハ日本ノ勢力カ英国ノ勢力ニ近似スルモノニ非サル事ヲ明カニシ置キ度キ趣旨ニ外ナラスシテ之決シテ八吋型カ英国ニ於テ軽視シ居ラルルトノ趣旨ヲ含ミタルモノニ非ス此ノ点ハ明カニ御諒承アラム事ヲ望ム要スルニ日本ハ比率隻数何レカ一方ニ執着スルモノニ非スシテ唯貴説ノ如ク釣合ヲ必要ト考フルモノナリ日本ハ唯其ノ安全感ヲ満サレサル事ヲ懸念シ居

ルモノニ過キスシテ英米ニ対シ劣勢ニ甘ンスルモノナルニ拘ラス何故ニ倫敦会議ニ於テ此ノ穏カナル主張カ承認セラレサルヤ之国民ノ諒解シ得サル処ナルヘシ此ノ点ニ関スル我カ国民ノ焦慮ハ充分御諒解アラム事ヲ切望スト述ヘタリ

「マクドナルド」ハ貴見ハ明カニ之ヲ諒得セリ双方ノ立場カ明瞭トナリタルハ誠ニ喜フ処ナリ尚此ノ上トモ双方ニ於テ他方ノ主張ニ対シ考慮ヲ廻ラシ諒解ノ進マン事ヲ切望ス繰返シテ申上クヘキ八吋型ハ六吋型ト全ク其ノ性質ヲ異ニシ一噸ノ価値モ自ラ同シカラサル事ヲ力説シ度シト述ヘタリ

首相ハ他ニ約アルモノノ如ク度々書記官ヨリ注意アリタルヲ以テ若槻ハ今日ハ御約束ノ時間モ迫リ居ル模様ナレハ此ノ上申上クルコトハ差控フルモ八吋型及六吋型ノ一噸ノ価値ニ関スル貴説ニハ日本側ニ於テモ全然同意見ヲ有スルモノニテサレハコソ八吋型ニ付特ニ重キヲ置キ居ル次第ナリ尚潜水艦主力艦等ニ付テモ時ヲ得テ御話シタシ唯本日ハ我方ニ於テ最重キヲ置ク点ニ付貴意ヲ得タル次第ナリト述ヘタリ

「マ」ハ本日ノ会談ハ甚タ有益ナリシカ尚進テ会談ノ機ヲ得タシト述ヘタルニ付

松平ハ「チエカース」ニ於テハ婦人モオ招キニ与リ居ルニ付其ノ機会ナカルヘキカト存スルモ如何ニヤト問ヒタルニ「マ」ハ同日ハ全ク社交的ノ心持ナレハ別ノ機会ヲ選ヒタク右ハ成ルヘク取急ク方然ルヘシト答ヘ結局明十日午前十時半ヨリ正（午）迄会談スルコトトナレリ

尚右会談中日本ノ具体案ニ付予テ英国側ノ開示セル難点ニ対シ数字ヲ挙ケテ反駁シタル部分ハ予メ心覚エノ書付ヲ作成シ置キタルヲ以テ之ヲ首相ニ手交シ置キタリ

（右書付郵送ス）

米、仏、白ヘ転電セリ

277

昭和5年1月10日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

我が全権と英国当局との会談中に仏国覚書言及の場合の応酬方について

ロンドン　1月10日後発
本　省　1月11日前着

第一七号

我カ全権ト英当局トノ会談中仏国覚書ニ言及セラルヘキ場合ニ於テハ大要左ノ如ク適宜応酬スルコトトシタリ何等御

参考迄ニ電報ス委細郵報

一、規約ハ勿論不戦条約ト共ニ軍縮ノ基礎ヲ為スヘキモノナルモ国ノ安全ヲ考量スルニ於テハ比率ハ却テ（脱）的ナル制限方式ヲ得ルニ便ナル事アルヘシ尤比率方式適用ニ当リテハ之ヲ適当ニ運（用）シ各国要求ヲ出来得ル限リ満足セシムヘシ

二、仏妥協案ハ各類別保有量及類別相互融通ニ関シ適当ナル協定ヲ見ルニ於テハ事実上我方主張ト近似シ英ノ艦種別制限トモ大差ナキニ至ルヘシ

三、三軍関連説ハ一応尤モナルモ海軍軍縮ノミニ付テモ公正且実効的ナル縮小ヲ行ヒ得ト信ス

四、安全保障相互援助等ノ必要ハ諒解シ得ル処ナルモ右ヲ以テ海軍軍縮ノ絶対前提条件トハ思考セス

五、地中海協定カ会議ノ成功ニ資スルモノナルニ於テハ歓迎スヘシ

六、会議ノ決定ヲ更ニ連盟ノ決定又ハ他ノ条件成就ヲ俟テ実施ストナスカ如キ見解ニハ反対ナリ

米、仏、伊及永井全権ニ郵送セリ

278

昭和5年1月11日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

比率、大型巡洋艦、主力艦の各問題に関するマクドナルド首相との第二回非公式会談について

付　記　一月十三日斎藤軍縮会議全権随員より堀田欧米局長宛
マクドナルド英国首相との第二回非公式会談の際の内情について

ロンドン　1月11日前発
本　省　1月11日後着

第二〇号

十日首相官邸ニ於テ第二回非公式会談開催英国側首相及「クレイギー」日本側三全権

若槻カ昨日ノ主題タリシ比率問題ハ今少シク英国側ノ考慮ヲ待ツコトトシ主力艦及潜水艦問題ニ移ラムカ為口ヲ開カムトスルヲ遮リ「マクドナルド」ハ昨日ノ覚書ニ対シ昨夜深更ニ及ヒ深甚ノ考慮ヲ加ヘタルカ其ノ要点ハ要スルニ日本側ニ於テ国防ノ見地ヨリ米国ニ対スル七割ノ比率ヲ要求セラルルモノト認メラル従テ英国トハ直接関係ナキモノニシテ之ニ対シ英国側ハ比率ヨリモ比率ノ結果ヲ重視スルモ

ノナリト答ヘムト欲ス比率ハ日米間ノ問題ニシテ英国ハ傍観者ノ地位ニ立ツモノト云ハサルヘカラス種々考量ノ結果又関係当局ト話合ノ結果ヲ申上クレハ日本カ七割ノ主張ヲ固持セラルル時ハ米国ノ新聞ハ勿論英国ノ新聞モ亦日本カ比率ノ増加ヲ要求スルモノトシテ一般ニ悪影響ヲ与ヘンコトヲ恐ルルモノナリ余ハ之ヲ非難スルニアラス全ク衷心ヨリ日本ノ友トシテ申述フル次第ナルカ巡洋艦勢力ニ於テ自分カ二十万六千噸ヲ二十二万六千噸ニ増加セントスルハ自ラ輿論ヲ刺戟スルノ虞アルモノト憂慮スル次第ナリ尚右覚書ノ末段ニ於テ大型及小型巡洋艦ヲ併合シテ考慮セサレハ公正ナル結論ニ達スルヲ得ストノ趣旨ヲ述ヘラレタルモ日本カ米国大型巡洋艦ニ対シ七割ヲ要求セラルルコト夫レ自身大型及小型ヲ区別シ大型ニ対シ特別ノ考慮ヲ加ヘラレタルモノニ外ナラサルヘシ尚六吋型及八吋型ノ実際勢力ニ付テ其ノ価値ノ全ク異ルコトヲ充分ニ考慮セラレンコトヲ切望ス日本ノ御主張ヲ徹底セシムル為ニハ右両型ノ間ニ何等カノ尺度ヲ設ケテ比較ヲ採ラサルヘカラス此ノ点ハ財部全権ニ於テ御同感ノコトト存スト言ヘリ

（若槻）ハ我方ノ申出ニ対シ詳シク且親切ニ考慮ヲ加ヘラレタルコトヲ謝ス日本トシテハ決シテ米国海軍ヲ特ニ目当トシテ論スルヲ欲スルモノニアラサルモ八吋型ハ特別任務ヲ有シ従テ日本ノ重キヲ置ク処ニシテ国防上ノ見地ヨリ又国民ノ信念ニ鑑ミ七割ヲ必要トスル結果自然覚書ノ如キ数字ヲ割出スコトトナリタル次第ナリ米国ノ保有量カ低下シテ従テ日本ノ保有量ノ低下センコトハ我カ希望シテ措カサル処ナリ現在覚書ニ計上シタル数字ニテモ英米海軍力ヨリ遙ニ劣勢ナルハ御諒承ヲ仰キタシ

尚大型ヲ併合シテ考ヘントスルニ当リ噸当リノ価値ノ異ルコトニ関シテハ全ク御同感ナリ大型小型ノ融通ニ当リテハ尺度ヲ定ムルコト必要ナルヘシ唯差当リ尺度ノ適当ナルモノナキカ為凡ソノ数字ヲ上ケテ仮ニ日本ノ要求通リ決定スルモ日本ノ勢力ハ決シテ英国ノ勢力ニ接近スルモノニアラサルコトヲ明カニセンカ為書付ニ認メテ貴覧ニ供セルニ過キスト述ヘタリ

尚昨日日本ノ欲スル処ハ縮減ナルニ拘ラス七割ヲ要求スルハ矛盾ノ嫌アリトノ御話アリタルカ此ノ点斎藤ノ通訳洩レトナリ御答ヘセサリシカ日本側ニ於テハ七割ノ釣合ヲ維持スルコトヲ重要ト考フルモノニシテ其ノ維持セラルル限リ

他国カ保有量ヲ低下スレハ従テ我保有量ヲ低下スルニ躊躇セサルモノニテ決シテ矛盾スルモノニアラサルコトヲ御諒承アリタシト付言セリ

（「マクドナルド」）ハ尚一点申上ケタキコトアリ即チ八吋型ハ最モ重要有力ナル艦種ニシテ六吋型ハ第二段ノ地位ニ立ツトシテ英国ハ八吋型ニ於テ十四万八千四百噸ヲ其ノ保有量ト認メ居レルカ日本カ対米七割即チ十二万六千噸ヲ要求セラルトセハ英国ニ対シ八割五分ノ比率ニ立ツコトトナル計算ナリ之ヲ六吋型及駆逐艦ノ噸数小ナル故ヲ以テ釣合ヲ採ラレントスルモ不合理ニ陥ルノ虞アリト述ヘタリ

（若槻）ハ日本ハ英国ニ対シ大型ニ於テ決シテ八割以上ヲ保有セント考フルモノニアラス若シ英米ニシテ右艦種ニ付平等ノ保有量ヲ主張セラルルニ於テハ日本ハ勿論対英七割ヲ以テ満足致スヘシ我方トシテハ国防ノ見地ヨリ米国カ十八隻ヲ保有スル以上之ニ相当ノ比率ヲ維持スルコト必要トスルニ過キスシテ決シテ英国ノ勢力ニ接近センコトヲ希フモノニアラス此ノ点充分御諒解願度シト述ヘタリ

（「マクドナルド」）ハ貴説ハ余ノ充分諒解スル処ナリ唯余ノ苦痛トスル処ハ英国ノ代表者トシテ日本ノ巡洋艦ニ於ケル保有量カ英ノ勢力ニ対シ八割五分ノ高率ニアルコトヲ証明スルニ困難ヲ感スル点ニアリ英国ノ海軍力ハ大西洋又太平洋南太平洋ノ三艦隊ニ分割スルヲ要シ之ヲ一勢力ニ集中スル能ハサル事情ニアリ此ノ点ニ於テモ亦問題ノ紛糾ヲ来ス次第ナリ日本カ其ノ保有量ヲ考量セラルルニ当リ動機ノ純正ナルハ疑フ処ニアラサルモ我方ノ困難ハ之ヲ諒トセラレタシト述ヘタリ

（若槻）ハ之ニ対シ余モ亦同シク苦シキ立場ニアリ若シ我方ニ於テ対英七割ヲ保有スルコトトナラハ米国ニ対シテハ頗ル低率トナリ国防上甚タ不充分ナルヲ以テ已ムヲ得ス対米七割ヲ主張スルモノニシテ決シテ英国ニ迫ラントスルモノニアラス英米協定カ今吾人ノ諒解スル如クナル以上日本代表トシテ已ムヲ得ス其ノ主張ヲ固持スルモノナリト言ヒタルニ

（「マ」）ハ閣下ノ困難ナル地位ハ余ノ充分認識スル処ナリ要スルニ貴我双方共難局ニ立テリ何ントカシテ妥協ノ途ヲ発見スルニ努力スルノ外ナシト存ス就テハ此処ニ一案ヲ記録ニ留メテ貴方ノ充分ナル御考慮ヲ煩ハシタク存ス英国側ニ於テハ此ノ見地ヨリ大型巡洋艦ニ付日英米ノ保有隻数ヲ

十二、十五、十八トナス案ヲ提唱セントス之未タ米ノ承諾ヲ経タルモノニアラス英国ノミノ思案ナルカ此ノ案ニ依レハ日本ノ英国ニ対スル比率ハ隻数ニ於テ八割噸数ニ於テ七割四分ト相成ルヘシ

又右案ニ付テハ重要ナル一方面アリ此ノ点ハ「クリスマス」以前松平全権ニ対シテモ充分申述ヘ置キタルカ当国ノ一般民衆ニ於テハ噸数ヨリモ寧ロ隻数ヲ目安ト考フルコト普通ニシテ日本カ過渡期ニ於テ十四隻ヲ保有セラル時ハ英国隻数ニ対シ九割三分トナリ将来十三隻ニ低下スルトスルモ尚八割七分ノ比率ニ立ツコトトナルヘク之英国輿論ノ諒解ニ苦シム処ナルヘシ

余ハ今最モ友誼的精神ヲ以テ申上クル次第ナルカ吾人ノ担フヘキ責任ハ之ヲ充分ニ知覚セサルヘカラス日本艦隊ハ太平洋ニ於テ防衛ノ任ニ当リ英国ハ世界各地ニ亘リテ防衛ノ任ニ当ラサルヘカラス然ルニ其ノ比率カ九割内外ナリト云フカ如キハ両国ノ世界ニ対スル責任ニ比例シテ全ク懸隔アルモノトノ批評ヲ免レ難シ従テ余カ八割ノ比率ヲ以テ満足セントスルハ特別ノ公平（extraordinarily fair）ヲ示シタルモノニシテ英帝国ノ内外ニ於テ之ニ異論ヲ唱フルモノ鮮カラサルヘキヲ予見スレトモ余ハ之ニ対抗スルノ覚悟ヲ有スルモノナリ

（若槻）ハ結局ニ十三隻過渡期ニ於テ十四隻ヲ保有セントスル日本ノ主張ハ計数上貴説ノ如キ観ヲ呈スヘキモ其ノ勢力ノ実際ヲ見ル時ハ甚タ劣勢ナルコト書付ニ明記シタル通ナリ十二、十五、十八隻案ニ就テ今少シク親切ナル考慮ヲ加ヘヨトノ御趣旨ニ対シテハ貴我双方共難局ニ立ツ関係ヨリ之ヲ研究スルニ吝ナルモノニアラサルモ我主張ハ由来国防論ヨリ出発シ居ルモノナルヲ以テ如何ナル意見ニ帰着スルヤ此処ニ申上ケ兼ヌル次第ナリ尚十二、十五、十八ナル御提案ハ十二万噸、十五万噸、十八万噸ヲ意味セラルルモノカト存スルモ如何ニヤト尋ネタルニ

（「マ」）ハ右ノ提案ハ日米間ニ於ケル現在勢力ヲ目安トシテ考ヘタルモノナリ現今日英ノ有スル八吋砲巡洋艦ハ一万噸型ノミニアラサルモ戦闘力ノ上ヨリ見テ何レモ同列ニ置クヘキモノト考ヘラル

尚申残シタルカ右提案ニ依レハ日米間ノ比率ハ六割六分三分ノ二トナリ従テ貴方ノ要求タル七割トノ差ハ僅ニ三分三分ノ一トナルニ過キスト言ヘルニ

（若槻）ハ右六割六分三分ノ二ナル計数ハ十八万噸十二万噸トシテ計出セラレタル儀ナリヤト尋ネタルニ

（「マ」）ハ余ハ唯隻数ヲ考慮シタルモノナリト答ヘタリ

尚我方ニ於テハ進テ主力艦及潜水艦モ自ラ倫敦会議ニ上程セラルルコトト存スルニ付之ニ対スル英国側ノ御意見ヲ伺ヒ又我方ノ所見ヲ述ヘルノ機会ヲ得レハ幸ナリト述ヘタルニ「マ」ハ之余ニ於テモ希望スル処ナリト答ヘタリ其ノ時「クレーギー」ハ之等ノ点ニ付テハ堀参事官、左近司中将等ニ対シ英国側ノ立場ヲ充分申上ケ置ケリ即チ主力艦ニ付テハ二万五千噸十二吋二十六年ヲ提唱セリ云々ト往電第三号会談ノ内容ヲ略述セリ

（財部）ハ英国政府ニ於テハ主力艦ノ代換開始期ハ之ヲ延期スル御考ナリヤ又ハ条約ノ規定通リ一九三一年ヨリ開始スル御考ナリヤト尋ネタルニ「マ」ハ其ノ点ハ英国ニ於テハ未タ決定シ居ラス会議ノ協定ニ依ルヘキモノト考ヘ居レリト答ヘタリ

（若槻）ハ仮ニ所謂英米仮協定ノ数字ヲ基礎トシテ補助艦ニ関スル決定ニ達シタリトスルモ実ハ国民ノ負担ニ付テ考フレハ日本ハ余リ軽減トナラス米国ハ新ニ建造スルカ故ニ増加トナルヘク英国モ亦余リ軽減トナラサルヘシト想像セラル之ニ反シ主力艦ニ付テ其ノ代換ヲ延期シ艦型ヲ縮小スルカ如キ協定ヲ得ルニ於テハ財政的負担ノ上ヨリ多大ノ軽減ヲ見ルヘシト思考スルモ此ノ点ニ関スル英国ノ所見如何ト尋ネタルニ

（「マ」）ハ主力艦ニ関スル協定ニ依リテ負担ノ大軽減ヲ実施シ得ルコトニ付テハ全ク御同感ナリ主力艦型ニ変更ヲ来サハ一隻ニ付二百万磅ノ節約ヲナシ得ヘク其ノ上艤装及人員ノ上ヨリ見テモ縮減ヲ見ルコトトナルモノト考フ乍併巡洋艦ニ付テモ亦多大ノ軽減ヲ見ルモノト言ハサルヘカラス何トナレハ万一協定ニ達セサルニ於テハ必然ノ結果トシテ高価ナル製艦競争ヲ馴致スヘケレハナリト言ヘリ

（若槻）ハ巡洋艦ニ関スル右御所見ニハ同意ヲ表ス唯主力艦ニ付テ代換延期艦齢延長艦型縮小等ニ関シ意見ノ交換ヲ行ヒ度キモ本日ハ時間ナキニ付次回ニ譲リタシト述ヘ

（「マ」）ハ之ニ同意ヲ表セリ

（財部）ハ散会ニ先立チ一言申上タキコトアリト前提シ八吋砲巡洋艦ニ関スル御提案ニ付テハ若槻ハ之ニ充分慎重ノ考慮ヲ加ヘンコトヲ答ヘタルカ之閣下ノ熱誠ニ感シタルノ

結果ナリト信ス実ハ貴提案ノ如キ数字ハ我方ニ於テ屢々考究ヲ加ヘタル処ニシテ若シ十二隻ノ語カ十二万噸ヲ示スモノナルニ於テモ亦然ラサルニ於テハ尚更我方ハ窮地ニ陥ルコトトナルヘシ乍併御約ノ通貴提案ニ充分ノ研究ヲ加フルコトト致スヘシト述ヘタリ

十三日午後二時半ニ再会スルコトヲ決定シ散会セリ

米、仏、伊、永井全権ニ転電セリ

（付　記）

拝啓益々御清祥奉慶賀候下而小生不相変頑健乍他事御休意被下度候会議関係事務之進行に就ては公電にて委細御承知と存候処一寸御耳に入れ置き度一事有之即ち去る十日「マ」との会見の際若槻全権に於て12―15―18案に対し非常の注意を以て後累を貽さゞる事即ち十二万噸ならば宜布と云ふやうな気配を見せぬことに注意して応酬し居られたる最後に及び財部全権突如開口「十二万噸之意味ならば兎も角然らざれば考量の余地なし」と言明せられたる事件に有之候電報には海軍側之希望を容れ余程文句を緩和しあるも先方には幾分我腹を見られたる虞ありと存じ候財部全権も自ら言過きたりと認め居られ候そして小生に対し自働車之中にて言過ぎはしたれとも実は十二万噸ならば六千噸之差に過ぎずと云ひ居られ失言之弁解と同時に海軍の肚を語り居られ候

若全権は右電文調節に同意を与へられたる後小生等に対し右調節ハ自分の立場を苦しくすること明なるも同僚を窮地に陥るゝことを欲せず又将来海軍を圧へる上に利用し得べしと考へたりと云ひ居られ候唯思想の連絡を考へつゝ応酬したる際横より無考へにチャチャを入れらるゝは閉口なりと云ひ居られ候（海軍側は英全権之態度を多とし居り候）

要之、出発前貴見の如く海軍之肚ハ其辺に有るべく何らか総括的に所期之数字を得て（若しくは之に近き数字を得て）解決に達し得るものに非ずやと感ぜられ松大使若全権も其意味にて努力を進むる御考へに御坐候

右事情為念申上候極秘に大臣、次官に御話し置被下度候

頓首

博　生

一月十三日

堀田兄

坐下

279　昭和5年1月11日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議に対する意見を述べたアレクサンダー―海相の演説要旨について

ロンドン　1月11日後発
本　省　1月12日後着

第二三号

十日「アレキサンダー」海相ハ「シエフイールド」ニ於テ同市選挙区民ニ対シ海軍大臣トシテ海軍省側意見ヲ説明スヘシトテ要旨左ノ如キ演説ヲ為セリ

英帝国ノ国防方針ハ歴代内閣トモ一強国標準ニシテ主力艦ニ付テハ華府会議ニ於テ他ノ最大海軍ノ「パリテイ」ノ形ニ於テ之ヲ現ハシタルカ巡洋艦ニ付テハ同会議後海軍省ハ国防上所要量トシテ七十隻ヲ要求シ寿府会議ニテモ同数ヲ主張シタル処今日ニ於テハ不戦条約ノ締結及良好ナル国際関係ノ新事態ニ鑑ミ一九三六年頃ニ行ハルヘキ次ノ会議迄最小限度トシテ五十隻ニ同意スルノ用意アリ英帝国ハ国際連盟ニ対スル義務ト共ニ内外ニ対シ重大ナル責任ヲ有シ英海軍ハ最近「パレスチン」事件ノ如ク列国平和ノ間ニ於テサヘ世界ノ或ル部分ニ於テ平和維持ノ為予備的有効ナル行動ヲ要スルコト鮮カラス若シ国際協定ニ依リ平和状態今日以上ニ良好トナルヲ得サル場合ニハ海軍省ハ更ニ其ノ立場ヲ変更セサルヲ得ス即チ五十隻ニ減少スルコトハ他国ノ建造計画制限合意ヲ条件トス主力艦代換ノ場合ハ華府条約規定ノ単艦最大限噸数ヨリモ建造及維持ニ一層廉価ナル主力艦ヲ欲ス巡洋艦及駆逐艦ニ付テハ未タ曾テ比率ニ付協定セラレタルコトナシ只米国ニ対シテハ「パリテイ」ニ同意セルモ其ノ「パリテイ」ノ主義ニ包含セラルル総噸数ヲ如何ニ分配スヘキヤ又単艦ノ大キサヲ如何ニスヘキヤニ付テハ何等協定ヲ居ラス駆逐艦縮小ノ程度ハ潜水艦縮小ノ程度如何ニ依リ又潜水艦ハ人道上ノ見地ヨリ之カ全廃ヲ希望スルモ各国ノ態度ニ依リ実現困難ナルニ於テハ之カ制限ヲ希望ス

右ニ対シ「タイムス」ハ海軍大臣ハ単ニ不戦条約ヲ以テ巡洋艦大縮小ノ論拠トスルモ同条約ハ単ニ現状ヲ確保スルモノニ過キスシテ新事態ヲ現出セシメタルモノニ非ス従テ此ノ際斯ノ如キ意見変更ノ理由ト為スニ足ラス若シ不戦条約ヲ以テ軍備ノ基礎観念トセハ巡洋艦ヨリモ戦争ヲ目的トスル戦闘艦ニ関スル政府ノ態度ヲ一層明示スルノ要アリト論

シ「テレグラフ」ハ海相ノ声明ハ国民ノ不安ヲ一掃スルニ至ラス国民ハ政府カ無謀ナル妥協ヲ為スコトナキヤヲ虞ルト論セリ

米ニ転電シ仏、伊、海牙ヘ郵送ス

280 昭和5年1月13日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

会議において討議さるべき問題に関する仏国政府覚書に対する英国政府覚書内報について

ロンドン　1月13日前発
本　省　1月13日後着

第一八号

仏発貴大臣宛電報客年第四四六号ニ関シ

客年十二月二十日付仏覚書ニ関シ英国政府ハ一月十日付ヲ以テ大要左ノ趣旨ノ覚書ヲ仏国大使ヘ交付シタル趣ヲ以テ帝国政府ヘ伝達方外務次官ヨリ本使宛書翰ヲ以テ依頼越シタリ

尚右覚書ハ公表迄茲数日機密扱トセラレ度キ旨付言シアリタリ（原文）郵送ス

一、英国政府ハ倫敦会議ノ招請状ヲ発スルニ当リ各国政府ニ於テ会議開催前ヨリ自己ノ主張ヲ固持シテ一歩モ譲ラサルカ如キ態度ニ出ツルハ会議ノ成功ヲ齎ス所以ニ非スト思考スルト共ニ連盟規約ヨリ生スル義務又ハ国ノ安全ト謂フカ如キ軍縮ノ前提タル対外的又ハ対内的ノ自明ノ義務ニ再ヒ言及スルノ要ナシト認メ専ラ当面ノ重大問題ニ注意ヲ集中セリ

二、現存平和的処理条約重視確保ノ為ニスル制裁機関ハ未タ完備セスト雖連盟規約太平洋四国条約「ロカルノ」条約国際司法裁判所規程選択条項ノ受諾及就中不戦条約ノ成立ニ依リ各国ノ安全カ著々保障セラレツツアル此ノ機会ニ於テ海軍軍縮ニ著手セサレハ各国民ハ失望シテ必スヤ再ヒ軍備拡張ニ趨ルヘシ

三、仏国政府ハ不戦条約ト連盟規約ノ区別ヲ試ミラレタル処右二者ハ互ニ補足シ合フモノタルヘク従テ連盟国タル右条約締約国ハ前者ハ後者ノ未完了ノ儘ニ存シタル平和組織ヲ完成シタルモノト認ムヘキナリ英国政府カ何等留保ナク規約ノ規程ヲ容諾セルハ勿論ノ義ナルモ之ニ依リ軍縮ノ遅延ヲ来スヘキニ非ストスルヲ以テ不戦条約ノ本旨ニ適フモノト信ス

四、仏国政府ハ英国政府カ其ノ海軍力ニ著シキ縮減ヲ講シ得サルハ恐ラク不戦条約カ其ノ決定的適用ヲ欠ク為ナラント云ハルルモ右ハ誤解ニシテ英国提案ハ各艦種ニ付自国ノ所要兵力ノ著シキ縮減ヲ包含シ居ルモノナルコトヲ指摘セントス

五、仏国政府ハ総噸数制限主義ヲ説カルルモ英国政府ハ一切ノ艦艇ノ艦型噸数及備砲ニ依ル制限ヲ以テ競争及不安除去ノ最良方法トシテ支持シ来レリ然レ共仏妥協案（全権発往電第二四号参照）ニ付テハ慎重考究ヲ加ヘタルト共ニ右ヲ基礎トスル何等カノ協定妥結ノ可否ニ付審議ヲ為スニ吝カナラサルヘシ

六、英国政府ハ三軍間ニ全ク関連ナシトスルモノニハアラサルモ亦三者同時ノ処理ヲ要スルモノトハ思考シ居ラス却テ今次会議ノ採ルカ如キ方法ニ依リ所期ノ目的ノ達成延テハ準備委員会ノ企図スル一般的軍縮会議ノ任務ヲ容易ナラシムト信ス

七、自国ノ地理的地位ニ充分ナル考量ヲ払ヒツツモ而モ尚仏国政府カ英国政府同様所要兵力ノ査定ニ依リ従来ト均シク極メテ控ヘ目ナラントスルハ英国ノ深ク満足トスル処ナリ

八、仏覚書ハ地中海関係国間ニ相互保障及非侵略協定締結ノ望マシキ旨ヲ記セルモ右ハ太平洋ニ関スル四国条約以上ニ出ツルモノニシテ同条約所載ノ共同覚書ノ如キ便宜ハ右関係国全部カ連盟国ナルヲ以テ既存ノ所ナリト言フヘシ尤モ本問題ニ付関係国ト喜テ意見交換ヲ行フヘシ之ヲ要スルニ英国政府ハ仏国政府ニ於テ同政府覚書所載事項中何等排除シ難キ障碍ナキ旨ヲ述ヘラレタルヲ大イニ欣幸トシ且各国代表ノ友誼的協力ニ依リ会議カ有終ノ美ヲ為サンコトヲ仏国政府ト共ニ確信スルモノナリ

米、仏ヘ転電シ、伊、連盟次長ヘ暗送セリ

281 昭和5年1月14日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

巡洋艦比率、主力艦及び航空母艦艦型縮小などに関するマクドナルド首相との第三回会談について

ロンドン　1月14日前発
本　省　1月14日後着

第二六号

一月十三日首相官邸ニ於テ第三回会見英国側首相「クレイギー」日本側三全権

「マ」カ本日ハ潜水艦問題ヲ考慮スル筈ナリト存スト云ヘルヲ遮リ

「若槻」ハ前回十八、十五、十二、ノ私案御提示ニ預リタルカ之ニ付テハ充分考慮ヲ加ヘ又専門家ニモ相談シタルカ御私案ノ通リニテハ日本カ重キヲ置ク大型巡洋艦ニ付最強海軍国トノ間ニ釣合ヲ得サルコトトナルハ皆意見ヲ同シウスル処ニシテ余ハ是ニ賛意ヲ表スルヲ困難トス今ヤ倫敦会議開催期ノ切迫ニ従ヒ日本国民ハ其ノ焦慮ヲ加ヘ新聞紙モ七割ノ必要ヲ強調シ居レリ余ハ必スシモ七割ヲ表面ニ現ハサンコトヲ欲スルモノニアラス隻数又ハ噸数ニ依リテ協定スルモ可ナリト思考スルト雖唯釣合ノ維持ハ之ヲ必要トセサルヲ得ス釣合宜シカラスンハ国論ノ容認ヲ得難ク余ハ国論ヲ無視シテ意見ヲ定ムル立場ニアラス此ノ点充分御同情願ヒタシ次ニ主力艦ノ艦型縮小及ヒ艦齢延長ニ関シテハ日英間意見ノ近似セルハ余ノ満足トスル処ナリ又備砲口径ノ縮小ニ付テモ主義上意見一致セルヲ喜フ唯英国案ノ如ク之ヲ十二吋トナスハ余リニ急激ニシテ左袒シ能ハサル処ナリ現今存在スル十六吋ト十二吋トノ中間ニ適当ノ制限ヲ求ムルコト然ルヘシ尚代換ニ付テモ英国ハ延期ノ御意見ト存スル処之亦負担軽減及世界平和増進ノ見地ヨリ我ノ歓迎スル所ナリ而シテ日本ハ五年位ノ延期ヲ可然ト考ヘ居レルカ其ノ点ニ付御意見ヲ伺ヒタシト述ヘタルニ

「マ」ハ閣下ノ国論ニ対スル立場ニ付テハ御同情スル所ナリ我ニ於テモ国論ハ最重要視セサルヘカラサル所ナルモ場合ニ依リテハ之ト戦ハサルヘカラサルヲ覚悟シ居ルハ先日モ申上ケタル通ナリ若シ巡洋艦ノ点ニ付互譲ヲ以テ協定ニ達スルヲ得ハ予ノ喜ヒ之ニ如カサルヘシ此ノ問題ニ付テ我カ陥レル大ナル「ヂレンマ」ハ日本ハ米国ヲ目標トシテ其ノ海軍力ヲ定メムトシ居ラルルモ英国トシテハ其ノ結果ニ付無関心ナル能ハス予ノ考ニテハ米ノ十八ヲ基準トシテ日本ノ十二ヲ考フレハ其ノ保有スヘキ量ハ日本ノ要求セラルル比率ニ比シ僅ニ三分三分ノ一ノ差アルニ過キス英国トシテハ日本ノ保有量カ其ノ八割ニ達スルヲ苦痛トスルモノナリ之英帝国輿論ノ許ササル所ニシテ英国政府ノ承認シ能ハサル所ナリ

主力艦ニ付テハ予ハ最近之ニ深甚ノ考慮ヲ加ヘタルカ個人

ノ思付トシテ其ノ隻数ヲ減スルノ案ニ対スル賛否ヲ閣下ニ質問セムトス未タ英国政府又ハ英国海軍ノ意見ト言フヲ得サルモ若キ士官中ニハ主力艦時代ハ既ニ去レリ主力艦ハ飛行機及潜水艦ノ脅威ヲ受ケ軍略上ヨリ見テ其ノ価値ヲ失ヒ之ニ莫大ノ費用ヲ投スルコト無用ナリ之ニ加フルニ飛行機ノ発達著シク一万七千尺ノ高空ヲ飛ヒ急下シテ爆弾ヲ投下シ「ドツク」ヲ破壊セントス従テ主力艦カ海軍力ノ中核ヲナシタルハ既ニ過去ニ属ストノ意見ヲ抱懐スルモノ多シ余ハ今回ノ会議ニ於テ主力艦ノ全廃ヲ提議セントスルモノニ非サルモ仮ニ英国ノ保有隻数ヨリ五隻ヲ減シタル場合日本ハ其ノ比率ヲ保チテ之ヲ低下セラルヘキヤ其ノ点ニ関スル日本ノ所見ヲ聞カンコトヲ欲ス

艦型縮小及艦齢延長ニ付テハ日英間大体意見一致セリト思考ス尚代換ニ付テハ英国ハ相当ノ延期ニ賛意ヲ表スルモノナリ唯日米何レモ英国ヨリモ新艦ヲ保有セラルル関係ヨリ延期長キニ過クル時ハ英国ハ不利益ノ地位ニ立ツヲ以テ同意ヲ難セサルヘカラス

更ニ備砲口径ニ付テハ艦型ト密接ノ関係アリ二万五千噸ノ戦艦ニハ十二吋以上ヲ搭載スルコト能ハス日本ノ御主張ト聞キ及ヘル十四吋ナラハ三万噸ヲ必要トスヘク夫ニテハ現在ノ制限タル三万五千噸ニ比シ縮減量少キヲ憾トス此等ノ点ニ付テハ自分ハ専門的知識無ク唯海軍省ノ意見ヲ取リ次キ居ルモノナリト述ヘタリ

（若槻）ハ余モ主力艦ノ縮小ハ熱心ニ支持スル処ナルモ隻数ノ縮小ニハ遺憾乍ラ賛成スルヲ得ス余ハ今最露骨ニ腹蔵無ク自分一己ノ意見ヲ申上ケントスルモノナルカ華府ニ於ケル五五三ノ比率カ日本国民ニ不安ノ念ヲ与ヘタルハ事実ニシテ数量カ大ナル場合ニ於テハ尚防禦ノ見込無キニ非サルモ其ノ隻数下ルニ於テハ実力ノ比較トレス危険ヲ感スルニ至ルヘク従テ隻数ノ縮小ハ国論ノ一致シテ否認スル処ナリ

備砲口径ニ付テハ日本側専門家ハ十四吋砲カ二万五千噸型ニ搭載シ得ル事ヲ認メ居レリ余ハ専門家ニ非サレハ此ノ点ニ深入スル事能ハサルニ付今申述ヘタルヨリ以上ノ事ハ日英双方ノ専門家間ニ充分自由ニ意思ノ交換ヲ為サシムル事ト致度シ尚英国ノ戦艦カ古ク日米ノ戦艦カ新シキ事ニ付御話アリタルカ日本ノ関スル限リ英国ニ比シ夫程新シカラスト記憶シ居ル処之亦専門家ノ研究ニ委ネ度シ

其ノ時「マ」及財部及「ク」ノ間ニ英国ハ日本ヨリ五年位古キ船ヲ保有シ居ル事及「ロドニー」「ネルソン」ハ最新式ナル旨ノ雑談アリタリ

「若槻」ハ次イテ航空母艦ニ付テハ英国ノ意見モ其ノ制限ノ低下ニ在リト承知スル所日本モ主義ニ於テ同意ナリ先日「ク」氏ト左近司トノ会談ニ依レハ英国案ト日本案トノ間ニハ相当距離アリ日本ハ略一万六七千噸位ニ低下シ然ルヘシト考ヘ居ルモ英国側ノ御意見如何尚今日ハ一万噸以下ノ母艦ニ付テハ制限ナキモ補助艦ニ制限ヲ加ル以上此ノ点モ問題トセサル可ラス我案トシテハ之ヲモ併セテ華盛頓条約ノ制限量内ニ組入ルル事ト致シタシ然ラスンハ飛行機ノ益益発達セントスル機運ニ鑑ミ母艦モ飛行機ト併セテ建造競争ノ目的物トナルカ如キ事アラハ誠ニ遺憾ノ至リナリ

「マ」ハ大体御趣旨ニハ賛成ナリ尚（「ク」ト話合ヒノ上）母艦ニ関スル英国案ハ単艦、噸数二万五千噸英国保有量十二万五千噸ナリ貴説ノ如ク一万噸以下ノ母艦ヲ此ノ噸数ニ組入ルル事或ハ然ルヘキカト存ス（此ノ点意味明瞭ナラサリシヲ以テ後述ノ通念ヲ押シタリ尚「マ」ハ更ニ「ク」ト談合ノ後）日本ハ一万六七千噸迄艦型ノ縮小ヲ提唱セラル所英国ハ二万二千噸型四隻ヲ有ス日本ノ提議ハ代換後ノ話ナリヤ又艦齢ハ二十六年トシタキ希望ナルカ日本側ハ如何ト尋ネタリ

「若槻」ハ日本側ニモ亦二万二千噸型母艦二隻アリト記憶ス之カ縮小ハ将来代換ノ際ヲ意味スルモノニシテ一応意見ヲ申述ヘタル次第ナルカ此ノ点ハ専門家ノ会談ニ委ネタシ又艦齢ニ付テハ大体英国ニ賛成ナリト云ヘリ

「マ」ハ之等ノ点ハ専門家ニ委ヌルコト然ルヘシト答ヘ尚（若槻）カ念ヲ押シタルモ英国側ハ必スシモ一万噸以下ノ母艦ヲ日本ト同シ意味ニテ母艦総保有量ニ組入ルルモノナリヤ否ヤニ付回答依然不明瞭ナリシカ「ク」ト雑談ノ形ニテ英国海軍ハ将来母艦代換ノ際ハ一万噸以下ヲ作ラサル一応ノ意向ナルコトヲ申述ヘタリ

「マ」ハ巡洋艦ノ問題ヲ離ルルニ先立チ日本全権ニ於テ明確ニ日英双方ノ立場ヲ諒解セラレンコトヲ希望ス貴方ニテハ一国ヲ目標トシテ七割ヲ主張セラルルモ右ハ英国ヨリ見レハ十割トモ九割トモナル場合アルヘキニアラスヤ又若シ英国トシテハ日本ト協定ヲ遂ケントセハ勢ヒ自国ノ持分ヲ増加セサルヘカラス其ノ際ハ米国ニ於テ更ニ高率ヲ要求ス

ヘク斯ノ如クシテ三竦ミノ態トナルハ真ニ不幸ナル関係ニアリト言ハサルヘカラスト述ヘタリ

「若槻」ハ之ニ対シ前回会見ノ際ニモ其ノ御話ヲ承リタルカ真ニ難儀ノ問題ト言ハサルヘカラス英米間「パリテイ」認メラルルニ拘ラス我方ニ於テ其ノ一方ニ対シ所要比率ヲ得ントスレハ他方ニ難アリ斯クシテ解決ニ達シ難キハ大イニ遺憾トスル処ナリト言ヘルニ

「マ」ハ之ニ対シ之全ク mathematical inability ニシテ単ナル外交問題ニアラス真ニ困却ノ至ナリト述ヘタリ

「マ」ハ駆逐艦ニ付テハ日英間相当意見ノ一致ヲ見居レリト諒解ス英国ニテハ駆逐艦ハ其ノ保有量ノ一割六分カ嚮導駆逐艦タルヘク又其ノ噸数ハ潜水艦ノ保有量ニ鑑ミテ定メラルヘキモノト考ヘ居レルカ艦型ハ嚮導駆逐艦ノ最大噸数千八百五十噸駆逐艦ノ最大噸数千五百噸タルヘク艦齢十六年砲五吋ノ制限ヲ提唱セントス

「ク」ハ寿府案ト同様ナリト付言セリ

「若槻」ハ駆逐艦ニ関スル唯今ノ英国案ニハ全然一致ナリト言フ事ヲ得サルモ或ル制限ニ付テハ賛成スル処ナリ之等ハ又専門家間ノ談合ニ譲リタシ交渉ノ重キヲ置クハ其ノ総噸数ニシテ補助艦全体ノ数量中駆逐艦カ如何ナル立場ニ立ツカヲ考ヘサルヘカラス英米間ニ於テハ十五万噸乃至二十万噸ニ協定セラレタルカ如ク承知シ居ルモ日本ハ其ノ最低数量ニ決定サレン事ヲ希望スルモノナリト述ヘタリ

「マ」ハ同感ナリ寿府ニ於テハ二十万噸ナリシカト思考スト言ヘルニ

「財部」ハ日英間仮協定ニ依レハ英国ノ保有量ハ巡洋艦駆逐艦ヲ併セテ五十万噸ナリシト記憶スト言ヘリ

「若槻」ハ潜水艦ニ付テハ日本ハ遺憾乍ラ英国ト見解ヲ異ニセサルヲ得ス日本ハ初メヨリ其ノ海軍力ニ於テ劣勢ニ甘ンスルモノナルヲ以テ防禦的武器タル潜水艦ハ之ヲ保存スル必要ヲ感スルモノナリ日本ハ其ノ地理上ノ存在熱帯寒帯ニ亘ル地勢ニ鑑ミ相当ノ潜水艦勢力ヲ要シ其ノ現有勢力七万八千五百噸ヲ要求セント欲ス専門家ハ之ヲ不充分トナスモ軍縮会議モ開カレントスル今日右ヲ以テ満足セントスルモノナリ但シ右勢力カ他国ノ勢力ニ対シ七割トナルモ平等トナルモ之ヲ問ハス七割以上ニ相当スル場合ニハ小巡洋艦駆逐艦ニ於テ之ヲ調節スルノ用意アルモノナリ此ノ点御諒承ヲ請フト述ヘタリ

「マ」ハ潜水艦廃止ニ付テハ意見一致セスト云ハサルヘカラサルカ如シ乍併此ノ点ニ於ケル意見ノ相違ハ誤解又ハ悪感情ヲ招来スルモノニアラサル事ヲ信ス由来潜水艦ノ用途ハ国柄ニ依ルモノニシテ欧州ノ西方及南方ニ於テハ防禦ノ具ニ非スシテ攻撃ノ具タリ我廃止ヲ提唱スルモ此ノ見地ヨリスルモノナリ但シ日本カ其ノ廃止ニ反対ナル事ハ良ク諒解セリ

英国側トシテハ其ノ所要総噸数ニ付今数字ヲ示ササルヘシ唯単艦最大噸数ヲ千八百噸ト致シ度シ

尚一点申述ヘタキハ日本ハ寿府会議当時ヨリ六万噸ヲ要求セラレタルニ比シ約二万噸ヲ増加スルハ如何ナル理由ニ依ルヤト尋ネタルニ対シ

「若槻」ハ潜水艦ノ制限ニ付テハ主義ニ於テ賛成ナリ尚僅ノ数字ナルカ日本ハ単艦最大噸数ヲ二千噸トセンコトヲ希望スルモノナリ尚寿府ニ於テ提出セル六万噸ナル数字ハ当時仮ニ私案トシテ提出シタルモノニシテ何国ノ容ルル処トモナラサリシモノナリ情勢ノ変化セル今日援用スヘキモノニ非ス而シテ同会議ニ於テハ日本ハ現有勢力トシテ七万二千噸ヲ要求セリ今日七万八千五百噸ト言フハ実ハ右数字ノ異ルモノニ非ス七百噸以下ノ制限外ノ分ヲ繰入レテ計算シタルモノナリト説明セリ

「マ」ハ引続キ次ノ会見ヲナスヘキヤ或ハ寧ロ両三日熟慮ヲ加ヘタル上再会スヘキヤト提議シタルニ対シ

「若槻」ハ今日迄ニテ我方ノ立場ハ一通リ申上ケタルニ付両三日ヲ経テ英国側ノ御意見ヲ伺フ事ト致シタシト答ヘタリ

「マ」ハ潜水艦駆逐艦主力艦等ニ関スル点ハ協定ノ見込アリト考フ唯難点ハ巡洋艦ニ在リト述ヘ

「若槻」ハ余モ同様ニ思考ス要スルニ釣合ノ問題カ要点ニシテ且難問タル次第ナリ本日本件ニ関シ述ヘタル我方ノ立場ハ充分考量ヲ廻ラシタル上御答ヘシタルモノナルカ尚貴方ノ深甚ナル御考慮ヲ煩ハシ度シト言ヘリ

「マ」ハ明日ヨリ閣議モ開カルル筈ナレハ両三日余裕ヲ取リタル後再会致スヘシト述ヘ会見ヲ了セリ尚右会談中言及セラレタル専門家会議ニ付テハ追テ時日ヲ定ムルコトトシテ散会セリ

米、仏、伊、永井全権ニ転電セリ

282

昭和5年1月14日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議討議問題に関する仏国専門家の研究結果を仏国大使より通報について

ロンドン　1月14日後発
本　省　1月15日前着

第三一号

予テ来意ヲ通シ居リタル仏国大使十四日午前若槻ヲ来訪シ会議「プログラム」ニ関シ仏国専門家ノ研究ノ結果通報ノ目的ヲ以テ英首相ニ面会方申入レ置キタル処昨日漸ク其ノ機会ヲ得タルヲ以テ貴全権ヘモ右内容申上ケタク参上セリト前提シ大要左ノ如ク語レリ

一、今次会議ニ基ク協定ハ其ノ実施期間長期ニ亘ルニ於テハ之ニ充分ナル弾力性ヲ与フルヲ要スヘキ処自分（大使）一己トシテハ実施期間ヲ四ケ年ト致度キ考ナリト説明セルニ対シ「マ」ハ同意ヲ表シタリ

二、仏国側トシテハ艦種間融通問題ヲ最重視スルモノニシテ仏主張ノ如ク上下双方ヨリノ融通ヲ認ムルト英主張ノ如ク上ヨリ下ヘノ融通ノミヲ認ムルトニ依リ割当総噸数ニ大ナル影響ヲ及ホスヘシト詳細説明セル処「マ」ハ孰レニセヨ融通率ハ十五「パーセント」以下ヲ適当トスヘシト述ヘ居タリ

三、華府条約ハ平時補助巡洋艦ニ付六吋以下ノ備砲搭載ノ為ニスル補強設備ヲ認メ居ル処右ハ平時ハ艦隊（Flotte de guerre）ノ一部ヲ為ササルモ戦時之ニ編入セラルル船舶カ戦時ニ六吋ヲ越ユル備砲ヲ有スルヲ不法（illicite）トスル次第ナリヤト問ヒタル処「マ」ハ黙シテ答ヘサリキ

四、仏国側ハ主力艦単艦噸数ヲ半減（一万七千五百噸）シ其ノ備砲ヲ十二吋ニ引下ケ得ルモノト思考シ居レリ又主力艦艦齢延長ニ異議ナキモ華府条約ニ基ク主力艦起工ノ権利ハ保留セムト述ヘタルニ対シ「マ」ハ右ノ如キ（主力）艦ニ十二吋砲ヲ搭載シ得ルモノナリヤト反問シ居タリ

五、潜水艦単艦最大噸数ヲ千五百噸見当（aux environ de 1500）トスルニ異議ナキモ殖民地用トシテ少数ノ三千噸級ノモノヲ所有シタシ

右終リテ大使ハ英首相トノ会談後印象如何ニヤト問ヘルヲ以テ若槻ハ主要点ニ付テハ必スシモ英国側ト意見ヲ同ジウセサルモ好印象ヲ得居レリト答ヘタリ次テ大使ハ仏覚書所載ノ如キ原則問題ハ会議ニ於テ取扱フニハ適セサルヘク自

分トシテハ具体的結果ヲ得タル後之ヲ右原則ニ適合セシムヘキ方法ヲ考究スルヲ可ト信シ居レリ又予備的交渉ヨリハ寧ロ解決ヲ会議開催後ニ俟ツヲ得策ト思考スルモノニシテ現ニ仏伊予備交渉ハ全ク行悩ノ状態ニアリ尤モ一度会議開カルレハ右モ好転スヘシト言ヘルニ対シ若槻ハ前段ニ関シテハ全ク貴大使ト同感ナリ唯日英間ニハ三国会議以来ノ関係モアリ旁会議前ニ意見交換ヲ為シ置クヲ適当ト認メタル次第ナルモ唯今ノ処何等決定的結果ヲ得タルニハアラスト答ヘ転シテ同大使今日ノ報道ニ謝意ヲ表シタル後日仏間ニハ主要問題ニ付意見ヲ同ジウスル所モ有之ルト存セラルルニ付今後トモ自分ナリ又ハ松平大使ニ於テ適宜仏国側ト意見ノ交換ヲ行フコトト致度シト述ヘタル処大使ハ我方ノ好意ヲ謝シ前顕所言ヲ記載セル書類（一月三日付）及曩ニ仏国側ヨリ全権事務所ヘ送付越セル仏妥協案ヲ手交シ辞去シタリ尚同大使ハ去ルニ臨ミ自分ハ之ヨリ西班牙大使ヲ往訪スル所存ナルカ西班牙ハ今次会議参加ニ焦慮シ居ルカ如シト笑ヒ居タリ右書類郵送ス

米、仏、伊、永井全権ニ転電シ仏ヲシテ連盟ニ転報セシム

283　昭和5年1月14日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

備砲口径を以て艦艇類別の基礎とする提案に関する仏国大使交付書類について

ロンドン　1月14日後発
本　省　1月15日前着

第三二号

往電第三一号ニ関シ

若槻全権トノ会談中仏国大使ハ特ニ言及スル所ナカリシモ其ノ辞去ニ際シ当方ニ交付シタル書類中第三項トシテ左ノ事項アリタルニ付為念電報ス

「仏提案ハ備砲口径ヲ以テ水上艦艇類別（classification）ノ基礎ト為シ居ル処各類別ヲ決定セムカ為ニスル特性ノ選定如何ニ依リテハ各種別中ニ包含スヘキ噸数ハ同一ナラサルヘシ依テ右類別ノ各々ニ付正確ナル噸数ヲ指示シ得ル為ニハ予メ各類別ノ特性ヲ決定シ置クノ要アリ」

前電ノ通転電セリ

284　昭和5年1月14日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

対米及び対英交渉に関する意見稟申について

ロンドン　1月14日後発
本　省　1月15日後着

第三三号（極秘）

米国ヲ通過シ大統領及国務長官ト懇談ヲ重ネ更ニ当地ニ来リ外相及海相ト会見シタル上三回ニ亘リ「マ」首相ト意見ヲ交換シタル結果余等ノ得タル感想御参考迄左ニ電報ス

米英共ニ日本ト協力シテ今回ノ会議ノ成功ヲ期シタキ希望ハ言語気色ノ上ニ充分之ヲ看取スルコトヲ得然レ共日本ノ七割要求特ニ大型巡洋艦ニ於ケル七割要求ニ関シテハ米国ニ於テハ主力艦ニ於テ六割ヲ承認シタル日本カ補助艦ニ於テ七割ヲ要求スルハ必要以上ノ要求ナリト為シ居リ若シ当局之ニ同意セハ米国民ハ政府カ日本ニ屈服シタルモノト為シ大反対ヲ為スヘク上院ノ批准ヲ得ルコト出来スト見居ルモノノ如ク又英国ニ於テハ米国大巡洋艦ノ七割ハ英国大巡洋艦ノ八割以上トナリ日本ノ勢力余リニ英国ノ勢力ニ近接スルカ故ニ国内輿論ノ反対ヲ受ケ政府ハ之ヲ押切ル能ハスト為スモノノ如ク結果米英共ニ日本ノ要求ヲ其ノ儘承認セス何等カノ形ニ於テ日本ヲ説得シ適当ノ所ニ落着カシメムト期シ頗ル苦心シ居ルモノノ如シ米英共ニ比率ナル文字ヲ避ケムコトヲ我ニ勧告シタルハ其ノ意自ラ知ルヘシ而シテ談大型巡洋艦保有量ニ及フ時ハ常ニ其ノ国民ノ諒解難シキコトヲ述ヘ我反省ヲ求ムルコト英米殆ト其ノ軌ヲ一ニス此ノ点ニ関シテハ英米ノ間ニ何等カ申合アルニ非スヤト思ハル

察スルニ彼等ハ到底予備交渉ニ於テ意見ノ纏ル見込ナシト見越シ適当ノ時期ニ至リ真剣ノ談判ヲ為サント決心シ予備交渉ニ於テハ不即不離ノ態度ヲ採リ居ル筋合モアラン故ニ此ノ際双方ノ意見ヲ極端ニ戦ハシ一刀両断的ニ左右何レカニ決セントセハ結局喧嘩別レスルノ覚悟ヲ要スヘシ

今ニ於テ直ニ此ノ覚悟ヲ以テ遮二無二押シ進ムカ如キハ時期尚早ト認ム然ラハ問題ヲ後日ニ延ハストシテ其ノ結果如何ト顧ルニ必スシモ日本ノ立場ヲ有利ニスルモノトハ思ハレサルモ形勢ヲ観察シツツアル間ニ何等カノ変化アルヘケレハ之ヲ利用シ適当ノ方策ヲ考フルコトトシ此ノ際ハ余リ焦セラサルヲ得策ト思考ス加之此ノ際引続キ談判ヲ急ケハ唯同様ノコトヲ繰返スノミニテ衷心ヨリ首肯セシムルニ至ル新論拠ニ乏シ但シ此ノ考察ノ下ニ於テハ予備会議ニ於テ格別ノ成果ヲ得ルコトナク此ノ儘ニテ本会議ニ臨ムコトト

ナルモ已ムヲ得ス今後ト雖形勢ヲ有利トナスカ為ニ下協議等ニモ尚一層ノ努力ヲナスヘキハ勿論ナルモ目下ノ感想一応御参考ニ供シ置クコト無益ニアラスト信ス

米仏伊永井全権ヘ転電セリ

285 昭和5年1月14日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

ロンドン軍縮会議へのイタリアの立場に関するファシスト党報の発表について

ローマ　1月14日後発
本　省　1月15日前着

第八号

十三日付「ファシスト」党報（原名ハ Foglio Dordini del Partito Nazionale Fascista ト称シ党ノ重要布告等ヲ発表スル際ノ形式ニ依ル）ヲ以テ倫敦会議ニ関シ左ノ要旨発表セラル

吾人ハ目睫ノ間ニ迫レル倫敦会議ノ成功ヲ衷心ヨリ冀念スルモノナルカ同時ニ同会議ノ前途ニハ幾多ノ難関横ハルコトヲ知悉セリ其ノ一ハ既ニ華府会議ニ於テ認メラレタル仏伊間ノ「パリテイ」ノ問題ナル処之カ抛棄ハ吾人ノ絶対ニ不可能ナル所ナリ吾人ノ重キヲ置クハ二国ノ「パリテイ」カ如何様ニ定マルヘキカノ点ニアラスシテ「パリテイ」ニ関スル権利カ倫敦会議ニ於テ成立スヘキ協定中ニ維持セラルルコト是ナリ伊国ハ仏国ニ対シテ「パリテイ」ヲ要求スルノミナラス理想論トシテハ最大海軍国ニ対シテモ之ヲ主張スルモノニシテ唯経済的財政的ノ理由ヨリ英国トノ「パリテイ」ヲ主張セサルノミ英国カ島国タルノ故ヲ以テ海軍ノ必要ヲ主張スルニ対シ伊国ハ出口ヲ塞カレタル地中海ニ位置スル半島国タルコトヲ指摘セサルヘカラス又仏国ニトリ地中海問題ハ殖民地兵力輸送安全ノ問題タルニ止マルニ反シ伊国ニトリテハ死活ノ問題ナルコトヲ忘ルヘカラス仏伊間「パリテイ」カ倫敦会議ノ暗礁タルコトアリ得ヘキ処万一ノ場合斯ノ如キ結果ニ立至ルコトアルモ吾人ハ驚クモノニアラス

全権及米ニ転電シ仏白ニ郵送セリ

286 昭和5年1月14日　在英国松平大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議に対するスペイン政府の態度に関する情報について

ロンドン　1月14日後発
本　省　1月15日後着

第二一号

一月十四日西班牙大使来訪シ今回ノ海軍会議ニ対スル西班牙政府ノ態度ニ関シ他ノ関係国政府ニ通報セルニ付直接自分ヨリ日本側ニモ御話シタシトテ西班牙政府ハ今回ノ海軍会議ニ招請セラレタキ希望ヲ有セス仏国政府カ過日英国政府ニ送リタル覚書ニ対シテハ仏国政府ヨリ何等ノ通報ニ接セス新聞ニ発表セラレテ後始メテ承知シタル次第ナリ「ジブラルタル」海峡ノ南岸ハ西班牙ノ領土タルヲ以テ地中海ニ関スル何等カノ協定ニ対シテ西班牙ハ当然協議ニ与ルヘキモノト思考スルモ万一今回ノ海軍会議ニ於テ本問題カ上程セラルル場合始メヨリ他関係国ト同等ノ立場ニ於テ招請セラルルニ於テハ参加ヲ辞セサルモ事後ニ於テ承認ヲ求メラルルコトアルモ断シテ之ニ応スルコト能ハス右ニ対シテハ英仏伊政府ニ対シ同文ノ通牒ヲ発シ尚「ヘンダーソン」ニ面会シテ委細申入レ置キタルカ未タ英国政府ヨリハ回答ニ接セスト述ヘタルニ付本使ハ右通報ヲ謝スルト共ニ右地中海協約ニ対シテハ英国政府ニ於テモ目下ノ処余リ進ミ居ラサル様見ユルカ如何ト述ヘタル処大使ハ然ル様見ユルモ今後仏国カ如何ニ本問題ヲ押シ進ムルヤモ判ラス又当国保守党ノ一部ニ於テハ本問題ヲ以テ政府ヲ圧迫セントスル気配モ見ユルニ付西班牙政府ハ其ノ態度ヲ明カニシタルモノニシテ実ハ斯ノ如キ問題カ何等今回ノ会議ニ上程セラレサレハ真ニ結構ナリト述ヘタリ尚同大使ハ仏国ハ「ユーゴースラビア」ノ為ニ潜水艦ヲ製造シツツアルニ付旁伊国ハ潜水艦廃止ニ賛成ノ態度ヲ仄カシタルモノト思ハルト話シ居リタリ

米、仏、伊、西班牙、永井全権ヘ転電シ連盟ヘ郵報セリ

（別　添）

昭和五年一月十五日在本邦西班牙国公使館覚書

第四号仮訳文

来ルヘキ倫敦会議ノ準備ニ当リ海軍軍備縮少ノミカ問題タリシ間ハ西班牙国政府ハ単ニ傍観者ノ地位ニ止マリ国際連盟ノ準備委員会カ会議ヲ再開スルトキ其意見ヲ開陳スヘキコトヲ留保シ居リタリ然レトモ西班牙国政府カ倫敦会議ニ於テ地中海問題ヲ討議スルコトアリ得ヘキ徴候アルヲ知ルヤ西班牙国ハ地中海ニ関スル如何ナル討議ニモ第一ニ参加スヘキ利益及権利ヲ有スルコトハ争フヘカラサル所ナルヲ

以テ此重要ナル問題ニ最直接ナル利害ヲ有スル仏蘭西国、英国及伊太利国政府ニ対シ西班牙国カ最初ヨリ討議ニ出席スヘキ招請ヲ受ケサル限リ倫敦会議ニ於テ同問題ヲ論議セサルヘキコトヲ直ニ要求セリ

帝国政府ノ地位ハ地中海問題カ直接同政府ニ影響セサルヲ以テ前記各国ノ地位ト異ナルモ西班牙国政府ハ地中海ニ直接利害関係ヲ有スル各国政府ニ対シテ採レル措置ヲ最特殊ナル友情ノ証左トシテ帝国政府ニ通報セント欲ス而シテ西班牙国政府ハ同政府ヲシテ該要求ヲ為スヲ余儀ナクセシメタル最正当ナル理由ヲ帝国政府カ諒解シ且地中海ニ関スル会談ハ海軍軍備縮少問題ヲ論議スル為ニ招請セラレタル会議ニ於テ為サルル場合ト雖モ西班牙国カ之ニ出席スヘキ正当ナル権利ヲ有スルコトヲ承認スヘキヲ疑ハサルモノナリ

287 昭和5年1月15日　在イタリア吉沢臨時代理大使より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議へのイタリアの立場に関する海軍軍令部長の内話について

ローマ　1月15日後発
本　省　1月16日前着

第九号

伊国海軍側委員出発ニ先立チ十五日挨拶ノ為往訪シタル丹羽武官ニ対シ海軍軍令部長ヨリ左ノ要旨ノ内話アリタル趣ナリ御参考迄

一、一昨日「ファシスト」党報ニテ発表セラレタルカ如キ伊国ノ立場ハ全ク明瞭ニシテ一方「ユウゴウスラブ」ヲ控フル関係上仏以上ニ兵力ヲ必要トスルハ勿論ナルモ伊トシテハ先ツ仏ニ対シ「パリテイ」ノ主義ヲ求メルモノニシテ誰ニモ首肯出来得ルコトナリ仏ノ植民地云々ノ理由ハ伊国ノ状況トハ異ナリ死活ノ問題ニ非ス又仏ノ独海軍ニ対スル懸念ハ既ニ「ロカルノ」条約ニ依リ英伊ノ協同ヲ得ルコトトナリ居リ之程安心ナルハナシ

二、潜水艦ニ対シテハ伊国トシテハ全ク「ニュートラル」ニシテ地中海海軍国ノ状況ニ依リ決スルコトトナルヘシ

三、地中海ニ於ケル伊西ノ関係ハ非常ニ親密ニシテ何ニテモ諒解シ得ルモ之ヲ以テ仏ニ対抗スルカ如キハ何人モ想像シ得サルコトナリ

四、尚最後ニ主力艦ニ対スル英ノ発表ニ付伊国トシテハ主力艦ニハ興味少キモ英国ハ既成ノ大艦ヲ有スル故ニ勝手

ナル引下ケヲ唱ヘ居ルモノト述ヘタリ

全権、米ニ転電シ仏、蘭ニ暗送セリ

288 昭和5年1月15日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛

海軍軍備制限方式に関する仏国妥協案仮訳送付について

軍縮機密第九号

昭和五年一月十五日

倫敦海軍会議帝国全権（印）

外務大臣男爵　幣原喜重郎殿

海軍軍備制限方式ニ関スル仏国妥協案及訳文送付ノ件

一月九日在英仏国大使館付海軍武官全権事務所ニ佐藤事務総長ヲ来訪シ妥協案（proposition transactionelle）及艦艇表ヲ手交シタリ右妥協案及海軍側作成ニ係ル訳文各一部宛別紙ノ通送付ス

本信写送付先（米）（仏）（伊）（連盟）

（別　紙）

仏国仮提案（昭和五年一月九日在英仏武官佐藤事務総長ヘ手交）

五ー一ー九　三川中佐

海軍艦艇制限ハ次ノ三項ヨリ成ル

㈠制限方法

㈡公表方法

㈢代換ノ規定

一、制限方法

(A)艦艇ノ制限ハ総噸数即チ戦闘用トシテ使用サルベキ艦艇中制限外タルベキモノヲ除外セル全艦艇ノ合計排水量ニ依ルモノトス条約ノ適用期間中各締約国ノ超過シ得ザル最大総噸数ヲ……噸ニ限定スルモノトス

表第㈠ハ各締約国ニ対シ前項ニ規定セル各国共通ノ最大総噸数並各国家安全ノ現状ヲ基礎トシ条約ノ適用期間中各国ガ超過セザルコトヲ約セル総噸数ヲ示スモノトス

(B)条約ノ効力発生後起工サルル艦艇ノ単艦排水量ハ……噸ヲ超過スルコトヲ得ズ

(C)条約ノ効力発生後起工サルル艦艇用ノ砲ハ口径……糎ヲ超過スルコトヲ得ズ

二、公表方法

第一節ニ示ス制限ハ次ニ記載セル公表方法ヲ付帯スルモノトス

(A)表第(一)ハ各締約国ガ自国ニ関シ表第(一)ニ於テ制限セル総噸数ヲ本条約ノ適用期間中按配セントスル艦種別噸数ヲ示ス

右艦種別噸数ハ次ニ記載セル定義ニ該当スル特性ヲ有スル総艦船ノ軍艦排水量ヲ類別毎ニ合計セルモノタルベシ

類別A　単艦ノ排水量一万噸ヲ超過スルカ又ハ備砲口径二〇三粍ヲ超過スル艦艇

類別B　備砲口径一五五粍ヲ超過セル軽艦艇

類別C　備砲口径一五五粍ヲ超過セザル軽艦艇

類別D　潜水艦

類別E　航空母艦

類別F　特殊艦艇(敷設艦、練習艦、航空機輸送艦等)

(B)表第(一)ニ示サレタル総噸数ノ範囲ニ於テ締約国ハ次ニ示セル二条件ノ下ニ前記類別ノ変更ヲナスコトヲ得但シ締約国間ニ於テ一層厳格ナル特別協定ノ締結ヲ為シタル場合ニハ同協定ニ依ルモノトス

(一)表第(二)ニ示セル類別噸数ハ如何ナル場合ト雖……

以上ノ増加ヲナサザルモノトス

(二)類別間融通噸数ハ同融通ニヨリ建造スベキ艦艇ノ龍骨据付前少クモ一年前他ノ締約国ニ通告スルモノトス

(C)各締約国ハ各自国ノ為ノ建造ニ係ル艦艇ノ龍骨据付ノ翌月ニ於テ其ノ艦型並排水量ヲ公表スルモノトス

而シテ右公表ハ同艦艇進水時ニ於テ主要兵装ノ公表ニ依リ完結サルベキモノトス

三、代換規定

(A)亡失ノ場合ノ外次ニ記載セル艦齢ヲ経過スルニ非レバ同一噸数ノ新艦ヲ以テ代換スルコトヲ得ザルモノトス

類別A……年

類別B……年

以下之ニ準ズ

未就役艦艇ト雖建造中ノ艦艇ハ其ノ龍骨据付後次ニ記載セル年数ヲ経過セルモノハ就役セルモノト見做ス

類別A……年

類別B……年

以下之ニ準ズ

(B)保有噸数ヲ表第(一)ニ記載セル総噸数及表第(二)ニ記載セル類別噸数以内ニ維持スル為完成セバ締約国ハ新艦艇就役ノ時期ニ於テ前記制限噸数ヲ超過スベキ旧艦ヲ除籍スベキモノトス

右除籍ハ条約ニ示サルベキ条件ニ依ルベク且之ヲ他ノ締約国ニ通報スベキモノトス

289

昭和5年1月15日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛

軍縮会議に対する専門家の意見書を仏国側より交付について

軍縮機密第一一号　(二月二十四日接受)

昭和五年一月十五日

倫敦海軍会議帝国全権委員(印)

外務大臣男爵　幣原喜重郎殿

仏国側交付書類送付ノ件

一月十四日在英仏国大使若槻全権ヲ来訪会談ノ次第ハ既ニ電報済ミナル処同大使カ辞去間際ニ当方ニ手交シタル書類写四部及右訳文十部別添ノ通送付ス

本信写送付先　在米仏伊各大使及国際連盟帝国事務局

(別　添)

千九百三十年一月三日

海軍会議「プログラム」研究ノ結果仏国専門家ハ其ノ特ニ重要ト認メタル若干数ノ問題ニ付注意ヲ喚起セムトス実ニ右問題各自ニ対スル解決ハ仏代表部カ各類別ニ付仏国所要噸数トシテ指示シ得ヘキ処ニ影響ヲ及ホスヘシ

一、協定セラルヘキ条約ノ実施期間。各国海軍カ殊ニ技術的方面ニ生スルコトアルヘキ進歩ヲ参酌シ得ル為ニハ実施期間ノ長キニ応シ条約ニ弾力性ヲ与フルノ要アルヘシ

二、制限方式。千九百二十九年十二月二十日付仏国覚書ハ吾人カ今以テ総噸数ニ依ル制限方式ヲ可トシ居ル旨ヲ既ニ指摘シタリ然レトモ千九百二十七年ノ妥協案ヲ抛棄シタルモノニ非ルコトモ表明シ置キタリ尤モ右妥協案ハ従来為サレタル反対ヲ考量シ修正ヲ施サルルト共ニ英米商議ノ根底ヲ為シタル見解ニ対スル大ナル譲歩及千九百二十七年ノ仏提案カ単一ナル類別ニ包含セシメ居リタル水上軽艦艇ヲ二箇ノ類別ニ分チタルコトニ依リ補足セラレタリ右ノ如ク修正ヲ施サレタル仏提案々文ハ別紙ノ通ナ

リ

三、艦艇ノ類別。仏提案ハ備砲ノ口径ヲ以テ水上艦艇類別ノ基礎トナシ居レリ

艦艇ノ各類別決定ノ為ニスル特性ノ選択如何ニヨリテハ各類別中ニ包含スヘキ噸数ハ同一ナラサルヘシ因テ右類別ノ各ニ付精確ナル噸数ヲ指示シ得ルニ先チ各類別ノ特性ヲ予メ決定シ置クヲ必要トス

四、融通。右ト同様ニ各類別中ニ包含スヘキ噸数ハ融通カ我方主張ノ如ク上級類別ヨリ下級類別及之ト反対ニモ何レトモ為シ得ルトスルカ又ハ嘗テ英国側ヨリ「サジエスト」セラレタルカ如ク単ニ上級類別ヨリ下級類別ヘ為シ得ルモノトスルカニヨリ異ルヘシ又右噸数ハ許容セラル融通率ノ大小ニヨリテモ同一ナラサルヘシ

五、補助船舶ノ兵装。華盛頓条約ハ平時補助巡洋艦ノ甲板ニ施スヘキ処理ハ一五五粍ヲ超ユル口径ヲ有スル備砲ノ搭載ヲ可能ナラシムルモノタルヲ得スト規定セリ右規定ノ結果戦時ニ於テ艦隊ニ編入セラレ平時其ノ一部ヲナササル一切ノ船舶ニ一五五粍ヲ超ユル口径ノ備砲搭載ヲ不法トナスモノト解スヘキモノナリヤ

六、主力艦。仏国側ニ於テハ華盛頓条約第五条ニ定メラレタル基準排水量ハ半減シ得ヘキモノト思考ス同条約第六条ニ定メラレタル口径ハ三〇五粍ニ低下セラルルヲ得ヘシ

仏国政府ハ将来ニ関シ主力艦々齢ノ延長ニ反対スルモノニ非ス但仏国政府ハ華盛頓条約ノ適用ニ基キ仏国政府カ今日迄ニ為スヲ得ヘカリシ代換ニ相当スル起工ヲナス権利ヲ保留スヘシ

七、潜水艦。当方ニ関スル限リ潜水艦ノ単艦排水量ヲ千五百噸ニ制限スルニ異議ナシ但殖民地用トシテ少数（後日明示スヘキ）ノ三千噸潜水艦ヲ有スルモノトス

290　昭和5年1月16日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

軍縮会議への英国政府の方針に関するマクドナルド首相の内外記者への説明及びこれに関する各紙社説について

第三六号　ロンドン　1月16日前発
十六日新聞情報　本　省　1月17日後着

十五日午后首相ハ倫敦会議ニ関係アル内外新聞記者約二百名ヲ外務省ニ招キ英国政府ノ方針ヲ説明セル趣ナルカ諸新聞ノ報スル所ヲ綜合スルニ其ノ要旨左ノ通

一、大戦以来締結セラレタル諸種ノ安全保障ニ関スル政治的協定ノ結果諸国ハ茲ニ真ノ軍縮ヲ実現シ得ヘキ時期ニ達シタリト信ス英国ハ単ナル gesture ノ為独リ軍縮ヲナスカ如キ意思ナシ他国ト協同シ国際的合意ニ依リ漸次軍縮問題ノ円満ナル解決ニ達セント欲ス

二、英国政府ハ会議ノ範囲ヲ拡張スルノ希望ナシ従テ海洋自由ノ問題ハ会議ノ議題トシテ適当ナリトハ思考セス

三、艦種別制限主義ヲ採リ総噸数制限主義ヲ排ス

四、空軍並水中武器ノ発達ニ鑑ミ戦闘艦ハ時代後レノモノトナレリ政府ハ軈テ其ノ全廃セラレンコトヲ希望スルモ其ノ実現前ニ於テハ先ツ艦齢ノ延長、一九三六年迄ノ代換延期ヲ提議ス一九三六年以後ニ於テ艦型及砲口径ヲ低下セントス

五、巡洋艦ニ就テハ其ノ総噸数ヲ如何ナル割合ニ於テ大型小型ニ振当ツルカカ最モ重要ナル問題ナリ同シ一噸ト云フモ夫レカ如何ナル艦種ニ使用セラルルカニ依リ均勢ノ問題ニ重要ナル関係アルヘキナリ

六、潜水艦ハ其ノ全廃ヲ欲スルモ其ノ不可能ナルニ於テハ最低限ノ縮小ヲ希望ス駆逐艦ノ問題ハ潜水艦縮小ノ結果如何ニ依ルヘシ

七、政府ハ提案ヲ為スニ当リ単ニ英国ノ見解ヲ表明スルコトナク諸国ノ合意ト依頼トヲ得ルニ足ルヘキ討議ノ基礎ヲ提示セントス一方政府ハ終始英帝国ノ安全ニ対スル海軍ノ重要性ヲ忘却スルコトナカルヘシ政府ハ円満協定ノ達成ニ付多大ノ信念ヲ有スルモ国民ハ余リニ無理ナル期待ヲナスヘカラス如何ナル協定モ凡テノ国民ニ公平ニシテ危険感ヲ与ヘサルモノナルコトヲ要ス

尚右会談ニ関スル諸新聞ノ社説左ノ通

「テレグラフ」（保守党系）

会議カ英国ノ提案ニ依リ左右セラルヘキ事大ナルハ明瞭ナル処首相ノ説明ニ依ル英国ノ方針ナルモノハ最モ肝要ナル諸点ニ於テ甚タ漠然且不完全ナル事ヲ遺憾トス英国死活ノ問題タル巡洋艦勢力ニ付唯国家ノ安全ニ関スル一般的且月並ナル文句以外何等聞ク事ヲ得サリシハ大ニ不満トスル処ナリ又今回ノ会議ニ於テハ英帝国ハ之ヲ不可分ノ一体トシ

テ考量セラルヘキ処自治領カ驚クヘキ巡洋艦削減ニ対シ承諾ヲ与ヘタリヤノ質問ニ対シ何等確認ノ返答ヲ得サリシ事ニハ更ニ大ナル不安ノ念ヲ禁スル能ハス

「モーニング　ポスト」(保守党系)

現在余リニ尨大且高価ナル主力艦艦型ヲ縮小スル事ヲ得ハ何等勢力ヲ損失スル事無クシテ経費節減ヲ行フ事ヲ得ヘク同様ノ事ハ他艦種ニ付テモ言フ事ヲ得ヘシ唯巡洋艦ノ問題ニ付テハ帝国ノ安全及通商路ノ警護ニ充分ナル勢力ヲ絶対必要トス此ノ問題ヲ考慮スルニ当リ不戦条約ノ如キ単ニ崇高ナル抱負ニ過キサルモノヲ根本トスル事能ハス巡洋艦ノ如キ効果アル警備力ヲ縮小シテ節減ヲ計ラントスルハ決シテ賢明ナル策ニ非ス如何ナル政治的必要モ外交的成功モ英帝国第一ノ義務ヲ無視スル事ヲ許ササルナリ

「マンチェスター　ガーデアン」(自由党系)

首相ノ主力艦ニ関スル説明ニ賛同シ之カ廃止ニハ専門家ノ反対参加五個国以外ノ諸国、航路ノ必要廃止後ノ海上勢力比例ノ問題等ニ付困難アルヘキモ本問題ハ会議ニ於テ慎重考究セラルルノ価値アリト論ス

尚其ノ他ノ主要記事左ノ如シ

「タイムス」

(一)前海相 Bridgeman ノ Chelsea ニ於ケル演説ノ要旨

吾人ノ強調スルヲ要スル三点左ノ如シ

一、英国ハ其ノ生存ノ為ニ原料品及食糧ノ海上自由輸送ヲ絶対確保スルヲ必要トスル唯一ノ国ナリ此ノ事タル万人承知ノ事実ナルモ事苟モ死活ニ関スル問題ナルヲ以テ再三再四力説スルノ要アリ

二、英帝国ノ領土ハ普ク全世界ニ亘リ吾人ノ負ヘル義務ハ他列強ノ何レヨリモ遙カニ大ナリ

三、大戦以来英国ハ他国ノ何レヨリモ大ナル海軍縮小ヲ実行セリ英国ノ巡洋艦所有数ヲ五十隻ニ低下シタルコトニ関スル過日ノ海相ノ演説ハ曖昧不徹底ナリ一九二七年ニ於テモ戦争ノ危険現在ヨリモ大ナリキトハ称シ得ス不戦条約ノ出現カ然ラシメタリト称スルモ英国以外ノ列強カ却テ海軍拡張ヲ行フハ何故ナリヤ

(二)「テーラー」中将講演「軍縮ト倫敦会議」要旨

海相「アレキサンダー」氏ハ不戦条約出現シタル為二十隻ノ巡洋艦減少ヲ可能ナラシメタリト述フルモ不戦条約ハ今後戦争起ラストノ保障ヲ為シ得ス若シ不戦条約カ将

来ノ平和ヲ確証スルモノナラハ何故ニ条約主要国ハ其ノ建造計画ノ急激ナル実施ヲ中止セサルヤ又他ノ大海軍国ハ其ノ陸軍及空軍ノ縮小ヲ断行セサルヤ海相ハ海軍本部カ巡洋艦所要数低下ニ同意セリト称スルモ余ハ之ヲ信スル能ハス余ハ最大五十隻ノ巡洋艦ヲ以テ戦争ヲ為サントスルモノハ我カ「アドミラル」中唯一人モ存在セサル事ヲ確信ス余ハ縮小ノ基礎ハ国際連盟ノ規定スル処ノモノナルヲ要スル事ヲ主張セサルヲ得ス

「マ」首相ハ常ニ英米間ノ戦争ハ不可能ナリト云フ「フーバー」亦然リ然ラハ米国ハ何故ニ英国トノ均等ヲ獲得スル事ニ斯ク焦慮スルヤ英、米均等ノ基礎ニ関スル話合ハ不合理ニシテ来ルヘキ会議ヲ失敗ニ終ラシムル一素因タルヤモ知レス

海軍専門家ハ唯利己的主張ヲ為ス以外能無シトノ汚名ハ除去スルヲ要ス彼等ハ自国ノ保安ヲ専心念トスル誠実ナル人タナリ

米ニ転電、仏、伊、永井大使ニ郵送ス

291　昭和5年1月17日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛(電報)

大型巡洋艦保有量問題に関する第二回日英専門家打合会の経過について

ロンドン　1月17日後発
本　省　1月18日前着

第三七号

一月十六日外務省ニ於テ第二回専門家打合会開催英国側「クレーギイ」「バックハウス」艦政本部長「ベレール」大佐日本側左近司斎藤豊田中村

「左近司」ハ先般英首相ト我三全権トノ会談中専門ニ渉ル事項ニ関シ専門家ヲシテ意見ヲ交換セシムヘシトノコトナリシニ付貴方ノ御諒解ヲ得タキニ、三ノ点ニ付御話致シタシト前提シ日本ハ英米間ノ仮協定ヲ基礎トシ大型巡洋艦ニ於テ対米七割比率ヲ主張セムトスル関係上約二万噸精確ニ言ヘハ約一万七千六百噸ノ建造ヲ見ルニ至ルヘキ事態ヲ以テ日本カ軍縮ノ結果トシテ勢力増加ニ至ルヲ問題視セラルルヤニ察セラルル処素ヨリ日本ハ縮小ヲ希望スルモノニシテ前述ノ約二万噸ノ増勢ハ米カ一万噸十八隻ヲ保有スルコトトナル自然ノ結果ニ外ナラス若シ米カ十五隻ニテ満足スルコトトナラハ我方ハ一噸ノ増加モ見サルコトトナリ此ノ方却テ我方ノ希望スル処ナリト述ヘタル処

「クレーギー」米ハ必スシモ十八隻ニ満足セルニアラス目下ノ処二十一隻ヲ主張シツツアリ之ヲ十八隻ニ下ラシムルコトハ中々困難ノ現状ナリト口ヲ挾ミ

「左近司」素ヨリ一ノ仮定ノ下ニ御話シ致ス次第ナルカ日本カ必スシモ増勢ヲ企図スルモノニ非サル一例トシテ余個人ノ所感ヲ述ヘムニ仮ニ将来ノ大型巡洋艦ノ最大噸数ヲ英ノ「ヨウク」級ニ相当スル八千四百噸又ハ一層奮発シテ八千噸位ニ低下スルコトトシ米カ英国トノ釣合上一万噸型十三隻残リ五隻ハ前述八千噸級ヲ建造スルコトトセハ米ノ保有量モ若干低下シ日本ノ保有量モ相対的ニ低下スルコトトナルヘク之亦米十八万噸ノ場合ヨリモヨリ良キ結果タルヘシト思考セラル又日本ノ造艦カ輿論ニ不良ノ影響ヲ与フヘシトノ御観測モアル模様ナルカ今日以後一九三六年頃迄ノ日英米三国ノ造艦量ヲ検スルニ巡洋艦ノ関スル限リ米ハ毎年約三万噸英約一万五千噸日ハ米ノ七割トシテ八千噸級二隻ノ新造艦ヲ加ヘ僅ニ五千噸内外ノ程度ニ過キス此ノ事実ハ日本ノ将来ノ立場カ甚タ有利ナルヘシトノ誤解ヲ解ク好資料ナリト考フ

尚過渡期ニ於ケル日本ノ保有隻数カ十四隻トナルヲ苦ニセラルル模様ナルカ我々専門的見地ヨリスレハ勢力ノ内容ヲ異ニスル一万噸級七千噸級ヲ一律同様ノ立場ニ置キテノ議論ハ何トシテモ不合理ナリト謂ハサルヘカラス日本ノ保有セントスル勢力ノ内容ヲ詳ニシ適当ニ輿論ヲ指導セラルルニ於テハ世人モ容易ニ理解スル所アルヘシト信ス之等ノ見解ニ対スル貴方ノ御所見如何ト尋ネタル処

「バ」ハ六吋砲艦ハ八吋砲艦ニ比シ極メテ劣勢ナリ故ニ八吋砲艦ニ付テハ噸数ノ問題ニ非スシテ隻数ノ問題ナリト述ヘ「ク」ハ過日英首相ヨリ申上ケタル通隻数ノ方一般民衆ニ解リ易シ且米ハ一万噸型ニ固着シ八千噸型ノ採用ヲ求ムルコトハ極メテ困難ナリト思フト述ヘタルニ対シ

「左近司」ハ或ハ政治家ノ眼ヨリ見レハ隻数論モ尤ナラムモ軍事上ノ見解トシテハ飽迄モ一万噸一隻ト七千噸級一隻トヲ同一価値ニ評価セラルルコトハ到底首肯スルコトヲ得スト答ヘ

「バ」ハ貴説ニハ全然同感ナルモ七千噸級カ八吋砲ヲ搭載スル以上六吋砲艦ハ到底其ノ敵ニ非ス依テ成ルヘク八吋砲艦ノ隻数ヲ一律ニ低下シタキ希望ナリト述ヘタルニ付

「左近司」ハ今ハ八吋砲艦ノ勢力比較ヲ試ミムトスルニ非ス八吋砲艦同志ノ勢力比較ヲ検討セムトスルニ外ナラスト応シ

「バ」諒承

「斎藤」ハ英国ハ米国ニ対シ八吋砲型ノ艦型縮小ノ申出ヲ試ミル意思ナキヤト尋ネタルニ

「ク」ハ望マシキ案ナルモ到底米国ノ賛成ヲ得難シト考フ米ハ二十一隻ヨリ十八隻ニ下ルコトスラ容易ニ之ヲ肯セサルヘク更ニ之ヲ低下スルコトハ困難トスル処ナルヘシ米ハ大型艦ニ重キヲ置キ隻数ニ頓着セサルニ反シ英ハ其ノ隻数ニ重キヲ置ク関係上多数ノ軽巡洋艦ヲ以テ大型ノ不足ヲ補塡シタル次第ナリ日本モ同様軽巡洋艦ノ保有量ヲ以テ何トカ調節スルノ工夫ニ出テラレムコトヲ望ムト言ヒ

「バ」ハ英カ隻数ニ重キヲ置ク所以ハ元来巡洋艦ハ単独ニ行動スルコト多キヲ想像セサルヘカラスシテ其ノ場合ニハ艦型ノ大小ニ拘ラス八吋砲艦ハ六吋砲艦ヨリ遙ニ優越ノ立場ニアルコト明カナレハナリ若シ艦隊ヲ編成シテ行動スル場合ノミヲ想像スレハ左近司中将ノ言ハルル如ク八吋砲艦ノ艦型大小ニ依リ力ノ差ヲ生スヘキモ巡洋艦ノ性能ニ鑑ミ此ノ説ニ左袒スルコトヲ得ス尚英国トシテハ世界ニ於ケル八吋型ヲ出来得ル丈減少セントスル希望ヲ有スルモノニシテ此ノ見地ヨリ六千噸ト雖モ八吋ヲ搭載スルコトニハ不賛成ナリト述ヘタリ

「左近司」ハ英米カ大巡小巡別々ニ「パリテイー」ナラハ日英間ニ困難ナル問題ハ無キモ大巡小巡ヲ併セテ英米「パリテイー」ナルカ故ニ難問ヲ生スル次第ナリト云ヒ

「バ」及「ク」ハ英米「パリテイー」ニ非スト述ヘタルニ付

「左近司」ハ招請状ニハ英米「パリテイー」ト記サレアリト酬ヒタルニ

「ク」ハ苦笑シテ「パリテイー」ナル語ハ一種ノ比率ヲ意味スルヲ以テ之ヲ避ケ「エクイリブリアム」ナル観念ヲ基礎トシテ協定ニ達セント試ミツツアリト云ヒ

「ク」ハ英ハ米ニ対シ大型ヲ減シ小型ヲ増加シテ釣合ヲ取レリ日ノ主張モ単ニ米国ノミヲ目標トシテ比率ヲ主張セス右英国ノ執リタル態度ヲ加味シテ何等カノ妥協案ヲ考ヘラレマジキヤ亦寿府ニ於テハ日英ノ関スル限リ華府条約ノ比率ニ比シ著シキ増加ナキ程度ニ於テ一応ノ協定ニ達シタル歴史モアリ今回モ其ノ程度ニ落着キ得ヘキモノト考ヘ居ル

次第ナリト述ヘタルニ付豊田ハ当時ノ事情ヲ説明シ日英間ノ仮案ハ単ニ専門家間ノ一私案トシテ提示シタルモノニ過キス之ニ対シテハ本国政府ノ同意ヲ得ルコト能ハサリシ次第ナルニ付今此ノ問題ヲ取リ上ケテ討議ノ基礎トスルコトハ謂レナキ事柄ナリト云ハサルヘカラスト応ス

「ク」ハ元来交通線領土其ノ他諸般ノ状況ヲ考慮セハ日英ノ責任ニ自ラ相違アリテ忌憚ナク云ヘハ日本ノ勢力ハ英ニ比シテ六割ニテ充分ナリト思考スルモノナルモ英ハ日ニ対シ噸数ニ於テ七割四分隻数ニ於テ八割五分ヲ提案セルハ最好意的ニ考慮ヲ加ヘタル結果ト考ヘ居レリ而シテ今回日本ヨリ対米七割ヲ強硬ニ主張セラルル事ハ率直ニ申セハ非常ニ失望シ居ル次第ナリト述ヘタルニ対シ

「左近司」ハ七割ノ趣旨ハ寿府ニ於テモ強硬ニ主張セル所ニシテ華府会議以来終始一貫セル態度ナリト応酬シ「豊田」ハ先程日英ノ責任ニ相違アリトノ「ク」ノ語ニ対シ一言シ度シト述ヘ領土交通線其ノ他ニ対スル英ノ立場ハ充分ニ諒解スルモ元来国防ノ責任ニ対シテハ国ニ依リ異ナルモノニアラス日本ハ国土防衛ノ責任遂行上対米七割ノ要求ヲ為スモノナリト応酬セルニ対シ

「ク」ハ英ハ不戦条約ニ立脚シ相当ノ危険ヲ冒シ隻数ノ減少ヲ行ハントスルモノナリ日本モ幾分ノ「リスク」ヲ採ラレ度シト答ヘタリ

「左近司」ハ本日ハ大型巡洋艦ニ関シ貴方ノ誤解ヲ解キ日本ノ立場ヲ充分明カニセント欲シタル次第ニシテ此ノ上トモ英国側ノ御考慮ヲ煩シ度シト述ヘタルニ

「ク」ハ大型巡洋艦ニ関シ前述ノ趣旨ニ依リ日本側ニ於テ少シノ考慮ヲ加ヘラレ間敷ヤト云ヘルニ付「左近司」ハ之ハ最重大ナル問題ニシテ既ニ全権ニ於テ取扱ハレ居リ専門委員トシテ御答ヘスヘキ限リニアラスト応酬セリ

別レニ臨ミ「ク」ハ主力艦問題ニ付代換開始期ニ関シテハ前回申シタルト異ナリ英国モ之カ延期ニ同意スル事ニナリタル旨ヲ一言セリ

米、仏、伊及永井全権ニ転電セリ

292　昭和5年1月17日　海軍省藤田中佐より外務省宛

大型巡洋艦問題などにつき解決を焦らざるを得策の旨全権へ伝達方依頼について

海軍省（藤田）

全権宛外務大臣電案（五、一、一七）

第三十三番貴電御感想ニ関シ当方ニ於テモ全然所感ヲ同フスルモノニシテ彼レノ容易ニ譲ラサル所ハ我亦之ヲ執拗ニ獲得スル価値アル次第所謂一刀両断的最後ノ解決ニ進ムニハ時期尚甚ダ早シト思ハルルノミナラズ此際御所感ニモアル如ク我方トシテハ余リニ焦ラザルコトガ最モ得策トスベク特ニ大型巡洋艦問題ノ如キ当分我レヨリ進ンデ内交渉ノ進展ヲ焦慮スルガ如キ態度ヲトルハ此際却テ我足元ヲ見スカサルル虞レアリト観測スル次第ナリ

（欄外注記）

藤田中佐持参、昭和五年一月十七日

特ニ此種ノ電報ヲ送ル必要ナシ、大臣承知

海軍省ヘモ右ノ趣旨内談スミ

293　昭和5年1月18日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

主力艦建造開始期延期による留保財源金額発表は微妙の影響ある旨申進について

ロンドン　1月18日後発
本　省　1月19日前着

第四四号

津島財務官ヨリ大蔵次官ヘ至急左ノ通

主力艦代換建造開始期延期ニ関シテハ全権ヨリ外務大臣宛累次ノ電報ニテ御承知ノ如ク英国側内部ノ反対等ニ拘ラス我全権ノ御努力ニ依リ之カ実現可能ノ大勢ヲ観取シ得ルニ至リシ処一方昨年我全権華府往訪米国国務卿会見ノ際国務卿ハ「日本ハ主力艦ノ建造延期ヲ策シ其ノ財源ノ余裕ヲ補助艦ノ建造ニ充当シ七割要求ヲ為サムトスルモノナリ」ト言フカ如キ口吻ヲ洩ラシタル等ニ鑑ミ延期実現全然確実ナリト言フハ未タ尚早ト考ヘラルル処若シ此ノ際ニ当リ右建造延期確定前ニ五年度財政計画上ノ留保財源ニシテ発表セラレ英米ニ伝ハル時ハ主力艦ノ建造延期ヲ行ハサル時ハ日本ハ補助艦ノ建造ニ困難ヲ来スヘシトノ観察ヲ導キ我補助艦七割要求ノ対抗策トシテ主力艦建造延期ノ決定ヲ遅延セシムル段取ヲ取リ来ルコトナシト言フヲ得ス斯ノ如キ状勢ニ立至リ他ノ原因ヨリ会議紛糾シ終ニ主力艦建造開始延期ノ実現ヲ見サル成行ニ終ル場合ナシトモ言ヒ得サル次第故留保財源金額発表ノ件ハ頗ル「デリケート」ナリト存セラルルニ付テハ議会開会ノ切迫セル際右御参考迄ニ申進ス

294　昭和5年1月18日　ロンドン軍縮会議全権より幣原外務大臣宛（電報）

巡洋艦隻数及び比率問題などをめぐるクレーギーとの会談について

ロンドン　1月18日後発
本　省　1月19日後着

第四六号

一月十六日大使館晩餐会ニ於テ「クレーギー」ハ佐藤公使ニ対シ日英間ニハ他ノ総テノ点ニ於テ一致ノ可能性アルニ反シ大型巡洋艦七割問題ニテ引掛リ居ルハ誠ニ遺憾ナリ日本側ニテモ何トカ伸縮性アル新案ヲ見出サルルコト不可能ナルヘキヤ自分一己ノ考ニテハ八吋艦ハ日英共現有勢力ヲ其ノ儘保存スルコト即チ十二、十五ノ隻数ニ制限スルコトト致シタシ御承知ノ通米国ハ依然二十一隻案ヲ有シ之ヲ十八隻迄低下セシムル望未タ確実ナラサルカ故ニ日本カ十二隻以上ニ止マルニ於テハ米国ハ益々二十一ヲ固執シ三国間ニ於ケル妥協殆ト絶望トナルヘシト言ヘルニ付佐藤ハ日本ノ要求中重要ナル点二ツアリ一ハ八吋艦ニ対スル七割ニシテ他ハ補助艦総体ノ七割要求ナリ然ルニ今日迄ノ日英間ノ会談ニテハ八吋艦ニ対スル日本ノ要求ハ未タ日本ノ為満足ナル解決ヲ見ス又総括的七割問題ニテモ保障ヲ得ストセハ日本全権ハ手ヲ空ウシテ帰国セサルヘカラサルコトトナリ到底承諾困難ナルヘシト応酬セル処「ク」ハ更ニ日本ニハ潜水艦ニ関シ百「パーセント」ノ要求アリ八吋艦ニテ満足ヲ得サル部分ハ之ヲ巡洋艦駆逐艦ニテアル「ヤード、スチック」ノ観念ヲ加味シテ補充スヘク斯クシテ不足分ヲ償フヲ得ヘシ

潜水艦ハ防禦ノ武器ト観ルヘク此ノ種ノ軍艦ヲ以テ敵ヲ攻撃シ其ノ死命ヲ制スルコト能ハサルヘキカ故ニ日本カ単ニ防禦ノ具トシテ必要噸数ヲ要求スルハ了解ニ難カラス英国ノ考ヘニテハ今回ノ海軍条約ハ有効期間ヲ一九三六年迄トセムトシ此ノ点米国ニテモ異議ナシ尤モ五、六年ノ期間ニテ余リ短カシトノコトナレハ期間ヲ三六年迄トシ其ノ後ハ自動的ニ延長セラルルコトトスルモ可ナリ兎ニ角余リ先ノコトヲ考フレハ協定ニ達スルコト困難ナルカ故ニ先ツ此ノ辺ノ期間ヲ採ルコト可然従テ日本ノ古鷹代艦等ハ考慮中ニ入ルルニ及ハサルコトトナルヘシ但シ締結ノ際日本側ニテ古鷹代艦ノ場合ニ至ラハ一万噸級ヲ以テ之ニ代ユヘシトノ

留保ヲナスヲ妨ケサルヘシ尤モ今後五、六年モ経過スレハ世情安定シ現在程ノ海軍力ヲ必要トセサルニ至ルヤモ知レス艦型縮小ノ問題モ出テ一万噸級ヲ以テ代艦スルノ必要ナキニ至ルヤモ計ラレス従テ特ニ此ノ点ノミヲ取立テテ協定ノ成立ヲ困難ナラシムル要ナキニ似タリト述ヘ居リタル趣ナリ

米、仏、伊、連盟ニ転電セリ

295　昭和5年1月21日　幣原外務大臣より在英国松平大使、在米国出淵大使宛（電報）

浜口首相の議会演説中の軍縮会議関係部分について

合第三一号

二十一日浜口首相ノ議会演説中海軍会議関係部分左ノ通

海軍軍備制限ノ問題ニ関シテハ昨年十月七日英国政府ヨリ在英帝国大使ニ対シ公文ヲ以テ華府条約ニ規定セラレザル艦種ヲ考究シ竝ニ同条約第二十一条第二項ニ規定セラレタル問題ノ準備竝ニ処理ノ為主要海軍国会議ヲ倫敦ニ於テ開催致シタキニ依リ日本政府モ右会議ニ代表ヲ派遣セラレンコトヲ望ム旨ノ招請ガアッタノデアリマス而シテ此ノ会議ノ開催ニ就キ英国首相マクドナルド氏ガ非常ナル熱誠ヲ以テ苦心努力セラレタルコトハ洵ニ敬服措ク能ハザル所デアリマシテ帝国政府ハ右ノ招請状ニ接スルヤ慎重考究ノ上昨年十月十六日欣然会議ニ参加スル旨ヲ英国政府ニ回答シタノデアリマス尋イデ政府ハ全権委員ヲ任命派遣シ茲ニ倫敦海軍会議ハ愈本日ヲ以テ開会セラルルコトトナツタノデアリマス倫敦海軍会議ニ対スル帝国政府ノ方針ニ関シテハ内ハ国防ノ安固ヲ期スルト共ニ国民負担ノ軽減ヲ図リ外ハ列国ノ間ニ平和親交ノ関係ヲ増進スルニ在ルコトハ論ヲ俟タザル所デアリマス国防ノ安固トハ如何ナル場合ニ於テモ決シテ他国ノ脅威ヲ受ケヌコトデアリマス各国ガ相互ニ他国ニ対シテ脅威ヲ与ヘズ又他国ヨリ脅威ヲ受ケヌト云フ情勢ヲ確立スルコトガ海軍協定ノ眼目デアラネバナラヌト信ズルノデアリマス斯ノ如ク列国ガ各々国防上ノ安全保障ヲ得テ始メテ国際間ニ真実ノ親善関係ヲ樹立スルコトガ出来ルノデアリマス海軍軍備ノ制限又ハ縮少ガ国家ノ財政ニ重大ナル関係ヲ有スルコトハ今更多言ヲ費スマデモナイコトデアリマシテ各国一律ニ軍備ノ縮少ヲ行フコトニナリマスレ

バ国防ノ安固ヲ害スルコトナク国民負担ノ軽減ヲ期スルコトガ出来ルノデアリマシテ同時ニ世界平和ノ保障ハ一層強固ヲ加フル次第デアリマス帝国政府ガ今回ノ倫敦海軍会議ニ際シテ単ニ海軍軍備ノ制限ニ止マラズ進ンデ之ガ縮少ノ実現ヲ主張スル所以ハ実ニ茲ニ存スルノデアリマス帝国政府ハ右述ブルガ如キ方針ヲ以テ倫敦海軍会議ニ臨ミ其ノ成功ノ為最善ノ努力ヲ為スノ決心ヲ有スル次第デアリマス

（在英大使ヘハ）全権ヘ転報シ仏伊ヘ転電アリ度

296　昭和5年1月22日　幣原外務大臣より ロンドン軍縮会議全権宛（電報）

軍縮問題に関する議会情報について

本省　1月22日後1時50分発

第二〇号

廿一日休会明ケノ衆議院ニ於テ犬養毅ヨリ「七割ノ比率ハ我国防ノ最小限度ニシテ全権モ従来度々之ヲ明瞭ニ公言シ居ルトコロ政府ハ最後迄右主張ヲ固執スルヤ又比率適用ノ艦種ハ何ソヤ」ノ質問アリタルニ対シ首相ハ「ロンドン会議ニ臨ム帝国ノ態度ハ国防ノ安固即チ他ヲ脅威セス他ヨリ脅威セラレサル最小限度ノ海軍力保有ヲ期スルニアリテ各国ハ右帝国ノ合理的要求ヲ諒トスルニ至ルヘキヲ確信ス比率ニ付テハ茲ニ明言セストモ自分ノ演説ニテ国民一般ノ支援ヲ得ルニ十分ナリ」ト答ヘタリ

尚ホ政友会ヨリ「衆議院ハ倫敦会議ニ於ケル政府ノ主張ハ国民一致ノ要望ナリト認ム」トノ決議案提出セラレ開会劈頭之カ上程方ヲ計リタルモ民政党及政府ノ反対アリテ右ハ日程ニ上ラサリキ

尚又衆議院ハ右犬養一人ノ質問ニテ解散トナリ総選挙ハ二月廿日施行ノ旨発表セラル

米、仏、伊ニ転電アリタシ

日本外交文書　一九三〇年ロンドン海軍会議　上　終

日本外交文書
一九三〇年 上
ロンドン海軍会議

不許複製

Documents on
Japanese Foreign Policy.

Documents on
the London Naval Conference
of 1930
Volume I

昭和五十八年九月二十日　印刷
昭和五十八年九月三十日　発行

外務省編纂
外務省発行

印刷所　東京都墨田区亀沢三―二〇―一四
ヨシダ印刷　両国工場